
救世の光、殲滅の紅

アナザーストーリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

救世の光、殲滅の紅

【Nコード】

N5067N

【作者名】

アナザーストーリー

【あらすじ】

ある時は『世を滅ぼす闇』、ある時は『世を救う光』。相反する二つの未来は、どちらももの子が宿すには数奇な運命だった。右目が黄金、左目が蒼銀の虹彩異色の青年は、十七歳の誕生日を境に外の世界へと旅立つ。世を救う光となる為に。

このお話は、ゲヴェル成分増量で描かれています。主人公はカーマイン。彼には双子の姉が来ています。

感想募集中。遠慮なく書き込んで下さい。

1・シエラの指輪

「……これは、あなたが大切にしていた指輪……？」

女は、男が無言で差し出した指輪を見つめ、首を傾げた。色素の薄い彼女の金髪が、緑色のドレスに当たって広がる。フリル付きのロングドレス。形遅れの大きめのリボンを配したドレスは、腰まで伸びる彼女の金髪を艶やかに引き立たせる。

女は、指輪を差し出したまま動かない男を見つめ、その手に乗った指輪を摘まむと、小さく口端を緩めた。

男は緊張した面持ちで息を潜めたまま、顔を上げない。

女は指輪を、空にかざした。

「いつ見ても綺麗……！ 不思議な光を放っているわ……」

そう言っただけで話題を探るように、女は男を横目見ながら、くるくると指輪の角度を変える。月光を浴びる位置に指輪を掲げると、銀の指輪に嵌まった虹色の宝石が強く輝き、女は目を細めた。太陽の光にも似た『白』に見えるが、白だけでは無い特殊な輝き。

この石は、手に取った者の見る角度によって色が変わる、不思議な石だ。この石の名前を、女は知らない。

男は、大事なものだ、といつも言っていた。

「……………」

指輪を差し出した男が、ようやく顔を上げる。女は反応が返って来たのが嬉しくて、穏やかに微笑んだ。

女の肌を、月明かりが白く照らす。華奢な女を物語るように、地面に影を引く。

「これを、」

男は低い声で言った。いつも静かな金の瞳が、今、女の手の中にある指輪を見据えている。

女は男に手渡された指輪を見下ろし、これ？ と、男に視線で尋ねた。男が頷く。癖の無い、うなじにかかる彼の黒髪が、さらりと

揺れた。

「これを君にもらつて欲しいんだ」

はつきりと力を込めて言う男に、女は、え？　と思わず固まった。鳶色の大きな瞳を見開いて、女はジツと男を見据える。

男は両眼が金、髪が黒の剣士だった。洗練された逞しい肉体に、整った顔立ち。肌が白く、切れ長で眉が細い。唇は厚くも薄くもなすが端正に引き締まつており、身長は女より頭半分ほど高い。

中性的な顔立ちだが、凜とした雰囲気のある男だ。彼は、その身に赤い軽鎧を着ていた。

満天の星が、紺碧の空を彩る。静かな夜に歌うのは、夏の虫とふくろうだけ。

二人が立つ岬は、森を抜けた先の高台にあり、見下ろせば波のなみ黒い海が、満月を見事に写し出している。今日はいつにも増して月が近い。

女は貰った指輪も、空に浮かぶ月も、何もかもが美しく思えてならなかった。

男が黒い頭を搔きながら、続けた。

「俺は……、しがない傭兵だ。だから、こんな風にしか言えない。

もし……もしよかつたら、俺と……」

男はぐつと拳を握ると、真っ直ぐな瞳で女を見る。女を魅了する美しき黄金の瞳で。

「結婚して欲しい」

途端、女の鳶色の瞳から、涙が零れた。指輪を握っていない左手で涙をすくうも、涙はどんどん溢れ、零れていく。　女の指先で受け止めるには、いささか無理があった。

ぼたたつ、と音を立てて、涙の粒がロングドレスの胸許に落ちる。

嬉しい

女は心の底から震えるような感覚に、たまらず唇を引き結んだ。

鳶色の瞳を細める。貰った指輪を胸元に抱き、彼女は自分の内にある感謝を伝えようと 最大限に笑った。

「嬉しい……嬉しいよ……。私、ずっとその言葉を待ってた……」
女は美しい言葉を返そうとしたが、嬉しさで目の前が滲み、熱く絡まった喉に声を奪われた。

男の腕の中に飛び込む。

男は黙って女を抱き留めると、金の瞳を嬉しそうに細めて、愛しい女の名を呼んだ。

「シエラ」

……
……

「お兄ちゃん！」

暗闇の向こうから声が聞こえる。よく聞き慣れた妹の声……。夢の中に出て来た女とは違う少女の声……。……夢？ ……そうか、アレは夢か……。また……。いつもの……

「お兄ちゃん、朝だよ！？ 起きて！ お母さん、帰って来たよ！
？ お兄ちゃん……！」

もう少し、寝かせてくれ。

「どいて、ルイセちゃん。そんなんじゃコイツは起きないわ。

……「こうするのよ……！」

「あ……？」

ルイセ……。？違う、聞いた事の無い声……。ルイセの他にも
う一人……。誰……

「ティピチャ……んキ……ック……！」

ドガアッ 凄まじい衝撃と共に、ベッドの上に居た青年は目を開けた。彼が目を開いた先には、見慣れたピンクの髪を左右で括り、赤を基調としたワンピースを着た妹の笑顔と、本や小説で読んだ事のある妹よりは淡い色の髪をボーイッシュなショートにした、黒い

半袖シャツに白い短ズボンの妖精と呼ばれる存在がいた……。

「……………？ 俺はまだ夢を見ているのか？」

「何、寝惚けてんのよ！？ もっとしつかりしなさいよ！！」

確認の為に目の前の妖精に話し掛けるとアツサリと暴言を返された。本で読んだ妖精の中でもこんな性格の存在はいない……。

妖精の羽が動くたびに零れる魔力の粒子を確認し、青年は正体に気付いた。

「……………魔導生命体……………？」

口の中でそう呟いた彼に、横からクスクスとルイセが笑いかけて来た。

「何にも知らないのにいきなりそんな事言っちゃお兄ちゃんが可哀想だよ、ティピ。」

ムクリと青年は起き上がり、改めてティピと呼ばれた妖精と自分の妹を見つめる。

青年は黒い髪に黄金と蒼銀の瞳をしていて、その肌は雪のように白い。上は黒のノースリーブのフィットシャツ、ズボンは同色の皮ズボンを着、赤いジャケットに袖を通すだけで、半脱ぎの状態という格好をしている。

その人間離れた完璧な美貌を青年は妹に向ける。

「うふふ、聞きたい事があるって顔してるケド、下に降りてからだよ。お母さん帰って来てるの。」

「そういう訳だから、早くしなさいよ！」

そう言い合うと二人は青年の部屋から出て行った。扉の向こうからルイセの声がある。

「次はシーティアお姉ちゃんを起こさないと！」

「まかせといて、ルイセちゃん！」

声が遠ざかって行くのを聞きながら

「……………シーティアの所……………？ ……………ま、いいか」

青年はスツと身をベッドから立たせると、扉を開け、下のリビンググへと向かった。その途中で……

「ティピちゃ〜〜ん、キイ〜〜ツク」

という声と共に、ドガアツという鈍い音がしたが、無視した。

下に降りると、ルイセが言った様に母であり、宮廷魔術師を勤める艶やかな蒼い髪を長く伸ばした女性、サンドラが居間にいた。14の娘を持つ女性とは思えないほど、その姿は若く美しい。青年は久しぶりに顔を会わせた母に挨拶をする。

「おはよう、母さん」

「おはよう」

にこやかに落ち着いた返事を返してくる母に青年は口の端をほんの少しだけ広げた。とその時、階段を複数の足音が下りて来た。

「お母さん、お姉ちゃん起こして来たよ」

「マスター」

そう言い合いながらルイセとティピが居間に入って来た。その後から右目が金、左目が蒼銀の青年と同じ顔立ち、服装の長い黒髪の女性が現れた。青年と同等の整った顔立ちはしかめられ、右手で頭の右側を押さえていた。

「……母さん、久しぶりに会って何だけど、その妖精は？」

女性……シーティアは開口一番にそう言った。サンドラはそんな娘の様子に少し顔をしかめ、

「……ティピ？ 紹介していなかったのですか？」

と小さな妖精に問いかける。するとティピは笑顔で返した。

「マスターに説明してもらった方が早いと思って……！」

「やれやれ……」

サンドラの顔に微笑が刻まれる。そして表情をスツと新ため、

威厳のあるソレへと変えた……。

「おはよう、シーティア」

「……おはよう」

あくびを噛み殺しながら返事を返すシーティア。サンドラはフツとため息をつくとしーティアと青年に向き直った。

「今日は二人に大切な話をします。今日で貴方達は十七歳になりますね？ では、何故今日まで貴方達を王都から出さなかったのか、そこから説明をしましょう」

そう言つて一息おき、サンドラは語り始めた。

「丁度、今から十七年前、私は双子の赤ん坊である貴方達を拾い、育てました。その双子は黄金と蒼銀の瞳を持った黒髪の姉弟でした。私は始めてその双子を見たとき、何か言い知れぬモノを感じ、宮廷にてその双子を占つてみたのです。すると、ある時は『世を滅ぼす闇』となり、ある時は『世を救う光』となると出ました。こんな相を見たのは私も初めてでした。そこで私は貴方達を育て、『世を救う光』へと未来を切り開く為に外界との接触を断たせたのです」

「……え……？ それじゃ……お姉ちゃんとお兄ちゃんが外に出なかつたのって……」

「私は、貴方達が自力で道を切り開いていくだけの力を与え、正しい事を判断するように育てたつもりです。貴方達は既にローザリアでも剣の腕なら一、二を争う程の実力、また、魔力もどの魔法使いよりも強力ですね？あるいは、私よりも……。そこで、貴方達に旅をするよう進言します。このお金で身なりを整え、様々な人達と出会いなさい」

そう言つと、サンドラは二人に金貨袋を与えた。

「……そして、ティピは私が創ったホームクルス。貴方達が間違つた事をしないようにするお目付け役です。胆に銘じておきなさい」

「ティピだよ、よろしく！ シーティアと……アンタ、名前は？」

静かに告げるサンドラと対照的に明るく言うティピ。そのティピが怪訝そうに青年を見る。……青年は静かに告げた。

「カーマインだ」

カーマインはティピと共に北西にあるという岬へと向かっていた。カーマインは行った事の無い場所を夢で見るという能力がある。

その場所は決確実にこの世界に存在するモノなのだ。サンドラに夢の場所を告げると、最も安価な『青銅の剣』を持って街道を進んでいた。その脇には木々が生い茂っており、ところどころ、モンスターが木陰から行き気している。

「ねえ、アンタ。アンタってさ、これからの冒険何を楽しみにしてる？」

そんなモンスター達を物ともせず、倒していくカーマインに、ティピは暇だから話せと話題を向ける。そしてカーマインは、無愛想だが律儀に、ぽつりと答えを返していく。

「……強敵との戦い、人との出会いだ」

そんなとりとめのない会話をしながら、二人は岬へと辿り着いた。「アンタの夢に見た場所って……ここ？」

「……ああ」

そう言いながら、夢には無かった石を見つめる……。ティピも視線に気付き、そちらに近づいた。

「……シエラ、ここに眠るだって。アンタが生まれる三年前に亡くなってるんだ」

「墓……か」

スツとカーマインは墓に視線をよこすと、岬の端まで移動した。そこは海を、岩山を一望できる場所だった。横にいるティピが「うわぁ」と感じ入った声を出す。と、しばらくしてティピが今度は驚きの声を上げた。

羽の生えた人影が岩の上に飛んでいたためだ。

「ちょっと！ 何よアレ……？ 人……？ 羽が生えてる……！？」
「アンタ、アレ何なのか私に説明してよ！」

そう言うティピにカーマインはどうと言う事も無く空を見上げて
呟いた。

「 フェザリアン」

「 ふえざりあん……？」

ティピは訳が分からず「？」マークを飛び交わす。その時

「そう……彼等はフェザリアン。この岩の上に彼等は暮らしている
んだよ」

落ち着いた声が背後から聞こえた。カーマイン達が振り返るとそこには腰まである長い水色の髪を持った白衣の青年が立っていた。長身でスタイルも良く、端正な顔立ちをしており、丸い銀縁眼鏡をしていた。ソレがまた、彼を一層知的に見せている。

「僕の名はアリオスト。彼等は大陸の東に住む有翼人で人間をはるかに上回る知識を持っている。いつ見ても綺麗な羽だ……。君もそう思うだろ？」

カーマインに青年アリオストは問いかける。するとカーマインは無愛想に「別に」と返した。がアリオストは別段気にした様子は無かった。

「そうかい？ よく見えなかったかな？」

「アタシは綺麗だって思ったよ！」

とティピはアリオストに賛同した。アリオストはティピにニコリと返した。

「……それにしても、君はただの妖精じゃないね？ ホムンクルス 魔導生命体かな？」

「凄～い！ よく分かったね！！ アタシ、ティピ。コイツのお目付け役なの！！」

と明るく言うティピ。「カーマインだ」と対照的に素っ気無いカーマイン。

「でも、よくアタシがホムンクルスって分かったね、アリオストさ

ん！」

「フフ……こう見えても僕は魔法学院の学者だからね。普通の人よりも詳しいよ」

「魔法学院って……ルイセちゃんが通ってる所だね」

「？ ルイセ？ 君達は彼女の知り合いかい？」

アリオストが目を丸くしてティピに問う。すると、ティピも目を丸くして答えた。

「ルイセちゃんはコイツの妹だよ。アリオストさんこそ、よくルイセちゃんを知ってるね」

「彼女は、グローシアンだからね。有名だよ」

「？ ……グローシアン？」

アリオストは優しく微笑み、静かに語り始めた。

「この世界は二重の世界と言ってね。かつて僕らが住んでいた世界は、死の世界になりつつあった。そこで自分達の世界と別の世界を重ねることによって、今の世界を作り上げた。グローシアンは、前の世界から流れて来るグローシユに関係なく力を使える存在なんだ」

「？ ……グローシユ？」

「多分、君達も見ていると思うんだけど……。ほら、大気中を浮かんでいる光の珠があるだろう？ これが魔法エネルギー、グローシユさ」

「へえ……！ そうだったんだ〜！！」

素直に感心するティピに、アリオストは微笑みを浮かべて続ける。
「普通の人はこのグローシユが無いところでは魔法を使えないんだ。前の世界では普通に存在するモノだったケド、重ね合わせた世界ではグローシユが存在しなかった。だから、時空の歪から来るグローシユを集める送魔線を使って……」

「そうません……？」

「クス……柱のようなものが街道にあっただろ？ アレの事だよ。アレで魔力を集めて、魔法エネルギーを必要とする各種設備に供給し、使用してるんだ」

「へえ……！ グローシユって凄いだね！！」

ティピが感嘆の声を上げる。

「グローシアンは、日食や月食に生まれた人のことで、彼等はグロ
ーシユの量に関係なく強力な魔法を使う事が出来るんだ。しかもグ
ローシアンにしかできない魔法もある。グローシアンは太陽や月が
完全に隠れる皆既食の時に生まれた者ほど高い魔力を有する。ルイ
セ君は最も強力な皆既日食に生まれたグローシアンさ」

「うっひゃあ！ ルイセちゃんってそんなに凄い子だったんだ〜！
アンタ、知ってた？」

と感極まったティピがカーマインに問いかける。

「まあな」

対して、カーマインは淡々とした口調で返す。

「う〜、それじゃあ、アタシだけ知らなかったってコト〜！！？」

「ところで、アンタは何故こんな所に来たんだ？ わざわざ魔
法学院から」

カーマインはアリオストに向き直ると初めて自分から問いかけた。
アリオストは一瞬、彼の人間離れた美しさに目を奪われた。特に
美しい黒髪と黄金と蒼銀の瞳が印象的だった。

「……僕は、いつかあの島に行こうと研究を続けているんだ。その
為ここに来た」

「ええ〜！？ あんな高い所にい〜！？」

「ソレが、僕の夢だからね。ここに来る度に決意を新たにするんだ
そう言い切ったアリオストにティピはニコリと微笑んだ。

「頑張つてね、アリオストさん！」

「ああ……！ さて、そろそろ僕は宿に帰るとするよ。じゃあね
「バイバイ」

アリオストが背を向け去って行くのを見送ってから、ティピが言
った。

「アタシ達も帰ろっか！」

「ああ」

そう言い合うと二人は帰路につこうとした……。その時……

あなた……、待っていたわ……

カーマインはスツと後を振り返った。ティピは仰天してカーマインを見ている。

「……待っていた？」

カーマインは淡々と言われた事を訊ね返した。するとカーマインの目の前に夢で見た美しい女性が現れた。その身は、黄金の輝きに包まれ、しかも体が透けて見える。ティピが更に絶句する。

「……ゆ……ゆ……！」

対してカーマインは平然としていた。女はじつとカーマインを見つめ淡く微笑んで頷いた。

「ええ……、もうずっと前から……。……これを」

すつと女はカーマインに手を差し出した。カーマインはソレを受け取る。指輪だった。

「ソレは……貴方が持っていて……」

「……貴女の大切な人のモノではないのか？」

カーマインは女に尋ねる。だが、女の姿は光に包まれ、消えていく……。

「愛しているわ、貴方……。あの子に伝えて……。シエラは……。母は今でも貴方を愛していると」

「……」
そして、女は虚空に消えて行った。ティピがようやく口を開く。

「……何だったんだろう？ 今の」

「……」
カーマインの様子を窺いながら、問いかける。

「アンタ、さっきの女の人の事知ってんの？」

「夢で見た」

「……え！？ アンタの夢に出て来た人！？」

「行くか」

カーマインは端的に告げるとその場に背を向けて歩き出した。テ
イピはカーマインの後に続きながら、「一言言っつ。
「不思議な所だったね」

2・オズワルド

帰路にて

いつのまにか、日はすっかり暮れており、林の向こうからは月が顔を出していた。

「うわぁ……、綺麗な月だねえ〜!?!」

ティピは初めて見た月を感じ入ったように見ていた。カーマインはその姿をどうという事も無く見ている。と、しばらく月を見ていたティピの様子が一転した。

「ちよつと!?! アンタ、アレ見て!!」

スツとカーマインがティピの指し示す方を見た…。

「……どうして? こんな事を……!?!」

そこには数人の男達が美しい金髪の女性を取り囲んでいた。男達は下卑た笑いを洩らす。

「へえ……! 結構可愛いじゃねえか……!!」

「大人しく俺達と来てもらおうか!?!」

そう言いながら男達は女性に近づいていく。

「イヤアアアアア!!!!」

絹を引き裂く様な声を女性が発した。すかさず、ティピが叫ぶ。

「大変だ、助けてあげよう!!」

その時、既にカーマインは男達に向かってゆっくり歩を進めていた。ティピはカーマインの意図を読むとその小さな顔に満面の笑みを浮かべた。

「そ〜こなくつちゃ!!」

すると、男達はこちらを向き様、言い放った。

「何だ? テメエは!?!」

「アンタ達、その女性をどうしようってのよ!?!」

「女みてえな声を出しやがって!?!」

「私は女の子よ!？」

そう喚くティピに気付き、男達は更に下卑た笑みを洩らした。

「こりゃいい、人懐っこい妖精だ!!!」

「捕まえて売り飛ばしてやるぜ!!!」

盗賊の馬鹿にしたようなセリフに、ティピの顔が怒りに歪む

「ムツカア~~~~!!」

その時、男達の目の前に風が巻き起こった。

「…………え?」

一人の男がそう呟くと同時に、金と銀の瞳が男を射抜き…………、ドグウツ、凄まじいひざ蹴りが腹部を痛打した…………。

「グフウツ!？」

「な!？」

驚きの声を上げる男達を前にカーマインは左の男の横顔に右上段廻し蹴りを放ち、最後に残った男を静かに斜に素立ちした姿で見つめる。

「ク…………クソオ!!!」

腰にある山刀を抜き放ち、カーマインに斬りかかった。しかし、ドグウツ「グフ」男の腹部に、またしてもカーマインの膝が決まり、男は地面に倒れた。カーマインは腰にある『青銅の剣』に手をかける事無く、ほんの数秒で男達を倒してしまっていた。

ティピはしばらく呆然とカーマインを見つめていたが、我に返ると同じように呆然としていた女性に声をかけた。

「大丈夫だった?」

「え…………あ、はい」

女性は我に返ったようで、急いでカーマインに頭を下げた。

「あ…………あの、有難うございました」

「大した事してないよ…………ね?」

満面の笑顔で答えるティピだが、カーマインは素っ気無く、じっ

と街の方を見ている。

「……全く、コイツときたら……!!」

「礼なら要らない。まだ終わった訳ではない様だからな」

じつと前を見据えたまま言うカーマインに。ティピと女性が前を見ると、倒れている男達と同じ格好をした連中と、青い軽装の鎧をつけた男が現れた。

「チ！折角この俺が奴を引き付けてやったつてのに……!! 情けねえ……、そんなガキにやられるとはな!!」

「仲間がいたの!？」

ティピがギョツとした様に男達を見る。地面に倒れている者の一人が呟いた。

「オ……オズワルドのアニキ」

「テメエら、ガキの足を止める。女は俺が連れ去る!」

そう言うつて動ける二人の部下に命じるところらに向かつて走ってきた。

「ねえ、貴女の名前何て言うの!？」

「え……カ、カレンです」

「アタシ、ティピ! ねえ、アンタ。カレンさんどうするの!？」

ティピはカーマインに女性、カレンの事を問う。カーマインは静かに言った。

「その場で待機していてくれ。ティピもな」

と同時に男達に走つて行った。オズワルドという男は二人の部下を先行させる。次々とカーマインに男達は斬りかかって来た!

「ヒヤッホウ!」「死イねえ!!」

瞬間、カーマインの瞳が煌いた。ドグウツ一人目の斬撃を左にかわすと、左拳を思い切り横顔に叩き込み、二人目の突きを体を翻してかわすと後頭部に後ろ廻し蹴りを決めた。ドガアツ「アビヤアツ」「ゲフウツ」奇声を上げて男達は倒れる。

「!! コイツ……俺の部下達を……!!」

「降参すんなら今のうちよ!!」

「俺を部下達と一緒にしねえ方が身の為だぜ!!」

勝ち誇るかの様に言うティピにオズワルドは片手斧を二つ取り出した。オズワルドはそのまま、カーマインに斬りかかった。ティピとカレンが思わず息を呑む程のスピードだ。カーマインは紙一重の所でオズワルドの鋭い斬撃を避けていく。

「チィッ!」

舌打ちすると、オズワルドはカレンに向かって手斧を投げた。

「キヤアア!!」

ギィンツ一閃、カレンの前にカーマインがいつの間にか立ち、投げられた斧を腰の剣を抜いて一閃した。斧はまるで命じられたかの様にオズワルドの所へ戻る。カーマインはその斧を追い抜く程のスピードでオズワルドに斬りかかった。ガキィッ

「グウ……コイツ、何て剣撃だ!?!」

右手に軽く握られた剣。片手剣はそれ程の攻撃力は無く、まして最弱の青銅剣では大した事が出来るはずもない。キィンツカーマインを切り払い、戻って来た手斧を掴む。と、カーマインの左手が白く光った。

「何!? 魔法だと!?!」

しかし、ソレはオズワルドでは無く、近くの森に放たれた。光の矢はズドオツという音と共に炸裂した。

「ガハアッ」

ドサアッ木陰にいた男がその場に倒れた。

「コイツ、オズワルドの仲間!?!」

「チ……!!」

カーマインは静かにオズワルドを見つめると言った。

「伏兵に気付かないと思ったか?」

「……やるじゃねえか。だが、その剣は既に使えねえだろう?」

オズワルドはカーマインの剣を見ていやらしく笑った。青銅剣はカーマインの腕前に耐え切れず、パキィッという音がして折れた。

「ちよつと、アンタ!!」

「確かにテメエは強い。だが、獲物がソレじゃ宝の持ち腐れだな！」

カーマインはじつと己の剣を見ると、ソレを無造作に地面へ捨てた。

「……鈍らは鈍ら……か」

「……ぬ!?」

カーマインは右拳をスツと前に出した。そしてソレはやがて光に変化し、剣の形を取ると、青銅剣とはまるで違う美しい片刃の刀身を持つ、黄金のつばと漆黒の柄の、決して豪華とは言えず、しかし見る者を魅いて止まない見事な業物が握られていた。

「レギンレイヴ……。この俺の最高の剣だ」

「テメエは……リングマスター!!」

「……さあ、続きを始めるぞ」

言つと、カーマインは右手の剣を強く握り、地を駆けた。シュンッ一瞬で懐に飛び込む。先程までとは別物の神速の縮地法だ。

「な!?」

斬！ レイギンレイヴが一閃された。咄嗟に身を引いたオズワルドだったが、しばらくして、兜が真つ二つになり、オズワルドの額から血が流れた。

「……コイツ!!」

両手斧で反撃しようとしたが、それよりも遙かに速くカーマインの剣が二閃、三閃される。的確かつ、速く、鋭いその剣は一撃一撃、確実にオズワルドを追い詰めていく……！ オズワルドは小斧二振りをもって防戦に徹するのがやっとだ。

クツ、バカな!? 攻撃を打ち込む暇も、隙も無い……!!

何でこんな奴がローザリアに居やがる!? 何故こんなガキが……無名なんだよ!?

「ハッ!?」

物思いに耽るオズワルドだったが、カーマインの左掌に魔力が集中しているのを見て取った。「チィッ」舌打ちして『マジックアロ

「』をかわす。が、その崩れた体勢に、鋭く速い斬撃が襲い掛かってくる。ガキイツ両斧をクロスさせ、上段からの振り下ろしを止める。

「ゲウ……!?!」

地面に足が埋められそうな程の一撃。このままではやられると悟ったオズワルドは懐から黄色い玉を出し、カーマインにぶつけた。スパアツ玉は斬られると同時に煙状に変化し、カーマインを一瞬包むとすぐに晴れた。

「……目隠しのつもりか？」

斬りかかって来たオズワルドの手斧を一撃、二撃と払う内にカーマインは自分の右手が痺れる事に気付いた。

「……シビれ玉か」

オズワルドは、にやりと笑い応えた。そして、とどめの斧を放つ。

「そう言う事だ。これでテメエは利き腕を使えん。俺の勝ちだ!」

「!!! アンタ!!!」「アア!!!」

ティピとカレンが悲鳴に近い声を上げる。その時、カーマインは己の左掌に剣を握らせていた。

無駄な足掻きを……! 死ね!!!

斬! 気付けば、オズワルドの斧は刃を真つ二つに斬られていた。いや、二本の斧は真つ二つになった後、粉々に砕け散った。

「な……何……だと……!?!」

「生憎だが、俺は左利きだ」

左手に持ち替えた瞬間、斬線がまるで見え、気付けば斧を切り刻まれていた……。右手の時と比べるべくも無い圧倒的な強さだ。

「……斧だけか？」

ビュンツ 剣を具現させた時に現れた腰の鞘の口で剣を払う。すると、ソレが合図であったかのようにオズワルドの鎧はバラバラに切り裂かれていた。

「……バ……バケモノか……!?!」

チャキツ オズワルドの鼻先に剣をかざし、カーマインは静かに

問う。

「……続けるか？」

「クツ……!!？」

ティピがガッツポーズを取り、カレンもホッと息を吐く。その時、王都から白い鎧を着た茶髪の男が現れた。大剣を持った青年だ。

「オイ、テメエ!! 一体、何のつもりで俺を……!!？」

「ゼノス兄さん!!」

「!! カレン!? ……これは、一体!？」

青年……ゼノスはカレンとそして、オズワルドと剣を突きつけているカーマイン。そして、地面に伏せつている盗賊達に視線を移した。

「お兄さんの!!? 大変よ!! 貴方の妹さんがコイツらに!!」
「何だと!? テメエ、よくもカレンを!!」

そう言つて大剣を抜いたゼノスにオズワルドは内心で舌打ちした。

コイツとゼノスの二人が相手じゃ分が悪すぎる。一旦退くか
!!

そう考えた瞬間、目の前にあつた剣がスツと退けられた。

「な!？」

「……闘う気がないなら、失せる。俺は逃げる奴に興味は無い」

「……このガキ!!」

そう悪態をつくくと、オズワルドは部下達に怒鳴り散らし、

「行くぞ、撤退だ!!」

森の中へ走り去つていった。「待つてください、アニキ!!」

盗賊達もオズワルドを追いかけて行った。ゼノスが叫ぶ。

「待て!!」

追おうとするゼノスだが、盗賊達は既に見えなくなっていた。カーマインはソレを確認すると剣を鞘に納刀した。次の瞬間には金色に輝いて光の粒子となり、指輪に戻った。ティピがカーマインに笑いかける。

「終わったね!」

「カレン!!!」「兄さん!」

ゼノスはカレンの元へ一も二も無く駆け寄る。カーマインはスツとその二人に背を向け、王都の方へ歩き出した。ティピはそんな彼に気付かず、ゼノスとカレンの元へ飛んでいく。

「大丈夫だったか? カレン」

「ええ……あの人が助けてくれたから」

「……そうか。改めて礼を言うよ」

そう言っつてゼノスとカレンがティピを振り返った。と同時にティピも応える。

「当然の事をしたまでだよ、ね?」

その場に居た筈のカーマインに話しかけたつもりだったが、三人が向いた時、彼は既にその場を後にしていた。

「……ア・イ・ツ~~~~!!!!」

ティピの眼が三角に吊り上がる。カレンは王都の方を見ながらつぶやく。

「お礼を言う暇も無く、行ってしまった……」

「ごめんなさい、カレンさん……。と……」

ティピは大柄で筋肉質な青年を見上げる。

「ゼノスだ。彼に伝えておいてくれ。君のお陰で妹は無事だった。有難うつてな」

「いいよ、あんな奴に礼なんか言わなくても!!」

ゼノスと名乗る青年は怒りまくるティピに苦笑するも、地面から反射する光を見、目つきを鋭くした。

「……それはそうと、あの親玉の武器をあんなにしたのは、彼なのか?」

とその光は、武器としての役割を持たなくなったオズワルドの斧だった。

「ん? ……うん」

ゼノスの言葉に、ティピは要領の得ない顔で頷く。

そんな彼女に構わず、ゼノスは質問を続けた。

「……………。武闘大会には出るんだろう？」

「ぶとーたいかい？」

ティピの様子に、彼は呆れるような表情をした。

「何だ、知らないのか？ グランシルにある闘技大会だよ。これ程の腕なら、彼も出場して欲しいな。是非とも手合わせしてみたい」

「ふん、そんなモン？」

「まあ、優勝は俺がいただくがな！」

ニカツとティピに笑いかけるゼノスにカレンがクスリと笑い、たしなめる。

「もう、兄さんたら」

「じゃ、俺達はもう行くよ。本当に有難う」

「有難うございました」

そう言って王都に戻る二人をティピはニコリと笑って大きく手を振った。

「バイバイー！！」

そして、自分も王都に向かって行く。

「さうて、アイツと来たら……………！ このアタシを放って帰るなんていい度胸じゃない。ティピちゃんキックをかましてやらなきゃ！！」
自宅へと急ぐティピであった……………。

3・仮面の騎士

サンドラの研究室

城の中にあるサンドラの研究室……。その部屋の前に番兵が血に塗れて倒れていた。カーマインはそれをジッと見ると、番兵の剣を拾い上げ、中へ入っていった。

「あつたぞ！ サンドラの研究書だ！」

「よし、早々とズラかるぞ！！」

「……ムッ!?」

仮面をつけ、両腕にブレードを装着したローブ服の男が二人、その場にいた。二人はカーマインに気付くと目つきを変えた。

「貴様……!!」

カーマインは邪悪な笑みを口元に浮かばせ、瞳は何の輝きも発しない闇に淀んでいた。金と銀の……闇。

「その魔導書を貴様らにくれてやる訳にはいかん。置いてゆけ」

いつもよりも遙かに低く邪悪で高圧的な声だった。聞く者を恐怖へ墮とすように。

「ええい、貴様も外の番兵の様にしてくれるぞ!!」

「フ……勇ましいな」

「ガキが……!!」

男が物凄いスピードでカーマインに斬りかかった。ズバァッ 二人の影が交差し、やがて男がゆっくりと倒れた。

「バ……バカな……!?!?」

血を払おうともせず、カーマインは剣を相手に突きかざす。

「貴様もこうなりたくなければ、その魔導書を置いてゆけ」

「……クソ!!」

ガシャァンッ 背後にあったステンドグラスを割って男は夜の闇へ姿を消した。

「逃がすか!!」

カーマインもすぐに男を追おうとするが、急に力が抜けていく。
「グウ……、コ……コレは……!!」

カーマインが見たのは不思議なグローシユを放つ水晶だった。それが彼がその日見た最後の映像だった。ドサアツ

男が一人、歩いていった。見知らぬ男が、見知らぬ場所を歩いている。近くに川の音がする。

「……ん？」

男の前に二人の同じ背丈、格好をした仮面をつけた騎士が現れた。
「お前か、この辺りをかき回っている男というのは……？」

「何者だ？ お前達には無え、道を開ける!!」

「そうは行かん、お前はここで死ぬのだ!!」

もう一人の仮面騎士がそう言い放って剣を抜いた。

何だ、コイツ等？ 全く声が……!!

「……ハッ!？」

ギインツ 物凄いスピードで斬りかかってくる仮面騎士。一人目の剣を男は己の『ダブルエッジ』で受け止める。もう一人の剣も、双身の剣である。この武器で止める。

コイツ等、出来る!!

ギインツギインツ 二、三度剣を交えて騎士の実力に気付く。自分と同等のレベルが二人……。分が悪い。騎士が口を開いた。

「中々やるな。だが ……!!」

「何!？」

男は魔法を全く使えない。剣の腕が互角なら、当然魔法の無い自分の方が不利だ。ズドオツ 『マジックアロー』が放たれる。

「クッ」

何とかかわす。が、体勢の崩れたそこへもう一人が斬りかかって来た。ガキイツ 剣と剣がぶつかり合い力比べとなる。騎士の背格

好は男よりも華奢で、小柄だった。しかし、それでも大柄な男と全く互角の腕力……。いや、それ以上で、徐々に男が押し返され始めている。

「クツ、こんな……バカな!？」

「もらった!！」

ギインツ 男を騎士はそのまま後ろへ吹き飛ばし、体勢の崩れた無防備な男へ二人同時に斬りかかった。ズババアツ

「グアアアアアアアアアアアア!！」

二人の騎士はそれぞれ両目と男の利き腕である右を斬り落とした。男は勢いのまま、背後にあった崖へ真つ逆さまに落ちていった……

！ 騎士は静かに男が踏み外した所へ立ち、下に流れる川を見下ろした。ス……ツと仮面を外し、冷酷に笑う……。

「フフ……あの傷でこの高さから落ちれば助かるまい」

その黒髪と黄金と蒼銀の瞳、そして端正な顔立ちはカーマインやシーティアのそれであった……。いや、カーマインそのもの……。

「……!！」

バツと目を見開き、身を起こしたカーマイン。肩で息をしながらも、静かに周りを見回す。そこは見慣れた自分の部屋であり、自分はベッドで寝ていた……。

俺は、確か……カレンとかいう女を助けて……それからどうした？

昨夜のことを思い出そうとするが、どうにも思い出せない。……いや。

「……そうだ、声が聞こえた。“奪え”という声が……。……そして、覆面の男を斬った。あの声は……。何だ？ そして……。さっきの夢は……」

カーマインは静かに立ち上がり、自分の両の手の指輪を見た。右手にはレギンレイヴ、左手には幽霊からもらった指輪。それを見た

後、自室を出て下のリビングへ向かった。

リビングには既にサンドラ、シーティア、ルイセそしてティピが居た。しかももう一人居る。ローランディア兵士だった。サンドラがカーマインを見るなり言った。

「お早う。どうして私の研究室に居たのですか？」

「……ああ」

ティピは今一切れの良くないカーマインに言った。

「アンタは、昨日カレンさんを助けてから急にいなくなってたの。家に帰ってると思ってたんだけど、そんなことなかった……。マスターと私とルイセちゃん揃って捜し出したときには、マスターの研究所でアンタが倒れてたってこと」

「昨夜、サンドラ様の所に賊が侵入したんだ。研究書を奪われてね。ただ、賊の一人が剣で斬られ死んでいた。恐らく君が倒したんだろう。君の剣に血痕がついていたしね。何か思い出せないか？」

兵士がティピの言葉を継いだ。カーマインは静かに答えた。

「記憶が所々飛んでいて……研究室の前までどうやって移動したのか覚えてない。ただ、賊の一人は俺の剣技を見てステンドグラスから窓を割って逃げた」

「やっぱりそうか！」

兵士は我が意を得たりと頷いた。

「サンドラ様！ 私は至急王に伝え、追手を手配します。それでは」
兵士はそのまま去っていった。

「お母さん、その研究書には何が書いてあったの？」

「グローシユの結晶である魔水晶の研究です。どうすれば魔水晶からグローシユを抜き取れるかというものです」

ルイセの質問にサンドラは静かに答えながら、続けた。

「ルイセ、どうやら貴女に魔法を教えるのは当分ムリの様ですね。私は他に研究書を奪われていないか、そして追手の特定を急がねばなりません。カーマイン、そしてシーティア」

呼ばれてカーマインとシーティアがサンドラを見つめる。

「悪いのだけれど、デリス村にいるウォレスという男にこの『魔法の眼』を届けてもらえませんか。片腕が義手なのですぐ解ると思います」

「……『魔法の眼』？ 何に使うのか大体解るわね。要は視界を一時的に回復させるモンでしょ？」

「そうです。では確かに頼みましたよ」

そう言うと、サンドラは家を後にした。ルイセが『魔法の眼』をジツと見ている。シーティアは『魔法の眼』をルイセにスツと渡してからカーマインを見た。

「で、行くんでしょ？ ……そう言えばさ、怪しい男が東門から逃げたらしいわよ？」

シーティアは早々と行こうと言おうとして、ふと思い出したように言った。

「看守兵が知らない男が今朝早く出て行ったって。渡しに行くだけじゃ暇でしょ？ 私とアンタで捕まえない？」

「それって……お兄ちゃんとお姉ちゃんが犯人を捕まえるってこと！？」

「……で、どうする？」

シーティアはジツとカーマインを見据える。カーマインは「ああ」とだけ答えて了承した。ティピが俄然やる気を出し始めた。

「よっし！ それじゃ、出発よ！！」

「うん！ 早く行こう！！」

「……って……え？」

隣で同じ様に頷く少女……ルイセにティピは思わず？マークを飛ばす。

「決まってるでしょう、私も行くの」

「ん〜もう……！ 性が無いわね〜、ちゃんと守ってあげなさいよ！」

ティピはカーマインをジツと見つめて言った。すると彼は淡々と「ああ」と返した。

「コ……コイツ……!!」
「そいつに愛想を求めても無駄よ、さあ……行きましょう」
シーティアは石の槍を持って出かける。その後をカーマイン達はついて行った。

東門を出て

カーマインは腰に覆面に殺された衛兵のブロードソードを差していた。刀身が反り返った片刃の剣。レギンレイヴと似ているローランディア特有の刀剣。叩くのではなく引くことで極限まで切れ味を引き出す事に成功したとされており、青銅剣のような安物からレギンレイヴの様な神業物まで、広く作られている。冒険者やローランディア兵に正式に採用されている。片手でも操れる事から片手剣とも呼ばれており、扱い易さは逸品。

「……アンタ、あのレギンレイヴとか言うのがあるんだったら、そんな剣必要無いじゃない？」

「剣士として、剣を選ぶ様ではダメだ。レギンレイヴは強力無比な剣だが、それに頼っていても、己の腕が鈍る」

「ふ〜ん、アンタって剣の事になると結構しゃべんのね」

「剣術は好きだ」

そう言うカーマインにティピが「ふ〜ん」と生返事を返す。しかし、今度はルイセが問うてきた。

「でも、お兄ちゃん。腰にもう一本差してあるのって青銅剣だよね？ どうして？」

「二刀流でもすんの？」

とティピも問うて来る。カーマインは静かに青銅剣を見た。

「鈍らでも、それを扱えなかったのは未熟の証。剣の修行のためにも必要だからだ」

「一流の腕を保つには、鈍らを使うのも必要ってこと」

とシーティアが二人に説明する。と、シーティアが川原の岸に剣が落ちてあるのを見つけた。

「……うん？ あれは……？」

「……」

シーティアはその普通よりも長い剣を掴むとジツと品定めをするかのように見つめる。

「よく使い込まれた、いい剣ね」

「あ、お姉ちゃん！ 橋の上にいるあの人のじゃないかな！？」

見ると橋の上に銀髪の青年が立っていた。が、青年はその場から立ち去ってしまった。

「届けてあげよう？ きつと困ってるよ」

「……でも、あんな所から剣を落としたら普通取りに来るんじゃない？ 来ないって事は要らないってことだから、私がもらっても……痛ッ」

ゴチンツ。シーティアが頭を押さえる。カーマインが拳骨を放ったのだ。カーマインはシーティアから剣を奪うと、青年の後を追って歩いていく。

「ア・ン・タ……！ 今の、ちょっと痛かったわよ！？ 姉に対して謝りなさいよ、カーマイン！！」

スタスタと無視して先に進むカーマイン。

デリス村へと続く一本道に入ってカーマイン達は青年に追いついた。ルイセが声を上げる。

「すみませ〜ん！」

「？」

青年が足を止め、こちらを振り向く。その青年の前にカーマインは無言で剣を差し出す。

「！……その剣は……！」

「やっぱり、これ……貴方の剣なんですわね！」

ルイセは「あはっ」と嬉しそうに微笑むが青年はその端正な顔立

ちを歪めて言った。

「それは……捨てたのだ！」

「捨てた？ こんなに大切に扱っている剣なのに」

「お前達には関係無いだろう！？」

そう怒鳴りつけると青年は剣を持って走って行ってしまった。

「何よ、アイツ〜！ 感じ悪いわね！！」

「……色々有るんだよ、あの人にも」

そう言っつてティピをなだめるルイセ。カーマインはそんな二人に構わず、また歩を進めた。

「……ねえ、ルイセちゃん。アイツっつていつつもあなの？」

「うん、お兄ちゃんはちよつと物静かだから」

とその後ろをシーティアがツカツカと歩んでいく。

「ちよつと、詫び入れなさいよ！ コラ！！ 聞いてんの！？」

ティピがルイセをジツと見る。

「……お姉ちゃん、普段は知的なんだけど、お兄ちゃんといつつも喧嘩するの」

「ふ〜ん」とティピは言い、ルイセと一緒に双子の後に続いた。

4・デリス村

デリス村

「ここがデリス村かあ!!」

「お兄ちゃん達は宿屋だよな?」

「うん、急ごう! ルイセちゃん!!」

二人は宿屋に入った。そこには思った通りカーマインとシーティアがいた。まだシーティアが一方的に話し続けている。カーマインはどこ吹く風と聞き流していたが、二人に気付くところらに向かつて歩いてきた。

「ウォレスという男はどこかに出かけているらしい。しばらく時間をつぶして来い。俺も出かける。……ルイセ」

「……うん、……て何?」

「シーティアを頼んだ。ティピ」

それだけ言うとカーマインは早々とその場から立ち去った。シーティアはチツと舌打ちし

「逃がしたか」

と続けた。そこでルイセにいつもの「お姉ちゃん」の顔に戻って問いかける。

「それじゃ、女二人で出掛けましょうか?」

「うん!」

二人は小さなアクセサリ店へと向かって行った。一方、カーマインとティピは先程の青年と出会っていた。村の東出口に位置する広間の隅をじつと見ている。

「……ねえ、あの親子をジツと見てるけど……どうしたんだろっ、アイツ?」

カーマインは静かに木刀を持った二人の親子を見つめる。男の子が父親に向かつて何度も何度も打ち込んでいく。その様を見ている

と、ティピが青年の元へ飛んで行った。

「ねえ、アンタ！」

「……何だ、羽虫」

「羽虫じゃないわよ、ティピよ！……アンタさあ」

「アンタじゃない、ジュリアンだ」

ティピはムーツと唸ってから話しかけた。

「じゃあジュリアン。さっきからあの親子を見てるけど、どうかしたの！？」

「……」

ジュリアンと名乗った青年は物憂げな顔でジツと親子を見つめる。

「ムツカア！ ちよつと、話を聞きなさいよ！！」

「うるさいな！……一人してくれないか」

そう怒鳴ったジュリアンにティピが蹴りを放とうとした時、カーマインがいつの間にかジュリアンの前に立っていた。

コ、コイツ、私に気配を悟られる事無く……！？

「……な、何だ」

カーマインがジツと真っ直ぐに自分を見つめていることにジュリアンは何故か激しく狼狽した。その金と銀の瞳に危うく吸い込まれそうだった。

「……何を落ち込んでいるのか知らないが、あまり思い悩むな。君の体がもたない」

「怒鳴ったりして、済まなかった。気にしてくれて有難う。だが……」

……今は、一人にしてくれ」

「気にするな。こちらもティピが失礼した」

「……すまない」

ジュリアンがティピに対して頭を下げた。ティピも顔を赤くして頭を下げる。

「うっん、こっちこそよく事情も知らないのに、ゴメンね」

カーマインはそれを確認すると、ティピに「行くぞ」といってその場を後にした。

「……何か、初めてだね。アンタが私に「行くぞ」って言ってくれたの」

「……そうか？ ……今後気をつける」

「うん、そうしなさいよ！ あんまりアタシをほったらかすとティピちゃんキツクだからね！」

「……ああ」

カーマインの、声が落ちる。どこか俯き気味になりながら答えた彼は、表情こそ無いものの物憂げだ。そんな彼の、カーマインの感情に初めて触れられた気がして、ティピはどこか上機嫌であった。

宿屋にて

カーマインとティピが宿屋に来ると、シーティアとルイセが机に座って談笑していた。二人はすぐにこちらに気付き、ルイセが満面の笑みで迎えてくれた。

「ティピ、お兄ちゃん。お帰りなさい」

「たっただいま〜！ ルイセちゃん、ウォレスさんは？」

「まだみたい……ん？ あ！ お兄ちゃん！」

と丁度その時、ガチャリと宿屋のドアが開き、盲目の右腕が義手の男が現れた。スツとシーティアがその男に近づいていく。その美しい声で問いかける。

「すみません、貴方はウォレスさんですか？」

「……？ ……そうだが、お前達は？」

とシーティアの横にいたルイセ、ティピが答える。

「私たち、サンドラの……母の使いでやって来ました」「この子供達はマスターの子供達なの」

「……そうか、サンドラ様のご息女か」

男、ウォレスは得心が行ったという顔をして納得している。シー

ティアはそんな彼に魔法の眼を差し出した。ウォレスは早速それを自分の目にかける。

「……うむ、これはいい」

「そんなので、本当に見えるようになるの？」

満足そうに頷くウォレスにティアが疑惑に満ちた質問を向ける。

「以前のようには無理だがな。そうだな、人の影がボンヤリ分かる程度だ」

「それじゃ、よく分かんないね」

「そうでもねえさ、今までは全く見えなかったんだ。それと比べれば雲泥の差だ。これで以前のような生活が出来る」

「良かったね」「うん！」

とティアが笑いかけるとルイセも自分の事のように微笑む。知らず、ウォレスの口元にも笑みが刻まれていた。と、そんな二人にシューティアが言う。

「さて、お使いはおしまい。それじゃ行きましょうか？」

「うん、そうだね！」「急がないとー！」

と女三人の言葉にウォレスが怪訝そうに言う。

「どうした？ 良ければ話してくれないか？ 何に巻き込まれてる？」

「えっと、サンドラの……母の研究書が盗まれる事件があったの。

私たちはその犯人を追いかけてるの。まだそんなに遠くには行っていないはずだから」

「……なるほど。そう言えば、東の森にある小屋に不審な人物が入りしていたと木こりが言っていたな」

「ビンゴ！ 有難う、ウォレスさん」「行こう、お姉ちゃん！」

シューティアはウォレスに礼を言うと、傍らにいるルイセ、そしてカーマインに向かって「行こう」と合図する。とそこへ

「待った。そこに行くなら、俺も手伝わせてくれ」

「え……！？ でも危険なんですよ！？」

とルイセが驚いた様に言う。ウォレスはそれでも退く様子はない。

「まあ、サンドラ様の御息女達を危険な目に遭わせる訳にはいかんさ。それにリハビリも兼ねる。大分体がなまってるからな」

「……闘えるのか？ その眼では距離感もあいまいだろう。何より、アンタ自身が慣れていないはずだ」

「だからこそだ。まあ、やっと義手に慣れた所で闘った事が無い。腕前はお前より劣るかも知れんが、手は多い方がいいだろう」

「……なら、俺から出来る礼はこれだ」

カーマインは腰からブロードソードを鞘ごと剣帯から抜き、ウォレスに差し出した。

「……いいのか？ お前の武器は？」

「俺にはもう一振りある」

「すまねえな。なら、早速行こうか！」

こうして、ウォレスという剣士を従え、一行は宿屋を後にした。

いざ出陣という所で、ティピが「あっ」と気付いて立ち止まる。

カーマインも静かにティピのしている方を見やる。ルイセが気付いた。

「あの人……」

「ふ〜ん、やっぱり何か訳有りってコト」

とシーティアがつぶやく。その先にいたのは、銀髪的美青年剣士……ジュリアンだ。

「ん？ あの人がどうかしたのか？」

「何だか、思い詰めてるみたいなのよね、あの男」

「……あの男？」

ウォレスはティピの応えにフムと頷き、ジュリアンに向かって歩いていった。

「何を迷っている。良ければ俺に話しちゃくれないか？」

「……貴方は？」

「おっとすまん。俺の名はウォレス」

「ウオレス？ …… ひよつとして放浪の剣士ウオレスか！？」

ジュリアンが憧れに近い表情でウオレスを見た。

「貴方の話は子供の頃に良く聞いた。しかし、どうしてこんな村にそれにその姿は？」

「二年前、クレインという村で暴漢にあってな。奴らに目と利き腕を奪われた」

「そんな身体で、どこへ行こうというのですか？」

「アイツらの母親の研究書を取り返してやろうと思つてな。ナマツた体のリハビリも兼ねて、な」

迷い無く言い切るウオレスにジュリアンは頭を振る。

「解らない。何故そうまでして剣を持つとする？」

「信念つて奴だ。俺は20年前から行方不明になった団長を捜している。こうまで捜していないってコトは生きてねえのかも知れない。しかし、俺は旅を続ける。俺なりに納得できる応えが見えるまで」

スツとウオレスはジュリアンに向き直ると言った。

「君は今迷っている様だが、信念があれば迷いなど断ち切れる」

「……私には信念が無いというのか？」

「ソレを決めるのはお前さんだ。何の為に剣を振るうか？ ソレを見出せれば、信念が手に入る」

ウオレスはそこまで語ると、カーマイン達の所へ戻って来た。

「待たせたな」

「年長者の言うことは重みが違うわね〜！」

とティピが言う。ウオレスはソレに苦笑を浮かべる。

「でも、ウオレスさん。その団長さんを20年も捜してんでしょ？」

「ああ」

「でも見つからないってコトは生きてるとは思えないな〜！」

そう悪びれずに言うティピにルイセがしかる。「ティピ！」「…
…だって」

「……確かに死んじまってんのかも知れん。だが、先程彼に言った通り、自分が納得するまで俺は辞めたりしねえよ」

「……ソレが、貴方の信念？」

「ああ」

「クス……そう」

シーティアはとても女性らしく美しく微笑んだ。ルイセやティピが思わず見惚れてしまうほど美しく……。カーマインはそんな彼女達に静かに言う。

「さあ、行こう」

「……そうね」「ああ」

シーティアとウォレスがソレに応え、ルイセとティピも慌ててカーマイン達の後を追い掛ける。ジュリアンはそんな一行の姿をジッと見送り、空を仰いだ。

「き……貴様ら……!!」

覆面をつけた男がカーマイン達と対峙していた。カーマインは静かに青銅剣を抜く。シーティアも石の槍をスツと構える。ウォレスはブロードソードを抜いた。

「……大人しく研究書を渡せ」

「早くしないと、痛い目……見るわよ」

カーマインとシーティアが男に冷たく言い捨てる。

「フン……ナメるなよ。……おい!!」

男は自分が出て来た山小屋に怒鳴った。中からオズワルドの手先だった盗賊達が現れた。

「ちよつと!! じゃあ、この覆面はカレンさんと関係あんの!？」

「……さあな、捕まえれば解るさ」

「簡単に言うわね。なら、お手並み拝見させてもらうわよ! っ
けえ〜!!」

「ああ」

ティピにそう応えると、カーマインは敵に斬りかかった。ソレも覆面の男も相手にだ。右手に剣を握り、突っ込む。

「チ！ 貴様は……！」

「……行くぞ」

一瞬で男の懐に飛び込み剣を振るうカーマイン！ 男も両手のブレードで斬り返す。ガキイツガキイツ……カーマインの斬り込みを完全に受け切る。

「……やるな」

「コイツ、昨日の時ほど動きが化け物じみていない……？ ……これなら！」

「……！」

ドガアッ！ カーマインが吹き飛ばされた。ルイセが悲鳴を上げるが、当の本人はケロツとして立ち上がる。そしてチラツと青銅剣を見据える。

「……成程」

そして、更にスピードを上げる。ギインッ

「ぬ……！？」

「……コツは解った」

そう言うと、カーマインは物凄いスピードで斬り始める。ギインッギインッ！ 必死で受け止める覆面の男。しかし、ズバアッ！

「……グッ！？」

男の二の腕が斬られ、血が滲む。立て続けに切り出される斬撃を両のブレードで止めながら高くジャンプし、カーマインの頭上を舞う男。

「ゲ！？ アイツ、どんだけ跳ぶのよ！？」

「……大した事無い」

「え！？」

男は上空からカーマインの頭部に狙いを定め、急降下する。いや、そのつもりだった。

「……何！？」

下にカーマインの姿が無い。妖精の姿をしたホームンクルスがいる

ただだ。そのティピはポカンとした表情で男の…更に上を見ていた。「!?!」

男が上を向こうとしたのと、ビュツと剣が男に振り下ろされたのはほぼ同時だった。

「甘い」

「バ、バ……」

ドガアツ 剣の峰で相手の頭部を一閃。片手剣と呼ばれるローラ
ンディアの剣だからこそ出来た加減の一撃だった。スタアツ ドサ
アツ 男はそのまま地面に叩き伏せられ、カーマインは静かに着地
した。

「グ……グウ……!」

男が何とか半身を起こすと、そこにはシーティアとウオレスによ
つて地面に叩き伏せられた盗賊達がいた。

「驚いたな。これ程の腕をそんな若さで手に入れているとは」

「まあね。母さん、教育ママだから」

「サンドラ様が?」

「ええ、私達を外に出て行かせる為に魔法と武術を一通りやらされ
たわ」

「ソレでコレだけ極めているとは大したモンだ」

「そりゃそうよ。城中の兵士を相手させられた事もあんだから」

「まるでインペリアルナイトだな」

「やめてよ、騎士なんて私はイヤ」

などとウオレスとシーティアの会話を無視し、カーマインは静か
に男に問いかける。

「さあ、研究書を渡せ」

「フ……フフ、無駄だ。もう……とっくに俺達の仲間が持ち去った
後だ。一足遅かったな」

「……つまり、陽動か」

と落ち着き払った声で告げるカーマインと対照的にティピが叫ん
だ。

「ちょっと、どーすんのよ!?!」

「……今から行っても間に合わないわ。諦め……」

とシーティアが言おうとすると、カーマインが何も言わず、身を翻して走り出した。

「ちょっと! いくら何でも無理……」

「無理でも何でも、やらなきゃ取り返せないんだ!」

いつもよりも遥かに強い口調で言うカーマインに、ティピとルイセが驚く。シーティアは「ふう」とため息をついて、頭を掻いた。と、その時、

「……それは必要ない」

!!!

一同が声をした方を向くと、そこには村で別れたジュリアンが研究書を片手に持って立っていた。

「!?! ジュリアンさん!?!」

「アンタ、どーしてここに!?!」

ルイセとティピがジュリアンの出現について、質問をしてしまう。

が、当の彼はその美しい瞳をカーマインに向け、研究書を差し出した。

「気になってお前達の後を尾けていたら、そこに倒れている男の仲間らしき奴がこちらに向かって来たので、倒して奴の持っていた本を奪っただけだ。この本がお前達の探しているモノか?」

「……ああ、間違いない。助かった」

カーマインは本を受け取ると、中身を確認してから、ジュリアンに向き直り、礼を言った。

「いや……」

ジュリアンは顔を背けてそれだけ応えた。シーティアは一瞬だけ意味有り気な視線をジュリアンに向けると微笑した。ウオレスはジュリアンの隣に来ると言う。

「……どうかしたのか?」

「貴方に聞きたい事がある。どうして、最悪の結果を予想してでも、

まだそんな危険な事ができる？」

「そんな事か？ …… そうだな、自分を納得させる答えを得る為だ。さっき言ったが」

「……私も、皆と行動して良いか？ 皆の元で私ももう一度、剣を振るう意味を見出したい」

「ソイツは俺より、コイツ等に聞くんだな？」

とウオレスはカーマイン、シーティア、ルイセを順に見つめた。

「私は勿論OKだけど……」

とルイセが答え、ティピもそれに続く。

「ウン、ジュリアンが味方になってくれたら凄い心強いもんね！」

「……好きにしてくれ」

「コ・イ・ツ~~~~~!!!!!!」 「お兄ちゃん、照れてるだけなの、気にしないで」

カーマインがぶつきらぼつに告げた瞬間、ティピの蹴りが横顔に決まった！ルイセがその横でジュリアンに必死で説明をする。

「……ま、私は貴方に居てもらった方がいいわ。色々楽しそうだし」

と、シーティアが最後を締め括った。ジュリアンはそれは美しい微笑をすると、

「すまない、有難う」

と告げた。

5・エリオット

カーマイン達は道中出会うモンスター達と戦いながら、村へと辿り着いた。ジュリアンの実力は凄まじく、ルイセやティピは開いた口が塞がらないと言った具合だった。

「凄い、ジュリアンさん！」

「ホント〜!!」

「……迷いを抱きながら、これ程の腕とは……！ 目と腕が自前だった頃に手合わせ願ったかったモンだ……！」

と感嘆した笑みを浮かべるウオレス。シーティアは「ピューツ」と口笛を吹いて見せる。カーマインのみ、何の反応も見せず、スタスタと先へ進んでいく。

「それにしても、アイツ等をそのままにして良かったの？」

「問題ない。一度仕掛けて失敗した以上、奴も迂闊な真似はしない」
ティピとカーマインの会話にシーティアが一言添える。

「警備兵がうるうるしてる中に忍び込まないってフツ。それに捕まえようとしたら、多分自殺されるわよ。私は構わないけど、カーマインは甘ちゃんだから」

「……無闇に命を奪うつもりは無いだけだ」

「それが甘いつてのよ」

と告げるシーティアに構わず、カーマインは前を見て歩いて行く。と、そのカーマインの足がピタツと止まった。

「? どうしたの、アンタ?」 「……お兄ちゃん?」

ティピとルイセが怪訝そうにカーマインを見る。カーマインは静かに、ザツと振り向いた。そのときには、シーティア、ウオレス、ジュリアンの三人もそれぞれの武器を構えて振り向いている。

そんな一行の前に、三人の親子が現れた。その後ろから続々と村に盗賊が入ってくる。

「……クツ！」

「やっと、追い詰めたぜ……！ 大人しく死にな……！」
「エリオット、ここは私達で食い止める！」 「貴方は早く逃げなさい」

男と女が少年に向かって言う。少年は金色の髪と美しい蒼の眼をした、あどけない美少年だった。気弱そうな顔で二人を見返す。

「でも……父さんと母さんは？」

「私達の事は気にするな」

少年……エリオットの問いに、その父親は細身の剣を抜いて構えた。レイピアと呼ばれる、斬るのではなく突くための剣だ。

母親も懐から投げナイフを複数本取り出し、構える。

「あなたは生き延びて……！」

「ハアツハツハツ！ てめえら……、悪いが全員死んでもらうぜ……！」

と、その時、ティピが叫んだ。

「ああ！ あいつ……！！！」

「あの親子が襲われている……！」

「大変、お兄ちゃん！ お姉ちゃん……！」

ジュリアンが鋭く盗賊達を睨み付け、ルイセはカーマインとシーティアを見つめる。シーティアは冷静に問いかける。

「アンタ、知り合い？」

「さあな？」

と答えるカーマインに、ティピが蹴りをドカツと喰らわせ、盗賊のリーダー、オズワルドに叫ぶ。

「アンタ！ まあた、こんな真似してんの……！」

「ゲツ！ その声は……、テメエはあの時の……！」

オズワルドはカーマイン、そしてティピを見ると、こちらに斧を突き付け、叫んだ。

「よくも、やってくれたな……！」

「なあに言ってるのよ、女の子を数人がかりで襲ったり、親子を攻撃したり、とことん情けない奴ね……！」

「ぬかせ！ 八つ裂きにしてやらあ！！」

と言うティピにカーマインは静かに剣を抜いた。シーティアも槍を構える。

「あ……あの、何が何だか……？」

「戦うしか無いってことだ」「そういう事のような」

戸惑うルイセに、ウオレスとジュリアンがそれぞれ剣を構えながら、言い捨てる。かくして、戦が始まった！

「やっちまえ、野郎ども！！」

「……おお！！」「……」

シーティアは敵陣のど真ん中に立つと、槍を振り回し、次々と男達を吹き飛ばし始めた。ドガガアツ 「グハアツ」「ギイヤア！！」盗賊達が怯んだところをウオレス、ジュリアンが一気に斬り込む。

「コイツ等！！」「フザケやがって！！」

ギインツ ウオレスは左手に剣を持つと、右袈裟に斬りこんだ。

ガキイツ 盗賊の一人が何とか山刀でそれを受け止めるも……

「又ウン！！」

「ゲエ！？」

ドガアツ そのまま力任せに吹き飛ばされた男は仲間たちと共に地べたへ転がった。

「クソツ！ このバケモンがあ！！」

背後から斬りかかる。ガキイツ それを義手で受け止め、力任せに山刀を振り払うと男の横顔に拳が叩き込まれる！ ドガアツ

「あべえ！？」

その隣では、ジュリアンが尋常では無いスピードで紙のように盗賊達を叩き伏せ、切り捨てていく。自分の身の丈ほどもある細いが長い剣を使って、力と技、そしてスピードで鬼神の如き強さを誇っている。シーティアやウオレスも強いが、ジュリアンの強さは別格だった。アツという間に手下が減っていくので、オズワルドは焦燥感たっぷりになった。

「クソ！ どうして、テメエ等いつも俺の邪魔をすんだよ！？」

「アンタが悪い事するからじゃない!!」

「うるせえ! コイツは仕事だ!!」

当たり前と言わんばかりのティピにオズワルドが吼え返した。エリオットがそれに問いかける。

「仕事って……誰かに頼まれたってことですか!？」

「言えねえな……! そつちが大人しく殺されねえんなら、こつちにも考えがある! おい、お前等!!」

と既にほとんど倒された部下達とは違う、村の周りに向かってオズワルドは叫んだ……。しかし……

「……って何で誰も出てこねえんだよ!？」

「叫んでも無駄だ」

背後を振り返るとそこにはカーマインが立っていた。

「! お兄ちゃん!!」「カーマイン!」「アンタ!!」

ルイセ、ウオレス、ティピがカーマインを呼ぶ。オズワルドは愕然とした表情で言った。

「ま……、まさか……。テメエ……!!」

蘇るのは、王都の前で彼と出会った、あの時。

伏兵に気付かないと思ったか？

脳裏を過ぎる、悪夢の声。それを、カーマインは淡々と再現した。

「村の周りに居た連中は眠ってもらった。お前の考えなど、お見通した」

「ク……クソッ! こうなったら!!」

とオズワルドは苦し紛れにエリオットに斧を投げた。

「う……うわあああ!!」

「! エリオット!!」

ジュリアンが舌打ちし、ウオレスが駆ける。

「チ! しまった!!」「クソ! 間に合え!!」

とその時、ドガアッ! 斧は魔法の矢で粉々に砕けた。皆が見つめ

る視線の先には、あどけない少女が杖を構えていた。ルイセである。「だ……大丈夫?」

「あ……ありがとうございます」

と言い合うルイセとエリオット。オズワルドは舌打ちするや否や懐からまたしても片手斧を取り出し、両手に構えた。

「なら、二本ならどうだ!!」

「いい加減にしろ」

「な!?!」

カーマインがいきなり、懐に飛び込み、オズワルドが投げるよりも速く剣を一閃した。ズバアッ! オズワルドの斧が斬られる。

「な……!?!」「に……!?!」

ジュリアンとウォレスが驚愕の表情を取った。カーマインの剣は一番安価な青銅の剣だ。それで、あれほどの切れ味を出した…。カーマインの技とキレに、二人は驚く。

「……クッ」

オズワルドは身を翻し、逃走を図るが、その前にカーマインが剣を一閃したまま、オズワルドは村を去った。

「逃げ足だけは速いんだから!」

とティピが叫ぶ。カーマインは静かに右手の剣を鞘に納めた。『ワアッ』次の瞬間、村中が歓声に包まれた。皆が互いの無事を喜び合っている。カーマインはそれを見た後、エリオットと呼ばれていた少年とその両親に眼を向けた。すると、彼等もカーマインに近づいてきた。

「あの……有難うございました」

「……いや、礼を言われる程の事はしてない」

スツとカーマインはエリオットの方を見た。すると彼はぺたんと地面に尻餅をついた。

「ちよつと! 大丈夫!?!」

「え……ええ、気が抜けてしまつて……」

ティピがエリオットの方に飛んでいく。尻餅について動けないエ

リオットにソツとカーマインは手を差し出し助け起こした。

「あ……有難うございます」

「安心しろ、もう大丈夫だ」

「ハ……ハイ！」

カーマインの瞳をジツと見返し、憧れの感情で頬を赤くしたエリオットが力強く頷いた。そんな様を見ながら、エリオットの父はジツとカーマインを見据え頷いた。と、そうしているとシートティア達がカーマインの元へ集まってきた。

「あらかた片付いたわ」

「ああ……村も大丈夫だな」

シートティアの言葉にウオレスも頷く。と、エリオットの父がカーマインに向かって言った。

「申し訳ありませんが、私達はこれから訳有ってこの子と別れなければなりません。そこで貴方たちにこの子を……エリオットをローザリアまで送って頂ける様お願いしたいんです」

「どうか、息子をお願いします」

と母親もそれに続き、深々と頭を下げた。

「どうするの？」

「断る理由は無い。引き受けよう」

ティピの言葉に淡々と了承した事を告げるカーマイン。後ろでシートティアが「やれやれ」とため息を吐いていた。

一行にエリオットを預けると、その両親は何処かへ行ってしまう。そこに今度は村長が近づいて来た。

「……よろしければ、貴方達と宴会を開きたいのですが、よろしいですか？」

「何故だ？」

「貴方がたのお陰で犠牲者が一人も出ませんでしたから」

そう言うと、村の人々が次々とカーマイン達を取り囲み「宴の準備だ!」「本当に有難う!」と口々に言い、結局それに付き合われる事になった。

宴の席にて

宴も酣^{たけなわ}、もつすつかり日も暮れて辺りは闇に包まれているというのに、騒ぎはより一層大きくなるばかりだった…。シーティアとルイセが村の娘達と談笑し、ウォレスが尊重と話をしているのを、カーマインは少し離れて見ていた。ティピがその肩に座る。

「ねえ、こんだけ人が居るのに誰かと話そうって気は無いの?」

「……別に。そうだな、お前と話すか」

「アタシと? これだけ人が居るのに、アンタって変わってるわね」と言うティピにカーマインは優しい微笑を向け、「そうか?」とだけ問う。にんまりとそれに笑い返し、ティピは言う。

「もしかして、アタシに惚れた?」

「かもな」

「エへへ、わかってるじゃない」

と上機嫌になるティピを穏やかに見詰め、カーマインは瞳を宴の席へ向けた。と、丁度同時にエリオットという少年がカーマインを見つけ、歩いてきた。

「あ……あの、先ほどは有難うございました」

「……先にも言ったが、礼は無用だ」

「でも、僕をわざわざローザリアまで連れて行ってくれるなんて」

「俺たちも明日には王都へ帰るつもりだったからな。気にするな」

「あ……ハイ。……あの、隣、いいですか?」

「? ……ああ」

エリオットはカーマインが座っている横に腰を下ろした。ティピがジッとエリオットを見詰め、ジッと疑いの声をかける。

「えと……エリオット、だっけ?」

「ハイ……、そうですか?」

「……何だか子どもっぽくないわねえ。もっと、こつ……打ち解けていいんじゃない？」

「そう言われなくても……！」

「……アンタ、いくつ？」

「14歳ですが？」

「ルイセちゃんと同い年!？」

と、ティピが仰天めいた声を上げた。と、その声を聞いてルイセがこちらを向いた。

「あ！ お兄ちゃん、呼んだ？」

とこちらに向いて歩いてくる。ティピがそれに「うん」と力強く頷き、エリオットを見据える。

「これが普通の14歳の反応よ!？」

「……と言われましても、家から出た事なんかなくて……。同世代の方々とお話するのも初めてなんです」

「……アンタ、どこのお坊ちゃん？」

と呆れるティピの隣へルイセが腰を下ろしてきた。エリオットは彼女に語りかける。

「でも、こういう風にたくさんの方がいるのって……いいですね」

「うん！ 何だか私達まで嬉しくなっちゃうね、お兄ちゃん！」

と、カーマインを見て同意するルイセに、カーマインは「ああ」とだけ答える。カーマインがジツと見据える先には、肉料理を大口を開けて頬張るシーティアと、それを目を丸くして眺めている村人達が映し出されていた……。その隣ではエリオットが頬を赤くしながら、ルイセやティピと楽しそうに話していた……。

6・剣を持つ理由

宴も終わり、カーマインは宿の一室で明日のために寝る準備をしていた。カーマインがベッドの準備をしている横で、客用の棚机の上でティピが自分用のハンカチ布団で寝ている。ちらりとそれを確認してから、カーマインもベッドに入ろうとした時、コンコンッとノックする音が聞こえた。

「うくん、誰だろう？ こんな時間に……」

ティピが目をこすりながら身を起こす。

カーマインは静かにドアに歩み寄り、開けた。そこには、自分と同じ目線の銀髪の青年が立っていた。ジュリアンである。

「少し……いいか？」

「……ああ」

スツと身を横に避け、ジュリアンを中へ招き入れる。ジュリアンは中へ入ると同時に口を開いた。

ティピがカーマインの横に飛んできて、その肩へ座る。

「つまらない話だが、黙って聞いてくれ。私が剣を捨てることになった訳だ。私は…、自分で言うのも何だが、名門の貴族　ダグラス家の出身だ。ダグラス家は多くのインペリアル・ナイトを輩出した家系で父自身も数年前までナイトを務めていた。私も……、当然父のようになりたいとナイトを目指し、剣の修行に明け暮れていたのだが……」

「あの、さ。話の腰を折るようで悪いんだけど、インペリアル・ナイトって何？」

ジュリアンはティピを見詰め、驚いた表情で問いかける。

「知らないのか？ あの大陸最高の誉れとされているインペリアル・ナイトを？ 誰でも知っている事だぞ？」

「アタシ……その……生まれたばかりだから」

「……ならば、ナイトとは何か、説明しよう。インペリアル・ナイ

トとは、力だけでなく、戦術、学問等の幅広い知識を持つ、心技体全てに秀でた者だけが与えられる称号だ。一人で百人の兵を相手に出来る腕前と、学者並みの知識、そして素晴らしい人格者であることが求められる」

「うっひゃあ！ そんなに凄い人なんて、この世にいないんじゃない!?」

「……そうだ。全くない訳では無いが、ナイトが一人もいなかった時代もそう珍しくは無い」

「あ、そうか。ジュリアンのお父さんはナイトだもんね！」

「数年前までな。今のナイトメンバーはオスカー・リーヴス卿、アーネスト・ライエル卿、そしてナイツマスターにしてバーンシュタインの王子でもあらせられるリシャール殿下だ」

「うへえ、たつた三人? ……いや、三人いるだけでも凄いよね。」

それで、ジュリアンはそれを目指してたんだよね?」

「……ああ。今思えば、父に認められたい一心だった。ナイトを引退した父を励ましたくて、ナイトを目指し始めたのだ。その時の父の喜び様は良く覚えている。私も父の期待に応えようと必死で剣を覚えた。……だが、ダグラス家に本当の息子が生まれてからは……」

と思いを馳せるジュリアンの表情が曇り、ティピが言いにくそうに問う。

「え? ……じゃあジュリアン……」

「……ああ、私は本当の息子では無いのだ。私がどれだけ頑張っても父は全く私を見てくれない。私の努力は全て無駄だったのではないか……。そう思って、私は剣を捨てた」

そう話し終わると、ジツとジュリアンはカーマインを見詰めた。「そこで、お前に聞きたい。お前の剣に迷いは全く感じられなかった。お前は一体、何のために剣を振るっている?」

ジュリアンは勇み込んでカーマインに問いかける。対するカーマインは傍目には全くの無表情で、冷静な声音でジュリアンに話しかけた。

「……君の悩みは、既に解決しかかかっていないか？ 自分でももう気付いているハズだ。君の瞳がそう語っている」

「確証が無いんだ！ だから……、お前の答えを聞き、自分の中の答えを見出したい！！」

「カーマインはスツと目を閉じ、一瞬、考える様に間を置いてから、ジュリアンを見詰め直し、口を開いた……」

「……俺は、自分の目に写る目の前の……力無き者を守りたい。強者に怯え、踏み躪られるだけの彼等の代わりに剣を振るい、一人でも多くの人が勇気を持つ手助けをしたい」

「……力無き者に……代わって……！」

「……というのが、母、サンドラの教えだ。俺はそんな事考えてない」

「なっ！？」

ジュリアンが絶句し、ティピが肩から滑りコケる。カーマインはジツとジュリアンを見詰め、言い直す。

「俺は、自分にとって大切な人達を守りたい。自分の身の周りにいる人々が危険に落ちたらそこから救えるだけの力が欲しい。だから、俺は剣を選んだ。目の前の人々を救う力を、大切な者を守る力を得るために」

「……そうか、そうなのか！」

とジュリアンは、興奮した様にカーマインを見詰めた。ティピがきよとん、としている。

「有難う！ それだよ、それこそ私が探し求めていた答えだ！！」

「良かったね、ジュリアン」

「ああ、それも君達のおかげだ。これで今夜はゆっくり眠れそうだよ。有難う」

「お休み〜！」

「ああ、……お休み」

それだけ言うと、ジュリアンは部屋から出て行った。

「ウフフ……、あれだけ興奮してたらかえって眠れないんじゃないかな？ ……ま、アタシ達もそろそろ寝ましよう？」

「……ああ」

そう言い合うとカーマインとティピは布団に横になった…。

ここは？ ……母さんの研究塔……？ いつもの夢か……。

だが、一体何故母さんが……？

サンドラは自身の研究塔のテラスで一息ついていた。その真下にウォレスを襲った仮面の騎士が三人、塔の中へ忍び込もうとしている……！

母さんが、殺される……！

バツ カーマインはベッドから跳ね起きた。ティピが「うわ」と驚いた声を上げる。

「な……何よ、どーしたの？」

「夢を見た……」

「夢？ ……どんな夢？」

カーマインは夢で見た内容をティピに告げた。

「マスターが研究塔のテラスに居て、怪しい仮面の男達が忍び寄ってるのね？ 気になるから、テレパシーで調べて見るね……！！ ……

…あ、ホントにテラスに居る！ マスター！ 下に怪しい男達が居ない……！！ ……やっぱり……！！ 急いで逃げて……！！」

と、空に向けてティピが話し終えると同時、カーマインも支度を済ませ、腰に青銅剣を差していた。

「ティピ」

「うん、わかってる！ 皆を起こして……！！」

コンコンツ、とドアがノックされ、ガチャリとドアが開かれた。

そこに立っていたのは、カーマインと全く同じ顔と服装の女性……ティピだった。

「その必要は無いわ。全員起こしたから」

との言葉の後に、全員が顔を揃えた。

「どうしたんだ、シーティア、カーマイン？」

「何かあったのか？」

「お兄ちゃん!？」

集まった皆にティピが手早く説明していく。ウォレスがカーマインを見詰め、言う。

「まさか、お前にそんな力が有ったとは……」

「にわかには信じ難い話だが、疑っても仕方あるまい」

「ああ……そうだな。シーティア、お前も夢を見たのか？」

ジュリアンの言葉に応えながら、ウォレスはシーティアを見て問うた。

「そんな力無いわよ。私はただ、カーマイン達の気配が変わったのを感じたから、皆を集めた方がいいと思っただけ。そんな事より、急ぎましょう」

「そうだな。だが、いくらこの村が王都から一番近いとは言え、間に合うのか？今から走って」

とジュリアンがもつともな意見を口にする。

「でも、見捨てられるワケ無いじゃない!！」

「……話は終わりか？俺は行くぞ!！」

ティピの叫びの後、カーマインが駆け出そうとしたその時、シーティアが叫んだ。

「待ちなさい!！」

「何故止める!？」「そうよ!！」

「……ルイセを見て!」

「……!？」「ルイセちゃん!？」

シーティアの言った通り、ルイセを見ると、彼女は全身に眩いばかりのグローシユの光をまとっていた。

「お母さん……、お母さん……! お母さあああん!……!」

!……!

ルイセから、圧倒的な光が放たれ、そこにいた全員がグローシユの光に包まれて行った……!

7・シュワルゼ

視界が晴れた時、そこは宿屋の中ではなかった。屋外で、大理石で出来た廊下の上に皆は立っていた。カーマイン達は当たりを見渡すと、そこにはサンドラの研究塔が目の前に立っている。

「こ……これは……！ テレポート」

カーマインが驚きの声をあげ、シーティアがルイセの頭をポンと撫でた。

「できちゃった……、テレポート！」

ルイセが興奮気味に叫ぶ。ジュリアンも驚きの声を上げた。

「これが、テレポートか？ これ程の人数を一気に運ぶとは……！」
「感心してる場合じゃない！！ サンドラ様の所へ急ぐぞ！！」

ウォレスの言葉が発せられると同時に、カーマインとシーティア、それにルイセが中へと入っていった。急いで、ティピ、ジュリアン、ウォレスも追う……。全員が塔の屋上に到着すると、そこには無数のグレムリンと、仮面騎士が三人立っており、その向こうにサンドラがいた。

「……この気、グローシアンか？ それに、貴様は……！！」

カーマイン達が屋上へ来ると同時に、仮面の男……他の二人の様に甲冑を着ていない、黒い服とズボンの上に紅いコートを羽織った男がルイセ、そしてカーマインを見た。

仮面騎士達はカーマイン達を無視し、サンドラへ向かおうとしている。

「無駄なあがきは止めて楽になれ。苦しめぬよう一瞬で殺してやる」

「……クツ、私の魔法が効かないなんて……！」

と、その時カーマインが消えた。

「！ お兄ちゃん！！」

ビュンツ 現れたのは、サンドラと仮面騎士達の間だった。

「！ カーマイン、それに貴方たち……どうして!？」

「!? 何だ、貴様らは……!!!?」「グ……この波動は……!」

サンドラ、そして二人の仮面騎士は明らかに狼狽していた。カーマインは静かに二人の仮面騎士を睨み付ける。

「貴様らに名乗る名など無い!! 行くぞ!!」

ジュリアンがそう叫び、グレムリン達に斬りかかった。ビュビュンッ グレムリンが三体同時にかかって来たが、右爪を左に避け、二匹目の左爪を切り払い、三匹目を右袈裟に斬った姿勢で動きを止め、ピタアツと静止した。一瞬後、残りの二匹も真つ二つになって倒れた。

「な……!?!」

仮面騎士達はジュリアンの剣を見て、狼狽を強めた。明らかに自分達よりも上の剣線だったからだ、グレムリン達が一斉にジュリアン達に襲い掛かった。

「クソ! これではサンドラ様の所へ行けん!!」

「邪魔をしないで!!」

ウォレスとルイセが、斬ったり、魔法で撃ち落しても、まだまだ数がある。シーティアが叫んだ。

「ジュリアン! 仮面の男達は貴方に任せる! ここは私が道を拓くわ!!」

「! 了解!!」

「ウォレスは私と一緒にグレムリンの群れを! ルイセは私達のサポート!」

「よし!」「ウ、ウン!!」

シーティアは左掌に光を集めると、マジックアローを放ち、ズドオッ グレムリンの一匹を落としてから、石の槍で突く、突く、突く! 襲い掛かってくるグレムリンの群れを、これでもかと言うほど叩き潰していく。

シーティアが倒し切れなかった奴らは、ウォレス、ルイセによって次々と撃破されていく……! ジュリアンがそんな彼等の間を縫

うように走っていく。と、その先ではカーマインが仮面の騎士二人と剣を交えていた。

「カーマイン!!」

ザッ ビュンツ ジュリアンの一撃を避け、仮面騎士達がカーマインから離れる。

「ジュリアン、二人を任せていいか？」

「ああ、奴等はお前の手に負える相手ではない。任せておけ」

「頼む」

そう言うと、カーマインはシーティアの方ではなく、サンドラの方へと走っていく。

「? お、おい!!」

ビュンツ カーマインは剣を握り、サンドラに斬りかかった!

ガキイツ いや、そこには今までどこに隠れていたのか、ジュリアンでさえ気配を読めなかった仮面の男が立っている。

「……ほう、この俺の気配を感じて取るとは……!!」

カーマインの剣よりも肉厚なローランディア製のモノとは違う、両刃の剣を男は持っていた。長さはカーマインの青銅剣と変わらない。

キーンツ カーマインは男の剣をはじき、サンドラを後ろへやっした。スツとそこで剣帯から鞘を抜き、剣を納めると、サンドラに渡した。

「? カーマイン?」

グツと右拳を握って前に掲げる。リングが金色に輝き始め、それは超絶刀剣、レギンレイヴへと変わった。鞘に納められた状態で具現した剣を剣帯に差し、ちゃき、と鯉口を切った状態で右手を柄に触れない程度に離して構えた。

抜刀術と呼ばれる剣術である。

「……ほう?」

男は、にやりと口の端を広げ、剣を正眼に構えた。

ドオンツ 周りからは消えたと思うほどのスピードで男は動いた。

と、同時にカーマインも消える。

ガキイツ 凄まじい一撃がぶつかり合った。

キインツ 真上から斬り下ろした両手持ちの男の剣に対し、カーマインは神速の抜刀にて応えた。互いに交叉法気味に斬りあい、すれ違って止まる。

ピシイツ 男の剣が、僅かにヒビが入った。

「やっつけてくれる……!!」

チャキツ、カーマインはレギンレイヴを左掌に握らせる。そして右手を剣の柄に添えた。両手持ちである。八双に構える…。男はそれを確認すると、傲岸不遜に笑った。

「では……行くぞ!!」

「……!!」

ビツ 男がまたしても消えた。カーマインはそれに合わせて動くが、男は圧倒的なスピードでカーマインに斬りかかる。紙一重で袈裟斬りをかわしたカーマインだったが、更に男のスピードが上がる。カーマインは目を細め、思う。

疾い……!! 体のこなしも、脚力も……!! 間違いない、

この男……俺と同じ縮地法の使い手……!!

ギインツ 剣で男の一撃を止め、バランスの崩れた所を男のマジックアローが襲う。

ドガアツ 片手で地に手をつくすと、見事な後方宙返りでそれを避けるカーマイン。

「……ほう、このシユワルゼの攻撃をこれ程見事に捌くとは……!!

名くらい聞いておいてやろう……!!」

「カーマイン・フォルスマイヤー」

「ククツやるな、カーマイン。久しぶりに歯応えのある奴だ」

カーマインはスツと右手を首に持つていくと、シャツの中に手を突っ込み、何かを引き出した。棘だらけの茨で造られた首飾りだ。

それを、ブチツと千切って外した。

「……!!」

男、シュワルゼの瞳が仮面の奥で細められる。その瞬間、カーマインの体から白い煙が噴き上がり、一気に気が膨れ上がった。目を細めたシュワルゼが、ふん、と笑いながらつぶやく。

「装備者の能力を限界まで弱くする“苦行者の首飾り”。しかし、長い事着ける事によって装備者をとことんまで鍛える事の出来るアイテム……か。面白い！ どれだけ上がったか、見せてみる！！」

「見せてやるさ」

ビュンツ カーマインが今度は消えた。シュワルゼもニヤリと笑って消える。

(……クク、縮地法か……！)

剣と剣がぶつかり合う音だけが辺りに響き渡る。

シュワルゼの右袈裟を紙一重で避け、真上から斬り下ろして来る。カーマインはそれを両手持ちで受けた。

ギインツ シュワルゼの右手が光ると同時、カーマインの右掌にも魔力が溜まっていた。同時に剣を払い、マジックアローを放つ。
ドガアツ！ 宙でぶつかり合う光と光。それを合図に二人はまたしても相手に斬りかかった。

ガキイツ ドカアツ！！ 互いに剣をぶつけ合うも、カーマインが吹っ飛ばされた。

「もらったー！！」

「カーマインー！！」

シュワルゼが宣言し、サンドラが絶叫する。シュワルゼの剣がカーマインに振り下ろされた。ズバアツ 音を立てて石でできた塀の一部が、チーズでも斬るように苦もなく切られる。が、そこにカーマインはいない。シュワルゼが瞳を後方へ移した。

「……殺ったと思ったが……、まあいい。よく避けた。もっとも、かわしやすいうようにしてやったのだが」

「……………！！」

カーマインのシャツは大きく右袈裟に切られ、白い肌からは紅い血が流れていた。

「それで限界か？ もう少し楽しめると思ったんだが……！ つまらんな」

「……………」
「チャキツと剣を構えなおすカーマイン。」

「ビュンツ シュワルゼが消える。カーマインも消えた。」

「そこだ……！」

「ビュンツ カーマインは剣でシュワルゼの右肩に突きを繰り出した。しかし、それは空を切る。ちっと舌打ちしてシュワルゼのいる方を向き直る。」

「流石に目はいいな。この俺のスピードによくついてきている。しかし……！！」

右！

「遅い……！！」

「ガキイツ 剣を水平に薙ごうとしたカーマインより更に速く、シュワルゼは右袈裟に斬りかかった。何とか受け止めるも後方へ弾き飛ばされる。」

「ドガアツ 背中を強烈に壁に叩きつけられ、石造りの塀はひび割れた。」

「ガハツ」

「カーマインが血を吐いた。シュワルゼが止めを刺そうと突っ込んでくる。と、そこへ強烈な炎がシュワルゼの身に迫った。」

「……………ぬ？」

「カーマインにそれ以上手出しはさせません！ ファイヤーボール……！！」

「ドガアツ 直撃し、爆発した。サンドラは肩で息をしながら前方を見やる。」

「や………やった………？」

「母さん……！！」

「ビュンツ サンドラが背後を振り向いた時、シュワルゼは剣を薙いでいた。ズバアツ！」

「ああー!!」

サンドラの肩口から血が飛ぶ。その様を見た瞬間、カーマインの瞳が獣さえも退かせる殺気を放ち、月夜にあつて尚輝く金と銀の瞳は自ら輝きを放ち始めた……。カーマインが絶叫する。体中から白い煙が噴きあがる。

「シュワルゼエエエー!!」

「……ククー!!」

ガキイツ!! キインツキインツ 二、三度太刀を交え、互いの影を追うかのように消えあう二人! パツと二人が現れた時、両者は鏢迫り合いをしていた。

「ぬう……!!?」

「うおおおおお……!!!!!!」

野に生きる獣さえも平伏させる程の咆哮がカーマインの口から出る。

ガキイツ シュワルゼとカーマインはそのまま、下の石畳の廊下へと跳び下りた。ずざあつ、と一旦離れ、互いを睨み合う両者。ビュンツ そして同時に消えた。

ギインツギインツギインツ、と凄まじい斬り合いの音が再び発せられる。共に宙で現れた。

コイツ、更にスピードが上がる!? バカな!!!!!!

ズバアツ!! シュワルゼの右突きを紙一重でかわすと、シュワルゼは左掌の剣を斜め上へ振り上げた。間一髪の所でカーマインは身を反らし躲すも、きつちりと線が体に刻まれ、血が飛ぶ。更にカーマインはシュワルゼに蹴打の追撃を仮面の真上に叩き込んだ。ドガアツ!!

「グハアツ」

シュワルゼの口から、苦鳴が出る。

スタアツ ズザアアアア……ツツ カーマインは着地し、シュワルゼは仰け反った姿勢のまま後方へ退がった…。

ぴしいっ、ぴしぴし……

仮面にヒビが入り、割れた。

「……！！」

カーマインは素顔のシュワルゼに一瞬だけ動揺した。対するシュワルゼはニイツと笑っている。何故なら、髪型こそ少し違うものの、シュワルゼの顔、瞳、そして髪の色は間切れもないカーマインそのものだったのだから。

「どうした？ 俺の顔がそんなに珍しいか？ 毎日鏡で合っているだろう？ 気になるか？ この俺の事……そしてお前の事が？」

カーマインは獣のような瞳でいつもより低い声で応えた。

「関係ない。貴様等はサンドラの命を狙った。貴様が何者だろうと、俺は 許さない」

「フン……まあいい。どの道、俺と立ち合った以上、お前の死は絶対だ」

シュワルゼの瞳が金と銀の輝きを自ら発し、体中から白い煙を噴き上がらせる。

「……」

「フン、ここからが本当の闘いだ」

ブウンッ ビュンッ！ 互いに猛スピードで相手にぶつかり合う。ギインッギインッ 凄まじい剣撃の音が辺りに響き渡り、魔法の矢が床でも壁でも平気で射抜く。

ズバアッ 互いに交差し合う。カーマインの右肩から血が噴き出た。

「クク……簡単には殺さんぞ……！！」

邪悪に笑むシュワルゼに、カーマインは不敵に笑って言い返した。「のぼせ上がるのもいい加減にしろ」

ぱちんっ、とレギンレイヴを納刀した瞬間、シュワルゼの右肩からも血が噴き出る。

「クク……、面白え……！！」

ブウンッ！ 魔力がシュワルゼの左掌に集中し、無数の細かい光の矢がカーマインに襲い掛かる。

ズドドドオッ カーマインは縮地法で移動しながら抜刀術の構えを取っていた。無数の光の矢の間を縫うように、カーマインは前進し、シュワルゼの懐に飛び込んだ。

「チー！」

ドガガガガオンッ！ 互いの凄まじい疾さと重さの剣撃が衝突しあう。互いの剣が肉を裂き、血を流す。瞬く間に二人の体は紅く染まっていく。

ガキィッ またしても両者の剣が衝突し合い、鏝迫り合いを行う。

「…………ぬん！」

「…………！」

シュワルゼがカーマインを再び吹き飛ばした。扉に叩きつけられるかに見えた瞬間、カーマインは人間離れた動きで壁に着地し、壁を蹴って突っ込む。シュワルゼもカーマインに斬りかかる。

「ハア！！！」

「ウオオオオ！！！！！」

キィンッ 互いに剣を袈裟斬りにして繰り出し、交差する。しばらくして、

ヒュンヒュンッ、、カッ！！！！！！

「…………チー！」

シュワルゼの剣が真っ二つに斬られていた。レギンレイヴがギリと光る。

「次は…………貴様の首を飛ばす！」

「…………やってみる！」

ドオンッ カーマインが剣を納刀した状態で、一瞬の縮地法にて交差気味に抜刀した。

「終わりにしてやるっ」

そう宣言するカーマインにシュワルゼが、ニイと笑った。

「甘えよ」

カーマインの瞳にはシュワルゼの折れた剣にグローシュが集まっ
ていくのが映った。いや、全身にグローシュが溜まり、ゴオッ 次
の瞬間、彼の全身を炎が包んだ。

「何だと？」

「死ぬ」

シュワルゼの剣がカーマインに振り切られた。次の瞬間。折れた
剣先から強烈な炎が爆発し、カーマインを包み込んだ。全身を焼か
れる。

「ぐああああああ……っっ！！！！！！」

「……ぬ！？」

と同時にカーマインも抜刀術を放ち、炎を切ってシュワルゼに白
刃が迫る。

ズバアッ まともに入り、流石のシュワルゼも片膝について血を
吐いた。

「ガハアッ！ ガハ、ッ！！」

が、カーマインの方も全身から煙を出しながら、膝をついた。肩
で息をしている。

「フ……フフフ……！！ これ程までにやるとは……！！ こんなに楽
しいのは久し振りだぜ」

そう言って折れた剣を構え、立ち上がるシュワルゼにカーマイン
も静かにレギンレイヴを八双に構えた。

ぼつりとつぶやく。

「魔法剣」

「そう言う事だ」

「上等……！！」

互いに自身のオーラを極限まで高め、同時に相手へ駆けた。カー
マインは剣を右斜め下へ寝かせ、左斬り上げへ振り切った！シュワ

ルゼは一瞬、全身を炎で包むと右袈裟に切り下ろす！ 生か 死
か、それとも相打ちか。

「くたばれ、カーマイイイイン！！！！！」

「シュワルゼエエエエ！！！！！」

ズドオツ！ 二人の剣が、相手にヒットする寸前、横合いから降
ったマジックアローが、二人の丁度真ん中へ叩きつけられた。

「！！！！！」

思わず二人は動きを止め、矢を放った者を見据える。カーマイン
と同じ顔、瞳、そして服装の、長い黒髪の女性 シーティア
が立っていた。

「……シーティア、何故止める？」

カーマインは凄まじい光を宿した瞳で、低く問いかける。

「自分の体見てから言いなさい。自殺したいの？ ……それに今の
アンタは、ルイセを怖がらせるわ。鏡、見てみなさい。血に飢えて
狂った化け物の瞳よ。そこにいる奴と一緒に」

シーティアは冷静に淡々と告げる。シュワルゼはシーティアを見
た。

「……何だ、お前は？俺たちと同じ……？ いや、違うな」

「アンタも、そろそろ引き上げなさいな。お仲間は今全員溶けちゃっ
たわよ」

「……ほう？ 人間にしては出来る様だ。俺の兄弟を皆殺しにする
とは」

値踏みする様にシーティアを見るシュワルゼ。と、シーティアの
後ろの扉が開かれ、ウォレス、ジュリアンが現れた。

「シーティア、カーマイン！ 無事か！！！」

「助太刀に来た！」

それを見た瞬間、シュワルゼは、バツ、と踵を返した。カーマイ
ンは荒ぶる声をそのままに叫ぶ。

「逃げるのか！？」

「……この勝負、今は預ける。だが……」

グオアツ シュワルゼの“気”が周りに凄まじい突風を吹かせた。
「まだだ。この俺をもっと楽しませるカーマイン！ 次に会う時まで、更に腕を磨いておけ！！」

全員が目を向けられない程の風を受け、怯んだ所をシュワルゼはそのまま逃げて行った。ジュリアン、ウォレスが剣を納めながら言う。

「……恐ろしい奴だ。奴は他の連中とは桁が違う」

「ああ……！！」

そう言い合う二人に背を向け、シーティアはカーマインの隣へ歩を進めた。

ガクウ その瞬間、カーマインは糸の切れた人形のように地面に崩れようとしたが、シーティアに支えられていた。レギンレイヴが黄金の光を放ってリングに戻る。

「昔っからそうだけど、アンタってツメが甘いのよ」

そう言ったシーティアは丁度扉から出て来たルイセ、サンドラを見つめてから、気を失ったカーマインに瞳を向けた。月が不気味に輝く夜だと、感じながら。

隣ではティピが、ルイセ、サンドラ達と元気いっぱい話している。

「……どうでもいいケド、私を手伝う気無い訳？」

とシーティアは憮然として呟いた。と同時にルイセが物凄い勢いで走り込んで来た。

「ちよ！？ ルイセえ！？」

「お兄ちゃん！ カーマインお兄ちゃん！！ お姉ちゃん、お兄ちゃんは！？」

「だ、大丈夫！！ 大丈夫だから離してええええ……！！！！」

サンドラが来て止めるまで、ルイセの暴走は止まらなかった……。

翌朝。

ベッドの上で寝ていたカーマインはようやく目を覚まし、リビングに向かった。そこには既に全員揃っていた。

「おっそ〜い！ アンタ、いつまで寝てんのよー!!」

とティピが騒がしく言う。ルイセ、ウォレス、ジュリアン、そしてサンドラを見るカーマイン。

「？」

カーマインは何か気付いた様にサンドラを見る。

「母さん？ ……何か、」

と口を開こうとした時、どげしっ 背中に蹴りを喰らって倒された。

後ろにいたのは、ふわぁ、とあくびをしているシーティアである。

カーマインは静かに立ち上がった。

「……何の真似だ？」

「アンタが邪魔な所に突っ立ってんのが悪いんでしょ？」

「ほう……？」

スラアッ カーマインは腰の剣を抜き始める。対するシーティアは静かに右拳を掲げて見せた。その細く美しい指にはカーマインのリングと同じモノがはめられている。

「……やんの？ 青銅剣で私と？」

カーマインは無言で抜刀術の構えを取る。シーティアの表情も小馬鹿にした色は消え、目を鋭く細める。次の瞬間、

「ティピちゃ〜んキイックク！」

ドガアッ カーマインの後頭部にティピのキックが炸裂した。前屈みになってうずくまるカーマイン。と、返す刀で

「クロ〜スッ!!」

ドガアッ シーティアの横顔にも直撃。頬を押さえ、シーティア

もうすぐまった。

「屋敷内でドタバタすんじゃないわよ！ このバカ姉弟！！」

二人はうらめしげにティピを見たが、騒ぎを起こす気は無くなつた様だ。

「……ちよつといいか、カーマイン？」

と。そんなカーマインにジュリアンが話しかけてきた。シーティアは、サツとカーマインから離れ、カーマインはジュリアンの方へ向かった。そこへティピも飛んできて、カーマインの肩に止まる。

「お前の言つた通りだった……。力無き者の為に戦う……。！ これからは、そのために剣を振るう。もう、迷わぬ」

「エへ、がんばってね！ ジュリアン」

「ああ……。皆にも世話になった！ また会おう」

とジュリアンはカーマイン、そして皆に手を振った。ルイセ、ウオレス、サンドラがそれに頷き返す。こうして、ジュリアンは一行的下を去っていった。

「……さて、これからどうするの？」

シーティアがルイセを見ながら問うた。

「え？ 何、お姉ちゃん？」

「グローシアンとしての能力が目覚めつつあるルイセを、やっぱり母さんが育てるのかってコト」

と、シーティアはサンドラを見つめる。サンドラはニコリと笑い、不安げなルイセを見つめる。

「あなたには、実戦で魔法を高める方が合っているようですね。カーマイン、シーティアと共に旅を続けなさい、ルイセ。……それに、

……私は……もう」

「それって……！ 一緒に行ってもいいって事！？ 嬉しい！！」
頬を紅くして喜ぶルイセに、ティピも笑顔になる。

「良かったね、ルイセちゃん！」

「うん！！……？ お兄ちゃん？」

そのとき、カーマインが、さつ、とサンドラの前に立ち、腰を抱

き、額に手を当てた。

「カ……カーマイ……ン」

「……！これは……！！！」

突然、サンドラがカーマインの腕の中で意識を失った。顔が青くなり、呼吸も荒い。

「……毒……！！！」

「ルイセ！ 医者に連絡！！ 私はベッドの準備をする！ ウォレスさん、悪いけどカーマインを手伝って！」

「う、うん！！」

「よし！」

……

しばらくして、医者がサンドラに万能薬を飲ませた。

しかし、サンドラの体調は回復しない。息が少し収まったくらいだ。

「本当に効くの！？ この薬！？」

「やめなさい、ティピ」

「シーティア！ アンタ何落ち着いてんのよ！？」

「その人の持つてる薬は今ある毒消しの中では最高の物よ。それでも効かなかった。つまり、」

シーティアは迷うことなく続けた。

「治す薬は無いってコト……。勿論、人間の中の知識ではね」

「それって……！」

「人間以上の知識を持つ者なら……！！」

「そう……！ フェザリアンなら、治せるかも知れない」

言い合う三人に、ウォレスが告げた。

「話は決まったようだな。俺も力を貸そう。ただ、どうやってフェザリアンに会うか、だな」

「フェザリアンって、あの高い所にいるんでしょ？ とてもじゃな

いケド、私じゃ運んでいけない」

ティピが珍しく弱った声を出し、ルイセも同調する。

「どうしよう？ お姉ちゃん、お兄ちゃん」

「……心当たりがある。宿屋に魔法学院のアリオストという学者が泊まっているはずだ」

「？ アリオストさん？ どうして、お兄ちゃんが……」

「この前会った」

簡潔に告げ、カーマインは、スツと家を後にする。ルイセ達は急いでカーマインについていった。

しかし、

アリオストは既に、魔法学院に去った後だった。

そのため、一行はローザリアからデリス村を通って魔法学院へ向かおうと歩いていたのだが……、ティピが声を上げ、ルイセも口を開いた。

「……あら？」

「エリオット……くん？」

前から、金髪の赤いジャケットを着た少年・エリオットが走ってきた。

「酷いじゃないですか！？ 僕を王都まで送ってくれる約束だったでしょう！？」

と可愛らしい眉じりをつり上げて怒る。

「昨日は大変だったんですよ！？ 訳の分からない連中が僕の宿に入ってきて……。一晩中、森に隠れていたんですから！？」

「ゴメンなさい、お母さんが大変だったの……」

ルイセが神妙な顔をして頭を下げた。エリオットはそんなルイセを見て、神妙な顔になった。

「お母さんが……？ ……それは、仕方ありませんね。では、今から王都まで護衛をお願いします」

「……約束したからな」

「そうね」

カーマイン、シーティアが答える。エリオットは頬を紅く染め、明るく二人に笑いかけた。

「ちよつと待て、護衛ならこんなに人数はいらんだろ。俺が送ってやるから、お前らは先に魔法学院に向かつてる」

「……そうか」

「じゃあ、よろしくね」

こうしてウオレスはエリオットと共にローザリアへと戻り、カーマイン達は三人と一匹で旅を始めた。

デリス村を抜け、石橋を渡り、洞窟へと入った。

洞窟内にはモンスターが大量に居たが、カーマイン一人でさつさと追い払ってしまう。何事も無く、このまま洞窟を抜けるか、と思つた、その時。

「……そろそろ出られるな」

「そうね。ご苦労様」

「シーティア、アンタも少しは手伝つてやんなさいよ！」

「面倒じゃん。……ん？ どうしたの、ティピ？」

「ん？ ……何か変な音がしたような……」

文句をつけたティピの様子がおかしい。仕切りに上の方を気にしている。瞬間。ガコツ 洞窟を担う一角が、巨大な岩石となって降りかかった。

「……ほらぁ！」

「マジ？」

「チ！」

「お兄ちゃん!!」

カーマインはティピ、シーティアはルイセを抱き、かばうと同時に上から岩が降ってきた。全員が生き埋めになるかと思つた刹那、

「？ ……岩が降つてこない？」

「宙で……、止まつてるよ!？」

ルイセ、ティピが疑問の声を発し、カーマインとシーティアは、スツ、と振り返る。と、そこには回転しながら宙に止まっている岩

があった。

「……これは」

「どういうこと？」

カーマイン、シーティアが口にした時、岩が粉々に崩れた。

「……不思議な現象ね」

「ルイセちゃんの手？」

「え？ 私、何もしてないよ」

「アンタはどう思うの、カーマイン？」

シーティアはカーマインをジッと見て問う。他の二人もカーマインに注目する。当のカーマインは指輪を見ていた。シエラからもらった指輪。

「……ルイセとは違う力が働いた。……お前も、そう思うだろ？」

「ええ……。でも、それが何なのかは分からない。アンタのその指輪の石が光ったのは偶然なのか、……それとも」

「……気づいていたか」

言い合う双子に、ティピがパンパンと手を叩いて言った。

「二人だけで納得してないで、アタシ達にも分かるように、ちゃんとして説明しなさいよ！！」

「……お兄ちゃん、お姉ちゃん」

怒ったように言うティピと、不安げで泣きそうなルイセを見、シーティアはカーマインとの会話を中断した。

「とにかく、先に進みましょう。また岩の雨に降られちゃたまんないわ」

「……う……！！」

ティピが蒼くなった顔で冷や汗を流した。カーマインを見据え、慌てて喚く。

「ほら！ ボーツとしてないで早々と行くわよ！！」

「……ああ」

対するカーマインは淡々と返事をする、出口に向かって歩いていった。

9・巨大ゲル

一行が洞窟をようやく抜け出た時、まぶしい太陽が空から出迎えた。

「うわ！ やっぱり外は良いわね〜！！」

「そうだね、洞窟って薄暗くて、なんだか怖いモンね」

「不気味なモンスターも多いモンね〜！」

二人して楽しそうに笑い合う。そんなルイセとティピをシーティアは優しく見守っていた。

「……………！！ 二人とも、まだ終わってないようよ」

途端、シーティアが瞳を急に細める。隣ではカーマインが青銅剣を抜いた。

「……………どうしたの、二人とも？」

「何かあんの？」

「……………来る」

カーマインがつぶやいた瞬間、

「じろじろ……………」

「ドゴオツツツ！！！！」

巨大なゲルと呼ばれる軟体のモンスターが道の前に現れた。大きさから言って、一軒家ほどある。ティピ、ルイセとも、呆然と見上げる。

「な……………何よ、このブヨブヨ〜！？」

「大きい……………」

「こんなにデカいの？ 世界のゲルって……………。ローザリアの周辺には小さいのしかいなかったし」

感心したかのように言うシーティア。その周りを、いつもの大きさのゲル、そして手槍を持った子供程度の大きさの青い魔物、イン

ブが囲んでいた。

「やるか」

「しょうがないわね」

チャキツとカーマインが青銅剣を構える。シーティアも石槍をスツと構えた。

ドオンツ！ カーマインは一瞬で巨大なゲルに向かって行った。ゲルはその巨体から無数の透明な触手を出し、カーマインに向かわせる。

「！ お兄ちゃん！？」

「カーマイン！？」

「ルイセ、私と雑魚を片付けるわよ！」

「で……でも、お姉ちゃん！！」

「カーマインなら死にやしないわよ」

ズドオツ シーティアはそう告げたと同時に、縮地法で遠くから魔法を放つて来ようとするインプに接近するや否や、スバアツ上段から切り下ろした。

「次！」

ビュンツ ゲルの群れが次々とシーティアに襲い掛かってくる。

一匹目の体当たりを左に避け、ズシュウツ ゲルの中核に石槍を叩きつけ、ゲルを潰す。次々と飛び掛ってくるゲルに対し、シーティアは石槍を扇風機のように回転させ、盾としてゲル達を弾き飛ばし、二匹目を突き、三匹目を左切り上げ、四匹目を横薙ぎで仕留める。

まだまだいるゲルの群れに、彼女は、槍を一旦、ピタリと静止させ、構える。途端、無数のゲルが飛び掛ってくる。

「……馬鹿ね」

シーティアは冷笑さえ浮かべ、構えた槍を動かした。その瞬間、槍の矛先が無数に増えたように見えた。

ズドドドドドドドドオツ！！！！！！

一瞬後。

凄まじい音と共にその場にいたゲル達が同時に地に叩きつけられ、次々と核を潰されて溶けていった……。

「やった！ お姉ちゃん！！」

「つ……強……！？」

ルイセがはしゃぎ、ティピが仰天している。シーティアはそんな二人にウインクすると、カーマインの方を見た。

「……………！！」

ビュビュンツ 触手の攻撃の隙間を縫うようにして躲し、縮地法で一気に間合いを詰め、切りつける。ズバアツ しかし、ゲルの厚みが大きすぎ、核に当たらない。すぐにゲルは再生し、元通りになる。加えて触手の波状攻撃。流石のカーマインも手こずらされていた。

バキィツ 触手の一撃がカーマインを吹き飛ばした。が、すぐに体勢を立て直し、着地するカーマイン。そこへ更に触手の追撃。

「カーマイン！！」

「お兄ちゃん！！」

ドガガガアツ 無数の触手が叩きつけられる。並の人間なら、あつという間に全身の骨を粉々にされているだろう。

ティピとルイセが見つめる中、土煙が晴れてそこにいたのは、カーマインと、そして折られた槍を構えているシーティアだった。

「……余計な真似を」

「減らず口叩いてないで、礼を言ったらどう？」

「……お前こそ、槍を折られてどうする？」

カーマインは、スツと立ち上がり、シーティアを自分の後ろにやっつてゲルと対峙する。

「……アンタ、何勘違いしてんの？」

「何だと？」

「私がいつ、アンタに守ってもらうほど落ちぶれたっていうの？」
スツとシーティアは右拳を掲げた。そこにはカーマインと同じ、

金色の指輪があった。レギンレイヴと同じ　それが金色に輝き、粒子となつて一つの型になった。

ロッドだ。

黒く長い柄に、先端の部分が丸い金で出来たロッド。シーティアはそれを掲げた。

「久しぶりね。コイツを使うのは」

ビュンツ　一振りし、石槍の時と同じ構えを取る。瞬間。シャキィッ　金色の先端が柄にズレ、中から折りたたんだ刃が現れた。カシィッ　刃はスツと真つ直ぐになり、ロッドは両の先端に鋭い片刃の矛のある槍へと変化した。カーマインのレギンレイヴと非常に良く似た美しい刀身だった。作りも良く似ている。

「グンニグル……。冥土の土産話にするがいい」

カーマインの前に出て、グンニグルを構えなおすシーティア。

「アンタはルイセを守つてなさい」

「……油断するな、お前を倒すのは俺だ」

「フン、根暗男が！」

そう毒づくくと、シーティアの姿が消えた。縮地法である。

ゴオツ　無数の触手がシーティアに向けて放たれていた。

ズバババアッ　物凄い勢いの風が巨体のゲルを通り過ぎ、シー

ティアはゲルの背後に現れて着地した。ビュンツと槍を払う。

「終わりにしてあげる」

ズシューウツ　無数の触手が根本から断たれ、ゲルの巨体はスタズタに引き裂かれた。

「！！　やった、お姉ちゃん！！」

「よっしゃあ！！」

ティピとルイセがはしゃぐが、カーマインが叫んだ。

「まだだ！！」

シーティアの刃はゲルの巨体を刻んだが、核には届いていなかったのだ。すぐにゲルは元通りに再生する。

「……この程度じゃダメ、か」

「やるぞ、シーティア。ルイセ、手を貸してくれ」

カーマインはシーティアの隣に来て、ルイセに言った。

「サンダーの魔法を頼む」

「！ そう言う事」

「う、うん！」

「何だか分かんないケド、皆、がんばってよ！！」

カーマインの合図後、シーティアとカーマインが左右から同時に切りかかった。ズバババアツ　ゲルの形が変わるも、核に対し攻撃はかすりもしない。

「お兄ちゃん、準備できたよ！！」

「シーティア！！」

ズバアアツ　ゲルの巨体が、シーティアの一撃で大きく裂け、揺れた。

「！　ダメだよ、核には届いてない！！」

横薙ぎに払った姿勢のまま止まったシーティアの横からカーマインが青銅剣を投げつけた。

ズドシユウツ　裂け目の部分から寸分変わらず、カーマインの剣は核を直撃した。

「き。イヤああアアアあああ！！！！」

初めて、ゲルが叫び声を上げた。が、致命傷ではない。すぐに回復する。青銅剣は核に突き刺さったまま、取り込まれた。

「今だ、ルイセ！！」

「サンダー！！！！」

ズドアアツ　強烈な青白い稲妻がゲルに向かった。

稲妻は青銅剣に集約され、核に直撃し、ドゴオアアツ　巨体のゲルは派手な爆発を起こして消えた。

「……やったあ！！」

「普通にやっても倒せないなら、青銅で伝導率を上げてサンダーで吹っ飛ばせばいい、か。考えたわね」

シーティアはカーマインを見ながらそう言う。当のカーマインは

ルイセの頭をポンと撫でた。

「お……お兄ちゃん」

「よく頑張ったな、ルイセ」

「うん!!」

頬を少し紅くしながら、ルイセはニコニコと微笑んだ。カーマインはスツとルイセから離れ、サンダーでへし折れた青銅剣を拾い上げ、パチンと鞘に収めた。

「でも、さ……！ カーマイン、アンタのレギンレイヴなら、今のヤツ一刀両断出来たんじゃないの？」

「……お前こそ、そのグンニグルなら八つ裂きに出来ただろ？」

二人はそう言い合いながら、先へ進み始めた。その後をルイセ、ティピがついていく……。

10・魔法学院

一行は魔法学院と呼ばれる建物に入った。

この学院は、魔法の活用と魔法使いの養成を目的として設立されており、コムスプリングスと呼ばれるバーンシュタイン領の温泉街一体を直轄している。バーンシュタインとローランディアの両国に出兵の要請を行えるため、かなり強い権限を持っている。

「それで、そのアリオストってどこにいるの？」

「さっき聞いたら、研究室には居なかつたって言ってたよね」

シーティア、ルイセは建物の入り口付近で相談していた。ティピがカーマインに問う。

「アンタはどー思ってたの？」

「……人の集まる場所に行けばいいだろ。図書館と食堂」

それにルイセがニコリと笑って答えた。

「それなら、食堂はこの本館に入ってすぐにあるよ。マホガク定食がおいしいんだ」

「……何？ その妙なネーミングの定食……」

「……気になるわね」

笑顔でルイセは「早く早く」と一行を急かす。シーティアは、やれやれ、とため息をつき、カーマインはふう、と吐息した。

食堂にはアリオストも、そして彼に関する情報も得られなかった。三階の図書館へ急ぐ一行。エレベータを使い、図書館フロアに来た一行。

「……ここにいるかなあ、アリオストさん」

「探してみよう、ルイセちゃん！」

「うん！」

言い合って、気合を入れるルイセとティピ。シーティアはクスリとそんな二人に微笑む。と、その時。カーマインの前に天井まで届く白い書類の束が近づいてきた。

「！」

思わず、サツと避けるカーマイン。書類…を抱えていた人物は急な前の動きに驚き、

「え？ うわっ！」

前から倒れた。バサバサアツ 書類が床に散らばる。

眼鏡をかけた紅い髪をおさげにした少女が、そこに倒れていた。

目鼻立ちはなかなかの美少女だ。プロポーションもいい。

「！ ミーシャ！？」

ルイセがその少女を見て、素っ頓狂な声を上げた。どうやら、知り合いらしい。カーマインはシーティアとティピを見る。二人とも、スツと肩をすくめてみせた。

「イタタ……！ 大体、何だってイキナリ避けんのよ……！ ……つて」

「……………」

「……あ。……あ、その、ゴメンなさい……！！！！」

カーマインに対し、美少女はしばし彼の顔を凝視すると、頬を紅くして走り去って行ってしまった。

「あ！ ミーシャ！？ ……ゴメン！ お兄ちゃん、お姉ちゃん！
すぐ戻るね……！」

「あ……早くしてね」
「うん……！」

そう言っつてルイセは、少女、ミーシャの後を追って図書館の奥へと走っていった。

「……………で、この書類……」

「……ああ、俺たちが片付けるしかないな」

「……………何なの、この扱い」

無然とした表情でブツブツ文句を言いながら紙を集めるシーティア。カーマインも無表情で集めているものの、どこかシーティアと似た雰囲気醸し出していた。無論ティピは見ているだけである。

ほどなく、書類を集め、床に置いた。

「……まだ話が終わらないわけ〜!?!」
「……ホント、早くしてつて言ったのに! ルイセつたら……」
ティピとシーティアが文句を言い合っている。程なく、ティピがルイセ達の所へ飛んでいった。
「アタシ、ちよつと言つてくる!」
「うん、お願い」

……

ルイセとミーシャは、図書館の隅の方にいた。ルイセが仕切りに話しかけているが、ミーシャは植木鉢を放そうとせず、じっとその花を見つめている。

「あゝ、素敵な人だったな〜! コレつて運命かな!?!」

「ミーシャ! ねえ、ミーシャつたら!?!」

「チツ、こんな事なら名前くらい聞いとけば良かったな!?!」

「ミーシャ!?!?!?!」

「わっ!?!」

ここでようやく、ミーシャがルイセを振り向いた。屈託なく笑う。

「あゝ、ルイセちゃん! 居たの?」

「居たよ、さつきからず〜つと呼んでた!」

と、ルイセは可愛い顔を珍しく、むっ、と怒りの表情で見つめている。当のミーシャはどこ吹く風だ。

「ゴメ〜ン、聞いてなかった! と、さつきと言えば、スツゴイカツコいい人を見つけちゃったの、私!?!」

「へ?」

ルイセの顔が一瞬固まり、そして強張った。

「……もしかして、ミーシャ?」

と、その時、

「ちよつと、いつまで待たせんのだよ!?!」

ティピが大声でルイセに呼びかけた。左右にカーマイン、シーテ

イアも居る。

「……………あ……………！」

ミーシャはカーマインを見て、また顔を紅くした。ルイセはティピに返事を返した。

「ゴメーン、すぐに行く〜！」

「ルイセちゃん!！」

「うわっ！ 急に大きな声出さないで！」

「んな事あ、どうでもいいの!！」

親友の変貌に流石のルイセ、一歩下がる。

「誰？ ダレ!?!? だれ!?!? 彼!?!?!?!」

「もう……………ちゃんと説明してあげるから来て」

「ルイセちゃんの知り合いなんて、ラッキー!！」

ミーシャから、アリオストは学院の南に位置するフェザリアンの遺跡に向かったと聞いた一行は、学院の長であるマクスウェルから許可証をもらった。

「ホレ、これが許可証じゃ!！」

「ありがとうございます!！」

「よかったね、ルイセちゃん!！」

「ん？ ん〜!?!」

マクスウェルの部屋にて、許可証を受け取ったカーマイン。と、当のマクスウェルが、ルイセの隣に居るティピをガシツとつかんだ。

「ちょ!?!? 何すんのよ!?!」

「ほう……………! これはよくできておる……………!」

と、マクスウェルはルイセを見つめた。

「はい、サンドラの作です」

「おお……………! やはりサンドラ殿のホムンクルスか! 思い出すの〜! 彼女の若かりし頃を」

物思いに入ったマクスウェルを見つめ、シーティアが一言。

「……………母さんの若い頃って……………ティピなの?」

「え、えつと……」

「おい、そんな事言ってる場合か。そろそろ学院長を助けないと……」

カーマインが述べた矢先、ティピの怒声が聞こえた。

「い・い・加・減・に・し・ろ……!!!」

ドガアツ

「ホゲエツ!!!!!!」

強烈な蹴りがマクスウェルに直撃し、老人はあえなく後ろに倒れた。

「……素人にはキツかったか」

「ジジイだからキツかったんじゃない？」

「ああ〜！ 学院長、しつかり〜!!!!!!」

落ち着き払った双子と、慥然と腕を組む妖精の中。ただ一人、ルイセだけがオロオロしていた……。

「まったく、酷い目にあつたわ！」

「……学院長の方は、散々だったと思うぞ」

カーマインはそう言って、不機嫌なティピを見つめた。一行は許可証をもらい、魔法学院を後にしようと建物から出て来た。

「学院長ってどんな人なの、ルイセ？」

「マクスウェル学院長？ 基本的には優しい、いい人だよ。ただし研究熱心というか……」

「なるほどね、納得」

一行が学院の外へ出ようとしたとき、筋肉質で背の高い剣士が一行を待っていた。

「ウォレスさん!!!」

ティピとルイセが明るい声をかける。ウォレスも呼ばれて「おお」と答えた。

「アリオストに会いに、今から遺跡に向かう。行くぞ」

「……任せておけ！」

フェザリアンの遺跡にて。

「ここが……フェザリアンの遺跡か……」

「ここはどういった所なの？ 何だか、石造りでできた小奇麗な場所なんだけど」

カーマイン、シーティアが口々にそう言った。問うた先はルイセだ。

「フェザリアンが造った遺跡だよ。今は魔法学院の管轄に入ってるんだけど、中には誰も入れないようにフェザリアンが仕掛けた罠やガーディアンがいっぱいいるの」

「でも、構造を知ってれば大丈夫よね！ 頼むわね、ルイセちゃん！！」

「ゴメン、ティピ。私もこの遺跡についてはほとんど知らないの」
元氣一杯のティピに対し、申し訳なさそうにルイセは頭を下げた。それにウォレスが答える。

「ま、それじゃ片っ端から探せばいいってコトだ」

「そうだな」

「大した問題じゃないわ」

カーマインとシーティアも同調し、遺跡に足を踏み入れた。遺跡内にはルイセの言った通り、侵入者を固く拒むモンスター達が生息していた。

「ヘルハウンドにスピリット、スケルトンか」

「面倒ね、一気に畳み込む……」

ドオンツ　カーマイン、シーティア、ウォレスの三人が一気にモンスターの群れに突っ込んでいった。ルイセは後ろからファイアーボール、ブリザードで援護する。瞬く間にモンスターを全滅させ、一行は奥へ歩を進めるのであった。

.....

一行はついにアリオストと合流した。ティピが明るく声を上げる。「やった！ アリオストさんだ！！」

「君達は……、ルイセ君にティピ君、カーマイン君か」

アリオストの方も、ニコリと優しい笑みを返してきた。それにカーマイン、シーティア、ウオレスが構えながら言う。

「ほのぼのしてる場合じゃない」

「モンスターに囲まれてるじゃない！」

「今、助けるぞ！！」

三人が言うように、アリオストはモンスターに囲まれ、絶体絶命であった。シーティアがグンニグルを振るい、ウオレスのブロードソードが唸る。カーマインは殴打、蹴打、マジックアローで、ルイセはファイアーボール、トルネードを放って敵を粉碎する。

「こりゃ凄い。アレだけいた魔物達をあっという間に片付けるなんて」

ノンビリ言うアリオスト。そんな彼の元にも、ゴーレムとヘルハウンドが迫っていた。

「アリオストさん、危ないです！」

「ちょっと！ 真面目にやって！」

ルイセ、シーティアからそんな文句が出た。アリオストはそれに「ああ」と答え、腰のブロードソードを抜いた。ガキィッ

「うわっと！」

ゴーレムの鉄槌を剣で流し、ヘルハウンドをその剣で切る。ズバアッ

「グルウッ！」

かすり傷程度しか負わない。アリオストの剣は確かに型としては綺麗だが、実戦ではあまり使っていない代物だという事が、カーマイン達三人には分かった。

「……やれやれ、剣を使って戦うのは初めてだから、なかなか難し

い

ゴーレムの巨体から繰り出されるハンマーの一撃と、ヘルハウンドの残像を残すスピードは、確実にアリオストを追い詰めている。しかし、彼はどこか冷静であった。

「フム、……そろそろか」

ゴーレム、ハウンドの同時攻撃が来た瞬間、アリオストは懐から爆薬を取り出した。

「喰らえ、エイトムの光！」

二体の魔物のちょうど中心に爆薬を投げつけた。バアツ 物凄い光が辺り一面を覆い、魔物二体は動きを止めた。

「もらった！！」

ズババアツ 次の瞬間、アリオストの剣がゴーレムとハウンドを同時に切り裂いた。パチンと鞘に剣を納める。

「計算通りだね」

そう言っただけ勝つ誇るアリオストに、フロアに居た敵全てを片付けたカーマイン達が近づいてきた。

「なかなかやるな、アリオスト」

「いや、君の方こそ凄じやないか。剣を使わないで敵を倒すなんて、凄まじい運動神経だ。ありがとう、君達のおかげで助かったよ。しかし、どうしてここに？」

「アンタにどうしても頼みたい事があって来た」

カーマインが単刀直入に言う。それをアリオストは制し、言った。「待ってくれ、まずこの用事を済ませてからでいいかな？」

「……そうね、お願いするわ」

「……！ビックリしたな、カーマイン君そっくりの女性か……。美しい」

「アリガト。初めまして、私はシーティア」

「俺はウォレスだ」

「アリオストです。よろしく」

アリオストは一行から事情を聞きながら、己の探していた飛行ユ

二ツトの動力源を見つけ出した。

「……なるほど。それで君達も僕と一緒にフェザースランドに行きたいのかい？」

「ああ。母さんを救うには、それしか思い浮かばない」

「分かった。君達は命の恩人だからね。僕の力で良ければ、力を貸すよー！」

「ありがとう、アリオスト」

カーマインは心から礼を言い、頭を下げた。その様をアリオストは優しい微笑で見つめていた。

一行はアリオストの創った飛行装置を持ってフェザースランドのある岬へと足を進めていた。

「……しかし、驚いたな。君の母親がフェザリアンとは」

ウオレスはまだ信じられないといった表情でアリオストを見つめた。アリオストはフツと笑い、言う。

「だからこそ、僕は母に会いたいんです。会って、フェザリアンの事をもっとよく知りたい。僕の尊敬する、孤児達を連れてきては村のものとした父の愛した人。父は死ぬ時まで母の事を愛していた」

「……アリオストのお父さんって、素晴らしい人なのね。羨ましいわ、その人の妻になったフェザリアンが」

シーティアはその美しい顔を更に美しくさせる笑顔を見せ、優しくアリオストに言った。アリオストはそんなシーティアを見て頬を真っ赤にし、答えた。

「あ……ああ。……で、でも……君ほどの女性なら、男には苦労しないんじゃないかい？」

「お生憎様だけど、私って結構えり好みが激しいのよ」

「……フフ、ずいぶんと男性を泣かせて来たみたいだね？」

「貴方も、そうなんじゃない？」

「そ、そんな事無いよ」

また照れたアリオストに、シーティアは悪戯な笑顔で問いかける。

「そうかしら？」

そう言うシーティアの横で、カーマインは静かに足を止めた。

「着いたぞ、皆」

「へえ……。あれがフェザerland？」

岬に来た皆は上を見上げ、天を突く岩の塔の上にある輪っかを眺めた。

「それじゃ、早速行こうか！」

「ああ」

アリオストの創った装置に皆引っ付く。アリオストが運転席、ルイセがその前の補助席に座り、カーマイン、シーティア、ウオレスの三人は適当な足場に足を引っ掛け、体を固定した。

ウオレス、青い顔でつぶやく。

「しかし……大丈夫なんだろうな？」

「もちろんさ、行くよー！」

「お、おい！？ 心の準備が……！？」

「お……お兄ちゃん……！！！」

ウオレスの言葉も聞かず、ルイセの悲鳴も無視し、アリオストは装置を起動させた。

グローシュが集まり、光の翼が具現。一気に空へ舞い上がった。

「……死んだら、化けてやるわ」

「縁起でもないこと言うんじゃないわよ……！」

シーティアの言葉に、ティピが激しく喚いた。

そしてそれは、青空に虚しく響いた ……。

……

……

一行はフェザerlandに足を踏み入れた。

「今度からは、ルイセのレポートで来れる……。安心だぜ」

「……そうね。流石にびびったわ」

ウォレスとシーティアが空の旅の感想を口々に述べた。アリオストが飛行装置を携帯用の水冒に入れながらクスクスと笑っている。ルイセとティピは互いの無事に安心したのか、ホッと一息ついていた。

ふと、一人だけ表情を変えない者が居た。

「君だけは変わらないね。カーマイン君」

「……アンタが随分と余裕だったからな。安全だと確信していた」「僕を信頼してくれるのかい？」

「していなければ、アンタに来て欲しいとは言わない」

アリオストはカーマインに素直な好感を抱いた。言い方は率直で愛想が無いが、それだけに彼の言葉に嘘が無いと分かったからだ。

「……行こう。アンタの母親に会う。そして俺の母を救うために」「ああ……！」

空の上でありながら、フェザラランドは緑があり、水もあり、土もある、普通の町だった。特徴としては今まで見たことも無いような、いや自分達の技術ではまず作れない技術で建てられた建物が並んでいる。

カーマイン達は街を見ながら、自分たちをジロジロと見つめて来る羽の生えた美しい人々を見返した。不思議なことに、誰一人として不細工な者はなく、繊細で端正な顔をした細身の者ばかりだ。また、能面のように皆無表情であり、老人が誰一人いない。

あどけない姿の子供までどこか「可愛い」とは違う「美しさ」を持っていた。フェザリアンとは美しい種だと聞いていたが、これほどとは……。ティピ、ルイセ、アリオストは感動に頬を染めた。

逆に、まったく表情を変えないのが、カーマイン、シーティア、ウォレスだ。ウォレスは目が殆ど見えないからという理由が、そして双子には見た目の美しさよりも中身の空虚さが映ったからだ。

やがて一行を取り囲むように、フェザリアン達が広場に集まってきた。その中の一人は金色の長い髪と白い服装の冠をつけた美女だった。一人だけ服装が違う。仰々しさは無いが、存在感が大きい

め、一行は自然と彼女を見据えた。

「何をしに来た？ 人間よ……」

「……あなたは？」

カーマインは静かに女を見返した。女は別段どうという事も無く言葉を返した。

「私の名はステラ。フェザリアンの女王をしておる。……して、そなたらは何をしに来た人間よ？」

「単刀直入に言う。あなた達の持つ解毒薬をもらいたい。母を救うために」

「……その毒……、何故に負うた？ 私たちの住まうフェザリアンにまで来たという事は、並みの毒物ではあるまい。人間は利己的で、常に自分のことしか考えぬ。故にそうやって同族同士で殺し合う」

「……何が言いたい？」

「簡単なことだ、愚かな人間よ。我々がそなた等に何かをしてやる義理は無い。即刻立ち去るが良い」

ステラは冷徹とも言つ答えを淡々と述べた。次の瞬間、カーマインの瞳が鋭くなり、殺気を放ち始める。

「……言つ事を聞かねば殺すか？ 真、愚かしい人間のすることよ」
他のフェザリアン達は、その額に冷や汗をかき、悲鳴をこらえるかのように唇を強くかみ締めている。しかし、ステラだけはカーマインの瞳を見返し、平然と問うてきた。

「その男が創った飛行装置、それはいずれ、争いの道具として利用されよう。己の事しか考えない人間という愚者が創り上げ、更なる愚者によって同族殺しの道具とされる。人間は優れたものを作れば必ず争いでそれを示す。そのような種族に我々の知識を与えられるものか？ 去るがいい」

「で、でも……！ 毒消しなんて一回使っちゃえば終わりじゃない！ アタシ達はマスターを助けたいだけなんだよ！？」

カーマインの肩からティピは小さな体で目一杯の声を張り上げた。

ステラはジツとカーマインを見据え、カーマインも目をそらさないやがて、ステラが声を上げた。

「……ならば、人間が我等フェザリアンより優れている点を証明せよ。さすればその薬、そなた達にやらぬでもない」

「あ、そ。じゃ、そうさせてもらっわ。……何が何でも認めさせてあげる」

ガツとカーマインの肩を掴み、シーティアがステラに答えた。

「ルイセ、テレポート」

ルイセに言うシーティア。カーマインも、睨むのを止め、仲間に向き直った。

「アリオスト、アンタの用事はいいのか？」

「……言える訳ないよ。僕は……母さんに会いたい一心で装置を創って来た。それが間違いだなんて……！」

「……気にするな。科学者とは少なからずそう言う者だ」

「……そう言う者？」

アリオストは絶る様にカーマインを見据えた。ウォレスが後を継ぐ。

「そうだな。どんな科学者だって他人には出来なかつた事を証明したいと、また証明できた事を自慢したいという気持ちがある筈だ。どんな奴にだつてな」

「……そう言つて頂けると、助かります」

ポンツとアリオストの肩に手を置き、シーティアが言った。

「さ、行きましょ！ くよくよしてる時間は無い。……ルイセ」

「う、うん！」

グローシユの光が一行を包み込み、そして消えた。

11・グランシルでの邂逅（前編）

カーマイン達はローランディアの南端に位置する都市、グランシルに来ていた。

ここ、グランシルはその昔ローランディアとは別の国として独立していた都市であった。その名残か、王都ローザリアに比べても、活気のある大きな街である。

闘技場という独特の施設もあり、武具も素晴らしいモノが調達できる。

「アリオストさんが言うには、フェザリアンの研究家であるダニーさんに会うには、ここの闘技場で優勝して『コムスプリングス旅行券』を手に入れないといけないのよね」

パーティのムードメーカーであるティピが確認のため、質問した。これに答えたのは、隣を歩くルイセだった。

「うん。ダニーさんの家はバーンシュタイン領のコムスプリングスだから、国境を越えるには、旅行券を手に入れて学院長に許可をもらわないと……！」

「でもさあ、ルイセちゃん。そのダニー・グレイズって人……ホントに役に立つ情報を持つてるのかなあ？」

「うーん、こればかりは会ってみないと……！ 専門的過ぎてチンブンカンブンかも……だけど」

ティピの言葉に、ルイセも眉根を寄せる。と、ウォレスが二人の話に割ってきた。

「だから、アリオストが学院に残ってフェザリアンの知識を調べてくれるんじゃないか。なあ？」

カーマインは「ああ」と無愛想に返した。そんな弟の隣からシューティアが言った。

「それじゃ、私とカーマインは大会に登録してくるから。ルイセ達はその辺で適当に買い物して！ 時間になったら宿屋に集合……」

いいわね？」

「うん」

「了解！」

「よし！」

シーティアの言葉に、三人はソレゾレ返事をする。こうしてパーティは一旦解散した。

ルイセ、ティピ。

ルイセ達は色々な店を見て回っていた。

「へえ……、いろんな物が売ってるのね〜！」

「うん、ローザリアでもここまでの品揃えは無いんじゃないかな？」

口々に手に取ったり、眺めたりを繰り返していた。と、その時……。

「ん？ ……君たちは……!？」

前方から、ルイセの知らない、白い鎧に黄金の籠手をつけた大柄な男が現れた。ティピが「アッ！」と声を上げる。

「え？ 知り合いなの、ティピ？」

「うん。いつか話したでしょ。この人がゼノスさんよ！」

男・ゼノスはニコリと笑って答えた。

「あの時は世話になったな。彼は一緒じゃないのか？」

「大会に登録しに行ってるの」

ティピの答えにゼノスはとてもうれしそうに腕を叩く。

「そうか！ ついに彼と闘えるってワケだ。楽しみだな！」

「カレンさんは？」

そんなゼノスに、あのと看一緒にいた女性の様子を聞いてみる。

「カレンなら南の方に向かったんじゃないか？ 薬草を取りに……」

ゼノスは律義に自分たちの生活やカレンの薬草取りの事まで教え

てくれた。このティピというホムンクルスは、人に話をさせるのがとてもうまい。

ルイセも始めはおずおずしていたが、ゼノスの人柄が分かれると話に参加し始める。ティピ達はある程度ゼノスと話をし、別れの挨拶を口にする。

「暇があつたら家に来てくれ。茶ぐらい出すぜ」

「うん！ 有難う！！」「さよなら」

ティピ、ルイセがソレゾレ返事する。

「ああ、また明日……！ 彼にも伝えておいてくれ。明日の大会には負けないってな……！！」

「うん！」

「ハイ！」

去り際にそんな事を言うゼノスにティピとルイセが頷き合う。

「怖そうな人だったケド、いい人だったね」

「まあね〜！ そうだ、この際だからカレンさんにも会いに行こうよ〜！」

「うん！」

二人はゼノスが教えてくれた街外れに向かった。その時

「きゃああああ……！！」

「！？ 悲鳴だよな？」

「行こう、ルイセちゃん！！」

二人が駆けつけた時、カレンは木の幹に座り込んでいた。その前に黒いシャツとズボンを来た黒髪の男が彼女を庇うかのように立ち、その手にはカーマインのレギンレイヴとそっくりの しかし、余りに長い、男の身長よりも長い 刀が握られていた。

男の前にはオズワルドという盗賊の男とその部下が二人いた。

「ああ、アンター！！」

「ゲ！ テメエ……！！ やっぱあの時の奴か！！」

オズワルドはティピを見た後、男をじろりと見てそう叫んだ。男は別段、どうという事も無く剛刀を構える。男が口を開いた。

「……下らねえ事言っでないで、退くか、斬られるか？ とつとと選べ」

ティピがその声を聞き、？マークを飛び交わす。その声は聞きなれた声だった。

しかし、ティピの知っている奴とはどこか違う……。

「へへ……！ あばよー！」

オズワルド達は一齐に橋の向こうへと渡り、橋を落としてしまった。

「ああ〜！ 逃げられちゃった……！！！」

「フン」

パチンツ 男は剛刀を背中中の鞘に納めると、刀は黄金の光を放って男の指に集まり、指輪になった。ティピは茫然とつぶやく。

「それって……カーマインやシーティアの……！！」

男は、すつと後ろを振り返った。その顔を見て、ティピとルイセが声を上げた。

「カーマイン！？」

「お兄ちゃん！？」

男は カーマインはそんな二人を無視し、座り込んでいるカレンに近寄った。

「お前ら、この女の知り合いか？」

「……へ？ ……アンタ……！！」

ティピは、じつ、とカーマインを見た。すると、服装が違う事は勿論だが、瞳の色も違う事に気付いた。両の眼は蒼銀だ。髪型も少し違う。

男は前髪をセンターで左右対称に分けている。

「お兄ちゃんじゃ……ない？」

「うそ〜！ ソックリだよ！？ でも、眼の色が違うか……！！」

男はカレンを抱き上げると更に続けた。

「質問に答える。お前等はこの女の知り合いか？」

「うん、そつだよー！」

ティピが男に答える。男は更に続ける。

「なら、家に案内しろ。それと医者を呼べ」

「え！？ 怪我してるの！？」

ティピが焦ったようにカレンを見る。大きな怪我は無いようにティピには見えた。

「出血と傷は塞いだ。が、毒があるようだ。解毒薬をもらうんだな」

「分かった！ ……えっと、アンタの名前は？」

「……シュワルゼだ」

にやり、と男は邪悪に微笑んだ。ティピとルイセはすぐに振り返って医者を呼びに行った為、表情までは見えなかったらしい。その時のシュワルゼの眼…右目が金色に変化していた事にも……。

その頃、ウォレスはブロードソードを腰に帯刀しながら、別の武器を探していた。槍や斧等、次々と手に取り、しかし、手にしつくりと来るモノが無い。カーマインのレギンレイヴという超絶刀を見、その卓越した剣技を見て思ったのだ。より強くならなければならぬ。シーティアのグンニグルという名槍も凄まじく、彼女の槍術もカーマインに勝るとも劣らなかった。現役の頃の自分だったら負けはすまい……が、勝てるとも思えない。それ程の腕前だった。

彼等と旅をする以上、彼等の荷物になる事だけは避けねばならない。

「……ふう、グランシルなら俺の探しているモノが手に入るかと思つたが……！」

ウォレスは落胆の色を隠さずに言った。少なくとも現役の頃の半分の力は取り戻さなければならぬ。そう思つて歩を進めていると、前方から人影がやって来た。

「……何かお探ですか？」

「……この声……！」

ウオレスは男の声に敏感に反応した。何故ならその声は……

「カーマイン？ ……いや……！」

「……どうかしましたか？」

男の声はカーマインと良く似ているが、カーマインよりも落ち着きと温かみがあった。カーマインならもっと冷めた 無愛想な口調だ。

カーマインに失礼だなと苦笑しながら、ウオレスは答える。

「いや、すまない。知り合いに良く似た声だったのでな」

「……そうですか。それで、どんな武器をお探しですか？ よければ私の店に来てください」

怪訝に思っ、ウオレスは問いかける。

「君は？」

「申し遅れました。私は各国を歩いて物を売る商人で……名はラルフ。ラルフ・ハウエルと言います」

淡々と名乗られたが、その名前に驚愕した。

「ハウエル？ バーンシュタインの豪商か！？」

「最も、私は単の放蕩息子ですがね。いかがです？ 商品を見て行ってくれませんか？」

「……ああ、お願いしよう」

ウオレスは男……ラルフの後を尾いていった。ウオレスは目が見えないので気付かないだろうが、その男の顔……そして目の色はカーマインそのものだった。違う点は服装と、後ろ髪がカーマインに比べて少し長いという所だった。注意して見なければ到底分からないうだろうが……。ラルフは黒いマントを翻しながら歩いていく。

……

ゼノスの家に着いたルイセ達は、連れてきた医者にカレンを看てもらっていた。やがて医者が広間に待っていたルイセ達の所へ戻ってきて黙礼し、去っていった。その後ゼノスが寝室から出てきて

医者を見送り、ルイセとティピに向き直る。

「有難う。君達がいてくれなかったら妹は助からなかったかもしれない。処置が早かったから助かったと医者が言ってたよ。また、彼に借りを作つたな」

「そんな……お礼だなんて。私達がもつと早く来れば……！」
ルイセが俯きながら、申し訳なさそうに答える。

「犯人は、王都の西の森でカレンさんを襲った奴等だよ！」

「……最近、あの連中がカレンを狙っていたのは事実だが、狙われるような心当たりは無い」

三人が「うゝむ」と考え込んでいると、不意に玄関が開いて中へ入って来る者がいた。シュワルゼだ。ティピが言う。

「どこに行つてたの？」

「知り合いに会いにな……！ ……どうやら俺の役目は終わりらしいな」

そう言つて背を向け、この場を去ろうとするシュワルゼにゼノスが話しかけた。

「君には、本当に世話になりっぱなしだな。一度ならず二度も助けてもらつとは」

「……？ 何の話だ？」

そう言つて怪訝な顔をするシュワルゼに、ティピが説明を始めた。ゼノスが目の前の男を見ながら疑問を口にする。

「すると、あの時の彼とお前は違う人間つてコトか？」

「ああ、俺の名はシュワルゼ。ソイツ等の言う”カーマイン”とは別人だ」

ニヤと笑いながらシュワルゼは言った。誰も気付かなかつたが、カーマインと口にしたとき、余りにも昔から知っている様な口ぶりだった。

「じゃあな」

「待つてくれ！ 勝手ついでにカレンを保養所へ連れて行つてくれないか！？」

「？ 保養所？」

振り返ってきた男にゼノスは、必死に頭を下げた。

「頼む！ 明日は俺は……絶対に外せないんだ！！ 闘技大会に優勝すれば、カレンの薬代と治療費も払える！！ 頼む！！」

「……フン」

シュワルゼは淡々と鼻を鳴らすと、ベッドに寝かされていたカレンを抱き上げ、言った。

「保養地と言えば、ラシエルまで行けばいいのだな？ ……なら、グローシアンの娘！」

「え……！ は、はい……！」

「レポートで連れて行け！」

「わ、分かりました！」

こうしてルイセとティピはシュワルゼをラシエルへと運んだ。しかし、この時にルイセ達は気付くべきだった。

この男は、何も言わずにルイセをグローシアンと確信していた事に。

疑うべき材料は揃っていたのだ……！

一方のウォレスは、ラルフの開いた目立たない裏通りにある店に入っていた。

「……コイツは……！」

眼の見えない……それ故に余計に感じるのかも知れない。ここに
ある武器達の素晴らしさが……！

「放浪の剣士……ウォレス殿の扱う武器はコレでしょうか？」

ラルフはそう言って剣を一振り持ってきた。ウォレスは思わず聞き返した。

「どうして俺の事を？」

「風の噂で聞いたのです。私も各国を渡り歩く身ですから」

「……成程」

ラルフの差し出した剣を手取るウォレス。柄の上下に太い剛剣をつけた武器でかなりの重厚さを感じる。しかし、意に反してその本質は剣ではない。

「……刀か。ローランディアの片手剣と同じだな」

「バーンシユタインでも刀は強く見直されています。それは遙か昔の技術で作られたブーメランスード。銘を『ミヨルヴィルム』と申します」

「……剣は叩き切るモノだが、刀は切り裂くモノだ。切るという行為は同じでも、その為に必要な動作が違う。……俺に刀を扱えと？」

「昔の実力を取り戻したいのでしたら、必要です」

ラルフはウォレスの眼をジッと見据え、きつぱりと告げる。ウォレスは内心で舌を巻いた。自分の意志をまるで読まれているかのようだった。

「……普段は指輪に出来る筈です。カーマインやシーティアの様に

「……」
「貴様……！ 何者だ!？」

「貴方が奴等の力になりたいというなら、私はその手助けをする。

それだけですよ。……もつとも、あの二人は私も興味がありますが

「……」

ウォレスはミヨルヴィルムを構え、ラルフを睨む。しかし、ラルフはまるで殺気が無い。

「……」
「また会いましょう。ウォレス殿」

「……」

そう聞こえたと同時に、ウォレスは急に町の喧騒の中に居た。気配を探って見るが、間違いない。そこはグランシルのメインストリートだ。自分は確かに店の中に居た。なのに、ラルフという男の気配もない。

「白昼夢か……？」

そう言っ額をこすった時、

「……」

左拳に何かがはめられていた。指輪である。ウォレスはその指輪を撫で、ふう、とため息を吐いた。

12・グランシルでの邂逅（後編）

カーマインとシーティアの二人は、グランシル闘技場にてフレッシュマンの部に登録した。

そして、テストが始められた。ミスリルゴーレムを相手にどこまでダメージを与えられるかというものだ。

結果はカーマイン一人の圧勝だった。彼はゴーレムの鉄槌を避け、蹴打とマジックアローそしてサンダーでミスリルゴーレムを叩き潰したのだ。彼等はこうしてAブロックに入れられた。

「明日から予選……？ つまんないわ」

「どちらでもいい。優勝すればいいんだ」

自分が戦えなかったことが不満なのか眉根を寄せるシーティアに、カーマインは静かに答える。

「ま、そうだけど……さ。予選なんかパパッと済ませちゃえば……うん？」

「……！」

二人は武闘会場を後にし、広場へと出てきていた。周りには誰もいない。大会は明日だからだ。……なのに、強烈な殺気を放つ男が二人の前に立っていた。

「 シュワルゼ」

「よお……！」

この間の時と服装が違う。紅いコートも首までであった黒いシャツも、そして何より仮面も無い。カーマインそのものの顔をした男は邪悪に笑んで背にレギンレイヴそっくりの しかし、2メートルはある刃渡りの剛刀 を背負っていた。

シーティアが視線を鋭くし、問いかける。

「……アンタ、この場にいた人達をどうしたのよ？」

「オメエ等とやり合うのに邪魔だったんでな、レポートでメインストーリーに飛ばした。流石に皆殺しにすると、目立つんでな」

「……それってつまり」

シーティアが何か言おうとするのを遮り、カーマインがシュワルゼの前に一歩進んだ。

「とことんやりたいってワケか？」

そんなカーマインを興味深そうにシュワルゼは見据えた。

「意外に冷静だな……？ 母を殺そうとした……、いや、今も殺そうとしている俺が憎くないのか？」

「憎い。だが、お前は剣に毒を塗ってなかった。毒はお前がつけた傷とは違う」

カーマインの言葉に、シュワルゼは嘲笑するかのように口元を吊り上げる。

「だから、何だ？ それで俺がお前の敵ではないと言つつもりか？ 呆れたお人好しだな……！」

「……いや」

そこでカーマインは右拳を掲げ、レギンレイヴを取り出した。同時に、シーティアもグンニグルを掴んでいる。冷たい瞳がシュワルゼを見据える。既に首飾りは外した。

「お前は、敵だ」

「それでいい……！ ……来い……！」

次の瞬間、カーマインが消えた。縮地法である。ビュンツ カーマインの本気の唐竹の一撃。それをシュワルゼは片手で止めた。レギンレイヴの刃は、鞘からいつの間にか抜き放たれた剛刀に完全に止められている。

「……！ ……何だと!？」

カーマインは二重の意味で驚いた。シーティアも同感だった。

(……あの剛刀をいつの間にか抜いた？ しかも……それを片手で苦も無く扱うなんて!)

「……クク、コイツはテメエのレギンと同じ作刀……。銘を『レギンスロータ』。俺とこの刀に……斬れぬモノ無し！」

「……！ カーマイン……！」

ズバアツ シュワルゼの剛刀を紙一重で躲す。

「！」
だが、シュワルゼは間髪入れず連撃を放ってきた。次々と繰り出される斬撃を紙一重で躲し続ける。上段からの一撃！

何て奴だ！ あの剛刀を苦も無く振り回しやがる！！

ガキイツ 両手持ちでシュワルゼの一撃を止める。

「……クツ！？」

「フン」

右手一本でシュワルゼは苦も無くカーマインを吹き飛ばした。ス
タツ、と着地するカーマイン。その次の瞬間、ズバババアツ

「……！！」

カーマインの体中から血が噴出した。ガクウツと膝を付くカーマ
イン。シーティアが驚いた声を上げた。

「バカな……？ カーマインには確かに触れてなかったのに……！！」

「フン……！！ この世に斬れぬモノ無しのレギンスロータ……！！
その威力は風圧で肉を裂く……！！ ソイツのレギンレイヴが無けれ

ば、受けた瞬間に終わってるさ」

チャキツ、とシュワルゼは両手で剣を掴まえ、八双に構えた。

「……さて、と」

グオアツ シュワルゼの体から白い煙が噴き上がり、その瞳は金
と銀の闇に彩られていた。

「……この力」

「行くぞ」

ビュンツ カーマインの瞳にも、シーティアの眼にも、シュワル
ゼが消えた様に映った。

「……！！ カーマイン……！！」

「……！！」

カーマインが背後を振り返ったのと、剣が振り下ろされたのは同
時だった。ズバアツ

「……フン」

シュワルゼの瞳は既に横っ飛びで逃れたカーマインを捉えていた。
「な！」

ガキイッ 剛刀が目の前にある。カーマインは咄嗟に両手で受けた。レギンレイヴとレギンスロータがぶつかつたまま静止した。ブシュウツ、カーマインの身体から血がまたしても噴き出る。

「……成程な、大したスピードとパワーだ……」

静かに冷静に述べるカーマインにシュワルゼは口の端を吊り上げ、つばぜり合いの状態から

「フン！」

ズドオツ 苦もなくカーマインを吹き飛ばした。カーマインは吹っ飛びながらマジックアローを放つ。が、バシイッ、素手で弾き飛ばされ、目の前にシュワルゼは現れた。

「クツ」

両手で十字受けしたカーマインを遙か後方まで吹き飛ばす、シュワルゼの蹴打。このまま何かに叩きつけられれば死ぬ。バシイッ そのカーマインを横から体当たりをくれて威力を減らし、助けた者がいた。

シーティアだ。

「……手を出すな。奴は俺の敵だ」

「格好付けてる場合じゃない事位、アンタだつて解るでしょ？」

クールに述べる弟に、そう言つてシーティアはシュワルゼに構えた。カーマインも立ち上がり、刀を八双に構える。

「……そうだ、テメエの力も見せてもらおう……。シーティア・フォルスマイヤー」

「フン……！ 付き合つてやるわ」

ビュンツ シーティアとカーマインが消えた。縮地法で駆ける。

しかし、シュワルゼの眼にはハッキリと両者の動きが見切れていた。ビュンツ、カーマインの袈裟切り、左薙ぎ、左切り上げのコンビネーションと、シーティアの突き、右薙ぎ、逆袈裟が左右から放たれ

る。

カーマインの三連撃を剛剣で捌くと、シーティアの最後の二撃を素手でつかみ、斬り下す。ガキイツ、横からカーマインが切りつけ、それを止める。

「ヤアッ！」

ドガアッ　グンニグルの刃と柄の中間部分に左拳を入れ、止めるシュワルゼ。ニツと邪悪に笑む。その後ろにカーマインが斬りかかる。

「　　」

三人の戦士が、所狭しと広場を物凄いスピードで駆ける。

(……クソッ、こんなに速いと、マジックアローも撃てない！)

シーティアが魔力を練りながら、しかし狙いが定まらない敵に舌打ちする。　　しかし、シュワルゼの方は違った。

「　　」

「な　　!?!」

シュワルゼの右拳に魔力が集中している。

「　　喰らえ」

ズドオッ、マジックアロー。だが、その威力は……！

「避ける、シーティア！」「クッ!!!」

間一髪で魔法の矢を避けるシーティア。床は平気で射抜かれていた。

「……なんつー威力……!」

「この程度で驚くな!」

「な!?!」

シュワルゼの右拳にあるのは雷だった……。

コイツ、マジックアローとサンダーを同時に編み出した!?

ズガオアッ　青白い雷光が辺りを照らしだし、一直線上のモノを吹き飛ばした。避けたシーティアにレギンスロータが迫る。ガキイツ　グンニグルで受け止めるシーティアだが、ズバアッ　風圧で肉

が割ける。

「ソレで避けたつもりか、女」

「え？」

ドガアツ シュワルゼはそのままシーティアを吹き飛ばした。ドガアツ 遙か後方の地面に背中から叩き付けられ、土煙が巻き上がる。その様を見て、

「シュワルゼ……貴様……!!」

カーマインがついに白い煙を全身から立ち昇らせる。その眼は金と蒼銀の間に彩られていた。

「フン」

シュワルゼは同じ力を放ちながら、ニイツと笑った。ビュビュンツ、二人の姿が消え、強烈な音と、土があちこちで掘り起こされ、青白い斬線が無数に宙に現れ、大気を切り裂いていく。ガキイツ、スタアツ、二人は互いに剣を繰り出して離れた。シュワルゼは八双に、カーマインは左掌に剣を持って斜に構えている。と、カーマインの身体から血が噴き出る……。

「フフ、触れなば斬られんのレギンスロータ。流石のテメエも破れん様だな？」

「……ソイツはどうかかな？」

「行くぞ!!」

ガキイツ シュワルゼが剣を振りかぶろうとした時、カーマインが懐に飛び込んできた。剣は振り切られる前に止められる。「……又!？」すぐさま連撃を放つシュワルゼに、カーマインは不敵に笑って全て受け止め、打ち込む。全く互角の打ち合いになった。

「……確かに貴様の剣は凄まじい。だが、衝突の際に衝撃を逃がすくらい、アレだけ見せられれば、馬鹿でもできる!!」

キインツ シュワルゼの剛刀を巻き上げ、カーマインは絶刀の柄にて眉間を打ち抜いた。「ガハアツ」悲鳴を上げ、地面に叩きつけられたシュワルゼ。

土煙をカーマインは凄まじい瞳で睨み続ける。…が、突如強烈な

脱力感を感じ、カーマインは前のめりに倒れた。

「……フン」

悠然とその前にシュワルゼが立つ。カーマインの一撃は全くダメージを与えられなかった。

「力を使い果たしたか」

ズドオツ ガアンツ 横合いから放たれた光を受け止め、シュワルゼはそちらを向く。そこにはグローシュの光を宿した右掌をこちらに向けるシーティアが居た。左掌はグンニグルを掴んでいた。

「……フン、中々タフだな」

「あの位でくたばってちゃ、ファフニール紅龍の戦姫は名乗れないのよ」

グンニグルを構え直すシーティアに、シュワルゼもレギンスロータを構える。……が、彼はすぐに剣を退いた。

「！？ ……どういうつもり？」

「……そろそろ処置も住んでいる時間だ、な。悪いが俺は行くぜ。」

……今度会った時はもう少し強くなっていくれよ……。二人ともそれだけを言うと、シュワルゼはその場を去って行った。シーティアは前のめりに倒れて気絶しているカーマインを見て、溜息を一つ、吐いた。

「……とんだ化け物が、私達の出生に関わってんのね。……最悪」

13・大会前夜

目が覚めた時、自分がベッドに寝かされている事が分かった。天井を見る限り、宿屋の一室のようだ。

「おはよう、カーマイン。よく眠れた？」

ベッドの脇には自分と同じ顔をした姉・シーティアが座っていた。その向こうの壁側の窓から注ぐ月明かりで、もう夜であることを、カーマインは察した。

「…奴はどうした？」

「帰ったわ。…見逃してもらったと言っべきかしら」

「シーティア、奴の狙いは何だと思う？」

ただ純粹に戦いを楽しむ自分と同じ顔の男を思い出す。迷いも恐れも、姦計もまるで抱かないあの強烈な金と銀の双眸を。

「さあ？ 分からないわ」

「……」

ムクリとカーマインはベッドの上で身を起こした。体の感覚は鈍っていない。傷にはしっかりと手当てが施されており、もう痕もない。

「ウォレスやルイセ達は？」

「もう皆、それぞれの部屋に帰ったわ。今夜はもう寝なさい」

シーティアは穏やかに言うとカーマインの両肩を優しく押し倒し、布団を被せた。

「…ああ」

その言葉に、カーマインは応えると、目を閉じる。その様を見据え、椅子から腰を上げると姉は弟の顔を見据えた。

いつもと違う、落ち着いた…慈愛に満ちた瞳で。

「じゃあね、明日からは決勝大会。疲れを残していたら承知しないわよ。 母さんの命が関わってるんだから」

「ああ、…分かってる」

瞳を閉じたまま返す、無愛想な弟に、姉は「お休み」とだけ言って、部屋を後にした。

ルイセの部屋

「お姉ちゃん！ お兄ちゃんは!？」

部屋を訪ねて来たシーティアに、ルイセが飛びついて来た。隣では、ティピが眠そうに眼をこすっている。

「大丈夫よ、ルイセちゃん。アイツは殺しても死なないって」

アクビすらしながら述べるティピにルイセは涙目になってシーティアを見る。

「…でもお!!」

シーティアは優しく妹を抱きしめ、頭を撫でつけた。

「大丈夫、アイツがルイセを置いていく事なんか無い。大丈夫」

「お姉ちゃん……」

シーティアは、ルイセをベッドに寝かしつける。

「さあ、ゆっくりお休み」

ベッドサイドの椅子に腰かけ微笑みかけるシーティアに

「うん」

心から安心して、ルイセは瞳を閉じた。程なくして、寝息を立て始める。

「……」

シーティアはこちらをジッと珍しいモノを見たという表情のティピに顔を向ける。

「何よ？」

「何かさあ、アンタにも『お姉ちゃん』なトコロが有ったんだなっつて」

「うるさい。私も一度部屋に戻るわ、また明日ね」

早々と場を後にするシーティアの背に

「おやすみ〜」

と気の無いティピの声が掛けられた。

「…………お休み」

部屋から出て行く前にそう応えたシーティアだが、彼女はそのまま自室へ向かわず、夜の街へ歩いて行った…。

グランシル南の街道。

シーティアはカレンが襲われた現場に来た。暗闇の中、木々が風に揺られる様はなかなか不気味だ。シーティアの黒髪が月の光を浴びて幻想的に輝く。彼女は闇に向かって声をかけた。

「…………アンタ、こんな所で何してんの？ ウォレスさん」

「シーティアか」

ウォレスはシーティアに向き直った。彼の手にはカーマインからもらったブロードソードとは明らかに違う双身の剣があった。投射剣に見えるが、その形と反りはローランディア製の刀だった。

「それ、どうしたの？ バーンシュタインの投射剣と似てるわね」

「ああ。お前達との旅をつづける為にもう少し強くならなきゃいかんと思つてな…………。使っている所だ」

「…………そう」

ウォレスはそこで、ふと首を傾げた。

「それで、お前はここで何をしている？ 明日は試合だろう？」

シーティアは答えなかった。

ただ右手に嵌った指輪を見据え　す、とウォレスに向きなおる。

「ねえ、ウォレス。私と闘ってくれない？」

「ん？」

ウォレスの返事を待たずに、シーティアは右拳を突き出し、グンニグルを取り出した。

「何かあったようだな。…………詳しくは聞かん。俺も、昔の勳を取り

戻したいしな」

「……アリガト。それじゃ 行くわよ!!」

グンニグルを構え、縮地法でシーティアが駆ける。その姿はまるで消えたようだ。

ガキイツ グンニグルの一撃をミヨルヴィルムで受けるウォレス。

「お互い似たような武器ね」

「ならばなおさら、負けるわけにはいかんっ!」

「こっちのセリフよ!」

ギイイツ ウォレスのミヨルヴィルムとシーティアのグンニグルが夜闇で激突する。ウォレスの剛剣が次々とシーティアに襲いかかる。ギインツ、ギインツ

「……くっ! この馬鹿力!!」

「フフ、頼りになるだろう?」

ブンツ 派手に空を切る音を同時、強烈な突きを躲し、横薙ぎでウォレスを狙う。が、ウォレスは更に速く懐に飛び込み、義手の拳を放った。

「クッ!」

シーティアは咄嗟に柄で受ける。同時。

「うおおおおお!!!!」

「!!!!」

吹き飛ばされたシーティア。更に左手のミヨルヴィルムがシーティアに迫る。

「!!!!」

シーティアの姿が消えた。咄嗟にウォレスは背後に剣を構えた。ガキインツ

「……大したスピードだ。縮地法か?」

「アンタ、本当にそれで実力を出し切れてないの? とんだ化物だわ」

「お前だって、その首飾りを外してしまい」

ガキイツ 互いに刃を弾き合い、ニツと笑い合う。

妙だな。あのラルフとか言う奴にもらったこの剣……。まるで、俺に力を貸してくれているかのようだ……。確かにコイツなら、全盛期の力を取り戻せるかも知れない……

ウォレスはちらりとミヨルヴィルムを見て、つぶやいた。

「……フン、名器には魂が宿る……か」

「？ 何を言っているの？」

「気にするな。続けるぞ！！」

ドオンツ ウォレスが駆ける。シーティアも向かっていく。ガキイツガキイツ

シュワルゼの剣を返すには、この剛剣をも受け切る技量がいる……！ 思ってたよりもずっと……！

ガキイツ 剣と槍をぶつけ合ったまま、シーティアはぼつりと言った。

「ずっと……いい練習になりそう」

「……うん？」

「気にしないで、こっちの話っ！」

ブウンツ 槍を払い、その反動で蹴打を放つ。ドガアツ ウォレスの両腕を軋ませるほどの威力だった。

「ぐう……」

後ろに跳びながら、ウォレスが呻く。

「もらった！！」

ゴオツ シーティアの槍が迫る。ガキイツ 咄嗟に剣で止め、弾き飛ばす。今度はシーティアが体勢を崩した。逆手の刃で斬りつける。

ヒュゴオツ 捉えたそれは影。

シーティアは遙か後方に退いていた。その右手に魔力が集まっている。

「ぬ！？」

「いくわよ」

ズドオ 魔法の矢がウォレスに放たれる。が、ウォレスは苦も無

くミヨルヴィルムで叩き落とし、大きく振りかぶった。シーティアは既にウォレスに向かって突進している。

なるほど、魔法で俺の体勢を崩し、切り崩すつもりか……！

「だが……！」

カシイツカシイツ ミヨルヴィルムの柄のサポートをしていた金の鰐が両翼を広げる。

「……！！！」

「うおりゃああああ……！！！」

左手に持ったミヨルヴィルムをサイドスローで投げた。剣は回転しながら、シーティアに向かっていく。

「……」

シーティアは更にスピードを上げ、ミヨルヴィルムの下をかいくぐって通り抜け、グンニグルを振り上げる。

ゴオツ ウォレスもその時、シーティアに突っ込んできた。ガキイツ 義手と槍が真正面からぶつかり合う。バツ、シーティアはそこで横跳びに移動した。その後ろからミヨルヴィルムが飛んできた。ガシイツ 左手でウォレスは掴む。

ドオンツ ウォレスが今度は突っ込んで来た。シーティアはそれに合わせ、槍の連撃を放つ。ズドドドドオツ マシガンのような突きの連打。ウォレスは動物的な勘で義手と剣で急所を回避しつつ、懐に飛び込む。

「やるわね」

ゴオツ シーティアはそうさせまいと、逆の刃で横薙ぎに切り払った。が、ウォレスは間一髪でそれさえもかいくぐった。

ガキイツ ミヨルヴィルムで止め、受けさせたのだ。

「もらったあ……！」

ミヨルヴィルムを手放し、右拳の義手を大きく振り被った。ゴオツ！ 魔力を帯びた右拳がシーティアに迫る。ドゴオツ 闇が……奮えた……。

ゼノス・ラングレー 時は少し遡る

「なんだって！ シズが棄権！？ ……クソッ、どういっつもりなんだ！！」

ゼノスは闘技場の運営者から急遽パートナーの棄権を言い渡されていた。

「許してやってくれ。お袋さんの容態が悪化したみたいなんだ」
「だからって！ いや、すまない。シズによろしく言っておいてくれ」

カレンをラシエルへと送った直後の事だった。ゼノスはパートナーの魔法使いの棄権を知った。共にラシエルから帰って来たルイセ達に礼を言うのもそこそこに、ゼノスは町へと繰り出し、パートナーを探し始めた。

彼と組みたいという者は多かった。しかし、カレンの為にも決して負けの許されないゼノスは、生半可な相手では駄目だった。

何としても見つけてやる！ カレンの治療費を払う為にも！

！

ゼノスは余程気が焦っていたのだろうか。町外れの自分の家の前にまで戻って来ている事に今、気付いた。

「……いるワケねえか……！ そんな都合のいい奴……！」

日が暮れ、自嘲的に笑っていると、ゼノスの後ろから目を仮面で隠し黒髪の黒マントを羽織った、茶色の鎧の男が歩いて来た。腰にはローランディア製の刀……シエルオープナーが差されており、左手には金色の指輪があった。

「うおおおおお！！！！」

気づいた時にはゼノスは腰のグレートソードを抜き、両手で持って上段から振り下ろしていた。男は背を向けた状態だったが、剣が迫ると同時にこちらを振り返り、消えた。ガキィッ

「なっ！？」

男は背後に立って刀を鞘に戻していた。ゼノスは自分の手元の剣を見下ろす。と。ピシッと音を立ててヒビが入り、そのまま柄だけを残して崩れ去っていった。最早剣としての役割を持たない。

「一介の商人に斬りつけるとは、どういうつもりだ？」

男は淡々と、ゼノスに振り返りながら問いかける。

「頼む！ アンタの力を俺にくれ！！ 俺はゼノス・ラングレ

ー！！ 訳あって絶対に闘技大会で優勝しなくちゃならねえんだ！

！ アンタの力を貸してくれ！！」

「……私は、商人だと言った」

そう言つて、男は背を向け去ろうとするが、ゼノスは叫んだ。

「頼む！！ 妹の命を救うには……それしかねえんだ！！ 金なら後でいくらでも払うつ！！」

ピタッと男が足をとめた。静かに振り返る。

「……身内に何かあったのか？」

「訳の分からない奴らに襲われて、毒を盛られたんだ！ 手術する必要があつて、その為には金が……！」

必死で事情を話すゼノスに、仮面の男は「フーツ」とため息をついてから述べた。

「……やれやれ。分かった、協力しよう……。私も少し闘技大会の参加者で戦つてみたい奴がいるからね」

「すまねえ！！ ……えっと、アンタの名は？」

仮面の男は、ふ、と穏やかに微笑して答えた。

「ラルフだ……。ラルフ・ハウエル」

こうして、ラルフはゼノスのパートナーとして、大会に登録されたのだった。

ラルフの店にて

「悪いな、斬りかかったのは俺の方なのに、新しい武器をくれるな

んてよ」

「……詫びるくらいなら、斬りかからないでくれ」

ラルフはそう言って笑った。ゼノスは頭を下げる。

「面目ねえ！……俺自身、何で斬りかかったのか分からなかったんだ。……アンタを見ていて何か……！」

そう、オヤジと重なったんだ……。俺の、オヤジと……！

物思いにふけてっていると、ラルフが一振りの剛剣を差し出して来た。

「！？……こいつは……！！」

「お前の戦い方はバーンシュタインの両手剣が合うな。切り裂くよりも叩き斬る方が合っていそうだ。……とりあえず、“ベルセルクの剛剣”で手を打ってくれ」

ゼノスの持っていたグレートソードと同じ種類の　しかし、比べ物にならない業物が差し出された。

「い……いいのかよっ！？　こんな業物……！！」

「気にするな。借りは……優勝して温泉に連れて行ってくれればいいさ」

仮面をつけたまま……しかし、ラルフは美しく微笑した。ゼノスが思わず見とれるほど……。

14・闘技大会開始

闘技大会 当日。

カーマイン達は受付にて手続きを済ませていた。

「大会参加者の方ですね。どうぞそちらの階段から控室へ向かって下さい。また見学の方はアチラの観客席へと続く階段をお昇り下さい」

カーマインとシーティアは受付の裏にある下へと続く階段の前へ向かう。

「それじゃ、俺とルイセは観客席で見てるぜ」

「がんばってね、お兄ちゃん！ お姉ちゃん！！」

ウォレスとルイセが、カーマインとシーティアに激励を送る。二人はそれぞれに頷いて答えた。

「ああ……、必ず優勝する」

「ま、成るように成るわよ」

「……アンタ達、何か心配だからアタシもついていってあげるわ！」
ティピがルイセの肩からカーマインの肩に乗って来た。カーマインとシーティアは互いに顔を見合わせると、肩を同時にすくめた。

「さあ、はりきって行こう！！」

ティピの元気な声が響き渡った。

二人はそれに合わせるように静かに階段を降りて行った……。

「……ウォレスさん、お兄ちゃん達大丈夫かな？」

「当たり前だろ？ 俺の知る限り、あの年であれだけの実力の奴等は知らないぜ」

「……うん」

心配そうなルイセに、ウォレスはポンと頭を撫でてやりながら、

観客席へ向かった。

「うわぁ……凄いい人だ。それに……広い闘技場……。あんな所で戦うんだ」

「ああ……懐かしいな。この空気……！」

「？……ウォレスさん、出場した事あるの？」

「エキスパートで3回優勝している。自慢じゃねえがな」

肩をすくめるウォレスに、ルイセは首を大きく振って応えた。

「凄いよ、ウォレスさん！」

「……そうか？」

「うん！」

にこやかに言うルイセに、ウォレスはまんざらでもなさそうだった。と、試合の始まりを告げるラッパが響き渡った……！

「……あ！」

「いよいよだな……！ 出て来たぞ、ルイセ！ 応援してやれ！」

「う……うんっ！ がんばって、お兄ちゃん！ お姉ちゃん！」

4チームの内、南西のチームがカーマイン達である。それぞれ北西、北東、南東に分かれて位置についてある。それぞれのチームから均等に真中へゲルが五体現れた。

『これより、予選を行います。5匹のゲルを一番多く倒したチームの勝利です。それでは予選第一組……開始……！』

カーアンと鐘の音が鳴らされた。次の瞬間

「……あ！」

ルイセがポツリとつぶやいたその時には、カーマインとシーティアの姿が消えていた。

！ 縮地法……か！

ウォレスは気配で二人の動きを見て取る。

「……ま、予選は見るまでも無いな……！」

そうつぶやくと同時に、鞘に納刀したままの青銅剣で一気に三匹をカーメインが潰す。隣でシーティアがサンダーを放ち、二匹を消し飛ばした。

他チームの者や司会者……観客席もポカンとしてコレを見守っていた……。

やがて場内に凄まじいばかりの拍手が、喝采が浴びせられた。

「チ……チーム……！……ローザリアチーム！！アツサリと……アツサリと予選通過です。素晴らしいコンビネーションでしたあ……！」

ナレーションも思わず上ずった口調で……しかし興奮しきった様子で彼ら二人を称賛した。カーメインはブイツとそっぽを向くが、シーティアは歓声に応じて笑顔と手を振っている。

肩にいるティピも「エヘン」と胸を反らせていた……。

「やったア！ウオレスさん、お兄ちゃん達やったよ……！」

「お……おお、分かったからもう少し落ち着いてくれ……！」

控え室へと戻るカーメインに後ろからシーティアが声をかけた。

「アツサリ決めたわね。ま、予選に力を使うわけにもいかないか」

「早々と終わらせる。俺達には時間はあるが、ソレでも早いに越した事は無い」

「……ソレもそうね」

言い合う双子にティピが声をあげた。

「ソレより……！カーメイン、アンタも少し愛想よくしなさいよ……！」

「必要あるのか？……俺は戦うだけだ」

「……コイツ」

何かを言おうとするティピだったが、その前に彼等に声をかける者が現れた。

「よお、お前ら!!」

「ゼノスじゃない!？」

ティピがゼノスを呼ぶ。カーマインとシーティアがゼノスに向き直った。そこで、カーマインが気付いた。それにゼノスがニツと笑いかける。

「……アンタは、あの時の」

「今度は人違いじゃないみたいだな」

ゼノスの言葉に、カーマインは一瞬首を傾げる。そこへシーティアが話しかけてきた。

「? 知り合い?」

「まあな。カレンさんは大丈夫なのか? ティピ達にラシエルへ療養に行つたと聞いたが」

シーティアとの会話もそこにカーマインはカレンの容体について聞いた。

「お前の妹のルイセとお前に良く似たシュワルゼという男のおかげで、大したことは無かった。お前達兄妹には世話になりっぱなしだな」

ゼノスの言葉に、カーマインとシーティアが驚愕の表情を取る。

「シュワルゼ……だと?」

「アイツが……? どういうつもりかしら」

二人の反応に訝しがりながらも、ゼノスは続けた。

「ま、とにかく礼を言いたくてな……! シュワルゼの事を知ってるみたいだが、アイツにもよろしく言っておいてくれ。……ソレと、闘いは真剣勝負だ。手は抜かねえぜ?」

「……アンタと闘うには、決勝戦だな。……了解した」

そう述べるカーマインの横でシーティアもウィンクして見せる。ゼノスはほんの少しだけ、シーティアにときめいた。それを戻させたのはティピの声だった。

「こっちだつて負けないからね!」

「そ……その意気だ!! ……じゃあな!!」

「……決勝で会おう」「決勝だね」
去っていくゼノスにカーマインとシーティアがそう告げた。ソレにゼノスはニツと笑い返した。

「……で、何でお前は挨拶に行かねえんだよ？ アイツ等に興味があんだろ？」

ゼノスは控室を繋ぐ通路で待っていた仮面の男　ラルフに問いかける。

「焦らなくても、決勝で会えるさ」

「勝ち残るとは限らねえぜ？ 向こうには『剛剣のニツク』がいる」

「……ソレで負けるくらいなら興味は無いよ」

そう言っただけ、ラルフは自分達の控室へ向かって行った。ゼノスはほんの少しだけ、ラルフの言った意味を考えていたが、気を取り直して戻ろうとした。

「あの……すみません」

見ると、可愛い女の子が居た。水を参加者に配っているようだ。

「お水、要りませんか？」

「ああ、一つもらおうかな」

そう言っただけ、ゼノスは水を取ると、一気に飲み干した。プハアッとつまそうに息を吐くと、礼を言っただけ、彼は控室へと向かった……。少女が一人取り残される。

「……ターゲットと接触、任務完了です」

その後ろにはサンドラの魔導書を奪った覆面の男達が居た。

「よくやった。後は我々にまかせろ」

「……ハッ」

そう言い合っただけ、少女は闘技場を去って行き、男も闇へと姿を消した。

「カーマイン！ シーティア！」

衛兵の声が控室に響き渡った。ティピが緊張した面持ちで顔を上げる。

「いよいよだね」

「後は俺に任せろ」「これからが本戦だもんね」

カーマイン達は衛兵の元へと来た。

「丁度、君達の出番だ。準備はいいかい？」

「ああ」「ええ」「もちろん！」

三者三様の答えを返す。そうして衛兵が道を開けた。瞬間。ドンツと後ろからカーマイン突き飛ばす者がいた。

「早々に行けよ、お子ちゃま供」

「へ！ ガキ供が参加者とは……ラッキーだぜ」

カーマイン達と同じ一回戦で当たるチームだった。二人の言葉に控え室が「どっ」と沸いた。当然短気なティピはすぐに挑発に乗る。

「コ・イ・ツ・ら~~~~！！！！」

「……落ち着け」

「アンタは、あんな事言われて笑われてんのに、何で落ち着いてんのよ!?!」

カーマインが小さなティピの頭を優しく撫でてから、底光りする金と蒼銀の瞳で不敵に笑った。

「……こういう奴等を黙らせるのが楽しいんだ」

「何だと、コラア!!!」「ガキの分際で!!!」

控え室に居た参加者全員が気色ばむ。

「止めないか！ コレから試合が始まるんだ。その時に優劣を決めたまえ」

衛兵の声でとりあえず、皆、腰を下ろした。

「このガキ、ぶっ潰してやる!」「大人をナメんじゃねえぜ」

「……ガキ相手にムキになるアンタの方が、余程ガキだと思わない？」

シーティアもカーマインの隣で不敵な美笑を称えていた。

「さあ、闘技場に進んで！！」

衛兵がカーマイン達と男六人を会場へ促した。スツとカーマインとシーティアは早々と衛兵の後について控室を後にした……。

「あ、お兄ちゃん達が出て来たよ！！」

ルイセが嬉しそうに声をあげた。カーマインとシーティアは東南の位置へ案内され、他の男六名はソレゾレ東北、西北、西南へと割り振られた。

「今度は四チームのサバイバル戦だな。最後まで勝ち残ったチームが勝利と言っ訳だ」

「本当に詳しいね、ウォレスさん」

「まあな」

……まあ、アイツらの敵になれそうな奴は……いねえな

ウォレスはフーツと溜息を吐いた。退屈になりそうだ……と。

ナレーションが大興奮でローザリアチームの事を紹介している。

他チームの時はソレ程でも無かったが、どうやら美しい双子の姉弟と妖精というチームが華になると踏んだらしい。

「……こういうのでヤツカミだったんなら、いい迷惑ね」

控え室での一件を思い出し、顔をしかめるシーティア。

「な〜くに言ってるのよ！ ソレもあたし達の実力にビビってるからじゃない！！」

「……ま、ソレはどうか知らないけど……。カーマイン、アンター人でやるつもり？」

ティピと会話しているシーティアの前に立つと、カーマインは静

かに鞘ごと青銅剣を剣帯から抜いて右手に握った。

「こんな連中に手を見せてやるつもりは無い」

カーン、合図と同時に、カーマイン達に一齐に他チームがかかって来た。

「まずは、クソガキ供だあ!!」 「覚悟しやがれえ!!」

アーマープレートを着込んだ二人の剣士が吠える。と、カーマインは静かに見据え、敵の懐に入った。

「な?」 「!?!」

ドガアツ みぞおちに突きを入れ、二人目には擦れ違い様後頭部に剣を薙いだ。ドガアツ 「グフウ」 「ガハアツ」 一人目は後方に、二人目は前のめりに倒れる。

「……!!」

魔法の矢がカーマインに放たれるが、ズドオドオツ 鞘で二つの魔法を弾き落とした。

「又オオ~~~~!! まやかしがア!!」

更に戦斧を持った闘士と弓を持った男、魔法使いの相棒らしき槍術士がカーマインに向かう。

「……俺に勝つつもりなら、もう少し頭を使え」

「ナメるな」 「ほざけ!!」 「ガキがあ!!」

巨大な戦斧を紙一重でかわ躲し、弓が三連射される。カーマインはソラを剣を微かに動かす事で軌道を外し、躲すと、左から来た槍をガシィツと掴んで止める。

な!?

ドガガガアツ 一振りで斧使いと槍術士を吹っ飛ばし、弓を構えようとした男の懐に飛び込み一閃。ドガアツ 一気に三人を倒し、魔法使いを見据えたその時。目の前でファイヤーボールが爆発した。「油断したな! 燃えろお!!」

その時、カーマインにはある光景が浮かび上がった。剣閃から折れた剣から炎を吹き飛ばした男の事を……。

カーマインは右手の剣に左手を添え、両手持ちにした……! シ

ーティアはジツと見つめる……！

なに？ ……グローシュがアイツに集められていく……！？

カーマインはその姿勢のまま、右に切り上げた。ズドオツ 剣閃からマジックアローが生まれ、ファイヤーボールを吸収していき、炎は一直線にはなった術者の脇を通り過ぎた。ズドオアツ 後方で爆発した。

「 な！？ 」

術者はペタンと自分の脇に出来たあちこちで炎が煙っている溝を眺め、ソレから背後のクレーターを見据え、……ソレらを創り出した青年を見据えた。

「 続けるか？ 」

青年は静かに……そう告げた。術者は両手を上げ、すぐ様こう言った……。

「 参った！ 降参するー！！ 」

闘技場が、また揺れた……。 「 やったあー！！ 」 と騒ぐティピの横で、シーティアはジロリとカーマインを睨んでいた。

今のは魔法剣。何でアイツが……？

そう思いながら、控室へ歩くカーマインの後を追う。控室に戻った彼等をなじる声は……もう、無かった。

ルイセは観客席でキョトンとしていた。

今のつて……魔法に剣閃の威力を足して放つ魔法剣……。魔術と剣術に長けた人が出来る奥義だって学院で聞いたことがある

けれど、カーマインは魔法剣をどこで知ったのか？ 学院でさえ、正式な技術に出来ない程、研究が進んでいないのに……。

「 ……お兄ちゃん 」

「どうした、ルイセ？」

「ううん、何でもないよ。ウォレスさん」

何かを考え込み始めたルイセにウォレスは心配したが、カーマイン達とは別ブロックのチームが出て来た事で注意がソチラに向いた。

「……ルイセ。ゼノスというのはどのチームだ？」

「え？ ……ゼノスさん？」

そう聞いてみるものの、実はウォレスは既に感付いていた。目が見えないからこそ、彼は気配で誰かを言い当てる事が出来るのだ……。一度出合った人物なら特に……。

ただし、今回ゼノスの事が分かったのは、一度会ったからではなく、戦士としての気配の鋭さが他を圧倒していたからだ。……だが。

「あの右下のチーム！ お兄ちゃん達が最初に居た所にいるのが、ゼノスさんのチームだよ。……隣の人、仮面付けてるね」

「……仮面の男？」

ウォレスはその男の気配を覚えていた。カーマインと似て非なるその気配は……。

「……ラルフ」

「……え？ 知り合いですか、ウォレスさん？」

「まあな」

渋い顔で今度はウォレスが黙り込む番だった。

「奴め、何をたくらんでいる？」

ウォレスはジツとラルフの方を睨み据える。ゴングが鳴った。カー……

やはり要注意はゼノスと思ったか、皆一斉にゼノスに攻撃を仕掛けて来る。ソレに対し、ゼノスは真っ向から突っ込んでいく。ラルフはその場から動かない。

巨体の男のハンマーがゼノスに振り下ろされる。ガキィッ 涼しい顔でソレを止めるゼノス。左右からクローを持つ男と、剣を持った男が斬りかかる。ズババァッ ……だが、ゼノスはまるで気にする事なく、ハンマーをたたっ切ってそのまま巨漢を切り裂いた。

驚き、怯んだ二人に剛剣を振って吹き飛ばし、ゼノスは一気に三人を叩き伏せた。残る三人は魔法使い二人と弓兵だけだ。ドガアツドガアツドシューウツ　魔法の直撃を浴び矢を鎧と筋肉で弾き飛ばし、ベルセルクを振るって試合を終わらせた。

「……呆れたパワーファイトだ。まるでガードを考えていない」

「でも、向こうのチームの魔法……ファイヤーボールとブリザード、サンダーも効かないなんて……！」

「あの大剣を振り回す腕力もだが、ソレ以上にとんでもない防御力だな。あの鎧と筋肉の前じゃ、刃での攻撃も大したダメージを与えられない」

「……お兄ちゃん、お姉ちゃん……！！」

心配そうに唸るルイセを横目に、ウォレスはジッと全く動かずに居たラルフを見据える……。

奴の狙いは、カーマインとシーティアか？ ……だが、一体なぜあの二人を狙う……？

ウォレスは拍手を浴びるゼノスの横を歩く男をジッと見据えていた……。

「へえ〜〜！　流石、アンタが気にするだけあって大したモンね、カーマイン」

ゼノスの試合を観たシーティアはカーマインにそう声をかけた。隣のカーマインは静かにゼノスの去った闘技場を見据えている。

「……シーティア。あの仮面の男に見覚えはないか？」

「仮面を被ってる知り合いはいないわ」

そう言っ返すシーティア達にティピが奥から声をかけて来た。

「アンタ達、こんな処にいた〜！！　ちよつと試合見て来るって言うからほつといたのに！！　衛兵さんが呼んでるよ！！」

「ヤベツ！」「マズツ！」

そう言い合って双子は早々と観戦場を後にした。

一回戦。

カーマイン達の前に現れたのは、奇しくも男の剣士と女の槍使いだった。

「予選を見せてもらったよ。中々やるじゃないか、ボウヤ」

女兵士がニヤツと笑って言うて来た。剣士の方もニヤリと笑う。

「だが、注意すべきはボウズの方で、そこのお嬢ちゃんの方は大した事無さそうだ」

「……ピクツ……何ですって……？」

カーマインはソツとシーティアから一步離れた。ティピも、シーティアとカーマインの間を飛んでいたが、一瞬でカーマインの肩に留まり、身を隠す。

「……かなり、キてるな」

「何か……ヤバそう……だよな」

「……ああ、相手に同情する」

ヒソヒソと話をしながらカーマインとティピは横目でシーティアを見つめる。案の定、シーティアの身体から黒炎が噴き始めた。

「カーマイン。次は私が殺るわ」

「……字が気になる。もう少し冷静に」

「……そうか」

カーマインはスツと後ろに下がった。ソレを見て、男と女はニヤリと笑い合う。カァンツとゴングが鳴った。

確かに、ボウズの剣は凄まじい……！ 魔法を剣閃から放つなんてバカげた真似までやりやがる……！

でもね、お嬢ちゃんの方は“ただ動きの速い魔法使い”。いくらボウヤでも二人掛かりなら抑えられる……！

シーティアは向かってくる二人に対し、あえて縮地法を使わず、

手をかざした。

「 な!?! 」に 「 !?! 」

次の瞬間、魔法陣が宙に浮かび上がり、その中央に炎の球が生まれた。

「動きが速いだけじゃなくて、構成も早いでしょ？ ファイヤーボール!?! 」

「馬鹿なっ!?!? 中級魔法を」 「一瞬で練ったと言うの!?!? 」

二人の戦士が驚愕に染まる中、大きく炎は爆発し、闘技場を揺らした。

「う……嘘……!?! シーティアってあんなに凄いの? 」

「魔法に関してなら、俺より上だ。魔力は互角でも練るスピードが違う。簡単に言うと、俺は力を凝縮して一直線に放つんだが、アイツは凝縮した力を多方面に放つ事も出来るんだ」

淡々とカーマインは述べる。それをジツとティピは見つめ、つぶやいた。

「アンタ、どこか嬉しそうね」

「分かるか？ 倒す相手が弱いのは嫌だからな」

「……歪んでるわね、アンタ」

などと言い合う二人を尻目に、シーティアは右手からグンニグルを取り出し、ビュンツと一閃した。と同時に槍から生じた風が炎を切り裂いた。

「いつまで、やられたフリしてんのよ? 」

「おや、バレちまったか」 「フフン、油断した所を突こうと思ってたのに」

そう言い合って、男と女は立ち上がった。全身にグローシユのバリアが張られている。ティピが叫んだ。

「何よ、あれ!?! アイツら魔法戦士!?! 」

「違う、アミュレットだ。あの二人の手首についてある飾り……」。

アレは魔法を完全に無効化する。……成程、だから“魔法使い”のシーティアを選んだのか」

一人納得するカーマイン。シーティアはそんな彼の言葉を聞いているのかいないのか。

「アミュレットなら確かに私の魔法を無効化出来るわね」

「そう言う事だ!!」「いくよ!!」

「……だ・け・ど」

シュンツ 次の瞬間、シーティアは縮地法を使い、消えた。二人の戦士の間を凄まじい突風が駆け抜け、スタアツ その後方へシーティアは着地した。

「……私って何でもできるの」

ビュンツと刃を払った次の瞬間、二人の戦士は全身をスタスタに斬られ、前のめりに倒れた。歓声がわき上がった……。

観客席にて。

「あ! 今度はゼノスさん達が出て来た!!」

カーマイン達が勝利し、次はBブロックの第二回戦第一試合が始まった。ゼノス達の相手は鉄球を持った大男と、カギ爪をつけた細身の男だった。

「……ほう、今度の奴等。なかなか強そうだな」

「え、そうなの? ゼノスさん大丈夫かな?」

「ソレは心配いらん。ソレ程の相手じゃない」

言いながら、ウオレスはジツとラルフを見据える。と、ラルフがついと前に出た。今度はラルフが一人で戦うつもりらしい。

「今度は、あの仮面の人が戦うんだ……!!」

「……さて、どうなるかな?」

二人の男、大男が鉄球を投げ飛ばして来た。ラルフは無造作に躲かわす。そこへ爪男が凄まじいスピードで斬りつけて来た。ゴオツ 当たると思ったソレは身を反らしただけで躲してしまふ。ほとんど足を地から離さず、すり足で移動して躲す。

「ちつくしよお〜!!」「の野郎〜!!」

闘技場で二人の男はラルフを必死で追い回していた。まるで当たる気がしない。

「……大した力とスピードだ。コンビネーションが加われば、もっと強くなるだろう」

「うるせえ!!」「余裕こくな!!」

「……だが、ここまでだ」

鯉口をチキツと切り、次の瞬間、ラルフは音も立てずに地を蹴って消えた。まるでフワリと浮かぶかの様に……そして。音も無く二人の男の背後に現れ、腰の剣をいつの間にか抜いて、ソレを鞘に納刀した。男達はドサツ　ズシンツ　と倒れ、歓声が上がった……。

「……あつという間だったね。……何が起こったのか、分からないよ」

闘技場でゼノスと笑い合いながら拳を合わせる男に、ルイセはキョトンとしていた。

「……だが。あの男……ラルフは実力の半分も出していない」

「ええ!?　……じゃあ、決勝で当たったら……!!」

「間違いなく、当たるだろうぜ。Aブロックはカーマインとシーティア、ソレに剛剣のニツクと柔剣のピートがいるが、Bブロックの優勝者はゼノスとラルフで決まりだ」

「……お兄ちゃん、お姉ちゃん」

正直、ゼノスも恐えが、ラルフの剣はまるで得体が知れねえ。まるで……剣術の動きじゃねえ……!　だが、あの太刀筋は……ベルガー隊長……!　どういう事だ?

ウォレスが思い悩んでいる間に、次の試合が始まって行く……。
カーメイン達は強かった。次々と現れる敵を苦も無く切り伏せて行く。いつの間にか、Aブロックでは、カーメインとシーティアが優勝候補に上げられるほどだった。そして、ソレと肩を並べるのが、ニックとピートのコンビだ。ニックの剛剣とピートの魔法、そして片手剣は凄まじく、またコンビネーションも光っていた。今や、このどちらが先に決勝進出を決めたゼノスチームに挑むのかで話題が持ちきりだった。

そして、その答えがコレから始まる……。

15・準決勝戦

『セミファイナル、第二試合、両者前へ!!』

闘技場に司会者の声が鳴り響いた。帽子が飛び、物も飛ぶほど観客は興奮しきっている。東の入場口にニックとピートの二人が立っていた。反対側の西入口にカーマインとシーティア、それにティピもいる。

「……いよいよだな。ルイセ、よく見ておけよ」

「う、うん……! でも、ウォレスさん。お兄ちゃん達大丈夫だよね」

「……これまでのようにはいかない。それは間違い無いだろうぜ」
ウォレスの言葉に、ルイセもジツと祈るように登場を見据えた。

『東より入場せしは、メデイス村出身にして、冒険者達の間でも名高き剛剣のニック! 柔剣のピート!!』

名のられ、重装甲にクレイモアと言う姿をした剣士、ニックと軽装にバンドナと言う姿で腰にブロードソードを二本差した男、ピートが同時に拳を上げ、応える。闘場は一層凄まじい歓声に包まれた。『西より入場せしは、ローザリア王都出身にして、今大会フレッシユマンの部最年少の双子、剣士カーマイン! 槍術師シーティア!!』

カーマインはジツと対戦相手を見据え、微動だにしない。シーティアの方は名乗りを聞くと同時に手を上げて応えている。美しき双子の名乗りにも、更に会場は揺れる。

『どちらも圧倒的な強さで勝ち進んできたチームです。噂通り……いや、それ以上の凄まじい強さを見せてくれたニック! ピート!! 対するは、全くの無名でありながら、アイアンゴーレムを倒し、

どちらも圧倒的な強さを、魔法を見せつけてくれた双子の美しき戦士！ カーマイン、シーティア！ はたして、どちらが勝利し、決勝のゼノスチームに挑むのでしょうか！！？」

ナレーションが終わり、ゴングが鳴った。カーマインはニックに向かい、シーティアはピートへ向かう。二人ともニツと笑い、クレイモアと二振りのブロードソードを抜いた。

カーマインが青銅剣を鞘ごとニックに叩きつける。ドガアツ ニックはそれをクレイモアで止め、ブウンツと大きく後方へ吹き飛ばした。ニックの怪力に会場はどよめく。

「……やるな」

「お前もな……！ 自分から後方へ飛んで逃げるとは、大した奴だ」
ドオンツ 凄まじい音とともにニックが駆けた。ギインツギインツ ニ、三発打ち合う。

「だが、その折れた剣じゃ、俺には勝てない！」

「……！」

ズドアツ 受け止めて流していた剛剣を流しきれず、鞘が両断された。カーマインは静かに半ばから断たれた鞘を見つめる。そして静かに構え直した。

「この大会でそんなお粗末な武器で戦うとは……馬鹿げてるな」

「……かもな。だが、それ位で無いと倒せない奴がいるんだ」

ニックの言葉にカーマインは静かに、しかし瞳にはかけらも迷いを示さずに言った。その様に剛剣の男はニヤリと笑った。

「面白い。じゃあ、お前の剣を見せて見る……！」

「見せてやるぞ」

ダアンツ と駆けて来るニックにカーマインも突っ込んで行った。ガキイツ シーティアはピートと激しい攻防戦を演じている。シーティアの魔法が一瞬にして出来上がり、ブリザードを放とうとするのを、中央の魔法陣をマジックアローで打ち抜いて止め、ピートは両手の刀で斬りつけて来る。

「……チツ！」

シーティアは穂先でひたすらに突き始めた。物凄いスピードで無数に穂先が見える。ズドドドドオツ　が、それらをすべてピートは左手のブロードソードを使っていなし、懐に入ると、右手のブロードソードで斬りつけた。ズバアツ　咄嗟に後方へジャンプして避けたのに血が噴き出しているシーティア。チラツと肩を見る。

「……やるじゃない。私の槍を破るなんて……！」

「得物の差だ。確かに君は強いが、槍つてのは懐に飛び込まれると弱いもんだ。剣ならある程度対応できるが、槍はそうはいかねえ……！　ニツクのような相手なら、ちょうど良かったろうにな……！」

「……フン」

ギインツ　そんな二人の会話を打ち消すように、カーマインとニツクが剣と剣をぶつけ合っていた。ガキイツ　ニツクの剛剣を折れた剣で止める。

馬鹿な……！？　何故、斬れない！？？

玩具同然の青銅剣を見据え、呻くニツク。対するカーマインはニツクと普段の生活ではあまり見せない、戦いになると良く見せる不敵な微笑を浮かべた。

「クソっ……！」

「終わりにしよう」

ガキイツ　クレイモアを青銅剣で流し、カーマインは左足を踏み込んだ。

「ハッ……！」

「ひっさあつ……！」

吸い込まれるように脇差しに折れた鞘が食い込み、次の瞬間にはニツクは天高く舞い上がっていた。両手もちにした剣を右斜め下から左切り上げに放ち、最終的には左手だけで振り切るカーマインの必殺技である。

通常の剣の威力のザツと三倍はある、凄まじい一撃だった。

ドゴオツ　地面に叩きつけられたニツクを見て、ティピが歓声をあげた。

と同時にシーティアも無数の穂先を繰り出す。が、ピートはそれを、見事に捌いて行く。……それにシーティアはクスリと笑った。まるで悪戯をする子供のよう。穂先はどんどん増えていく。ビツ血が噴き、服が裂けるピート。

「悪いケド、槍に関して私の右に出る者はいないわ」

「お……お前、ワザとスピードを落としていたのか!？」

「懐に入れるモンならどうぞ?」

ビュビビビビビビュンツ　ズザアツ　ついにピートは後方へ退がってシーティアの間合いから逃げた。だが、ピートはすぐさま突っ込んできた。ゴオウツ　シーティアは逆の刃で大きく横薙ぎに払った。巨体のゲルをも揺るがせた、シーティアの必殺技である。だが、それさえもピートはかわ躲し、懐に飛び込んだ。

「カ、カーマイン!!」

「問題無い。アイツ、躲せる程度に弱めて払いやがった」

「え?」

ティピの焦りの声に冷静に返すカーマイン。その前ではピートはもらったとばかりに目を見開いた。と、そこでシーティアは美しい笑みを浮かべた。

「楽しかったわ、さようなら」

ズバババババアツ　両者が交差した。一瞬、両者の動きが止まるが、体中から血を噴き出してピートが前のめりに倒れた。シーティアの両手にはグンニグルが中央から分かれて出来た二振りの刀、ランドグリーズが握られていた。

「……ランドグリーズまで使う必要があるとは、苦戦したな」

「そうね。楽に勝たせてくれないわ。でも、あと一勝よ」

「……ああ」「よっしゃあ!　この調子で優勝よ!!」

ティピの明るい声が響いたと同時に双子を称賛する声から拍手と共に降って来た。控室へ帰ろうとしたカーマイン達に後ろから声がかかる。ニツクとピートだ。

「……まさか、もう立てるとは。驚いたよ」

素直に称賛するカーマインにニツクは苦笑いを零す。折れた青銅剣で無かったら、間違はなく死んでいただろう一撃だったからだ。隣ではシーティアとピートが会話をしていた。そして、ピートがこちらに歩いて来て、ブロードソードを一振り、カーマインに差し込んだ。

「？ ……何故、俺に？」

「勝者には勝ち続けて欲しいと言う事と、決勝のゼノスを相手にするなら、いくらなんでもそれは無いだろう？ ちゃんと持って行け！」

「……何て言うか、サンキュ」

青銅剣を捨て、カーマインはピートからもらったブロードソードを腰の剣帯に差した。こうしてカーマインとシーティアは決勝進出を決めた。

16・決勝戦（前編）

ついに決勝戦が始まる……！

カーマインとシーティアは西門で立っていた。東門にはゼノスとラルフがいる。

「……やっぱり、ゼノスの所が勝ち上がって来たわね」

「そうね。……でも、何だか彼、顔色が悪くない？」

シーティアの言うように、ゼノスの顔色は土気色だった。遠目に見ても明らかに体調が悪い。

「……毒か」

カーマインは静かにつぶやいた。その声は誰の耳にも届かなかった。ゼノスが応える。

「気にするな、全力で……！？」

「……」

ズバアツ いきなり、ゼノスを仮面の男、ラルフが斬った。その剣はシエルオープンナーでは無かった。

ガクウツと膝をつくゼノス。恨めしげにラルフを見上げ、つぶやく。

「な……何を……！？ ……あれ？」

しばらくして、ゼノスは疑問の声を上げた。体が斬れておらず、血も出ていない。それどころか血色がどんどん良くなっていく。

「……この剣の銘はメイジスローター。普通では斬れないモノを斬る事が出来る。魔法、封印、……そして、毒だ。反対に人や物を斬る事は全く出来ないナマクラでもある」

そう言っメイジスローターてラルフがビュンツと剣を振ると、元シエルオープンナーの刀に戻った。アイピとシーティアが啞然とした。

「な……剣の形が変わったよ！？」

「何……アレ？」

カーマインはジツとラルフを見つめ、つぶやいた。

「昔、母さんの研究所で読んだ事がある。コマンドメンツ……通常の剣にあらゆる武器の記憶を取り込ませ、使用者の意思で変化させる事のできる武器の事だ」

「……私の槍グニグル ランドグリース……双刀と同じってコト？」

シーティアは自身の槍から変化する双刀の事を問う。カーマインもそれにああ、と返した。

「ただし、アイツの持っているモノは、姿そのものが市販されている剣に変化するようだな。性能も同じようだ……」

「その通り、コレが私の持つリングウエポン、10の変化を持つ者テン・コマンドメンツだ」

初めてラルフの声を聞き、シーティアとティピがバツとカーマインを見た。彼の声が、カーマインそっくりだったのだ……。当人も気付いている。

「……お前は一体……！」

「何でもいーからよ、始めようぜ！！ ゴングはもう鳴ってんだ！！」

そうやってゼノスはベルセルクを腰から抜いた。歓声が鳴り響く。

「カーマイン。とりあえず、今は闘いに専念しなさい」

「……分かった。お前の言う通りだな」「頼んだわよ、二人とも！！」

「私がああの仮面を押さえる！！」

「俺はゼノスだな」

そう言い合うと、二人はそれぞれの相手に走って行った。ゼノスもニイツと笑ってカーマインに突っ込んで来る。闘場の中央で二人の剣はぶつかった。ガアオンツ 凄まじい爆裂音が観客席全体に届く……。すぐさま、剣と剣が激しくぶつかり合う！

ギインギンツ ゼノスの剛剣をカーマインは真つ向から受け、斬り返す！ あまりにも激しい剣の打ち合いに、観客のボルテージは上がり切る。

「コイツ等……！！ 本当にフレッシュユマンなのかよ！？」

「し……信じられねえ……！ 強い……強過ぎる……！」

「……俺達が勝てねえワケだよ」

大会の参加者達は決勝を見ながらそう思う。ガキイツ 一際高い音を立てて、カーマインの刀とゼノスの剛剣がぶつかり合った。

ニツと笑うゼノスにカーマインも微笑した。

「思った通り……やるじゃねえか……！」

「……アンタもな」

カーマインは最初から両手持ちでブロードソードを握っていた。

ソレ程までに、ゼノスは強敵だった。移動のスピードは遅いが、剣の振りならかなり速い。更に鉄の丸太を打ちつけられているかのようにならかった。少しでも気を緩めると、重さで手が痺れて、次の動作を遅らせてしまう程に。

ガインツ 剣を払い、同時にまたしても打ち込み合う。体格差は圧倒的にゼノスが上だった。しかし、カーマインも負けていない。完全に互角に打ち合っている。

「頼もしい限りだな、カーマイン……！」

「……フ、アンタこそ馬鹿力だな」

「ニイツ 又オリヤアアア……！」

「……！」

ブウンツ カーマインを剣ごと後方へ吹っ飛ばした。体格差をいかしたタツクルである。遙か後方に吹っ飛ばされ、着地するカーマイン。そこへゼノスの追撃。しかし、カーマインは剣を左手に持つと、一閃して空を切った。

「 何っ……？ 」

斬閃からマジックアローが飛び出す。ゼノスはそれをサツと横へ避けた。と同時にカーマインの姿が消えた。 縮地法である。

「み、見えねえ！ 消えやがった……！」

ビュンツ カーマインはゼノスの懐に飛び込んだ。思わず後方へ下がるうとするゼノスだが、それよりも早くに一閃される。

ズバアツ 鎧が真つ二つに斬られた。

「……………！」

「やるじゃねえか、俺の見込んだ通りだ。……………だが」

手応えのあつたその剣の一撃は、ゼノスの薄皮を一枚斬つただけで、筋肉を斬る事は敵わなかった……………。

「伊達に鍛えちやいねえんだよ！！ 剣撃は俺には効かねえ！！」

ゴオウツ ソレまでとは比べ物にならない強烈な一撃で今大会、

初めてカーマインがグラついた……………。

「……………グウ」

「オラオラオラア！！」

ギインギインギインツ 何とか防ぎつつ、ズバアツ 一撃を返す。

それはゼノスの胸を斬り裂いたが、またしても分厚い筋肉の前では無意味だった。

「……………言つたらろう？ 効かねえつてよお！！」

ドガアツ 凄まじい剣弾によつてカーマインが後方へ弾き飛ばされた。ズザアツ 何とかして立ち上がるが、その前には既にゼノスがベルセルクを振り被っていた。

「この勝負、もらったあ！！」

「……………！！」

勝利を確信し、ゼノスは剣を振り下ろした。しかし、ゼノスにはカーマインが笑つたように見えた。……………そして、彼の目に青白い斬閃が映つた……………。

次の瞬間、ゼノスとカーマインは交差法で斬り合つていた。ゼノスは上段からの一撃、カーマインは下段からの左切り上げ……………。カーマインが静かにつぶやいた。

「……………さすがのアンタも、コレは耐えられなかったようだな」

ズバアツ 血が噴き出、ゼノスは前のめりに倒れた。カーマインの一閃はゼノスのそれよりもほんの一瞬速かつたのだ。

「やったア！！ カーマインの勝ち！！」

そう言つて浮かれるティピを見ず、カーマインはシーティアの隣に立つた。未だ全く動かない男……………ラルフの前に……………。ラルフは静

かに述べた。

「……回復をしてから来ると良い。それまで私は何もしない」

「ムツカア！ 何だか余裕を見せつけられてるって感じ!!」

「その位のハンデはいるだろう？ カーマイン君の方は見るからにポロポロだからね」

横で喚くティピを見ず、カーマインはシーティアを見た。シーティアは右掌をカーマインにかざし、ヒーリングを唱えた。カーマインの体から傷と失われた体力が戻る。

と同時にシーティアは首飾りを引き千切り、ポケットに入れた。

カアツ 一瞬だけ、彼女の身体が白い光に包まれ、一気に気が跳ね上がる。

「……コレでいいか？」

「ああ……。私はラルフ・ハウエル。カーマイン、シーティア……。君達の手を見せてもらおう……」

カーマインはブロードソードを左手に握り、腰を落として構える。シーティアもグングルを上段に構え、矛先をラルフへと向ける。

ラルフはソレを見て静かに腰のテコンコマンドメントを取り込んだシエルオープンナーを抜いた。右掌に握らせ、棒立ちする。

しばし、三人は睨み合う。トオンツ 先に仕掛けて来たのはラルフだった。地を爪先で軽く蹴るような動作……。なのに 消えた。

「……!!」「カーマイン!!」

ガキイツ ラルフの背後からの横薙ぎをギリギリで止めるカーマイン。ビュオンッ シーティアが間髪入れず、ラルフに斬り上げたツーツ グングルを紙一重で躲すラルフ……。その動きは正しく異形だった……。カーマインもラルフに斬りかかる。

何、コイツ……。!? 見た事も無い体術……。!?

強いだけじゃない、何か……。得体の知れないモノを秘めている!?

フワリと浮くように跳び、トオンツと地面を軽く押すようにして消え、物音も無く着地、移動するラルフ。その圧倒的なスピードと、

ソレらの動きに相反する鋭く速い斬撃。グオアツ シーティアの凄まじい突き、ガキイツ ラルフは何と刀の刃の部分でそれを止めて見せた。

「な!?!」

「そろそろ、私からも攻めて行くか」

そうつぶやくと、ラルフはまたしても消えた。シーティアは縮地法でズザアツ 消える。ガキイツガキイツビュンツ 次に二人が現れたのは、ラルフがグンニグルを止めた所の数十m後方だった……。シーティアは片膝を突き、グンニグルを両手で支えている。ラルフは片手で刀をシーティアに下ろしていく……。刃がシーティアに迫る。

「……グウ……!!」

「……どうした? この程度では私は倒せんと、ファフニール」

ズドオツ ラルフの後方からカーマインがマジックアローを魔法剣で放った。直撃する一瞬間にラルフは振り向き、無造作に脚を一閃させ、ボールのように弾き飛ばした。それは頑強なフェンスを粉々に吹き飛ばした。ドゴオンツ

「なんだと?」

「悪くない攻撃だが……その程度か?」

「!?!」

背後に気配と声を感じ、斬り付ける。ガキイツギンギンツ 両者共に カーマインは力強く地を蹴り、ラルフは爪先で押すようにして、消える。辺りに剣撃の音が響き渡る……。パツと現れては消える二人の闘いに観客は夢でも見ているのかという半信半疑の表情になっていた……。

「コイツは……夢か……?」

「何だか分かんねえケド……凄え……!!」

ドガアツ 炸裂音とともに辺りを猛烈な風が襲う。ビュンツズザアツ 三人は同時に姿を現した。カーマインとシーティアはジツと目の前の仮面を見据える。

「……………!!」「……………ホント、面倒な奴」

「……………あいつが認めるからどれ程のモノかと期待したが……………、見込み違いだったな」

二人の体は全身がボロボロに切り刻まれ、無数の赤い線が入っていた。対するラルフはノーガードの状態で全く息を切らさず、傷一つ負っていない。

「……………アイツ？ 誰のことよ……………!!」

「シュワルゼ……………!!」

シーティアが怪訝そうに問う横で、カーマインが凄まじい形相でラルフを睨んだ。

「……………ほう、分かるのか？」

消えかかっていた“気”が膨れ上がって行く……………!!

余裕の笑みを敢えて口に作りながら、仮面の奥の瞳は鋭く細められる。ビュンツ

ギインツ 凄まじい上段からの一撃を両手で止める。物凄いスピードで片方は激しく地を蹴り、片方は地を押すようにして、互いの影を追いかける。

「やっちゃえ、カーマイン!!」

カーマインとラルフの斬り合いを見て興奮したティピが吼える。

斬閃が空を渡り、火花が生ずる。ガキイツ 互いの剣で受け止めたまま、静止する。

「……………コレが、お前の本気か？」

「……………!!」

ギインツ 後方へとカーマインが吹き飛ばされた。ラルフはジッとそれを見、笑みを再び浮かべた。

「なら、私には勝てない。テンコマンドメンツも使う必要は無いな」

「お前、アイツの……………シュワルゼの仲間か？」

「だとすれば？」

「貴様を殺す」

グオアツ シーティアが思わず後ずさった。それ程迄にカーマイ

ンの気が変化したのだ……。血に飢えた異形の気だった……。全身を白い煙が覆い、その金と蒼銀の瞳は光をまったく反射しないモノに変化する……。

「カーマイン……？ どうしたのよ、あいつ！？ ねえ、シーティア！」

「シュワルゼの名が……カーマインを目覚めさせた？」

凄まじい殺気が闘場全体を包み込む。遠目から見ても尋常でない気をカーマインは放っていた。

ここは、アイツのアレに賭けるしかない、か……

シーティアはジツとカーマインを見据え、ラルフを見る。ラルフはそれに対し、ニツと笑みを深めた。

「成程、今度は楽しそうだな」

ラルフはシエルオープナーを構え直した。ゴオウツ その眼前をカーマインの蹴りが通り過ぎる。首を横にひねって躲したラルフは、すぐさま斬り返した。ギインツ

「なっ!？」

刀の柄の先の点の面に、ラルフの刀は止められていた。ラルフが驚愕の声を上げる。そして、カーマインが消えた。シーティアが驚愕する。

「見えないっ!？ アイツの動き……この私にもっ!！?」

速いだけじゃない

ガキイッドガアツギインツ 凄まじい剣を捌きながらラルフはジツとカーマインを観察している。剣を止めるのは体の感覚に任せ、頭はカーマインの動きを見据えていた。そうしなければ……殺される。

動きも洗練され、パワーも反応も桁違いに上がっている……。まるで

ギインツ ラルフの剣が宙に舞った。ヒュンヒュンツ カツ 地面に突き刺さる。

「まるで化け物……か」

凄まじい気を発して来るカーマインに、ラルフは自嘲気味につぶやいた。手がしびれ、握力がまるで戻らない。たった三撃交わしただけなのに、だ。

「シュワルゼが気にする訳だ。同族でも、お前ほどの奴は見た事が無い。まるで、シュワルゼがもう一人増えたようだな……」

「……無駄口を叩いてないで、貴様も変わって俺と闘え」

「フ」

ラルフは笑うと無造作にシエルオープナーを抜いた。カーマインの瞳が細められる。

「そんな台詞は、」

「あー！ 剣の形が変わった!？」

ティピが言うようにラルフの持つ刀が、鍔の部分が銀製の重厚なモノに変わっている。

「ファイランギ」

「私のテンコマンドメンツを受け切ってからにしてもらおう」

「いいだろう……全てを破り、引きずり出してやる」

「行くぞ」

ラルフの動きが圧倒的に速くなった。今のカーマインにも匹敵する動きだ。

「音速の剣」

ドオンツフォンツ 二人は同時に消え、剣撃を放ち合う。……しかし……

「何だと?」

ギギギギギンツ 圧倒的な手数でカーマインはガードに廻らざるを得なかった……。身体能力が上がった今のカーマインでさえも防ぐのがやっとだったのだ。

「音速の剣 ファイランギ。私の身体能力を上げる。コレがテンコマンドメンツ」

「……確かに速い。だが、」

フォンツ またラルフが擦れ違い様に無数の斬撃を放って来る。

それに対し、カーマインは剣を左手に持って真上から振り下ろした。ズバアツ ギギギギインツ

「!!!」

ドサアツ 後方に吹き飛んだのは、ラルフだった。

「その剣はスピード重視の為に、パワーが落ちる。軽い剣等、役に立たない」

フィランギは半ばから折られていた。スピード重視のつけは、強度にもあるのか……。

「そんなモノか、ラルフ」

ドオンツ 更に攻撃を仕掛けてくるカーマイン。と、ラルフは何を思ったか折れた剣先を握り、柄を握って二刀流に構えた。

「カーマイン、私も言ったハズだ。この剣は……折れない武器だと」
「!!!」

次の瞬間、ラルフの両手に雷を放つ刀と冷気を放つ刀が生まれていた。

「双刀の剣」

ギインギインツ 二刀流を苦も無く捌くさばカーマイン。ラルフは自ら後方へ退がり、雷の剣 雷鳴剣を頭上に掲げた。

「ライトニング!!!」

ズドオツ「!!!」 雷が天から落ち、カーマインに直撃した。が、カーマインはソレを斬り、ズバアツ 剣閃と共に魔法剣として放った。ラルフがつぶやく。

「サンダーアロー……か!」

一直線に雷光はラルフへと向かう。ソレにラルフはニヤリと笑った。氷の剣、アイスブレードを一閃する。一瞬にして、氷の壁が出来上がった。

「アイスウォール!!!」

ガガアツ バリバリツ 雷は氷に吸収され、雷撃を帯びた氷塊へと成った。

「デュアル魔法を使えば、こんな事も出来る……ブリザードスパイ

クー！」

二振りの剣を払うと、雷と冷気と氷弾がカーマインの立っている位置を中心に踊り狂う。

「カーマイン！！」「サンダーとブリザードを合わせた！？」

「……そう、コレが同時詠唱……デュアル魔法だ。最も、私は魔剣の力を借りて出来るだけだが……。シーティア、君ならできるだろう？」

「……そうね。でも、何故私に教える？」

「……………」

ラルフは静かに笑った。ラルフの創った氷と雷のフィールドが苦も無く、ズバアツ 真つ二つに一閃された……。

「……なんだと、アレを斬った？」

驚愕するラルフの見つめる先には、レギンレイヴを握ったカーマインが居た。ブロードソードは鞘に戻し、地面に突き立てている。

替わりに剣帯にはレギンレイヴの鞘が差されていた。

「……俺のレギンレイヴは、俺が斬ろうとしたモノは容赦なく斬り捨てる。例外は……無い」

「……………チツ」

ラルフは両手の剣を合わせ、一振りに戻した。その刀はまた、別のモノであった。

「闇の剣」

ドオンツ カーマインが近づいて来るタイミングに合わせ、影がカーマインに纏わりついた。ガシツガシツ カーマインの四肢を影の触手が捕らえる。

「……何よ、あの剣！ 反則じゃないのー！！」

「妖魔刀……。あんなモンまで合成されてるなんて……！！」

ティピが喚き、シーティアが舌打ちする。ラルフが剣を振り下ろした。

「終わりだ！」

「そうか？」

ズドオアツ カーマインは気で影を吹き飛ばし、ギインツ 目にも止まらぬ一閃を放った。ラルフは遙か後方へ吹き飛ばされた。

「グハアツ!!」

背中から叩きつけられ、ラルフが血を吐く……。カーマインは静かに歩み寄る。ラルフの刀がまた変わった。

「今度の剣は光の剣……光の魔剣だ!!」

「何でも同じ事だ」

「そうかな？」

ズドオツ 淡い緑の光の線が剣閃から放たれた。魔剣故に、魔法剣を使う事など造作も無い……。ホーリーライトだった……! カーマインもズドオツ とマジックアローを放つ。青と緑の光の矢が中央でぶつかり、爆発した。

ホーリーライトで、互角とはな……!!

閃光が煌き、ラルフの姿を隠す。

「フン、この程度……目隠しにすらならない」

「一瞬でも、お前に近づければいいのさ」

ラルフの刀がまた、変わっていた。グラムと呼ばれる魔剣だった。ゴオウツ 一閃される。

「コレで、九つ目。見事だったぞ、カーマイン」

アレは伝説の魔剣グラム……!! なら……

「逃げなさい、カーマイン!!」

カーマインは真つ向からレギンレイヴを叩き付けた。……が……、
「なっ!?!」

「私の 勝ちだ」

ラルフは苦も無く、剣を振り下ろした。地面に突き立った時、その衝撃で大地が、ドゴオアツ 大きく割れた……。

「……ハアツ……ハアツ……」

ラルフはしかし、肩で息をしていた。

「コレが……地の剣だ」

ティピが唾然としながら、ラルフを見つめる。

「……魔剣グラム。その重さ故に並の者では持つ事さえ敵わない名刀……。威力は、今見た所ね……」

「……カーマイン、カーマインはっ!!!?」

土煙が晴れて来た時、ラルフは驚愕した。そこに居る筈の無いモノがいたからだ。左手にレギンレイヴを持って……、カーマインは立っていた。

「カーマイン!!」 「……フウ」

ティピが歓声を、シーティアが息を吐いた。

「……まさか、アレをギリギリでかわ躲したというのか!?!」

「ああ……。ギリギリだったかな」

口の端をつり上げ、カーマインは答えた。スッとレギンレイヴをラルフに向ける。

「……さあ、追い詰めたぜ」

17・決勝戦（後編）

「……………」
次の瞬間、ラルフから白い煙が噴き上がる。そして、刀もそれに合わせるように変化した。レギンレイヴに似た造りだが、鐔の装飾と鯉口の所に青い宝石が嵌められている。留め金も刀の腹をなぞるように造られていた……………」

「コレから見せるのが……………炎の剣……………レヴァンティン。お前の……………レギンレイヴと同じ代物だ……………」

「……………面白い。ようやくマジってコトか」

ラルフの宣言に、カーマインが不敵に笑い、ティピが吼える。

「そんなにハツタリ聞いちゃダメよ！！　今のアンタ、間違いなくバケモンなんだから！！」

「……………ソレはホメてんのか、ケナしてんのか？」

微妙な表情のカーマインにティピは正面から言い放った。

「素直な感想よ！！」

「……………そうか」

力強く言い切られ、カーマインは「フウ」と吐息して、ラルフを見る。ゴオウツ　レヴァンティンの刀身に炎が纏わりついた……………」

「　行くぞ」

「来い」

異形の二匹は淡々と宣言する。トオンツ　ビユンツ　二人は同時に異なる動作で地を蹴り、消えた。カーマインの移動している所には土がせり上がるが、ラルフの方はまるで何も起こらない。ソコにいないのでは無いかと思える程に。ギインギガガガアンツ　無数の斬閃が空に描かれ、二つの力が衝突する。ズザアツ　カーマインが遠方に現れた。ラルフも同時にスウツと現れ、カーマインに向かって炎を放った。ファイアーボールは剣閃から生み出され、一直線の炎の矢へと変化した。

「フレアアタック」

「……フ」

ズバアツ 一閃、刀を鞘に戻し、抜刀させ自らを焼く炎を真つ二つにした。

「……その技はシュワルゼに見せてもらった」

「一度見た技は効かない……か？」

「……ああ！」

ズドオツ 今度はカーマインの魔法剣。マジックアローがラルフに迫る……。ソレにラルフはニヤリと笑って剣を水平に構えた。

ズガアツ 次の瞬間、雷がラルフの周りに降り、魔法の矢を防いだ……。

「ライトニング」

「……その魔法は、そんな風にも使えるのか」

「……そして……！」

ザツ 刀を両手で持ち、大きく振り被り、語り出した。

「この勝負、剣技ではお前。体術では私。スピードは互角だった……。

だが、最後の一つで勝敗は決する……！ サンダーフレア……！」

炎の矢は雷を吸収し、強力な光線へと化した。カーマインは左手の剣を盾にし、右手を峰に副そえた。ドゴオアツ ラルフの放った光をまともに受け止める……。

「……グ……ウ……！！！」

なんとか受け止めるカーマインに淡々とラルフは告げる。

「魔法剣の種類だ。私は魔剣、テンコマンドメンツ、デュアル魔法の三つから無限に近い。対してお前のソレはマジックアローのみだ」
更に強烈な一閃。放つ光が一気に膨れ上がる。

「グアアアア……！！！！！」

ズドオアツ 受け切れず、光が爆発し、カーマインを悲鳴ごと飲み込んだ……。

「……終わったか……。……うん？」

ラルフが静かに、空を一閃し立ち上る煙を見据える。するとその

傍らから凄まじい殺気が叩きつけられてきた。

「アンタ……！！！」

シーティアの瞳に凄まじい怒りが生まれていた。金と銀の双眸は美しく煌いている。

「……許さない！！！」

ドオンツ シーティアが縮地法で消える。ギインツ だが、シーティアの一撃は軽く止められている。今のラルフは、カーマインと同じ異形だった。

「くっ！！！」

「フ」

軽く手を触れただけで、シーティアは後方へ弾き飛ばされた。と同時に、二つの魔法陣を描いている。片手はファイアーボール、もう片手はトルネード……。

「吹き飛ば、レッドトルネード！！！」

炎の竜巻がラルフを襲う。しかし、ソレを苦も無くラルフは消えて^{かわ}躲す。

どうせ、見切れないなら……！！

スツと目を閉じるシーティア。力も抜き、諦めたようにすら見える。ティピが焦ったかのように声を上げる。

「ちよつと！ シーティア！？」

フォンツ ラルフがシーティアの左から剣を振って来た。ピタアツ と刃が止まる。首の付け根にグンニグルの刃が突きつけられていた。パチツと目を開けるシーティア。

「捉えたわよ、その動き」

「……！！！」

ドゴオアツ 凄まじい音と共にラルフは吹き飛ばされ、コロシァムの堀に激突した。シーティア必殺の横薙ぎである。スツと構えを解き、カシィツ グンニグルを中央から二つに分け、右手と左手に握る。ス……ッ すると、光の粒子となって二本の槍は二振りの刀へと化けた。

「……ランドグリーズ……！ シーティア、まだ終わってないの？」
「ええ……。ウンザリするケドね」

不安そうなティピに応え、ジツと前を見据える。するとラルフが煙の中から平然と歩いて来た……。

「二刀流……。ソツチが本気か？」

「さあね、試してみたら？」

ラルフは正眼に構え、レヴァンティンに炎を宿した。シーティアも二刀流の構えを取る。トオンツ ガキイツ 消え、現れた時、ラルフはシーティアの眼前にいた。ソレに対し、シーティアは左刀を振るった。レヴァンティンで止める。

「……無駄だ。私には勝てない」

「……………」

トオンツ ラルフが消える。シーティアもソレを追って消えた。
ギインツギインツ 辺りに剣撃の音が鳴り響く。

しかし……ズザアツ

「……クツ……！」

バツ シーティアは肩から血を吹いて仰け反った姿勢で現れた。

「その二刀で無ければ、ここまで私と闘えなかつたろう……。人の身でそこまで極めた君に敬意を表す……。だが、ここまでだ」

「……やって見なけりや分からないわ」

ラルフは雷と炎を剣に纏わせる。ソレを見て、シーティアも双刀に淡い緑の光を纏わせた。ラルフが剣を振るった。ソレはサンダーフレアとなつてシーティアに迫る。

「これで……サヨナラだ……！」

「アンタがね、ホーリークロス……！」

と、シーティアも二刀をソレゾレ横薙ぎと唐竹に振り、十字を削つて、二つのホーリーライトを合わせた光線を放った。雷炎と聖光が激しくぶつかり合い、爆発した。

「……キヤアア……！！」「シーティア……！」

爆発を浴びて、シーティアが後方に吹き飛ばされた。しかし、同

じ衝撃を喰らったラルフの方は全く効いていない……。無傷のまま素立ちしていた。

「……私のサンダーフレアと互角とは……！ とんでもないな」

「ク……ソ……！ 私は……負ける訳には……行かない……！！」

ラルフに向かい立ち上がるうとするシーティアの前に、立つ者が居た。ティピが歓声を上げる。

「カーマイン！！」

「……アンタ、やっとこ目が覚めたの？」

憎まれ口を叩くシーティアに振り返り、カーマインはその異形の力を張らせた気でヒーリングを唱えた。

「……どうだ？」

「うん、少しは……マシ」

「……後は俺に任せろ」

言うと同時に、カーマインはラルフに向かって行った。ラルフもカーマインを迎え撃つ。ドガアツ 互いの剣がまたしても激突した。二人の気が辺りに飛び散る。

「……貴様は許さん」

「ならば、私を倒してみろ！！」

ガキイツ 上段からの一撃をラルフは止める。ギインツギインツ すぐさまカーマインは追撃を仕掛ける。左手一本で苦も無くレギンレイヴを袈裟斬り、横薙ぎ、右斬り上げ、蹴打へと繋げて行く。ラルフはソレをことごとく受け流していた。ティピが絶叫する。

「……なんてヤツなの！？ あのカーマインの攻撃を捌さばくなんて！！」

しかし、内心ではラルフもカーマインの攻めに称賛を贈っていた。

いや、素晴らしい攻撃だ。だが、カーマイン……私はお前に言ったな……。剣技と体術で……我々は互角だが、一つ私が優れるモノがある と！

ズバババアツ 「……グツ!?」 カーマインの十字斬が、ラルフのガード 受け太刀をついに斬り裂いた。思わず、ラルフは後

方へ退がる……。

「コレで終わりだ!!」

ズドオツ 後方へ退がったラルフにカーマインは魔法剣を放った。光の矢はラルフに向かう。ラルフは先程と同じようにライトニングで壁を作り、光の矢を弾き落とす。そして剣先に炎をまとわせた。

「……さらばだ!」

ズドオアツ サンダーフレアが放たれた。カーマインに返す術は無い。……だが、

「……フウ……!」

左掌のレギンレイヴにグローシュが集まり、青白い光が生じる。剣が青白く輝いていた……。カーマインはその血に飢えた狂気の瞳をラルフに向ける。

「マジックアローじゃない!?!」

ラルフがその圧倒的な魔力の輝きに気付く。

「コレで……決める。ソウルフォース」

ズドオアツ カーマインの剣閃から、全てを吹き飛ばす光の槍が放たれた。ガオンツ 「な!?!」 ラルフのサンダーフレアをアツサリと打ち砕き、ズドオウツ ラルフへと向かう。

「チイツ!!」

舌打ちし、ラルフはメイジスローター対魔法用の剣に自身の刀を変化させ、眼前のモノを斬った。ズバアツ ……だが、メイジスローターをもつとしても完全には切り裂けず、ラルフは光に飲み込まれていった。

グオアツ 大爆発が起こり、コロセウムの半分ほどを衝撃波が襲う……。

「やったあ!! いくらアイツでも、アレを喰らったら一たまりも……!!」

「いいえ……まだみたい」

土煙の向こうにはラルフが立っていた。ただし、ボロボロの姿で……。仮面が取れ、素顔が明らかになっている。ティピが絶叫し、シーティアは慄然とした。

「ええ！？ アイツ、アンタ達と同じ顔……！！！」

「……どうなってんのよ、全く」

カーマインとラルフは何も言わず、異形の力を放ちながら睨み合う。シュオウツ 先に元に戻ったのはラルフだった。

「……どういうつもりだ？」

カーマインは静かに問いかける。ラルフはソレに答えず、ゼノスを担ぎ上げ、言った。

「お前とは、まだ決着をつけるべきじゃない。そう思った」

「……何だと？」

ラルフはカーマインに振り返り、優しく微笑した。

「私とお前が闘う意味は、お前が決める。自分が何者なのかを理解した上で……な。私やシュワルゼのように……」

「……何を言っている？」

「サラバだ」

トオンツ ラルフはソレだけで姿を消した。この為、優勝者は決まった。

『勝者、ローザリアチーム！！ 見事大本命のゼノスチームを破り、優勝です！！ 今年のフレッシュユマンのレベルは圧倒的に高かった！！ 有難う、ローザリアチーム！！ 有難うゼノスチーム！！ 感動を有難う！！』

カーマインは力を収め、レギンレイヴをリングに戻すと、ブロードソードを腰に差した。シーティアもランドグリーズをリングに戻す。二人の下へ司会者がやって来た。

「素晴らしい試合を有難う。優勝者にはバーンシュタイン王子、リシャール様よりコムスプリングス旅行券が贈られる。行って来なさい」

「……ああ」「アリガト」

二人は玉座に座るリシャールの下へ歩いて行った。その顔を見て、シーティアの目つきが変わる。カーマインも瞳を鋭くした。二人の視線を受け、リシャールは微笑んで見せた。ただし、カーマインに

意識を向けて……。

「おめでとう、優勝は君達だと思っていたよ」

「え？」とカーマインの肩のティピがキョトンとする。リシャールはソレを気にせず、続ける。

「コムスプリングスは良い所だ。ゆっくり疲れを癒してくれたまえ」

「……心遣い、感謝する」「リシャルル殿下もお元気で」

カーマインとシーティアがそう答えると、リシャルルは「おや？」という年相応の顔をし、それから元の威厳ある笑みを浮かべ、去って行った。

「ねえ、……エリオットじゃないわよね？」

「……ああ、顔は似ているが、……気が違う」

言い合う双子にティピも小首を傾げる。

「気がどうってのは分かんないけど、エリオットってあんな感じだったっけ……？」

「……別人だろう……。ただ、気になるが」

三人はそう言い合いながら闘場を後にした。

ゼノスを医務室へと運んだラルフは、新しい仮面を懐から取り出し、顔に着けた……。その口は嬉しそうに笑っている。

「……まさか、本気になった私と対等に立ち会うとは……カーマイン、か……。確かに、アイツならあの化物を倒す切り札になるかも知れない……。……だが、もう一人……」

笑みを引つ込め、思案する。

「……彼女は何者だ？……我々と……どこが違う……。現に私とカーマインが成っても……彼女は変身しなかった……。力に引きずられなかった……」

だが、完全に違うモノでも無いようだ……。……そして、あの魔力……。……まるで……

「……まるで、グローシアンだ。しかし……我々とグローシアンは

相反するモノのハズ……。あの化け物が創り出す事は……無理だ。

……なら……彼女の正体は……？」

スツとラルフはシーティアに入れられた一撃を思い出した。

「……まさか、彼女が……！！」

ラルフは何かを思いつくと、医務室を後にした……。しばらくして、ゼノスが目を開けた。

「ん？ ……ここは……！！ ……ハッ！！」

バツと体を起こしたが、体中が痛くて苦闘する。

「……俺は……負けたのか？」

カーマインの一閃を思い出し、ゼノスは肩を落とした。その前に、金髪のウェーブのかかった男が現れた。

「……失礼だが、ゼノス・ラングレー君かな？」

「そうだが、アンタは？」

「何、君の妹さんの治療代を払おうというモノだ」

「！？ 何だつて……！！」

男はスツとゼノスと同じ目線に腰を屈め、ニヤリと笑った。

「私は……ガムラン。バーンシュタインの騎士だ。君をスカウトに来た」

「……俺……を？」

ゼノスはガムランをジッと見上げていた……。

「テメエ、何者だ？ あの化物を捜しているようだが……、俺と同族か？」

「一緒にするな……、人形風情」

男……シュワルゼはその言葉を聞いてニヤリと笑った。

「テメエもその人形だろう？」

「……私と一緒にするな。私は 人間だ」

「……人間？ ……下らねえ。自らを弱者にするなど、愚者の行い

だ

そう答えたシュワルゼに、男は静かに腰の剣を抜いた。シュワルゼも腰の剣を抜いた。

「何の用で、あの化物を捜しているのか知らんが、奴は俺の獲物だ。手出しはさせん」

「……？ 奴はお前の創造主だろう？」

「ソレがどうした？ 俺は自分こそが最強と信じている。俺の王は、俺一人だ」

「……」

ドオンツ 縮地法を使っ ていきなりシュワルゼは斬りかかった。

男のローブが切れる……。男は静かにつぶやいた。

「……避けたと思っ たが……」

「真っ二つにするつもりだっ たんだがな」

男は仮面を捨て、シュワルゼと同じ顔と瞳を晒した。

「……フン、久しぶりに楽しめそうだ……！」

「何が楽しい？ ……殺し合いが？」

クールに問うて来る男に、シュワルゼは益々楽しそうにする。己の意思を持つ同族と話すのは初めてだった。……だからなのか、自分と同じにして異なる存在との邂逅がシュワルゼを興奮させていた。「殺し合う……？ そんなつもりは無え……！ 俺はただ、俺とテメエ……どちらが強えのか知りたいだけだ」

ドオンツ またしても一気に距離を詰め、斬りかかる。ガキィツ

トオンツ ビュツ 二人は異なる動きで消え、無数に切り結び合う。火花が散り、地面が切り裂かれる。男の剣はシュワルゼのソレよりも二回り細く、反っていて片刃だった。……刀とか言うらしい。

ガカツ 剣と剣がぶつかり合い、静止する。「！！」 シュワルゼの周りを影が取り囲もうとする。ソレを見、ニヤリと邪悪に笑い、剣を横薙ぎに払った。影を無造作に斬り、男にもそのまま斬りかかる……。が、男はソレを空で回転して躲かわし、上段から右手で斬りお

ろしてきた。ガツ 同じく片手で止めるシュワルゼ。トオンツ その右手首に触れるようにして、男は宙に浮き、妖麗な動きで蹴りを放った。爪先が軽くついたただけだというのに、シュワルゼは遙か後方へ吹き飛ばされる。ドオンツ タツ しかし、彼は見事に着地した。トオンツ その前に男は静かに着地する。

「……面白いな……！ 今まで見た事もねえ体術だ……！ 斬撃は同じなのにな……！！」

「私の体術はヤツを倒す為に編み出した自己流だからな
興奮するシュワルゼとは対照的に冷静な男。

「益々面白い……。……じゃあ、どっちが奴を殺せるか、決めようぜー！！」

「勝つのは……私だ」

「ほざけー！！」

ゴオツ 男の刀がまたしても変化し、炎をまとった。ギインツ まともに剣がぶつかり合い、ヒュンヒュンツ カツ あっさりとシュワルゼの剣は半ばから断たれた。

「クク、面白い……！！」

「……………」

チャキ、男は静かに剣をシュワルゼの喉元に突きつける。

「……どうした、勝負はコレからだぜ……！！」

「……………」

シュワルゼの身体から白い煙が噴き始めた。が、男はソレを見て、剣を納めた。キインツ

「どういうつもりだ？」

シュンツ 男はシュワルゼに何かを投げた。パシィツ 受け取って見ると、ソレは黄金の指輪だった。

「……どうやら、お前は私が倒す相手では無いようだ」

「何だと？ めっ！？」

カアツ 光がシュワルゼを包み込む。リングから放たれた黄金の光だった。

「…………コイツは…………!!」

光の粒子はやがて一つの形をとり、具現化した。それはシュワルゼの身の丈をも超える長い刀だった。

「…………コイツは…………手になじむ…………なんだ？」

「私と決着をつけたいのなら、ソイツをやるう。その上で私と闘うかを決める。さらばだ」

「決めるまでも無え!!」

ゴオウツ 男に向かって剛刀を振り下ろす。が、既に男はいなかった。声だけが辺りに響き渡る。

「…………その剣の銘はレギンスローター。また会おう…………シュワルゼ」
「待て、…………テメエの名は？」

この場から去ろうとする男を追おうとせず、シュワルゼは静かに名を問いかける。

「…………ラルフ・ハウエル」

「ラルフよ、この次に会った時は…………このシュワルゼ・ロードがテメエの首をもらう。覚えておけ」

気配の消えた男…………ラルフに対し、シュワルゼはニッと笑った。

スツと目を開けた時、花畑があった。シュワルゼは仰向けに寝そべった姿勢のまま、静かにそれを見すえつぶやく。

「…………ラルフ、そしてカーマイン…………か…………面白え…………!!」

シュワルゼはラシエルの花畑で邪悪な笑みを浮かべ、天を睨みつけるのだった。

18・エキシビジョンマッチ

「えきしびじょんまっち？」

ティピが闘技場の衛兵にそう問いかけた。優勝券ももらったので去ろうとしたら、衛兵に呼び止められたのだ。

「……ソレってさ、エキスパートの優勝者とやり合えってコト？」

「そう言う事になる。勝てなくて当たり前なんだ。いい経験になると思うよ」

「……フーン」「……」

シーティアとカーマインは静かに向こう側の入口を見た。ソコに一人の剣士が現れる。ゆるやかなウェーブを描く銀色の髪を腰まで伸ばし、赤いリボンでまとめている剣士、ジュリアンを。

「へえ……」「……ほう」「ゲ！？ ジュリアン！！」

シーティア、カーマインは淡泊な、ティピは仰天したように相手の名を呼んだ。

女性のように白く透き通った肌の、ひよる長い青年は、フツと口許を緩めた。

「久しぶりだな。お前達がフレッシュマンの優勝者とはな。お前達との闘いは楽しくなりそうだな……」

「あの……さ、加減してよ！ ね、シーティア」「そうね、適当にやらない？」

ティピとシーティアがジュリアンに言うと、彼は首を横に振った。「エキシビジョンだとは言え、私は容赦しない……。覚悟するんだな」

「あ……っそ！」「……ジュリアン」

肩をすくめるシーティアの隣で、カーマインは静かにジュリアンを見つめた。

「？」

「倒してもいいんだよな？」

「 やってみる 」

不敵に笑うカーマインに、ジュリアンも笑って言い返した。カーマインはブロードソード、シーティアはランドグリーズを抜く。ジュリアンも背負った長刀を抜いた。

「 我がダグラス家の家宝……ギンナルを受けて見よ！！ 」

「 ……遠慮はしない 」 「 思っ切りやってあげる 」 「 二人とも、行っけえ〜！！ 」

カーンツ 試合開始のゴングが鳴り、エキシビジョンマッチが始まった。

「 どっちから行く？ 」

「 決めようぜ…… 」

双子はそう言い合うと同時に手を突き出した。 「 ジャンケンポン！！ 」 「 カーマインがチョキ、シーティアがグーであった。

「 よし！ 私から〜！！ 」

「 ちえっ 」

シーティアは無邪気に喜び、カーマインは憚然として背を向ける。その様を見て、ジュリアンは呆れたような表情をしていた。

「 一対一でやるつもりか？ フレッシュマンとエキスパートの血がいを知らんらしいな 」

ビュビュンツと空を裂き、シーティアは二振りの剣……ランドグリーズを構える。

「 首飾りは外してあるのか？ 」

「 勿論…… 私も遠慮はしないわよ 」

「 良いだろう、来いっ！！ 」

ドオンツ 地を蹴り、猛スピードでシーティアは斬りかかった。上段からの右刀をジュリアンは左に見切り、長刀を抜刀して斬り返す。シーティアはソレを左刀で止め、キンツ、受け流すと、右刀で突きを放った。ビュンツ ジュリアンが間一髪、シーティアの頭上を取り、落下と同時に長刀を振り下ろして来た。ガキイツ 双刀をクロスさせ、シーティアはソレを止める。

「……やるな、ここまでやるとは」

「貴方もね！」

ビュビュンツ 二人は同時に剣を繰り出し合う。シーティアの双刀とジュリアンの長刀が激しく火花を散らし合う。シュオンツ「……！」 突如、シーティアの姿が消える。ジュリアンは咄嗟に左に跳んだ。ヒュバアツ 一瞬後、右手に持たれた刀が突きを放っていた。ジュリアンの横を通過する。即座にカウンターを仕掛けるジュリアン。ガキイツ 左刀で止められる。互いにニツと笑い合い、シーティアは縮地法にて消える。ジュリアンは自身も高速で駆けながら、シーティアと刃を交え合う。

「……なるほど、少しは出来るな。なら……私も少し本気を出そう」
パチンツ 鞘に刀を納刀し、柄に手をかけるジュリアン。ソレにシーティアが縮地法で斬りかかる。

「……！！」
咄嗟にシーティアはバックステップしていた。目の前を風が通り過ぎる……。

見えなかった……！？

ズバアツ 疑問と共に胸から血が噴き出た。ガクウツと片膝をつく。

「ほう……その程度の傷とは……。エキスパート部門でもいい線行くかも知れんな」

パチンツ ジュリアンは横薙ぎに払った長刀を再び鞘に納めた。

「カーマイン、アンタ……今の見えた？」

「……」

ティピの言葉に、カーマインは黙ってジュリアンを見つめた。その頬には冷や汗が流れている。

「シーティア、お前は確かに速い。だが、気配を察し、先の先を取る最速の剣があれば、お前のスピードは驚異にはならん」

「……言ってくれるわね。じゃあ……次、行くわよ」

ビュンツ 更にスピードを上げるシーティア。ジュリアンもソレ

を追うように駆けだした。剣が宙で無数に激突し、火花を散らして行く。パツ　ツツ　ザツ　だが、双刀ランドグリーズをもってしても、ジュリアンの攻撃を捌くので手一杯だった。ズザアツ　無数の赤い線を体に刻んで、シーティアは動きを止めた。

「……やるわね。ならー!!」
「……!!」

縮地法を今一度使い、シーティアは交差法でジュリアンに斬り付けた。ズバアツとジュリアンはいつの間にか納刀していたギンナルを抜刀し、斬り返して来た。両者の剣閃が空を斬った。ズバアツ

「クツー!!」

シーティアの胸が大きく裂かれ、片膝をついた。ドオンツ　とどめとばかりにジュリアンが剣を振り下ろして来た。

「シーティアー!!」

タイプが絶叫する。ビュオンツ　剣は空を斬った。シーティアはジュリアンの背後に立っていた……。シュルルツ　双刀の柄を合わせ、黄金の粒子に変える。粒子は剛槍グンニグルへと変化した。

ん？　……何か……違う？

この時、ジュリアンは目の前の女性が、別のモノに成っている事に気付いた。アレほど大きく裂けた傷が、今は見る影も無い。

「……なんだ、この気は……!!？」

シュウオオツ　全身を白い煙に覆われ、シーティアは静かに槍を構えた。

「さっきのカーマイン達と同じ!？」

「……いや、確かに似ているが」

シーティアの背中からグローシユの光の翼が現れた。バサアツ　翼を広げ、シーティアは瞳を開けた。カーマインと同じ、闇を彩られながら……刃の煌きを秘めた瞳を。

「……何が……違う？　グローシアンと異形の力を同時に放っているのか？　……シーティア」

ビュオンツ　圧倒的な力を放っているシーティアが消えた。ジュ

リアンはソレに反応し、ギンナルで斬り付ける。ギインツ 高い音はグンニグルによって止められた音だった。

「お……お前は一体？」

「……私か？ ……私は全てを滅ぼす者……。お前は敵だ」

軽く払われた一撃で、ジュリアンは後方に吹き飛んだ。ドサアツ 地面に叩きつけられる所を見事にカーマインが止める。

「大丈夫か？」

「あ……ああ。……だが、シーティアはどうしたんだ？」

カーマインはジュリアンの前に立つと、ティピをジュリアンに預けた。そしてブロードソードを構える。

「分からない。だが……俺が、止める。アイツも俺も……世界全てに興味など無い！！」

ドオンツ カーマインは瞬時に、シーティアは駆けて行った。

「一人では無理だ！！」「そうよ、今のアイツはさっきのアンタじやない！！」

カーマインはそんな二人の言葉を無視し、シーティアの前に立った。

「……何だか知らんが、随分と無様な姿だな。俺の姉なら少しは抵抗しろよ」

「私に弟などいない。私は常に独りだ。お前も……殺す」

シュオンツ 空気が弾け、シーティアが消えた。と同時にカーマインも縮地法で消える。ギキンツ 一瞬後、剣と槍がぶつかり合い、一方的にカーマインが吹っ飛ばされた。「……クッ！！」ブロードソードを地面に突き刺し、後方へ吹っ飛ばすのを防ぐ。

「……吹き飛ばす」

何の感慨も無く突きだされた手の平に魔法の矢が生まれ、放たれた。ズドドドドオツ それも五発。急いで避けるが、光弾は空気を穿ち、射抜く。

通常のマジックアローなら一つの光球から一線の矢、もしくは多数の光弾が生じる。しかし、シーティアのソレは五つの光球を生み

だし、そこから多数の光弾がそれぞれ放たれた。魔力もそうだが、ソレを制御する術を彼女は成している。およそ、人外の技を。

何とかして、かいくぐり、地面に伏せて、やり過ごしたカーマインの目の前に、グンニグルが振り下ろされる。ガキィッ 剣でソレを受け止める。

「……無駄な事を」

「お前こそ、何だその無様な姿は？」

シーティアはただカーマインを見つめる。カーマインもジッとシーティアを見る。

「力に飲み込まれるのか？ クソくらえな予言通りになるのか？ 全てを滅ぼす闇？ 救う光？ そんなモノ、俺達には関係ない。俺は自分にとって大切なモノを守る為にここにいる。お前は違うのか」
ギィンッ 剣でグンニグルを斬り払い、蹴打で弾き飛ばした。フワリッ しかし翼を広げ、あつさりと着地するシーティア。そんな姉へ、カーマインは静かに剣を構えた。

「……だとすれば、俺はアンタに失望するよ。シーティア姉さん」
ピクッ 微かにシーティアの右手が震えた。が、それだけだ。ピュオンッ またしても翼を広げ、シーティアは消えた。カーマインも地を蹴り、消える。カーマインの頭の中はその感覚の全てを戦いへと集中していた。ティピもジュリアンも、観客席にいるルイセ達も全て意識の外にある。頭が真っ白になり、ただ……ただ、相手に集中する。戦いに集中する。ソレが……カーマインだった。

異形と化したシーティアの刃を、カーマインは全て見切り始めた。圧倒的なスピードとパワーの差があるのに、カーマインは見切っていた。カーマインの動きが少しずつ速く、洗練されていく。キィンッキィンッ 戦えば戦う程にカーマインの動きに無駄が無くなって行く。まるで、真綿に水を浸すように。

「……なんて……奴だ……！」

「……コレが……？」

ジュリアンとウォレスの二人は、その重大さを感じ、冷や汗を流

す。いつもは騒々しいティピも、ジツとカーマインを見ていた。美しくも恐ろしい光の翼の異形では無く、全ての人間は、ソレと闘うカーマイン一人に魅せられていた。二人は神速で移動しながら剣と槍をぶつけ合っている。風がもつと唸っていいだろくに、二人の周囲はひどく静かだった。

ティピは素直にカーマインが……剣を振るう姿が美しいと思った。ソコにあるのは完成されて尚、進化する何か、だった。何なのかはよく分からない。だけど、シーティアのグンニグルにぶつける青い斬閃が一つ二つと走る度に、胸を打つモノを感じた。ガキィッ シーティアの一撃をカーマインは両手持ちで受ける。

「……どうした？　いつものお前なら、もつと強い」
「何だと？」

「今のお前は自分の力に飲み込まれた三流……ソレ以下だ。俺が決着をつけたいのはお前じゃない。……目覚める、そして……俺を見る……俺と闘え、シーティア……」

「……！！」
シーティアは巨大ゲルを揺らめかせた必殺の横薙ぎを放って来た。ソレを見、カーマインは鞘に納刀する。

そして　ブロードソードを抜刀した。交差法気味に斬り合い、そのまま擦れ違つて、ピタアツと止まる二人。ズバアツ　シーティアの肩から血が出る。

「……アレは私の抜刀術……！　私の抜刀を……真似たのか？」
ジュリアンはそう言うが、カーマインは元々抜刀術の使い手だった。ただ、ジュリアンの一部の無駄もないフォームを頭に焼きつけ、神速の抜刀術を己のモノとしたのだった。

互いに横薙ぎに払った姿勢で止まり、ゆっくりと振り向き、構え合う。

「……フン、強くなったじゃないか。あの根性無しが」
「……久しぶりに聞いたな、その口調」^{セリフ}

シーティアの口端にはティピが見た事も無い、鋭く厳しい……し

かし、慈愛に満ちた笑顔が生まれていた。いつの間にか、シーティアを覆っていた白い煙も、黄金の翼も消えている。

「……さて……続きを始めるか、カーマイン」

「望むところだ、シーティア」

ジュリアンをそっちのけで武器を構え合う二人に「ティピちゃんキツククロス」が決まった。うづくまる二人にジュリアンが改めて剣を構えて来た。

「本当に面白い奴等だな。……しかし、エキシビジョンは終わっていない。二人同時にかかって来い」

「……とりあえず、勝敗をハッキリさせないと終わらないわね」

いつも通りの口調にシーティアは戻っている。カーマインもフーッと息を吐き、構える。

「では……行くぞ!!」

「……!」

ガキイツ 剣と剣が激しくぶつかり合う。カーマインが驚いた表情で言う。

「……お前……縮地法を……!!」

「剣士ならこれ位できねばならん!!」

ギインツ 弾き飛ばし、地を蹴って消えるジュリアンに、カーマインも消える。ギインギインツズバアツ 「……クツ」地面を滑って仰け反ったカーマインが現れた。ジュリアンの剣に、剣を弾かれたのだ。ゴオツ 剣がカーマインに迫るが、ガキイツ 横合いから槍の斬り払いで止められる。

「……やるな」

「二対一で五分か」「しまらないわね」

「そうか? では……本気でやろう」

シユオオツ 首に手を伸ばし、茨で出来た首飾りを外すジュリアン。苦行者の首飾りだった。

「コレを外させたのは、お前達が初めてだ!!」

「……来い」

シュシュオンツ 二人同時に姿を消し、斬閃がぶつかり合う。ジュリアンの剣はカーマインを一撃一撃切り結ぶ毎に追い詰めていく。「……どうした？ シーティアを止めた力を見せてみる!!」

凄まじい剣弾を、カーマインは二度三度と受ける。そして弾き飛ばされた。ガオンツ 吹き飛ばされたカーマインに「まだだ!」と剣からかまいたちを放ち、追撃するジュリアン。

「グウ……!!」

たちまち全身を切り刻まれるカーマインにトドメの上段からの一撃。ガキイツ ブロードソードで受け止める。

「……やるな、こうでなくては……」

ジュリアンはちらりと後ろに目を向ける。そこにはシーティアが神速の連続突きを放って来た。無数の穂先がジュリアンを狙う。ギインツ 神速の抜刀にて、グンニグルを止め、ジュリアンは剣を振りかぶった。ズバアツ

「面白くない」

シーティアは逆の刃で必殺の横薙ぎを放った。ジュリアンも両手持ちで上段から袈裟切りに斬りこんで来た。ガキイツ 交差法ですれ違うシーティアとジュリアン。ぴたりと静止し、背中を向け合う二人の中心の地面に亀裂が生まれ、ピシ……ビシィツ スドオアツ 爆発した。

「何? どうしたの、ウオレスさん!？」

「力と力の拮抗だ。シーティアとジュリアンの放つ力が凄まじ過ぎで逃げ場を失くした力が地面を割った……!!」

観客席の類背とウオレスは最早闘場に釘付けされていた。いや、二人だけでは無い。エキシビジョンだというのに、双子はエキスパートの覇者と対等に戦っている。それが観客達を酔わせた。

やはり

ジュリアンは我が意を得たりとばかりに心の中で頷いた。

コイツら、戦えば戦う程に……戦いの中で成長している……。ソレも急激に……!!

カーマインが剣を振るい、シーティアが槍を払う。ジュリアンはソレらを長剣で捌き、切り結んで行く……。不思議なほど、それが心地よかった。

初めてかも知れない……。父に必要とされなくなったあの時から……剣を握る事が苦痛になってしまったあの時から……改めて剣を持つ意味を与えられ、今は剣を交える事で楽しみを与えられている。シーティアのファイアーボールをスパアツと斬るジュリアン、その右手には魔法の光が集まっている。マジックアローが放たれた。カーマインとシーティアはそれぞれ右と左によけ、二人同時に斬りこんで来た。ガキイツ 三人の武器が闘場の中央で激突した。

「……では、俺達も本気でやるぞ」「……そうね」「ほう……?」

ギインツ 三人はそれぞれ別の方向に散った。スーッパチンツと刀を鞘に納めるカーマイン。ジュリアンも鞘に納刀し、同時に抜刀術を構える。ガアキイツ 剣速は互角、両者の刀は中央で激突した。

「……まさか、ここまで私の剣を盗むとは……!」
ヒュンツ 刀を外し、ジュリアンの懐に入ったカーマイン。「……クツ!」ジュリアンは入れさせまいと手刀を放つ。バキイツ 右拳で止め、蹴打を放つカーマイン。バキイツ 咄嗟にガードし、止めるジュリアン。と、そこへ左側からシーティアの槍が払われた。

コイツら!?
カーマインに両腕を防がれ、ジュリアンは躲すしかない。体勢の崩れたジュリアンをカーマインが斬り付ける。後方へ飛んで下がるジュリアンに、シーティアの連続突きが放たれる。

ドガガガアツ 長刀で捌いて懐に入ろうとすると、目の前にカーマインが迫っている。槍の間を縫うようにして、カーマインはジュリアンの正面に現れた。

カーマインに当たらないように紙一重のところで槍を放って来ている!? そんな事が……!!!?

バツ 左手からマジックアローを放ち、カーマインを狙う。カーマインはソレを横に跳んで避け、と同時にシーティアも右に跳んで避け、同時に縮地法で斬りかかって来た。

「……私をここまで追い詰めるとは……見事だったぞ」

ジュリアンの剣先から凄まじい気が発せられた。青白い光を放つ刀身を横薙ぎに払った。一瞬後、ジュリアンの全周囲を青白い炎が囲み、爆発した……！！

「我が剣、受けて見よ……！」

ズドオアツ ザアンツ 三者が交差法にすれ違い、ぴたりと動きを止めた。

「……まさか、二人掛かりで負けるとはな」

「ホント……！ でも、楽しかったわ」

二人はそう言い合うと、ガクウツと膝をついた。ジュリアンはそれを見、長刀を鞘に納めた。三人を歓声が包んだ……！！

『 おおっと、ジュリアンの勝利……！ しかし、フレッシュマンとは言え、エキスパートのどの相手よりも、この双子が善戦した事は間違いないでしょう……！ 今一度、この三人に拍手を……！』

そう言うナレーションを聞き、ジュリアンも頷いた。

「……来年はエキスパートで直に手を合わせる事になるだろう。その時を……楽しみにしているよ……！！」

「……ジュリアン」

ジュリアンの素直な称賛に、ティピが嬉しそうに返す。そして、双子も同時に微笑した。

19・プロミスペンダント

闘場から出て。

受付に来る時、カーマインとシーティアはとにかく旅行券を手に入れて良かったと言いつつ合っていた。

久しぶりに会えたんだ。後でゆつくり話でもしないか？

闘場から出る時に、双子はジュリアンにそう言われた。闘技場の外で待っていると言っていた彼に会いに歩を進めていた。

「凄かったよ！ お兄ちゃん達！！」

控え室を出て階段を昇り切ると、そこにはウォレスと満面の笑みを浮かべたルイセが立っていた。二人に駆け寄りはしゃぎ切るルイセに、シーティアが頭を撫でながら述べた。

「勝てなかったケドね……。二人掛かりでやられるとは思っても無かったわ」

「……次に剣を交える時、その時に勝てばいい」

カーマインが静かながらも「次は勝つ」という宣言をした。ウォレスはソレにニヤリと笑い、カーマインの肩を叩いた。

「その意気だ！ そう言えば、ジュリアンがお前達を待っていると
言ってたぞ」

「ああ……」「そうね」「行こう！！」「うん！！」

皆が言つと、全員がその場を後にした……。

闘技場を出ると、約束通りジュリアンが待っていた。ティピが声をかけ、ジュリアンも一行に加わる。ジュリアンとティピ、ルイセが話し合っている。

「フレッシュマンの部はコムスプリングス旅行券だったな……」

「うん、初めて行くからどんな所だろうとは思つよ」「もう………ティピったら」

「ハハハ！ 確かに、あそこは一度行くと病みつきになるぞ」

「え〜！ 本当！？ じゃあ、羨ましいでしょ！？」「……もうっ！」

「残念だが、私は元々バーンシュタイン領だからな。あそこへは良
く行くんだ」

「チエツ、つま〜〜んない。羨ましがると思ったのにい〜〜！
「クスクス」

などと三人が言い合っていると、商店街へ出た。と、ウォレスが
立ち止まった。

「？ どうしたの、ウォレス？」「……？」

シーティアとカーマインがウォレスを怪訝そうに見つめる。ウォ
レスは二人と前を歩いている三人に笑いかけた。

「積もる話もあるだろう。俺は先に街の入口へ行ってるから、お前
等は後から来るといい」

そう言っつてウォレスはその場を後にした。ジュリアンが話しかけ
て来た。

「……何だか、気を遣わせたみたいだな。後で礼を言っておいてく
れ」

「……ああ」

カーマインは相も変わらず無愛想に返す。それにジュリアンはク
スリと笑った。

「……？ 何だ？」

「闘っている時のお前は、不敵で勇ましく、口数も多くなるが……
普段はまるで貝のようだな、と」

「……そうか？ ……そうかもな」

「……本当に、おかしな奴だ」

ジュリアンは美しく、とても楽しそうにカーマインに笑いかけた。
そこでカーマインも初めて穏やかに微笑し返した。シーティアはそ
んな二人をジッと観察し、つぶやく。

「……BL？」
ホーモ

そこでカーマインがシーティアを向き、冷たい視線で一言言ってきた。

「お前の趣味に俺達を巻き込むな」

「……って端から見たらそう見えるわよ？」

「……まあ、別に当人達にその気が無いから問題無いだろう。な？」

カーマインはジュリアンに同意を求める。ジュリアンも「ああ」と頷いて来た。シーティアは目敏く、ジュリアンを見、「フーン」と生返事する。

「な……何だ？」

「……別にいゝゝ」

シーティアはそっぽを向いた。その先には、ルイセがティピとグズ屋で何かを見ている。シーティアと目が合い、ルイセは甘えた声を上げた。

「あ、お姉ちゃん。お兄ちゃん！ コレ買ってゝゝ！！」

「……何を言うのかと思えば……」 「……性の無い奴だ」

二人してやれやれと溜息を吐く。そんな二人にムツとした表情でルイセは反論した。

「あ、何か勘違いしてるゝゝ。ちゃんと意味があるんだよ！」

「どんな？」と、口にしようとして、ジュリアンが前に出た。ルイセの隣にやって来る。

「……どれだ？」

「コレ！ プロミスペンダント……！ 自分で決めた誓いを実現すると、願いが叶うの」

「ほう……？」

カーマイン、シーティアもちらりと見る。蒼い水晶で出来たペンダントで、見た目は綺麗だ。

「ゲッ！ 一万エルムもするの！？」

シーティアが値段を見て目を瞠る。カーマインも「やってられん」とばかりに首を振った。と、ジュリアンがそのペンダントを手に取

り、「フ……」と笑った。

「面白いな。すまない、このペンダントを一つ……いや、二つ売ってくれ」

「かしこまりました」

店員の女の子はにこりと笑うと、二つのペンダントを別々の紙袋に入れてくれた。

「ちよつと、ジュリアン？」

シーティアが怪訝そうにする。ジュリアンは彼女にニコツと笑うと答えた。

「エキスパートの優勝賞金がある。気にしないでくれ」

差し出された袋を一つとり、もう一つをルイセに渡す。ルイセは頬を赤くして喜んだ。

「ありがとう、ジュリアンさん!!」「太っ腹ね……!!」

ティピが横で感心したように唸った。それからジュリアンに問う。

「……それで、ジュリアンは何を誓うの？」

「私はこのペンダントにインペリアル・ナイトになる事を誓う!」

「うっひゃあ! 凄いわね……!!」で、何を望むの？」

勢いこむジュリアンに、ティピも嬉々として問いかける。すると彼は穏やかに言った。

「……もう一度、皆と会えるように。これが私の願いだ」

「何だか控え目な願いね……!!」「……そう? そこそこ良い願いじゃない」

納得のいかないティピにシーティアは優しくジュリアンを見て述べた。するとジュリアンも苦笑を返してきた。そしてルイセに問いかける。

「それで、君は何を誓うんだい？」

「私は、お兄ちゃん達を泣かせてみせる!!」

シーティア、そして我関せずをしていたカーマインが同時にこちらを向いた。

「ちよつと、ルイセ……何よ、今の?」

「だって、私。お兄ちゃんとお姉ちゃんの泣って見た事無いんだもん。私の事は泣き虫って苛めるのに……!!」

プーツと頬を膨らませるルイセにカーマインはクールに一言述べた。

「本当の事を言ったただけだ。苛めてなどいない」

「むう……!!」

興味なさげな態度に益々ルイセは眉をつり上がらせ、可愛い頬を膨らませる。しかし、愛らしいだけで全く迫力は無かった。ジュリアン、ティピが苦笑している。と、一人だけ焦った様子の者がいた。「ちよつと、ルイセ！ 私、貴女の事そんな風に言った事無いじゃない！ どうして、私まで……」

「お姉ちゃんも同罪だもん！ 私が泣いてるの見て、笑ってた!!」
「アレは……あんまりルイセが可愛いからで……」

弁論しようとするシーティアを遮って、カーマインが言った。

「それで、何を望む……?」

「え……えつと……!!」

弱った様になるルイセを一行はジツと見守る。やがて、ルイセがハツとなった。

「世界中の人が幸せになりますように……かな?」

「……今度は随分と大きく出たな」

ジュリアンが微笑ましく見つめる。カーマインとシーティアは微妙な表情だった。

「ほら、アンタ達。泣きなさいよ……それで皆が幸せになるんだから」

「泣かせるモンなら泣かせてみる」

カーマインは不敵に笑ってルイセとティピを見た。ティピは表情をこれでもかと崩し、言った。

「イ・ジ・ワ・ル・ね……!! アンタ……!!」

一方のシーティアの方はジツと目を開けている。

「よし、後ちよつとで涙が……」

「……こっちは姉馬鹿か……！」

ルイセの為に泣こうとするシーティアだが、ルイセに「ダメ！」と止められた。

「自分でやらなきゃ意味無いんだもん！ 私、絶対に二人を泣かせて見せるからね……！」

「ルイセ……！！」「……フン」

すでに弱り切ったシーティアと、望む所だと言わんばかりのカーマイン。そんな三人を見て、またジュリアンが笑った。

「ハハハ！ 彼女の意志は堅そうだ……！ 十分注意してくれよ！ それじゃあ、私はそろそろお暇するよ」

「ああ」「気をつけて」「まったね……！！」「ペンダント、ありがとうございました……！」

そう述べる四人にジュリアンは微笑を返し、その場を後にした。

ジュリアンが見えなくなつてから一言……カーマインは述べた。

「ところで、アレを買わせた上で、あんな誓いをするつもりだったのか、ルイセ？」

「え……え……と……！ あ、ウォレスさんが待ってるよ！ お兄ちゃん……！」

冷たい兄の視線から逃げるようにピューっとルイセはその場を後にした。ティピモルイセについて行く。

「……で、お前はいつまで嘘泣きを続けるつもりだ？」

傍らで一人涙の演技をしていたシーティアに淡々と問う。シーティアはソレに一言返した。ジツとカーマインを見据える。

「……アンタって、ホンットにムカつくわ……！！」
こうして、一行はグラランシルを後にした。

20・コムスプリングスでの邂逅

学院長・副学院長フロアにて。

カーマイン達は魔法学院に来ていた。通行手形の発行をしてくれるのが、学院長だからである。ルイセが一步前に進んで金髪の秘書に問いかけた。

「闘技大会で優勝したので、手形を発行してもらいに来たのですが……」

「……少々お待ち下さい」

秘書は何らかの手続きをディスクの上で行う。すると、奥への扉が開いた。

「うっ……ん、いつ見ても綺麗よねっ……!!」

「うん？ 学院長の秘書はそんなに美人なのか？」

ティピの言葉に、ウォレスが食いついた。

「あ！ そうか、ウォレスさんは初めて会ったんだね。髪は金色で冷たくも整った顔立ち、薔薇の蕾のような紅い唇、肌の色も白くて……!!」

「ほほう……！ それで？」

「ピアスの色は紅で、クチベニと同じ色だね。総合的に言うと、とってもセクシー！」

「……クソツッ！ この目が……見えりゃあな!!」

などと盛り上がる二人を尻目に、カーマインとシーティアは「どうも」と礼を伸べ、部屋に入って行った。ルイセが慌てて、ティピとウォレスを呼び、部屋へ入って行った。

渡り廊下にて。

学院長から手形を渡された一行は、早速アリオストの研究室へ向かっていった。

「ケチくさいわね。用が済んだら返せ、なんて！」

「そうよね〜！ 私も面倒臭いわ」

言い合うティピとシーティアに、ルイセが困った顔でなだめる。

「まあまあ、それでもそんなに手間はかからないんだから……いいじゃない」

「あ〜！ 見つけたあ！！」

「!？」

一行の背後からとても明るい女の子の声がかげられた。一行は立ち止まり、背後を振り返る……と、ドサアツ。「?」カーマインに急に柔らかい何かがぶつかって来た……。静かに抱き止め、ジツと見る。

「……ミーシャ……だったな?」「え!? ミーシャ!!」

「ハイ! お兄様!!」

一行の前に突如現れたのは、ルイセの同級生ミーシャだった。

「へえ……、なかなか積極的ね〜!!」「……お兄ちゃん」

異様に冷めた視線をカーマインに向ける姉妹。ミーシャは頬を赤く染め、目を潤ませながらカーマインを見上げ、語り出した。

「お兄様、優勝してコムスプリングスに行けるようになったんですよ。私も行っていいですか? 確か、参加者は五名までのハズですよ!? おじ様に聞いたんですから!!」

だんだんと力を込めて来るミーシャをジツと見つめるカーマイン。どうやら気圧されているらしい。ティピがカーマインの肩から旅行券を見た。

「あ! 本当だ!! 五名までって書いてある!？」

「……? ルイセ、おじさまって?」

シーティアが隣でルイセに問いかける。ミーシャが答えた。

「私、幼い頃に両親を亡くして……おじ様……学院長先生に育ててもらったんです」

「……へえ、あのエロジイさんが……ねえ?」「ちよつと、見直すわね!」

ミーシャの言葉にシーティアとティピが頷き合う。

「で？ どうするんだ」

ウオレスがミーシャを連れて行くかどうか問うた。カーマインが答えた。

「行けばいい。俺は残る」

「ちよつと！ アンタ、どういづつもりよ！？ マスターの命が……！」

「話を聞くだけなら俺でなくても、シーティアやルイセ……ソレにお前がいる。後一人、どうしても連れて行ってやらなきゃならない奴がいるだろ？」

「あ！ ……アリオストさん」

「……そう言う事だ。ウオレス……皆を頼んだぜ」

ティピが納得した所でカーマインはウオレスにそう告げると、魔法学院の来客用宿に手続きを済ませに行った。ミーシャが慌てて告げる。

「え〜！ お兄様が残るんですたら、私……」

「いいのよ、私もルイセのお友達に興味があるの……。ソレじゃ、アリオストを誘ってから……行きましようか」

「オツケー！」

シーティアの言葉にティピとルイセが対称的な声を上げた。ジツとカーマインの背を見つめるルイセ。シーティアは彼女の頭をポンと撫で優しく笑った。

「行くわよ、ルイセ」

「……うん」

こうして、アリオストとミーシャを一行に加え、シーティア達はコムスプリングスへ向かった……。

カーマインはソレを確認した後、宿の部屋に行き、ベッドに腰かけた。瞬間……糸の切れた人形のように崩れ落ちた。

「……ク……あの“力”を使った……反動……か……！！ やはり、

今の俺が行っても役には……立てない……な……任……せ……た……ぜ……シー……ティ……ア……」

ベッドの上に横になり、彼の意識は闇に取り込まれて行った……。

「コンジョーナシ!!」

「!!」

スパンッと頭を叩く女の子……。自分と同じ顔の肩くらいまで伸ばした自分と同じ色の髪……。瞳の色までまったく同じ……。髪の毛の長さを除けば、この女の子と自分とはまるで見分けがつかない。何故なら、二人は性別こそ違うものの服装も背丈も全く一緒に、年の頃は四つくらいだったからだ。

「まったく、お前はどーしてみんなと仲良くしない？」

女の子は可愛い眉をつり上げらせ、男の子を見る。

「……興味ない。俺の事より、ねーさんはみんなと遊びなよ」

「うるさい、コンジョーナシ!!」

ペシッと理不尽に叩かれる。姉の一撃は結構痛い。弟……。カーマインは母サンドラよりも、姉のシーティアが苦手だった。自分と同じ顔、背格好、瞳の色……。何もかも同じなのに、彼女は天真爛漫で、友達を作るのが得意だった。反対に自分は静かに一人でいる事を好む。なのに無理矢理、自分を友達の中へ入れようとする。理不尽なまでの力で。いい加減、カーマインも限界に来た。

「……やめろよ!!」

ペシッと叩いてくる手を止め、シーティアを睨みつける。

「ちからがあれば、弱者をしたがえてよいと、とーさまも言った。だから、お前は私のものだ!一緒に来い」

「ふざけんな!!」

物凄い理論で説き伏せる姉にカーマインはバツと戦闘態勢を取った。シーティアはソレを見て取ると、ニツと不敵に笑った。

「面白い、主君にゾーハンするつもりか？」

「俺がねーさんを倒して従えてやる!!」

ビュンツ 子供とは思えないスピードでカーマインは動き、シーティアに体当たりをかました。全身全霊の体当たり……。彼女もカーマインと同じくらいの動きはできるので、避けられたハズ……。なのに、あえて受け止めて見せた。

「……コンジヨーナシのくせに……！」

さらに細い腕が、カーマインの顎と足の間に回され……。「？」何かがおかしいと気付いた時にはもう遅い……。身体が浮き上がったと思うと、いつの間にか横向きで彼女の肩に担がれていた……。

「……？ ……シーティア……ねーさん？」

「主君に刃むく、不屈き者には」

「……いつ、主君になったのさ！」

喉と膝を掴む、両方の手にグツと力が込められたかと思うと。

「セイサイだ……！」

「ぐあああああああああ……！！！」

しばらくして……。カーマインはやつと解放された。シーティアの友達と呼びに来た為だ。結局カーマインはその日一日をシーティアの友達と遊んで過ごした。

「……なんて力……してやがる！」

遊び終え、ボロボロにされたカーマインがシーティアを見る。

「相変わらず、非力だな……コンジヨーナシ」

夕方二人は家に帰りながらそんな事を言い合う。

「この前、大人になったらルイセやとーさま達を守りたいなんて言っていたが。あんなに弱いんじゃない、悪い奴は倒せないぞ」

「俺は弱くないっ。シーティア姉さんだけだ、俺が勝てないの……！」

フテくされた表情の弟を楽しそうに……。姉は見つめる。弟の事を皆は言う。表情の無い……。人形。不気味で恐い化け物と呼ぶ。本当の弟の姿を見もせず……。でもソレは彼等が悪いのではない。ソレを彼等に吹き込む大人が悪いのだ。

だから……。コンジヨーナシの弟がどれだけ皆と変わらないのか……

…ソレを教えてやるのが姉の務めだと彼女は思っていたのである。
「コンジョーナシ。安心しろ、お前は私が一生守ってやるぞ」
「いらぬ。俺、シスコンじゃない」
「何だと、このコンジョーナシ!!」
「ぐあああ!!」
沈んでいく夕日を背に、双子はいつまでもジャレ合っていた……。

コムスプリングス。

湯気に包まれ、煉瓦造りの街並みが続く街。緑と共存し、調和された美しい……活気に満ちた街……観光地・コムスプリングス。

シーティア達は足を踏み入れると、周りを見回した。

「……凄いわね……!!」

「本当に……!!」「うん……!!」

シーティアの感嘆に、ティピとルイセが周りを見回す。ミーシャがソレに手にした本を見せた。

「ソレで、どこに遊びに行くんですか!? ほら、こんなにも名所があるんですよ!?!」

「ミーシャ君、僕等は遊びに来たわけじゃないんだ」

と観光マップを広げるミーシャにアリオストが困った顔をしながら注意した。ソレに、ミーシャだけでなく、ティピとルイセもビクツと口を押さえる。ウオレスがアリオストに話しかけた。

「確か別荘地に住んでるんだったな」

「ええ……。この丘の上の向こうにあるみたいですから。急ぎましよう」

そう述べ合う二人にシーティアが告げる。

「ダニー・グレイズを探すのは重要だ・け・ど、帰りに温泉に入っ
て行きましょうね? 这儿ん所、キツかったから休みたいの」

「……そうだな」「ああ、分かった」

こうして一行は別荘地へと向かった。そこは温泉の湯気の無い、落ち着いた雰囲気で満ちていた。明らかに他の場所とは違う。

「……いい所ね。私はこう言うの……好きだわ」

シーティアはそよ風になびく髪をかき上げ、少し楽しそうに笑った。隣に立っていたアリオストや同性のミーシャまでも頬を赤らめてしまう程に彼女は美しかった。

「さ・て・と！ ダニー・グレイズさん家を探そうよ！！」

「……そうね。まずは、あの別荘地の中でも極端に大きい家にしましょう？」

ティピの言葉にシーティアは鼻歌混じりにそう言った。

「？ 何だよ？」

「学者だったんなら、大きい家に住んでるモノよ」

「……そう言うモン？」

「お姉さんに任せなさい」

そう言ってシーティアは立派な門の前に立つと、呼び鈴を鳴らした。

「もう、お姉ちゃんたら」

クスクス笑うルイセ。ウォレスは「ヤレヤレ」と溜息を吐いた。ガチャリと中から出て来たのは……

「……！」

美しい白銀の髪と妖しく煌くルビーの瞳を持った、氷の美を持った美男子だ。

「……え……と……ダニー・グレイズさんですか？」

「人違いだ。私はアーネスト・ライエルという」

「ご……ゴメンなさい」

ルイセは慌てて頭を下げた。

「何が、お姉さんに任せなさいよ！？」

「……ま、こんな時もあるわよ」

などと言いつつシーティアとティピにルイセは更に申し訳なく頭を下げる。すると、アーネストは氷の表情をやや緩めた。

「どうしたんだ、アーネスト？」

と中から女と見紛うばかりの美しい紫の髪を持ったエメラルドの瞳の背美青年が現れた。物腰が穏やかで、見る者に安らぎを与える微笑みを口許に浮かべている。

「何でもない、ただの人違いだ」

氷の表情のアーネストは、自身とはまったく違う美貌の青年にそう告げた。すると、青年は

「そうか。そろそろ時間だ……私はもう行くとするよ」

「……そうか、いつでも来てくれ」

「ああ」

そう言っただけで去ろうとする青年に、シーティアが声をかけた。

「ゴメンなさいね。お邪魔したみたいで」

「……気にしないでくれ。私も帰るきつかけを探していたんだ」

「そう言ってもらえると助かるわ。ありがとう」

美しい微笑みを浮かべる青年に、シーティアも美しく微笑み返した。アリオストとミーシャ、ルイセまでも頬を赤らめる。

「……フフ、貴女のような美しい方がこのコムスプリングスに居たとは……知らなかったよ」

「どうも有難う。でも、お世辞はいいわ」

「本心だよ」

と言っただけで青年はシーティアをジッと見つめる。まるで、自分のモノとしようとするかのように……。しかし、シーティアはアッサリニコツと微笑み返した。

「……コレは強敵だ」

「そりゃどうも」

と言い合う美男と美女。その姿は絵になる。とそこへ、アーネストが声をかけた。

「行くべき所があるんだらう？ 油を売ってないで早く行け、オスカ」

「……ヤレヤレ、君にはもう少し雅が欲しいね、アーネスト」

「……フン」

「では、縁があつたらまた会いましょう……美しいお嬢さん」
そう言つてオスカーと言う青年は去つて行つた。

「なかなか面白い人ね。私を見て平然としていられる男性は初めて
だわ」

「……何気に凄いセリフね、ソレ」

興味深げに見送るシーティアに、ティピがやれやれと溜息を吐く。
「さて、ダニー・グレイズだったな？ その人なら、向かい側の左
奥の家だ」

「そう……有難う」「ほんとうに、すみませんでした。ライエルさ
ん」

「……気にするな」

ボタンツ そう言つてアーネストは扉を閉めた。

「……もう一人いたわね。……ソレにしても……彼等……どこかで
……？」

「そんな事いーから、早々とダニー・グレイズさん所に行くわよ、
シーティア！」

「……分かつたわよ」

と言つて一行はダニー・グレイズの家の前に立つた。

「……今度は人違いじゃないだろうな？」

「大丈夫でしょ？ あのライエルつて人が教えてくれたんだし、違
つたら“すみません”で済むわよ」

「……おいおい」

とウオレスが頭を軽く押さえた。コンコンツ 構わず、シーティ
アは戸を叩く。中から初老の男性が出て来た。

「……誰じゃな？」

「フェザリアン研究家のダニー・グレイズさんですね？ 私達は訳
あつてフェザリアンを調べている者です。貴方のお力をお貸し頂き
たいのですが」

シーティアがいつになく落ち着いた口調で話しかけた。

「何と、美しいお嬢さんがフェザリアンを知りたいと!? よくぞ言うてくれた。若人達よ!! さあ、中へ入るが良い。私が応えられる事なら、何でも教えよう!!」

嬉々としてシーティア達を招くダニーにティピがポツリと零した。

「……よっぽど今まで相手にされなかったのね」

「……大丈夫かしら?」

シーティアも、一行も不安と言う表情で中へ入って行った……。

家の中は小さいながらも綺麗に整頓され、そこそこ広く感じられる台の上に飾られた一輪の花もきちんと水を与えられているのか、美しい。ミーシャが早速鼻に取り付いていた。ダニーがシーティアを見て尋ねた。

「……さて、どこから話せばよいかの?」

「……そうね、まずフェザリアンの特性……生態について。彼等が個より全を主とする基盤についてお聞かせ願いたいわ」

「……フム、君達はフェザリアンのことをよく知っているようだね?」

そこへアリオストが口を挟んだ。

「貴方の書かれた書物には、フェザリアンは個よりも全を主とする。全よりも個に執着する人間を軽視するとありました。具体的にはどのような事なのですか?」

「……そうじゃの」

ダニーは宙を見据え、一つの例をあげて来た。

「例えば、病で死にそうな友人がいたとする。その友人は後三日で死ぬかも知れん。その友人を治す薬はあるが、取りに行くのに三日……往復で六日かかってしまう。さて、お主らならどうする?」

「諦めずに取りに行くに決まってるじゃない!!」「……別の方法を探すわね」

ティピとシーティアが同時に答えた。

「そうだな、やってみなけりゃ分からん」

「効率のいい方法を探す必要があるね」

ソレにウオレスとアリオストがソレゾレの意見に頷いた。ルイセもコクリと頷く。

「……そう、人間は情と言うモノで動く。しかし、フェザリアンにはソレが無い。フェザリアンから見れば人間の情はエゴにしか見えんだろうな。その薬を取りに行く労力と時間より、見捨てた方がはるかに効率が良い……そう考えるだろう」

「……そ……そんな……」

「フェザリアンは合理的な種族だ。打算的で合理的……無駄を徹底的に排する。命さえも……な」

シーンとする。重苦しい空気が一行を包んだ。

「……そうかしら？」

疑問の声を上げたのはシーティアだった。

「……どういう意味かね？」

「たとえ、普段表面的にそう受け答えしていたとしても、本当に死が迫った時……その当事者は仕方ないと思えるかってコト」

「……フム」

「私に言わせれば、命の本当の意味も知らずに頭で分かった気になつてる、絵空事の世界で生きてる者の持論に聞こえるわ」

そのシーティアの隣で、常に命のやり取りをしていたウオレス、飢餓で命を失いそうだった孤児と共に育ってきたアリオストが力強く頷く。

「……もし、フェザリアンより人間が優れている所があるとするれば……ソレはまさに君が今、口にした事だと私は思う。……私に話せる事はここまでだ」

「有難うございました。ダニーさん」

シーティアが一行を代表して頭を下げた。

「いや、こちらこそ。久しぶりに楽しい時間を過ごせたよ」

ダニーもまた、微笑み返した。

「……何となく見えて来たな」

ダニーの家から出て、ウォレスは一言述べた。アリオストがソレに相槌を打つ。

「……でも、ソレをどうやって証明するの？」

「う〜ん、難しいな〜」

ルイセの言葉に、ミーシャが感想を述べる。ティピがシーティアに尋ねた。

「これから、どうする？」

「……振り出しに戻る」

「へ？」

「魔法学院でカーマインを迎えに行つて……ソレからね。……でも、折角温泉街に来たんだから……ね？」

シーティアはティピに軽くウインクしてみた。

21・温泉宿にて

「……ふう、生き返るな」

「まったくです」

ウオレスとアリオストは互いに裸で向かい合っていた。カポーンという場所特有の音も聞こえる。周りには湯気が立ち上り、広い風呂場を大勢の人間が湯につかったり、背中を流したりしていた……。そう……。ここはコムスプリングス特有の温泉宿であった。シーテイヤ達の旅行券のおかげで温泉が無料になった一行は、彼女の提案で風呂に入っていた。

「……ソレにしても、フェザリアンの研究家が言ってたコト……。どうするよ？」

「難しいですね……。具体的な案が出てこない」

「……フム」

そう述べ合う二人に明るい声が聞こえて来た。

「うわぁ、広いね〜!!」

「ソオレ!!」

ザバアンツという音が二人の耳に届いてくる……。

「と……隣は女湯だったんですね」

「……そのようだな。ま、目の見えない俺には関係ないが」

と無関心のウオレスにアリオストは少し残念そうな顔をした……。と、その時、

「この壁の裏に、女湯が……!!」

「男のロマンじゃん、デカブツ!!」

「ガキンチヨにはまだ早えって!!」

と言い合う、金髪の男とタヌキの耳と尻尾のアクセサリーをつけた子供が言い合っていた。ザバアツとその中央に居た蒼色の髪の毛の青年が立ちあがる。

「……行くか」

「おう」「ジャン」

そんな三人に対し、連れであろうか、左手がウオレスとは違う明らかに爪といたった義手の男とウオレスに負けないほど立派な体格をした初老の男……そして、先に述べた金髪の男と違い、静かで、淡い金の髪を持った青年がいた。

「阿呆が」「若いのう」「後が怖いと思わないのか？」

三人の言葉に意を介さず、先の三人は「男のロマン」を求めて立った。

「待ちたまえ!!」

アリオストが凜とした声を張り上げた。

一方、女湯では真っ先にティピとミーシャが入って行った。

「うわあ、広いね～～!!」

「ソオレ!!」

ミーシャは温泉全体の景観を見て、感嘆する。ティピは見もせず浴場に飛び込んだ。

「こおら、ティピ……!! 他のお客さんに迷惑だよ」

ツインテールを下ろしたルイセが可愛い頬を膨らませて注意する。ミーシャは眼鏡をはずし、三つ編みを解いていた。「エへへ」とルイセに笑いかける。

「何よ～～!! そんなコト言う娘はこうだ!!」

ティピが眉をつり上げながら、その小さな身体に一杯の水をすくい上げると、ルイセに浴びせかけた。バシヤアンツ

「きゃあ……っ」

「! ……おもしろそう……!! アタシも～～!!」

バシヤアンツ 別方向から水鉄砲。ミーシャがティピに加勢し、二人してルイセに水を浴びせかける。

「やめてよ、二人とも……!! やめてったら……!! ……っっっ」

ふえ〜ん、カーマインお兄ちゃん」

その時、パシユオンツ 水の弾丸がティピとミーシャの中間を襲った。

「……………何すんのよ、アンタ!? 後ちよ……………!」 「! ……お……お姉様?」

ティピが文句を言い付けようと目を向けた先に……………シーティアがいた。その彼女の姿にティピとミーシャが言葉を失って見つめている。

「ルイセをいじめるな。私の妹に手を出すなら、ソレ相応の覚悟をしてもらうぞ、ティピ……………ミーシャ?」

艶やかな黒髪をポニーテールにしてまとめ、雪のような白い肌をあらわにしている。裸になった彼女は他の女性客の目を釘付けにする程に艶めかしく、美しかった。

「有難う、シーティアお姉ちゃん」

「……………ルイセも、こんな時までアイツに頼らないの。呼んでも来れないんだから」

「ゴ……………ゴメン」

目を俯かせる妹に、シーティアはソツと頭を撫でる。

「……………綺麗……………うっとり……………! お姉様って……………ステキです!」

「……………アンタって……………ソレばかりね……………」

夢見る女のミーシャにティピが冷めた視線を送った……………。

「……………クツもう少しだ……………!」

アリオストはその端正な顔立ちをゆがませながら狭い路地を腰布一つで歩いていった。その後ろには、蒼髪の青年と金髪の男性が続いている。

「何をしてるんだ。早く行くぞ!」 「後ろがつかえてるんだ!」

「分かっているよ、君達の気持は十二分に……………。しかし、こう暗くて狭くちや……………」

そう言い合う三人の耳に、女の子達の声が聞こえて来た。

「……そうだな、弱音は行けない。君達の仲間であるあの小さな少年の犠牲を無駄にしちゃいけない」

「……そうとも!」「ガキンちよの分まで、俺達が見るんだ!」

三人は金髪の青年に捕まえられたタヌキの少年の遺志を継いだ。金髪の男性が前に出る。

「……俺が、行くぜ!」

「……頼んだぞ!」「……僕等の運命は貴方にかかっている」

蒼髪の青年とアリオストの言葉に、男性は二ツと親指を立てて答えるのだった。

一方の女湯では、シーティア達四人の他に、蒼髪の女性、茶髪の少女、金髪の女性と赤髪の女性、銀髪の幼女、黒髪の少女が入って来た。

「いーお湯だね!」

「本当に……久しぶりですね」

養女と金髪の美女が言い合う。茶髪の少女がルイセに話しかけて来た。

「ゴメンなさい、騒がしくくないですか……?」

「大丈夫です。……えと、気にしないでください」

少女は「ふう」と一息つくくと、猫さんタオルを頭の上に被せた。

「あ……可愛い」

「コレ? 自分で作ったんだ」

「そうなんですか、凄い」

と女二人で話し合うルイセをシーティアは微笑ましく見つめた。

「アンタ達も旅の者かい?」「……タダ者じゃなさそうね」

「……貴女達も、ね」

赤と蒼の髪の女性二人に、シーティアも笑み返す。ティピとミーシャはルイセと話しこんでいる茶色の髪の少女、銀髪の幼女と話し

込んでいた。金髪の女性はこちらを見てニコリと笑っている。黒髪の少女は「ほけーっ」と一人で湯を楽しんでいた。

「……………ぐうつ!? しまった……………!!」

金髪の男性が切羽詰まった声を上げた。

「どうしたんだよ」「何か、畏が……………!?」

蒼髪の青年とアリオストが同時に尋ねる。三人は未だに暗く狭い路地を迷走中だった。

「……………なんてこった! 俺とした事が……………!! シヤレにならねえ!」

「一体、どうしたんだよ!?」「何故、立ち止まるんだ!!」

「……………身体が、つかえて動けねえ!!」

「「な……………何い……………!!」」

男達の悲鳴がこだまする中、声が聞こえて来た。

「ミーシャって胸、大きいね」

「そんな事ないって。ルイセちゃんも……………えと、ま、気にしない!」

「うう……………どうせ、私は……………!!」

そんな声を聞いた漢達は再び燃え上がった。

「こんな所で!」「負けては……………!!」「いらねえ……………!!」

しかし、男の巨体は道につつかえたままであった……………。

「気にする事は無いよ。アンタはまだまだ大きくなるんだから」

「そうだよ。気にする事無い」

赤髪の女性と茶髪の少女に言われ、気を持ち直すルイセ。隣で、シーティアが背を流していた。ミーシャがジツと見ながら言う。

「お姉様ってスレンダーなのに、出る所出でて、完璧ですよ……………。私から見ても凄いいんだから、男の人が見ちゃったらと思うとちよっ

と怖いです」

「……面と向かってソコまで褒められたのは初めてだわ。流石にちよっと照れる」

そう言つて恥じらうシーティアは色つぼく、その場にいた者の目を釘付けにしてしまった。

「や……やっと抜けた!!」

「諦めないで良かった!!」「さあ、ゴールまであと少しだ!!」

男がようやく抜けた時、三人は歡喜に打ち震えた。しかし、コレで終わりでは無い。むしろ、ここからが本番なのであった……。

「もう少し……もう少しだ……!!」

奥の方に光が見えて来た。男達はただその光を目指す……! 道の先を信じて。そして、ついに彼等は辿り着いた。幾多の苦行を突き進んで、彼等は前へ突き進んだのであった。

「やったね、君達の協力のおかげだ!! 途中、諦めそうにもなかったが……!!」

「ああ……でも、感激し合うのは後だ」「ああ、桃源郷は目の前だ!!」

「では諸君、じっくり堪能しよう!!」

「ああ!!」

そう言い合つて三人が中を覗こうとした時、

「そろそろ上がるつか!!」

絶望の一言がティピから発せられた。三人とも、固まる。「そうだね」「ふーっ、いいお湯だった」等と言う女性達の声がし、……そして、女風呂には誰もいなくなった……。

「……帰ろうか」

「……ああ」「おう……」

三人はやるせないという表情でその場を後にするのであった……。そして、そんな三人に金髪の青年の制裁が与えられた事は、言つま

でも無い……。

22・異形と女王

美しい花畑に一人の男が眠っている。いや、青年と言うべきか。保養地ラシエルの花畑であった。黒髪と蒼銀の眼を持つ男……シユワルゼ。

「……フン、俺はいつまでここにいればいい。早々と来い、ゼノスめ」

忌々しいと言わんばかりのシユワルゼだが、花畑が気に入っているのか、一日の大半をそこで過ごしていた。とりあえず、ゼノス・ラングレーが仕事の目途をつけるまでカレンの安全を守って欲しいと言われていたのだ。

「……ソレにしても、下らん約束をしたものだ。退屈で死にそうだ」「あー！ こんな所に居た！」「シユワルゼ兄ちゃん！」「四、五歳位の男の子と女の子達が四、五人シユワルゼに抱きついてきた。」

「おう、遅かったな」

「兄ちゃん、知ってる？」「最近保養所の南の遺跡から歌声が聞こえるんだよ」

「知っている。寝るには丁度良い子守唄だ。ソレがどうした？」

「お化けとか、幽霊とかじゃないかって話だよ」

「……下らねえ。もし、そうだとしても、ソレが何だっただけ？」「シユワルゼは子供達の考えを一刀の下に切り捨てた。」

「そうかなあ？」「お化けなんかいないよ」「でもさー！」

と子供達は話し合っている。この子供達はラシエルにて一番重症とされ、親から隔離された子供達であった。外で遊ぶことは勿論、ベッドから出ることも不可能とされていた彼等を治したのは、シユワルゼであった。

それ以降、彼等はシユワルゼになついているのだった。ただ一人、ベッドから起き上がれるようになっても全く外に行かない女の子と

いう例外もいるのだが。シュワルゼのヒーリングは魔法学院で開発されているモノよりもはるかに優れ、複雑なのであった。

「そんな事よりも、今日は何をする？」

「よ～～し！」「かくれんぼ！！」「兄ちゃん、鬼だよ！！」

「……よかるっ」

シュワルゼ達が時間を忘れて遊んでいると、カレンが現れた。

「皆、ご飯ですよ～～！！」

彼女の方もすっかり体調が良くなっていった。本当は保養所について二、三日で完治していたのだ。シュワルゼの処置が適切だった為である。

「は～～い！」

子供達はカレンの言葉に素直に従い、保養所へ帰って行った。

「お疲れ様です、シュワルゼさん」

「……フン、カレン」

「？ 何ですか？」

にこやかに笑いかけるカレンに、シュワルゼは無愛想な顔で問う。
「遺跡へはどう行けばいい？」

「グローシアンの遺跡ですか？ あそこは扉も閉められていますし、魔物も大勢いて危険ですよ。……何をしに行くんですか？」

「……ガキ共があの中から聞こえる歌声が幽霊だと言つのでな……
確かめてやる」

そう答え、シュワルゼは邪悪に笑った。

「しかし、そうか。あの遺跡はそんなに危険なのか……！ ククッ
いい退屈しのぎになりそうだ」

そう言つてカレンに背を向けるシュワルゼ。

「シュワルゼさん！」

「安心しろ、飯を食ってから行つてやる。片付かんのだろうっ？」

「えと……そうではなくて……！」

「……なら、晩飯までには戻る、でいいのか？」

と怪訝そうに立ち止まり振り返つて来るシュワルゼに、カレンは

ニコリと微笑んで言った。

「私もついて行きます。薬草の知識と回復魔法なら唱えられますから」

「……いらん。代わりに……ガキ共の相手をしてやってくれ」

そう言うと、シュワルゼはカレンに背を向けた。

「ソレで借りはチャラにしてやる」

「……シュワルゼさん」

シュワルゼとカレンは保養所に一旦戻り、昼食を取ってからカレンは子供達の相手を、シュワルゼは遺跡へと向かった……。

カレンから地図を渡され、道中に現れるリザードマン達を無造作に斬り捨てながら、シュワルゼは街道を歩いていた。……そして

「なんだ、案外近いな」

目の前に明らかに他とは異なる造りの建造物が現れた。随分と大きい扉が正面にあり、これまた巨大な鎖を袈裟がけと逆袈裟にかけ、両者の交点に巨大な錠前をして止めている。

「……フン、後から無理矢理創った風の扉だな。……本来なら、グローシアン用の入口がある筈だが」

そう言うと、シュワルゼは懐からグローシユ結晶を取り出した。

ソレはサンドラによって研究されたグローシユの結晶化を基に創り出されたモノだが、小型化できないと言う欠点があった。……しかし、彼はそのあり得ない結晶を持っていた。

ザツとシュワルゼは扉の脇にある壁を調べ始めた。結晶が輝きだし、シユオンツ 壁が消え、入口が現れた。

「……フン」

中へ足を踏み入れた……。遺跡の中は全体的に薄暗く、魔物が普通に徘徊していた。外からの侵入者に魔物達は一斉にシュワルゼを睨みつける。

「……フン、虫けらめ」

右手の指から黄金の粒子が現れ、刃渡り2mはある剛刀が具現される。ソレをつかみ取る……。パシィツ とシュワルゼが握ると、剛刀レギンスロータは一瞬歓喜に震えるように刃が蒼く煌く。

「くたばれ」

ザアンツ 一振りでその場に居た魔物は斬り捨てられた……。そんな彼等の死骸に見向きもせず、彼は上へ昇って行った……。

シュワルゼがソコに辿り着いたその時、ブウンブウンツ 警報が鳴り響く。そして彼の目の前に巨大な鉄の塊が現れた。

「……ほう、ガーディアンか」

「侵入者、排除」

「やってみる！」

巨大な塊は人の上半身を形取ると、拳を振り下ろしてきた。バキィツ ホール全体 部屋の10分の1はある巨大な拳は、人形のように小さな人影によって片手で止められていた。

「どうした、排除するのでは無かったのか？」

自身の体よりも3倍は大きい拳を止め、シュワルゼは涼しげに、そして邪悪に微笑した。

今度はガーディアンの周りに光球が生まれ、五つの光球から電気が生じる。

ズドドドドオツ 落雷の嵐がフロア全体をボロボロにして行く。

……しかし、

「……下らんな……！ 見た目だけか、派手なのは」

そう言うつと、刀を一閃した。ズドオツ マジックアローが放たれる。無数の雷を弾き飛ばし、光は巨大なガーディアンをアツサリと貫いた。

「…… 損傷率90%オーバー…… 機能…… 停…… 止……」

ドドドド……ズドオアツ 派手にガーディアンは爆発し、消滅した。しかしソレ程のことが起こっても、建物自体に傷はついていない……。

「……フン、流石はグローシアンの遺跡という事か……」

そう言ってニヤリと笑うシュワルゼの前に、巨大な上へと続く階段が生じた。

「……さて、幽霊の顔を拝んでやるか……」
傲岸不遜にシュワルゼは階段を昇って行った……。

三階に上がったシュワルゼを待っていたのは巨大な紅い門であった。ダイヤルが存在する。更に周りにはおかしな四つのパネルが存在した。

「……ほう？」

シュワルゼはそのまま、ダイヤルを触った。マジックロックをかけられており、うまく解除できねば、罠が発動する。そこまで解った上での行為だった。

マジックロック解除行為を感知30秒以内にロックを解除して下さい。解除できない場合、フロアを爆破します

シュワルゼはバツと周りを見回す。おかしな四つのパネルからゴーレム、ガーゴイル、スピリット、レイスの四種類の魔物が現れた。「……フン、30秒以内とめかしておいて、実際は10秒くらいだな。面白い」

ドドドオツ スピリットがサンダー、レイスがマジックアロー、ゴーレムがメイスを振り上げ、ガーゴイルは槍を空から放って来た。シュワルゼはソレらを巧みに躲し、斬り捨て、ゴーレムを止め、ダイヤルを回し、レイスをスピリットを斬り捨てる。

「……フン、違うな。……後、1回か」
ズババアツ 魔物を斬り捨てながら、冷静にダイヤルを見つめる。しかし、魔物はパネルから次々と出てくる。シュワルゼはジツと部屋を観察し始める。

「アレか！」
四つのパネルの後ろに青、白、赤、黄の四つの色を見つけ、そしてニヤリと笑った。レギンスロータが蒼炎に煌き、薙ぎ払われた。

ズバアツ　ズドドドオツ　一瞬後、シュワルゼの全周囲を青白い炎が連鎖し、爆発して生じる。魔物が消し飛ぶ。

「……フン」

そのまま、ダイアルに手を触れ、黄、青、白、赤の順にダイアルを押した。カチリツと音が鳴り、カウントダウンが止まる。と同時に扉が開いた。シュワルゼは魔物を同時に倒し、次に現れる魔物達の順を見て、パネルを押したのである。

「タネさえ分かればどうという事も無い。くたばれ!!」

シュワルゼの右目が金になり、マジックアローが剣閃から四つ放たれ、現れる魔物とパネルを一気に貫いた。ブウンツと剛刀を振り払い、背の鞘に納めると、扉に向き直った。

「……さて、幽霊はどんなツラだ？」

ガチャリと扉を開けた……。そこには羽根の生えた女が四肢を鎖につながれて捉われていた……。

「……翼を持っているのか、最近の幽霊は」

「お主は……!!」

冠をつけた金髪の女……フェザリアンはシュワルゼを見ると瞳を冷たくした。

「……妾を殺しに来たのかえ」

「……何だ、幽霊ではなかったか」

言つと、シュワルゼは掌に魔力を集め出した。

「……!!」

女はジツとシュワルゼを睨みつける。ズドオツ　魔法の矢が放たれた……。

時は少し遡る。シーティア一行はダニー・グレイズの話聞いた後、魔法学院へ通行手形を返し、カーマインを迎えに来ていた。

「あー、コムスプリングスって楽しかった！ 次はどこに行くの？」
「……ア・ン・タ・ねえ〜！！！」

脳天気なミーシャの台詞にティピが青筋を立てる。と、その時アリオストが二人を制した。

「シツちよつと静かに！」

「？ ……どうしたの、アリオストさん」「？ ……先輩？」

「……こつちだ！！！」

アリオストはティピ達の言葉も聞かず、一目散に走って行った。

「……どうしたのかな、アリオストさん？」

「何か気になる音を聞いたみたいね」

「どうして分かるの、お姉ちゃん」

「静かになって言ってたでしょ？ アレって多分聞き覚えのある何かを聞いたからだと思うわ」

とルイセに説明するシーティア。ソレにウオレスが頷いた。

「歌声が聞こえるな。……聞こえないか？」

「……ウオレス、あなたって何者？」

そう言い合いながら、シーティア達は学園の中庭へ足を踏み入れる。

「私、学院長に手形を返してくるから、ミーシャとウオレスはアリオストを追って。ルイセとティピはアイツを呼んできて。この場所で集合……いいわね？」

一同はコクリと頷くと、ソレゾレ別れ合った。

ティピはルイセの肩に乗りながら、カーマインを探していた。

「アイツ、宿屋に居ないで何やってんのよー！」

「もう、一日中部屋の中に居たら、引きこもりだよ。ティピ」

カーマインはすぐに見つかった。学院のホールの手前で、彼は座り込んでいた。

「あ！ お兄……」

と声をかけようとしたルイセだが、そのあまりにも美しい寝顔に声をかけられなかった。まるで……別の世界の人間のように感じたのだ。

ルイセはいつも、ソレを感じていた……。カーマインに対して……決して表にはいけない感情……。しかし、溢れそうで……。隠し切れなくなりそうな、そんな想い。だから今は入れない。妹の仮面をつけないと、彼に近寄れない……。しかし、ルイセにとっての絶対領域をアツサリと踏み越えて行く者が居た。

「ティピちゃあん、キーックー！」

ドゴオツ まともに横つ顔に入り、カーマインはしばらくうずくまった……。

「早々と起きなさいよー！」

「……元気な奴だ」

「……なんか、文句でもあ・ん・の？」

「……別・に」

ティピとカーマインは互いに至近距離で睨みあっている。ルイセはそんな二人をほんの少し、羨ましそうに見ていた……。

ウォレスとミーシャはアリオストを見つけた。彼は吟遊詩人の歌をジツと聞いている。突然、アリオストは詩人に飛びついた。

「……やっぱり！」

「！ 何だ、歌の邪魔をしないでくれ」

「すみません、その歌……どこで覚えたんですか！？」

「……コレかい？ ラシエルに立ち寄った時に風に乗って美しい歌声が聞こえて来てね。覚えてしまったんだ」

「……有難う」

アリオストは詩人に礼を言うと、後ろから来たウォレス、ミーシャを見つめた。

「どうしたんだ、アリオスト？」 「あの歌が、何か？」

「……アレは僕が幼い頃……母が歌ってくれた曲なんだよ」

「……何？ どこで聞いたんだ、彼は？」

「保養地、ラシエルだと言っていた……」

「決まりだな。アリオストのお袋さんと同じ歌を知っている者……つまり」

「……ああ！ シーティア君に話してみよう！！」

そう言い合う二人の下へ、シーティアが通行書を返して合流してきた。急いで事情を話すアリオスト。と、そこへカーマイン達もやって来た……。

「……って事は考えるまでも無く、ラシエルね」

「ああ……。急ぐっ」

一行はラシエルへとテレポートで旅立った……。余談だが、ミーシャのみ、話についていけなかったのは……言うまでもない。

放たれた魔法の矢は女を縛る鎖を全て立った。

「……何のつもりだ？」

「フン……」

スツと女に背を向け、シュワルゼはその場を後にしようとする。

「妾を殺しに来たのでは無いのか、人間よ？」

ピタツと足を止め、彼は女を振り返った。

「フェザーランドに居た時、妾達を皆殺しにしようとした狂人……。

そして、不吉なその瞳……。全てを滅ぼす者よ……」

「……下らん事を言っていないで、早々と追いて来い。お前を連れて行かないとここに来た意味が無い」

「……断る」

ハッキリと言い切った女にシュワルゼはキョトンとした表情をした。
た。

「面白い奴だな。こんな何も無い所が良いのか？」

「……そ、そんな訳なかつ……」

女は相手の予想を裏切る言葉に拍子抜けした。あの時の男なら、きつと睨みつけ、意のままにしようと思つたからだ。

「お……お前、あの時の男は違つたのか？」

「ほう……？ 俺と同じ顔をした奴を見た事があるのか？ ……その割には化け物から何の話も無かつたな……」

フムと一人で考え事を始めるシュワルゼに女はますます困惑する。「大体、お前の仲間達はどつしたのかえ？」

「？ ……仲間？ ……そうか、カーマインの事か。あの化物の支配下におらず、仲間のいる奴……アイツしかない」

「……お、おい」

尚の事話しかけてくる女にシュワルゼは応えた。

「俺の名はシュワルゼ・ロード。お前の言つてる奴とは人違いだ。

……で、お前は何者だ？」

「……妾は……ステラ。フェザリアンの女王だ」

「……？ ……何だソレは？」

「フ……フェザリアンを知らぬと申すかえ？」

「知らん。人間の歴史に興味も無い」

とにべもないシュワルゼにステラは氷の瞳を向けた。

「妾は人では無い。フェザリアンである」

「……まあ、いい。とりあえず、ここを出るぞ。居なければ好きにしる」

「……無礼な……愚かな人間め」

「俺も人間では無い……化物だ」

シュワルゼはステラを振り返り、邪悪に笑つた。

「……化物の言う事を信用せえと言つのかえ？」

「別に俺はお前に興味は無い。安心しろ」

「ならば、何故妾を連れて行くつとすする」

「ガキ共に歌の正体を教えてやる為だ。幽霊とかぬかしてやがつたからな」

「ソレと妾に何の関係がある？ やはり断る」

そう言い合いながら、二人は遺跡を後にした。遺跡の外に出たステラは太陽に目を細めた。

「……こうして、陽の光を浴びられるとは思わなかった……」

「？ …… テメエ…… 好きであそこには行ってたんじゃないのか？」

「当たり前じゃ、無礼者。数人がかりで人間に捕らえられ、妾達の科学力を教えよと言うて来たので、人間に利用されるくらいなら黙ったら、あそこへ閉じ込められたのじゃ」

「ほう……？ そんな時に翼も傷つけられたのか？ なかなかの小悪党だな、ソイツら」

そう言いながら、シュワルゼはステラに手をかざした。

「ヒーリングー！！」

「……！！」

癒しの光が彼女を包み込む。次の瞬間には羽根の傷が治っていた。

「……どういっつもりかえ？」

「ガキに見せるなら、美しい方がよかろう。羽根が折角あるのだからな。ソレだけの事だ」

「勝手に決めるでない」

等と不仲のようで、その実会話のキャッチボールを行う異形の男とフェザリアンの女性。道中現れるモンスターを斬り捨て、ラシエルへと向かう。女王ステラは羽根が回復したにも関わらず、シュワルゼの傍から離れようとしなかった。

「？ どうした、無礼者」

シュワルゼはいきなり立ち止まり、背中の剛刀に手をかけた。その姿勢のまま、ステラに言う。スラァツと剛刀・レギンスロータが抜かれた。

「退がつてる、あの建物から出た時から妙な視線を感じてたんだ」

「何じゃと？」

「よく、勘付いたな」

その時、二人とは別の声が街道の脇にある林から発せられた。シ

ユワルゼは静かにその声の主を見る。三人の男が出て来た。

シュワルゼは知らなかったが、頭に頭巾バンドナ、手に山刀と言
う出で立ち。カーマイン達と幾度も戦った盗賊連中である。そい
つらが二人、後の一人はその二人の後ろから現れた。スキンヘッド
に茶色の革防具、そして左眼に眼帯をつけた鋭い眼をした男……。
男はシュワルゼに笑いかけた……。狡猾で残忍な笑みだ。

「やるじゃねえか。たった一人であの遺跡をクリアしちまうとはな
……。だが、その女は置いていってもらおうか？ 聞きたい事があ
るんでな」

スラアツ 手下達が山刀を抜く。シュワルゼはソレを確認すると
邪悪で不遜な笑みを返した。

「うつけが。人間風情がこの俺に命ぜられると思うのか？」
「なら、死ね！！」

男の合図と同時に二人の手下が斬りかかって来た。「な！？」ス
テラが思わず悲鳴を上げるほどのスピードだった。男の考えでは、
ソコでシュワルゼは死ぬはずだった。しかし、三つの影が交差した
時、地に伏せたのは二人の方だった。

「な……なんじゃと？ 妾をフェザーランドから連れ去った手練を
一瞬で……！！？」

「……ほう？ インペリアル・ナイト級か……。たまにいるんだよ
な、こういう無名でありながら実力のある奴つてのが……！！」

眼帯の男は静かに指輪を撫でた。黄金の粒子となり、巨大な斧と
化す。

「……リング・マスターか。少しは使えるんだろうな？」

「試してみるよ」

「よかるう！！」

言つとシュワルゼは男に斬りかかった。ガキイツ 長い柄で見事
にシュワルゼの一撃を止める男。ビュビュンツ 剛刀を払うと戦斧
を回転させ、胴を薙ぐ。ガキイツ はらわれた剛刀を右手一本で操
り、片手で止める……。ニヤリと笑い合う二人。

「……フン、少しは出来る。なら、見せてやるう」

「何を見せてくれるってんだ？」

「この俺の実力だ」

瞬間、シュワルゼの姿が消えた。縮地法である。「チ」ガキイツ
舌打ちし、斬り合う。ザツ 足音が左からした。男はそこへ斧を
振る。

「そこだー!!」

ビュンツ 斧が払われる。しかし、その場には誰もいない。

「何だと!？」

「後ろだ、うつけ」

バキイツ 男が振り返るのより先にシュワルゼの蹴りが直撃し、
吹っ飛ばした。が、男はすぐに立ちあがって来た。

「……今のが剣術の至高の境地……縮地法ってヤツか。この目で見たのは初めてだぜ……。考えてたより、ずっと厄介なシロモンだ」

「続けるか? なら、次は殺す」

そう言っレギンを構えるシュワルゼに男はニヤリと笑い、言った。

「だが、そう簡単に殺れると思うなよ?」

「ほう……? この圧倒的な実力差をどう埋めるといふのだ?」

「……確かにな。だが、強い奴が勝つんじゃないやねえ。要は、生き残った方が勝ちなんだよ!!」

斧と刀が打ち合った。次の瞬間「ぬ?」

「かかったな!!」

ズドオアツ 男の嘲笑が聞こえ、斧が爆発した。ズザアツ 煙からシュワルゼが後退しながら現れた。

「無礼者、大丈夫なのかえ?」

「下らん事を聞いてないでその辺りに隠れるか、空を飛んで逃げろ」

「……フン、私を連れていくのではなかったのかえ?」

「ならば、その場を動くな」

「もとよりそのつもりじゃ……化物」

「フン」

シュワルゼはジツと自分と相対する男を見つめた。

「どうだ？ この斧には爆薬と魔力が組み込まれている。つまり、衝撃によって爆発力を高める事が出来るんだよ」

チラリと男はレギンスロータを見据える。

「だが、グローシアン の遺跡にすら壁を空けられる爆発でヒビどころか曇り一つないとは……ただの武器じゃねえ。テメエもリング・ウエポンの使い手か」

「……フン」

「なるほど、道理で。だが、何の付加効果も無い武器なら俺の敵じゃねえ」

「気は済んだか？」

「……何だと？」

シュワルゼは剛刀を一閃し、告げた。

「うつけ者、テメエは自分が斬られたのも分からねえのか？」

ズシューウツ 次の瞬間、男の胸から血が噴き出した。

「ガハッ！ ……テ……テメエ……！」

男は斧を振りかぶり、シュワルゼに斬りかかって来た。男の斧が振り下ろされる。その男の眼に美しい青白い光の線が走った。

「うおおおおー！！」

咄嗟に後方へ飛ぶ。シュワルゼの剛刀が振り切られていた。ザンツと着地した男……。

「……フ……フフ、危ない所だったぜ……！ だが……ここまでだ……！」

「ああ。テメエの命運もここまでだ」

スパアツ 「ー！！」 ドシャアンツ 斧が真つ二つに斬られ、落ちた。

「バ……バカな！？ リング・ウエポンがー！！」

「さあ……とどめだ！ くたばれー！！」

シュワルゼは剛刀を頭上へ掲げる。グローシュが刀に集まり、炎

へ化した。それを右袈裟に振り切る。ズドオアツ 炎の線が男に放たれた。

「ぐああああ!!!」

男は先の無い長い棍と化したリングウエポンを使って炎を受け止める。も、一瞬で弾き飛ばされた。その後方にあつた林は一直線上に燃えカスとなった。ドサアツ 一瞬遅れて宙に飛ばされた男が地面に落ちる。

「コイツ、魔法剣まで……!! ……しかも、あの刀……折れないリングウエポンを斬りやがった。レギンレイヴか!!」

「ご明察……。なかなかの観察眼だ。俺のフレアアタックを回避したのは、テメエが初めて……! 褒めてやるぜ」

ブンツ 刀を突き付け、邪悪にシュワルゼは笑う。

「……さあ、続けるか？」

「チ!」

ドオンツ 男は自分の周りを棍で薙ぎ払った。ズドドオツ 一瞬後爆発が起こり、土煙が巻き上がった。

「!!! まだ、爆薬を仕込んでやがったか!!」

ズバアツ 苦も無く、煙を真つ二つに切り捨てるシュワルゼだが、その場には男は既にいなかった。

「……フン、逃がしたか」

急に興味を無くすシュワルゼ。刀を鞘に納め、リングへ戻す。

「……で、知り合いか？」

「ああ……妾をここへ連れて来た者達だ」

「そうか」

シュワルゼはそれだけ述べるとラシエルへ歩き出した。ステラもシュワルゼの背をジツと見つめながら歩いていた……。距離を広げる事も……。縮める事も無く……。

23・最強の異形

カーマイン達はラシエルへと到着した。

「ラシエル……ついこの間来たばかりだ。……カレンさん、平気かな」

「……ああ。彼女に会えば、歌の事も聞けそうだな」

「決まりね。まずはカレンさんを探しましょ？」

ルイセの言葉に、カーマイン、シーティアが答えた。ラシエルは全体的に緑が多く、街中は静かで保養地と言っただけの事はあった。まるで病院の庭をそのまま街にしたような場所。ソレがラシエルだった。

「カレンさんに会うなら、保養所に行きましょう？」

「そうだな……。？ ミーシャはどうした？」

「あら？ ……いないわね」

シーティアとカーマインの言葉に皆そう言えば……という表情だった。アリオストだけが、クスリと笑い言った。

「ここ、ラシエルには美しい花畑がある。たぶん、そこじゃないかな？ 彼女は花が大好きだからね」

「そっかあ、もう……ミーシャったらあ。どうする、お姉ちゃん？」
ルイセの頭をポンツと撫で、シーティアは保養所の建物を見つめた。

「カレンさんって人に会ってからミーシャを探しましょ？ その方が何かと手っ取り早いわ……。行くわよ」

「うむ……そうだな」「じゃ、行くうよ！」

ウォレス、ティピが賛同し、一行は保養所へ辿り着いた。普段騒がしいティピもこの時ばかりは大人しくしていた。

「あら？ シュワルゼ君……もう帰って来たの？」

「！？ ……シュワルゼ？」

カーマインが保養所内で呼び止められた。緑髪の美しい女性だ…

…。

「あ、お兄ちゃん。シュワルゼさんってお兄ちゃんそっくりの……」
「そうそう！ カレンさんを助けてあげた人の事だよ！ ただ……
アンタと違って目の色が両方とも蒼銀なんだけどね」
ルイセとティピの言葉にカーマインは素っ気なく「知っている」と答えた。

「あ、そうか……！ もう説明しちゃってたもんね」
「……ところで……貴女は？」

ルイセが納得した所で、シーティアが女性に問うた。

「？ シュワルゼ君じゃないの？ ……そう言えば瞳の色も違うし……シュワルゼ君そっくりの女の子もいる……。不思議な感じね……。ゴメンなさい、私はアイリーンよ」
「アイリーンさん、私達はカレンさんを探しているんだけど、知らない？」

「今なら、花畑の方じゃないかな？ シュワルゼ君の代わりに子供達と遊んでいるのよ」

「……そう、ありがとう」

一行は一旦保養所から外へ出た。

「ミーシャを探した方が手っ取り早かったわね」

「まあな。しかし……アイツが居たか」

「何のつもりかしらね？」

「さあな。ただ……アイツは他の仮面達とは違う。何かの奸計があるって訳じゃなさそうだ」

「……案外、カレンさんをゼノスが来るまで守ってあげてんのかもね？」

「かもな」

シーティアとカーマインはそう言い合つと先を歩いている仲間達に早足で追いついていった。

アイリーンの言った通りカレンは子供達と遊んでいた。一行が近づくとカレンは嬉しそうに振り返った。

「あ！ シュワルゼさん……！！」

「……久しぶりだな、カレンさん」

「……？ ……あ！ ……貴方は……！！」

カーマインの隣のティピを見て、カレンは何か気付いたようにカーマインを見直す。

「……確か、ローザリアで私を助けてくれた……」

「カーマインだ。貴女に聞きたい事がある」

「……？」

カーマインはカレンに事情を説明した。カレンはニコリと微笑み、答えた。

「ソレなら……もう少しでその歌を歌っていた人が来ます。シュワルゼさんがその人を連れて来てくれるって言ってましたから」

「……何故、シュワルゼが向かったんだ？」

「この子達の為って本人は言っていましたよ」

クスクスとカレンは笑っている。カーマインには、今一シュワルゼの行動が解りづらい。シーティアも「フウム」と唸っている。

「シュワルゼさん、最初は怖い人だと思ったんだけど、いい人だった……。本当に」

「……アイツが？」

「ええ……、シュワルゼさんはこの子達に大人気なんですよ。兄が当面の治療費を稼ぐまで、私の身を護ってくれていますし」

「……マジかよ？」

驚いた口調のカーマイン。シーティアも信じられないと言った表情であった。

「あ！ お兄ちゃん……！！」

ルイセが気付いたように後ろを指した。カーマインにはソレが誰か分かっていて。心配で気付くのだ……ヤツの事は……。

「……ほう、奇遇だな」

「ああ……」

邪悪な笑みを浮かべる男に、カーマインは静かに返した。子供達

が一斉に男、シュワルゼに駆け寄る。

「お兄ちゃん、このお姉さん誰？」「綺麗な羽根だね」

「テメエらの言ってた謎の歌の歌い手だ」

「スツゲエ！！」「ホントに遺跡行つたんだ！？」「どんな所だったの？」

子供達の質問責めに会うシュワルゼ。と子供達はターゲットをフエザリアンの女王、ステラに移した。

「な……ステラ女王……！？」

アリオスト、ルイセ、ティピまでも茫然としている。以前薬をもらいに行つた時に拒絶されたフエザリアンの女王……。

「……まさか、女王様とはね。どうしたモンかな？」

シーティアは呆れた表情で皆を見た。一行は……ウォレスでさえポカンとしている。ステラは一行の事など見向きもせず、子供達の相手を戸惑いながらしていた。

「お帰りなさい、シュワルゼさん」

カレンがカーマインと睨み合うシュワルゼに微笑みかけた。シュワルゼはカレンに向き直る。

「その女が正体なんだが……幽霊ではない」

「フエザリアンですね……。私、グローシアンの他にフエザリアンにも会えました」

「……そんなに嬉しい事か？」

「私にとつては大事件です！」

そんなカレンとの会話を切り、シュワルゼはステラを向いた。

「で？ やはりコイツらと俺を間違えたのか？」

そこでやっとステラはカーマイン達を見据えた。色の無い無機質な瞳に成って……。

「そうじゃ……。お主等……妾を殺しに参つたのかえ？」

「ち……違います！！ 私達はただ……アリオストさんの聞き覚えのある歌がここラシエルで歌われているって聞いて……それで……！」

「……？ 妾の歌を聞いた事があるじゃと？」

ステラはジツとアリオストを見据えた。アリオストはルイセを優しく制し、一歩前が出る。

「僕の母は……フェザリアンです」

「お主……そうか、ジーナの子か」

ステラは一つ納得する。そして、シーティアを見つめる。

「ソレで？ 妾をどうするつもりでここに来たのだ？」

「話を整理すると……貴女、グローシアンの遺跡に居たのね……どうして？」

ステラは事情を話した。眼帯をつけたスキンヘツドの男に捉えられた事。もうダメかと思つた時に助けに現れた異形の青年の事を……。

「……つまり、貴女はあの遺跡に七日間も捉われていた訳？」

「そんな期間があんなら、どうして他のフェザリアン達は助けに来ないのよ！！ アタシ達、助けに行こうって普通に考えたわよ！！」

シーティアの言葉にティピが憤然と言う。

「？ ……何故だ？ 確かに女王が不在なら不便ではあるが、代わりの者を選べば事足りると言うのに」

「呆れたわ。ダニーさんから聞いてたケド、私の大っ嫌いなタイプだわ。やる前から諦める弱い生き方。本当の命の重みを分らない愚かな生き方」

「妾達の生き方が……諦め……弱いじゃと？」

ステラがシーティアを睨みつける。が、ソレを上回る凄まじい目つきでシーティアはステラを睨んだ。

「命を本当に理解しているのなら、代わりなんて言葉は絶対に言えない。お前は自分が本当に死ぬと思つた時……ソレでも生きたいと思わないのか？ シュワルゼに救われ、安堵しなかつたというのか？ 違つたろう、お前は喜んだハズだ。だからこそ、シュワルゼの傍を離れられずにいる」

口調こそ穏やかだが、反論を許さない、シーティアの強い口調だ

った。

「……そうだな。自分で変えようとしなのは弱い生き方だ」

「歩き出す前から諦めるのは愚か者のする事だ……。父の言葉です」
ウォレス、アリオストが頷き同意する。ステラはうつむき……。「
うむ」と小さく頷いた。ルイセが遠慮がちに述べる。

「とりあえず、私のテレポートで女王様をお送りしますね？」

「ソレは構わんが、少し待て。妾が、あの男に借りを返すまでな」
そう言っただけステラはどこか優しい表情でシュワルゼの方を向いた。
ソレを見たカレンがニコリと微笑する。

「シュワルゼさんの優しさが、彼女を変えていくのが分かります」

「……アイツの優しさ？」

シーティアはジッとカーマインと睨み合うシュワルゼを見据え、
カレンを見た。

「分からない……！」

「クスクス」

シーティアの頭を抱える姿をカレンは笑う。

「ていうかさ、アンタ達……いつシュワルゼと知り合いになったの
？」

ティピがキョトンとした表情でシーティアに問う。焦った彼女は
必死で言い訳を試みた。

「……えっと……！ ティピ達が会った日に実は、偶然！ 会って
たのよ……！」

「ふ〜ん、じゃあなんでカーマインとシュワルゼ……ずーっと睨
み合ってたの？」

「そ……それは……、ソリが合わないみたいよ、うん」

その言葉で、ティピは一応納得したのか、「フ〜ん」と睨み合
う二人を見つめる。

「……ソレで無礼者、妾が借りを返すには何をすれば良いかえ？」
ステラ女王はシュワルゼを見据え問う。そこへルイセが割って入
って来た。

「お願いです、シュワルゼさん！ お母さんを助けるのに貴方の力を貸して下さい！」

シュワルゼはカーマインに片眉を上げて問う。カーマインはシュワルゼを見据えたまま、答えた。

「俺の母・サンドラは何者かの手によって毒を盛られた……。その毒を解除する事の出来る者がフェザリアン……。俺達は彼女達に力を駆りに行ったと言う訳だ」

「アンタが女王様に頼んでくれたら、マスターは助かるの！ お願い……！」

シュワルゼはカーマインとティピを見据えた後、邪悪に笑った。

「よかるう……。！ その願いを叶える事で、女の借りは無かった事にしてやる」

「勝手に決めるでない、無礼者……。！」

ステラは少し慚然として答えた。シュワルゼはソレを無視し、カーマインを見据えた。静かにシュワルゼに問いかける。

「……条件は何だ？」

「この女が欲しければ……。俺を倒してみろ……！」

クールなカーマインにシュワルゼが吼えた。ゴオウツ 指輪が黄金の粒子と成り、2mとある剛刀へと変化した。同時にカーマインも絶刀を召喚した。両者、同時にレギンレイヴとレギンスロータを構え合う。

「カーマイン！」 「お兄ちゃん！」 「シュワルゼさん！」

ティピ、ルイセ、カレンの声が聞こえるが二人にとってはまるで外の事だった……。

子供達を退がらせ、二人の周りから人がいなくなる……。

「……動かない？」

「いや、二人の間では既に斬り合いが始まっている……。果たしてどちらが先に動く？」

ステラの言葉にウォレスが答えた。アリオストは女達と子供達を背にやり、見据える。シーティアは静かに二人を見つめる。

「……フン、相当腕を上げたようだな？」

「そう言う事だ……。今、見せてやる」

シュンツ　一瞬でカーマインはシュワルゼの懐に入った。縮地法……。ギギインツ　刀と刀がぶつかり合う。

「……又!？」

ギギギギインツ　凄まじい斬線が宙に走った。余りの手数にシュワルゼをしてガードに徹しなければならぬ程だった。ドガアツ　最後の一撃を防ぐも態勢が崩れそうになった。その前にバックステップし、仕切り直す。

カーマインも深追いせず、静かに見据える……。

「今の……って、ラルフの音速剣？」

「いや……フィランギ程のスピードでは無いけど……。でも、そうね……威力と手数なら負けて無いわ」

ティピがつぶやき、シーティアが解説した。

ドオンツ　今度はシュワルゼが斬りかかる……。！　すると、カーマインは鞘に刀を戻していた……。次の瞬間……

「ぬ!？」

シュワルゼは刀を縦に構えた。ガアキイツ　風がシュワルゼの目の前を通り過ぎ、凄まじい衝撃と共に後方へ吹っ飛ばされた。抜刀術である。

「ジュリアンの神速抜刀術!！」

「凄い、凄~~~~い!　お兄ちゃん!！」

レギンスロータでなければ、受けた刀ごと斬られていた。シュワルゼはソレを理解し、更に見えない剣閃を放った男を見据えて笑った。

「面白い……!　やはり、闘いとはこうでなくては……!！」

シュワルゼの右目が金に変わった。瞬間、圧倒的な気がシュワルゼから放たれる……。ウオレス、アリオストが思わず戦慄した。

「な……何て気だ……!！」　「す……凄いプレッシャーだ!！」

「アレ……?　シュワルゼの右目……カーマイン達と同じ金色……

」？

ティピの言葉にシーティア以外の者がキョトンとシュワルゼを見る。

「アイツ……何者なのよ？」

カーマインは静かに問いかけた。

「何だ？ 成らないのか？」

「フン……アレは人のいない場所でやらねえと思いつきやれんな」

「……いいだろう。俺も人のまま……お前を倒す」

カーマインも両眼を煌かせる。

「ほう？ 首飾り無しでもリミットの付け外しが出来るように成ったか」

「おかげ様でな」

「……もう少しだな。思ったよりテメエは俺の境地に早く辿り着きそうだな」

シュワルゼが一瞬でカーマインの懐に入り込む。カーマインも反応し、抜刀する。ガオンッ およそ、絶刀と剛刀……刀と刀がぶつかり合った音には聞こえない音を生んで、二人は鏝迫り合いを行う。「どういう意味だ」

「俺と本当の死闘ができるってコトさ！」

ドガガガガアッ 互いに刀と刀をぶつけ合う。シュワルゼの右袈裟切りを左に躲し、その背に遠心力たっぷりの胴薙ぎを払うカーマイン。ビュンッ 捉えたソレは残像。ゴオウッ 背後からカーマインへ一撃！ シュワルゼの右袈裟斬りを縮地法で消えて躲すカーマイン。

「……！」

ザザアッ 勢いをつけていた為、踏ん張って態勢を整えるシュワルゼ。カーマインがその背後から剣閃に炎をまわらせて放って来た。フレア・アタック

「この間のお返しだ」

「！！！」

ズドオアツ 炎の熱線が放たれる。ズバアツ 苦もなく真つ二つにするシュワルゼ。ドオンツ 縮地法で互いに消え、ガアキイツ 中央で激突し合う。シュワルゼの下から真上に振り上げる一撃を左に躲し、左手で横薙ぎを返す。と頭を屈めてカーマインの一撃を躲す。着地際にズドオツ マジックアローが左掌から放たれる。またしても縮地法で躲す。ビツ 現れたのはシュワルゼの左。カーマインは左掌で剣を握り、右手を添えると、右斜め下から左上へ切り上げた。グアオンツ

「チイツ！！！」

強烈な炸裂音。剛刀で止めたシュワルゼをして、後方へ吹っ飛ばされた。その背後には巨大な木がある。ビュンツ 間一髪、大木を蹴ると、シュワルゼは姿を消す……縮地法であった。

「俺の強打撃から脱出した！？」

背後に気配を感じ、振り向くのと同時にシュワルゼの蹴りがカーマインを吹き飛ばした。ドガアツ 地面に叩きつけられ、土煙が舞う。

「カーマイン！！」「お兄ちゃん！！！」

ティピとルイセが叫んでみるも、土煙の中にカーマインは……いなかった。

「……そこだ！！！」

ガアキイツ 背後に向かって上段からの一撃！カーマインは刀を横にし、両手持ちで受けていた。

「この俺の一撃を真つ向から止めるとはな……！！！」

「上がった腕を見せてやる約束だからな」

ギイインツ 互いに剣を弾き合う。ビュビュンツ 上段からの一撃が来ると同時に左薙ぎの一撃も決まる、カーマインの十字斬。一撃目を防ぎ、二撃目は一撃目を止めたと同時にバックステップして躲す。

「……………」

シュワルゼは静かに己の胸元を見据えた。紅い線が疾っている。
「俺の方が早かったな」

「……フン」

邪悪に笑ってクールな敵を見据える。

「吠えたな……!!」

「!!……そう来なきや、な……」

シュワルゼの身体から圧倒的な威圧感が放たれる。ザァンツ一閃。シュワルゼの両手持ち袈裟斬りがカーマインをガード越しに吹き飛ばした。ズザァツ 地面に片手と両足を着け、踏み止まったカーマインの後ろにシュワルゼが剛刀を振り被って現れていた。ガォンツ 振り下ろされた剛刀に正面から絶刀を叩き付ける。凄まじい衝撃と風、音が辺りに響き渡る。

「……」

ガクウツ 目の前でシュワルゼが急に姿を消した。バァキィツ 背後から強烈な蹴打で吹き飛ばされる。目の前に地面が近づいた所を片手をつき、バク転して態勢を整え、着地。

「何よ、急にカーマインの動きが悪くなった!？」

「いや……、シュワルゼが本気になった。カーマインの反応速度、動体視力を奴が上回っている、ソレだけの事よ」

ティピにシーティアが答え、ウォレスはジツと二人の動きを観察している。

「……確かに、奴の動きは昔闘ったインペリアル・ナイト以上だ。

今のカーマインで倒せる相手じゃねえ」

シュンツ 縮地法……。ウォレスの言葉に応えるようにカーマインが消え、無数の斬閃を宙に描いた。

「アレって……ラルフの音速剣!!」

「フン……!!」

シュワルゼも縮地法で消え、宙に無数の斬線を描く。

「!! シュワルゼもか!!」

「同じ技同士!!」

ズドドドドオツ 両者神速の域で動きながら同時に剣撃を繰り出し合う。ガキイツ 斬り下ろし、右薙ぎ、逆風、逆袈裟、左薙ぎ、右斬上げ、刺突、そして渾身の右袈裟切り。次の瞬間、カーマインが宙へ跳ね上がり、体中に無数の斬線を生まれ、地面に叩き付けられた。

「ガハアツ」

「お兄ちゃん!!」 「カーマイン!!」 「お兄様!!」

ルイセ、ティピ、ミーシャがカーマインに駆け寄る。

「……なかなかの連続攻撃だが、手打だな。ソレではこの俺には勝てん」

「……………」

ルイセとミーシャに抱きかかえられながら、カーマインはジッとシュワルゼを見据える。

「……強くなれ、この俺を倒せるほど……! 俺はその強さを更に一歩越えて見せる」

「……上等だ」

邪悪に笑うシュワルゼに、カーマインはニヤリと不敵に返した。

次は…… 負けない。

24・仕官

フェザerlandにて。

カーマイン達は、シュワルゼ、カレンと別れ……ステラをフェザerlandへ送り届けていた。

「薬をもらっていいの？ 私達何もしてないケド？」

「化物との約束じゃ。妾は約束は違えぬ」

「有難う……感謝致します、陛下」

ステラはシーティアに薬を託した。そしてアリオストを見据える。「歩き出す前から諦めるは愚か者のする事……か。考えるに値する言葉だ」

「……父は私等より立派な方でした」

「……アリオストよ、そなたがジーナに会いたいのならば、妾に先の言葉の正しさを証明して見せよ。フェザリアン、全てにな」

「はい……！ 必ず認めさせて見せます……！」

アリオストは凜とした口調でステラを見据えるのだった……。

「お母さん、薬だよ……飲んで」

一行はサンドラ邸にてフェザリアンの薬をベッドで横たわるサンドラに与えた。寝室にはルイセ、シーティア、ティピ、そしてカーマインと医者が居り、サンドラを見守る。

「……どうなの？ 母さんの容態は？」

「しばらく様子を見んことには何とも言えませんが、恐らく大丈夫です」

「……そう」「よかつたあ……！」

シーティアが思わず顔をほころばせ、ティピとルイセが手を取り合って喜び合う。三人は部屋を出て、皆が待つホールへと向かった。そこには、アリオスト、ウオレス、ミーシャがいた。

「容態はどうだった？」

ウォレスが一番初めに口を開いた。ルイセが花の咲いたような笑顔を見せる。

「うん！ 大丈夫だって！！」

「そうか……、良かったねルイセ君！」

「はい！ 本当に有難うございます、アリオスト先輩！」

アリオストが優しく微笑んでルイセを見つめる。

「そうね……貴方が居なかったら、フェザーランドに辿り着く事も、ダニー・グレイズに会う事も無かった……。有難う、私からも礼を言っわ。アリオスト」

「ぼ……僕の方こそ、礼を言わせてくれ。君達が居たからこそ、フェザリアンの女王に認められる機会を与えられたんだ」

美しい微笑を刻むシーティアに両手を振って制し、頬を紅くするアリオスト。

「……だが、だからこそ……僕はフェザリアンに人間を認めさせる方法を考えようと思う」

「そう……、ソレが一番かもね……。また私達と上で寝てる奴の力が必要だったら言ってね。いつでも力を貸すわ」

「有難う……！！ それじゃあ！！」

ウインクするシーティア、そして別れの言葉を告げる仲間達に手を振り……アリオストは真っ暗になった王都を去るのだった……。

「アリオストさん、生き生きしてたね〜！！」

ティピが嬉しそうに笑う。シーティアがパンパンと手を叩き、声をかける。

「さて、私達もそろそろ寝ましょうー！」

「そうだな」「ミーシャ、一緒に寝よう？」「うん！！」

皆が一斉に寝室へと向かう中、独り残ったシーティアはジッと母が眠る寝室を見つめ呟いた。

「お休み、また明日ね……母さん」

薄暗い闇の中……仮面の男達が2m程の銀色の異形を従え、主の前に跪いた。その異形を象った鎧を着た銀の騎士達の上から声が降って来た。

「どうした……ローランディアの宮廷魔術師は生きているぞ」

見上げると……そこには10mはあるつかという巨大な白銀の異形が立っていた。

「申し訳ございません……！」

仮面の一人が冷や汗を流しながら答える。

「……最もお前達だけの所為ではない……。シュワルゼ……ラルフ、そして……！！」

「……は？」

「……構わん……。裏切り者の二人はまだ始末出来ていないのだな？」

「……申し訳ありません」

「……ならば、一刻も早く計画を進めるのだ。来るべき日の為に……。その為には欠陥品の二体等、捨て置け」

「……では、我々はその準備に」
「有無」

四対の紅と金の瞳を持つ異形は満足そうに頷いた。

「どうしました？ 顔色が優れませんね」

リビングに降りて来たカーマインを仲間達と母・サンドラが笑顔で迎えてくれた。そのサンドラの体調はすっかり元通りになっていた。だからこそ、息子の顔色に気付いたのだ……。訝しげに問う。

「……夢を見た……」

カーマインはいつも通り……淡々と答えた。だが、その揺れる感情にサンドラは気づき眉をひそめる。サンドラとシーティアにしか解らない、微妙な感情……。

「そーなの、コイツったらまたおかしな夢を見たんだって!! マスターを襲った仮面の騎士達と銀色の化け物がいて、物凄く大きい銀色の化け物がソイツ等に命令してるんだって!!」

「……ちよつと聞いてくれ」

ティピの言葉にウォレスが重々しく口を開いた。ソレにルイセ、ミーシャが問いかける。

「どうしたの、ウォレスさん？」

「何か、ただでさえ恐い顔なのに、余計恐くなってますよ」

あどけないルイセと脳天気なミーシャに構わず、ウォレスはサンドラに話しかけた。

「俺は十数年前にヴァルミエの鉱山で魔晶石の発掘の警備をしていた。その時、化物が現れて傭兵団を壊滅させやがったんだが……。ソイツを探し回って俺は眼と利き腕を仮面の男達に奪われた」

「!! ソレって……!!」「マスターを襲った奴等……!!」

「似てると思ったんだ……。俺の眼はほとんど見えねえが、あんな形をしてりや嫌でも気付くぜ」

ルイセとティピに頷き、サンドラを窺う。サンドラはジツと何かを考え込んでいた。

「アンタを襲った連中は……母さんを襲った奴と同じだ、ウォレス」

「……!! お前……」

「アンタの事も夢で見た。アンタと知り合う直前……あの日の朝にな。アンタは一人目に眼を斬られ、二人目に右腕を斬り裂かれ、滝壺に落ちた……」

カーマインの言葉にウォレスは「ウム」と頷いた。

「凄いですね、お兄様……!! やっぱり単なる夢って訳じゃないんですね」

ミーシャが夢見る乙女の表情でカーマインを見据える。ルイセが母を見上げる。

「……お母さん……!!」

「化物について心当たりがあります……。恐らく……」

落ち着いた表情で答えるサンドラにウォレスが吼えた。

「本当か、サンドラ様!?」

「……恐らく……伝承に伝わる異形……ゲヴェルでしょう。かつて人間を窮地に陥れたとする……人間を喰らう化物」

皆がシーンと静まり返る。サンドラの言葉の続きを、リビングの入口から聞こえた美声が続けた。

「その異形はグローシアン支配時代に現れ、無差別に人を殺し回った。しかし、五人のグローシアンが命をかけ、異形の封印に成功した……」

声の主はカーマインの隣に歩み寄るとサンドラを見つめた。

「千年以上前の伝承だけど……本気で言ってるの、母さん」

「やっと起きて来ましたね、シーティア。お前もカーマインもどうして朝が弱いのか」

ヤレヤレと首を振るサンドラ。カーマインと同じ顔と服装をした美女は不敵に笑ってウインクする。

「カーマインが見たと言う異形……、そして人々を混乱の渦へと追いやる知能と力……ゲヴェル以外には考えられません」

「……異形……ゲヴェル」

カーマインは静かにその名を呟いた。まるで噛みしめるように……。

「クソツ 調べてみたいが……この体じゃ……!!」

「方法があります……。カーマインとシーティアは闘技大会で優勝していますね? その実績を持って仕官するのです。なるべく自由度の高い任務を与えられるよう、私の方からもかけ合ってみます」
こうして、カーマイン達はローランディア城へと向かった……。

「成程……ゲヴェルの調査……。お前が言うのであれば、信用しよう……サンドラ」

「有難うございます」

ローランディア城は見た目の無機質な外装とは裏腹にシンプルで……しかし、よく磨かれた内装をしていた。広い空間を大きく取り、丁度良い位に装飾がされてある。玉座の間でもソレは同じであった。「しかし、その子供達がソレを行うと言うのか？」

「こちらの我が子達……二人とも闘技大会で優勝をし、共に剣術、体術、魔術に優れております」

「よく知っておる……。息子の方は初めて見るが、シーティアには城中の兵を破ったという忘れ得ぬモノを見せてもらっておるからな」
シーティアを見つめ優しく微笑するアルカディウス。ソレにシーティアがニコリと微笑んだ。

「城中の兵を負かしたのは私だけでは有りません。シルヴィア殿下もですわ、陛下」

「フフ、分かっている。アレは昔からお前をライバル視していたからな」

「姫様のライバルだ等と、とんでもない……。と、申し上げているのですが……」

「アレは頑固者だからな。……しかし、そうか。その者がお前の自慢の弟か。なるほど……。よく似ておる」

次の瞬間、カーマインはポカンとした表情でシーティアを見た。当の彼女は白い肌を真っ赤にし、アルカディウスを見つめ「陛下！

！」と叫ぶ。
「フフ、愛されておるな……。カーマイン？」

王の言葉に今度はカーマインが俯き、耳を紅く染めた。シーティアもバツが悪そうにそっぽを向いている。大人びた二人が初めて年相応の表情をしているのに、ティピとウォレスはどこか嬉しそうだった。と、ルイセが、二人の袖をギュツと掴み、寄り添う。

「……フム、闘技大会に優勝する程の腕……。しかも二人、か。仕官の話はいずれこちらから行う所であったろう。早速で悪いが、お前達に我が愛娘の護衛を頼みたい……。バーンシュタインのリシャー
ル王の即位式に姫を出席させる為だ」

「？ 護衛ですか？ ……シルヴィア姫の？」

ルイセが思わず聞き返した。“白銀の薔薇”、“ローランディアの姫將軍”の名はインペリアル・ナイトに並ぶ程に有名だ。剣と魔法、知略に優れ、幾度となく繰り返された親善試合においてもバーンシユタインのインペリアルナイトに後れを取った事は無い……。ソレ程の女性を守るといふのはルイセでなくとも疑問であつたろう。

「シルヴィアではない。アレは今、ノストリツジ平原にてベルナード將軍の元へ向かっている。兵士がたるんでいないかを見る為だそうだ」

ヤレヤレとアルカディウスは溜息を吐いた。

「お前達に頼みたいのは、姉……レティシアの方だ。……入って来なさい」

そう王が促すと、玉座の奥の扉からカーマイン達と同世代の美しく優しい雰囲気の女性が現れた。高貴なオーラを纏い、清純な雰囲気を持った……美しい姫だ。

「キツレツイ〜〜！！ お姫様つて凄〜〜い！！」

ティピが感動して叫ぶ。ソレにサンドラがジロツと睨みつけ、「う……」黙らせる。

「よろしく願いますね、皆様」

「お任せ下さい。姫様」

シーティアがレティシアの言葉に応えた。普段の彼女とは別人のような凜とした雰囲気だった。……こうして、姫の護衛と言う初任務で重要な任務を言い渡される一行であつた。

玉座の間から外へ出ると、ミーシャが駆け寄って来た。

「ど、どうでした？」

「アンタね〜〜、いくらドジ踏んで迷惑がかかるたって、外で待つる必要ないと思うわよ！？」

「だ……だって……！」

と言い合つティピとミーシャの前にシーティアが歩み寄った。

「何でもいいけど、任務の最中って事……忘れないでね」

「？ ……任務って……早速何か言い渡されたんですか!？」

シーティアはスツと視線を後ろのレティシアに送った。

「よろしくお願いします」

「レ……レティシア姫!? 本物……アワワワ……!!」

泡を吹きそうなるミーシャにルイセが頬を膨らませる。

「もう! しっかりしてよ、ミーシャ!!」

「そうやってんのが、一番失礼よ!」

とルイセとティピに叱られ、とりあえず落ち着く。その様をウオレスがヤレヤレと肩をすくめ、カーマインは静かに見据えていた。

「とりあえず、そう言う訳だから、レティシア?」

「ハイ……! お願いしますね、シーティア!」

そう言い合う二人にルイセとミーシャ、ティピが啞然とする。

「なんて顔してるのよ、貴女達」

「お姉ちゃん……レティシア姫に対して……」

三人を代表してルイセが感想を述べると、「ああ」と返事をする。

「昔から、私は城と交流あったから、レティシアや、シルヴィアとはある程度親しいのよ」

「身分を越えた友情です」

シーティアはアツサリと、レティシアは誇らしげに答える。ソレにティピとミーシャが感心したように溜息をつき、ルイセは不機嫌そうに眉根を寄せるのだった。

25・大陸最高の誉れ

「フフフ……！」

街道を進んでいると、レティシア姫が突然微笑した。

「……どうかしたのか？」

隣を歩いているカーマインが問いかける。

「ゴメンなさい。本当にソックリなのですね、シーティアに」

「……………」

「どうして、服も一緒なのですか？」

「……趣味が一緒なんだ……。アイツが好きな物は俺が好きな物、俺が嫌いな物はアイツも嫌いだ」

「フフ、双子故ですね」

カーマインは静かにレティシアを見つめ、言った。

「……何だか、機嫌が良いようだな？」

思わず、そう呟いたカーマインにレティシアは嬉しそうに微笑んだ。

「外に出るのは初めてなのです。同世代の方や殿方とこうして一緒に旅が出来る……本当に嬉しい」

「……生き方を選べないと言うのは、不自由だ」

静かにレティシアを見つめ、呟く様に話すカーマイン。

「……今のセリフ、私がシーティアと初めて会った時言われましてわ。本当に同じなのですね……貴方とシーティアは」

ニコリと美しく微笑むレティシア。ミーシャ、ルイセが成り行きをジッと見守っている。ソレをシーティアとその肩に座ったティピが呆れながら見ている。

「モテる男は辛いな……！」

ウオレスがニヤリと笑う。

カーマイン達はグランシルを南へ進み、ローランディアの知将と呼ばれるブロンソン将軍が任された砦……ラージン砦へとやって来た。

「ブロンソン将軍」

「コレは……レティシア姫……！ ……このような所へご足労願ひ、申し訳ありません」

「良い……！ この者達のおかげで何の苦勞もありませんでした」
そう言つて一行を見据えるレティシア。

「有り難き幸せ、勿体無きお言葉です」

ウォレスが代表して答えた。

「それにしてもおつきい砦だねー！」

ティピが周りを見回しながら溜息を吐く。ウォレスが説明を始める。

「東にはバーンシユタイン王国、南にはランザック王国。つまりここは、三つの国の接点だ。そして軍隊が通れるような太い道がある重要な防衛地点だ」

ルイセがキョトンとして問いかける。

「ここだけが重要拠点なの？」

「バーンシユタインとの防衛拠点なら遙か北のノストリツジ平原にもあるわ。今、シルヴィアが向かったって陛下が仰つてたし。……」

魔法学院の傍にある山脈の所為で、その中間にはないよ」

「ね？」とシーティアがウォレスに言うと「ウム」と答えた。

「お姉様、ウォレスさん……物知りー！」

「伊達に十何年も城で過ごして無いわ」「俺も同じくらい旅してるんでな」

ミーシャの言葉に二人は得意げだった。

「それで待ち合わせの場所は？」

「は、すぐ東に位置する平原でございます」

レティシアの言葉にブロンソンが答えた。

「では、早速出発します」

「はっ、お気をつけて」
こうして一行は平原へと向かうのだった。

平原にはまだ誰も現れていなかった。

「少し早かったようです……。少し、お話ししましょう」

「は……はい」

優しく微笑むレイシアにルイセとミーシャはカチカチに固まっていた。

「そんなに固くならない方がいいわよ」

「そうですよ、シーティアの言う通り」

リラックスした様子の二人にルイセとミーシャは困ったような表情をする。

「……おい」

ガツとカーマインは背後から襟首を掴まれ、後ろへ引きずられた。振り向くとウオレスの熟知り顔があった。

「女同士の話だ。俺達は後ろにいようぜ」

「……ああ」

「じゃ、アタシは女の子だから行く〜こうつと！」

カーマインの肩からシーティアの方へと飛び移るティピであった。「私、城の外に出て、シーティア以外の同世代の女の子と話すのは初めてなんです。シーティアには色々と城の外の事や、弟のカーマインさん、妹であるルイセさん、貴女の事をよく話してもらいました」

「お……お姉ちゃん」

照れて首まで真っ赤になるルイセにティピが「このこの」とからかう。レイシアはルイセとミーシャ、ティピを見て微笑んだ。

「よかつたら、お友達になって下さい」

「ど……どうしよう!? ルイセちゃん」「私に言わないでよ〜」

動揺するミーシャ、弱り果てるルイセを尻目にシーティアの肩でティピが言う。

「普通に接すればいいんじゃない？ そんな堅苦しい友達なんて聞いたことないよ〜？」

「フフ、良い事言う……！ ティ・ピ」「そうです、ティピちゃんの言う通りです」

シーティア、レティシアが口を揃えてティピに同意すると、ルイセとミーシャも固まりながら会話に入る。最初は緊張していた二人だが、レティシアの優しい人柄に安心したのか、本当の友達のように話し合うようになった。

その様をウオレスが優しく見守る。

「……親父みたいだぜ、ウオレス」
「ウグツ」

カーマインの一言にウオレスは胸を押さえる。そんな男二人等どこ吹く風、女五人は話に花を咲かせていた……。と、その時……。「……どうやら、話の時間は終わりみたいだ」「そのようね」

カーマインが腰のブロードソードを抜くと同時にシーティアも立ちあがって脇に抱いていたグンニグルを掴み、カシイツカシイツ上下についた穂先のブレードを抜く。ルイセが困惑の声を上げた。

「ど……どうしたの、二人とも」
「誰か来た」「ルイセとミーシャはレティシアをお願い」
「お迎えの方じゃないんですか？」

ミーシャが双子に問うと、ウオレスが答え、声を張り上げた。
「この殺気……違うと思うぜ……！ 隠れてないで出て来い……！」
「チッ！ バレちゃしようが無え……！」

いつの間にか、一行を取り囲むように盗賊連中が現れていた。
「アーツ！ コイツら、オズワルドの……！」

そう言うティピの前に、前述の青い鎧の男が現れた。オズワルドだ。

「……またお前か」

「ねえ、いい加減……殺さない？」

「……………！」

「ハイハイ、分かったわよ」

双子の会話を聞いてオズワルドが額に青筋を作った。

「テ、テメエら……！」

「ソレで、お前さんは何をしに現れたんだ？」

ウオレスが気を取り直すかのように問う。ソレにオズワルドは得意げに踏ん返り返り、言った。

「その姫さんに傷一つでもつけりゃあ、テメエら……下手すりゃ死刑っていう寸法よ……！」

「……………下らない理由……。そんな事で私の親友に手をかけると言うの？」

ザワザワ……静かなシーティアだが全身から鬼気を立ち昇らせている。そして金と銀の瞳が煌いた。その髪が、ポニーテールにくくられている。

「ならば……私はお前達を叩きのめす。一切の情けはかけない」

口調がガラリと変わる。リミッターが外された証拠だった。隣ではカーマインも静かに構えている。

「へ……！ 何とでも言え……！ やっちまえ……！」

「……………おお……！！」「……………」

盗賊達が一気に襲いかかって来た。シーティアはグングルを一閃すると、敵陣に斬り込み、横薙ぎの連続攻撃で次々と族を叩き潰していく。

ビビビッ 背後からの弓兵の攻撃は縮地法を使って矢の間を縫うように躲しつつ前進、交差方向気味にズバババアツ 槍を二閃、三閃する。

「ヒ……ヒイツなんて奴だ……！」

「弓を構えてるのを見て加速して薙ぎ払いやがった……！」

盗賊達が怯えている隙に背後に縮地法で周り込み、ズババアツたっ切る。一切の容赦は無い。

「言った筈だ。レティシアに手を出すなら……容赦はしない、とな」
カシィツカシツ 槍は中央から分離し、二振りの刀へと変化した。
銘をランドグリーズ。

「コ……コイツ、武器が変わりやがった!？」

「私のコマンドメンツ……受けて見るがいい」

「チ……チクシヨウ!！」

一人、二人、シーティアが左刀、右刀を振るう度に敵が崩れ落ちていく。

「お姉様……凄おい」「お姉ちゃん……」

「……コイツア出番無えな、おい」

ミーシャ、ルイセが感嘆し、ウオレスはカーマインの肩をポンと叩く。

「ク……クソ……!！」

「残るは……お前一人だ」

シーティアは魔法を使わず、剣だけで敵を叩き潰して行き、オズワールドだけが立っていた。

「な……ナメるなアああ!!!！」

手斧を左右に持ち、二刀流のシーティアに斬りかかる。ズバアツ「グハアツ!！」

相手では無く、一閃で終わってしまった。

「……チク……シヨウ……!!!！」

「コレで……最後だ」

チャキツ 右刀を高く掲げ、シーティアはオズワールドを見据えた。

その時、シーティアの側面から吹き矢が放たれた。

「!!!！」

咄嗟に後方へ退がり、矢弾を躲す。その先にはスキンヘッドの眼帯の男が立っていた。男はコレでもかと言う程に顔を歪めた。

「……なんて様だ!！」

「か……頭ア!！」

オズワールドが文字通り泣き付いた。

「お前達は退がっている!!」

「……お前が親玉か？ 私は今、機嫌が悪い。早々と立ち去れば良
いが、邪魔するなら……斬る」

双刀ランドグリーズがその刀身を青白く煌かせる。

「ナメんなよ、女ア……!! 人数で勝つてると思っなら、この俺
様には勝てねえって事を思い知らせてやる!!」

スキンヘッドの男は右拳を掲げた。すると、光の粒子が現れ、長
い柄を持つ巨大な戦斧を象って具現化した。

「!!! アレって……お姉ちゃん達と同じ!？」

「……バトルアクスか……。しかし、シーティアやカーマイン……
それに俺のに比べると、大した武器では無い。いろいろ有るって事
か」

「え？ ……ウォレスさん、ソレって……」

と、ルイセとウォレスが会話していると、カーマインの瞳が鋭く
細められた。

「……誰か来た……。凄まじい……気だ」

彼は、盗賊達とはまったく違う方向を見据えた。そこに、三人の
男が現れた。二人は鎧を着た兵士だが、馴染みのあるローランディ
アのソレではなく、銀色の重装備。その前にいるのは、ゼノスやウ
オレスにも匹敵する長身でありながら細身の……銀髪の紅い瞳を持
った青年だ。

「……!! 彼は……!!」

シーティアが驚いた表情をし、レティシアがハツとする。

「ライエル様、アレを!!」

兵の一人が青年に話しかけた。青年はこちらを一瞥すると言った。

「何と無礼な……!!」

「!!! 何だ、テメエら……!!」

「野盗風情に名乗る名は無い。去るがいい」

青年は氷のように冷たい表情で冷徹に言い捨てる。

「……テメエから死にたいらしいな？」

「無知とは、恐ろしいモノだな」

「阿呆が！」

青年の嘲りの声に、盗賊達がバトルアクスを振り被り、斬りかかった。ズバアツ 二つの影が交差した時、青年の左手には白柄のジユリアンの長刀にも匹敵する長い刀が持たれていた。右手にはもう一振り、同じ長さの刀が握られている。

ドサアツ 音も無く倒れた頭に、オズワルドは震え出した。

「か……頭を一撃で……化物だ！！」

そう言つと、オズワルドはシーティアに倒された部下たちを連れて逃げだした。

「……………」

カシインツ それを確認すると、二振りの長刀を鞘に戻し、青年はレテイシアの下へ歩いて来た。その動作は機敏にして優雅だった。

「レテイシア姫でいらつしやいますね。私……アーネスト・ライエルと申します。迎えに来ました」

「有難うございます、ライエル卿」

ライエルの差し出された掌に手を置き、そつと彼等の下へ行くレテイシア。

「君達もご苦労だった。後は我々がバーンシュタインまで責任を持つて送り届けよう。式の終わりにここで落ち合おう」

彼はレテイシアをエスコートすると、顔をこちらに向け言った。

「貴方……インペリアルナイトだったのね」

「……君は……そうか。ローランディアの騎士だったのか」

「ええ……。レテイシア姫をお頼み申し上げる、ライエル卿」

「……ああ」

スツと視線を鋭くし、言うシーティアにライエルも真つ向から見返し、頷いた。

「シーティア、皆さん……！ それでは行つて参りますね」

「行つてらつしやい、レテイシア！」 「お気をつけて！」 「まっ
たね〜！〜！！」 「」

シーティアをはじめ、ルイセ、ティピそれにミーシャが手を振る。彼女達はレティシアを乗せた馬車が見えなくなるまで、手を振り続けた。

「それじゃあ、無事送り届けた事を陛下に報告しないとな」

「そうね……！ 行きましよう」

ウォレスの言葉に頷き、一行はその場を後にしようとした。とテ
イピがふと、カーマインを振り返った。

「どーしたの？ 皆、行っちゃっうよ!？」

「……ティピ、俺から離れる」

言っと、カーマインはブロードソードを抜いた。

26・イレイザー

いつ現れたのか、目の前に黒装束のフードを被った男が腰に刀を差して立っていた。

「何者だ……？」

「カーマイン・フォルスマイヤー。あの方に逆らう欠陥品には、消えてもらうよ」

スラアツ 柄にドクロの装飾を施された妖刀が抜かれる。ガキイ

ツ 男の打ち込みに、カーマインも打ちこんで止める。

「！カーマイン！！」

「来るな……！」

ティピが叫ぶのにカーマインも叫び返し、目の前の男と幾度か切り結ぶ。ギンギンッ しばらくして、ブロードソードに……その刀身の所々に紫色の液体が現れ、急速に腐って行くのを確認した。

「な……何よ！？コレ！？」

「……毒……？……お前が……母さんを斬った男か！？」

その毒は、フェザリアンにしか治せぬ毒……。それを理解したとき、カーマインの瞳が煌いた。剣身を下段に構え……斜め下から……

「……！」

ドガアツ 左切り上げを放った。男は剣身を縦にして防ぐも、勢いを殺せず、遙か後方の地面に背中から叩きつけられた。

「やったア……！」

カーマインの強打撃の威力にティピが歓声を上げる。しかし、ブロードソードがその代償としてへし折られた。

「ヘン！ザマー見る……！」

「……いや、まだだ」

「え？」

冷静に言うカーマインを見るティピ。その時、男は土煙の向こうからユラリと立ち上がった。フードがゆっくりと取れ、その素顔が

露になる。

「ええ！？……あ……アイツ！！」

「……やはりな」

男はカーマインと同じ黒髪、金と銀の瞳……そして顔を持った男だった。

「フフ……驚いたよ。まさか、俺を吹き飛ばす程とは……。消去者イレイザーとして……ね、敬意を表すよ」

「……イレイザー？」

訝しげに問うカーマインに男は答えた。

「欠陥品を片づける同族殺し……。ソレがイレイザーだよ。俺の名はルーチェ……。ルーチェ・イレイザー」

「……シュワルゼヤラルフとは……違うな。母さんを襲った仮面の奴等の気配。……ソレを更に歪ませた様な気だ……！」

「……その二人も、俺が片付ける対象だよ。君と同じ欠陥品だ……」
それを聞いたカーマインはルーチェに不敵に笑いかけ、右手のレギンレイヴを指輪から絶刀へと具現させた。

「……そうか、俺だけでは無いのか。……そうだな。確かにアイツらは誰かの命令を聞く輩じゃない……。……俺のように」

「……そう言う事だ。君を始末したら、次はあの二人だよ」
「できるものなら、やってみろ」

カーマインはそう言うと、ルーチェにレギンレイヴを振り下ろした。ギインツ　ルーチェの剣の半ばまで、刃は食い込む。

「へえ……、流石レギンレイヴ……。フルンチングでも止められないか……」

ビュンツ　完全に斬られる前に捌き、距離を取るルーチェ。カーマインは縮地法でルーチェに追いつき、斬りかかる。

「クツ！」

ギギインツ　両者の刀が交差し火花が散る。妖刀の毒を前に絶刀の刃は、腐る所か煌きを鈍らせることなく顕在している。

「フフ……アンタを殺したら、その刀……もらうよ」

「……お前には無理だ」

刀をぶつけ合いながら言うカーマインとルーチェ。両者の動きはほとんど互角だった。バツ　カーマインの懐に飛び込み、胴を薙ぐうとするルーチェ。が……カーマインは紙一重でソレを見切り、刀を振り下ろそうとした。が、チユイーン！　白刃は、先ほどと逆の軌跡を描いてカーマインの喉元に向かつて伸びた。一発でも掠れば、即死。ティピはソレを思っけて目を見開き、悲鳴をあげそうになった。ガアキイツ！

しかし、カーマインは冷静に柄頭でコレを受けると、その力を利用して更に剣速を上げ、右袈裟に左手一本で斬りつけた。

「甘い！」　「！！」

ルーチェは体勢を崩しながら、袈裟状に赤い線を胸に疾らせる。が、かろうじてカーマインの剣をやり過ぎすと、後ろに跳んで間合いを取る。

「……ふう」

血が滴る胸元を見て、彼は口笛を吹く。

「俺のアレを返したのは、君が初めてだよ」

「……岩壁に剣先をこすりつけるとは、奇妙な戯れ事をすると思っただが……壁との距離を測っていたか。いかにも暗殺慣れした邪剣。

……まるで獣の剣だ」

「……いいね……君！　最高だ……」

ウツトリと微笑むルーチェ。その様は妖艶だった……。口許の紫色のルージュと同じ色のマニキュアが妖しく輝く。

「……出来れば、このまま君と殺し合っていたかったけど……。そろそろ、俺も次に行かないと……。ね？」

「……」

突如、ルーチェの刀が紫色の煙を上げ、彼の手から消えた。

「……」

彼はゆっくりと剣を消してカーマインに進んだ。明らかに素手だと言つのに、カーマインは左掌にレギンレイヴを握り、腰を落とす

本気の姿勢で見つめた。一瞬でも注意をそらせば……殺られる。

ルーチェの瞳が……金と銀の間に彩られる……。全身から白い煙を噴き出す。

「ア……アレって……！カーマインやラルフがやった……！！
……何が、どうなってるのよ!?」

泣きそうな顔で言うティピに、ルーチェは妖艶に笑った。瞬間、ルーチェの動きが圧倒的に変わった。

「何よ、あのデタラメな速さは!?」

刀で斬りかかったと思ったら、カーマインの背に移動し、背後から一閃する。ガキイツ 並みの人間では到底対応できない剣閃に、しかし、カーマインはくると反転し、防ぐ。が、反撃する前にルーチェはカーマインの間合いから離れる。

ガキイツ「!!」間一髪で防いだ突き……。見ればソレは槍だった……。

「……な!? 武器が変わった!?」

ティピが叫ぶと同時に今度は矢が三本放たれる。ギギインツ 全てレギンレイヴで叩き落す。ズバアツ カーマインが左に跳んだと同時に岩が裂けた。今度は刀による切り傷だ……。

「テンコマンドメンツなの!?」

「……いや」

超スピードで移動し、目には映らないルーチェを睨みつけながら、カーマインは言った。

「リングウェポンなら無手になる事も、金の粒子が現れない事も無い。つまり……魔法剣とリングウェポンの融合……!」

トツ 静かにルーチェはカーマインの前に現れた。

「俺の魔方剣は可能性……」

彼はイメージすると魔方剣は槍となって姿を現した。そのリーチを利用してルーチェは攻撃を仕掛ける。ズドドオツ 三連突きを見事に捌くカーマイン。

「フフ……掠っただけでもあの世行き」

「……当たらなければ、いいだけだろ？」

ギギインツ 懐に飛び込み、十字斬でルーチェを後方へ退がらせる。距離を置くと槍は消え、ナイフが彼の指に挟まった。ルーチェは怪しげな微笑でカーマインに次から次へとナイフを投げて来た。紙一重の所で避けて行く。

宙返りし、背後に着地、側宙、バク転。周九地方で巧みに避け、ナイフの合間を縫うようにしてルーチェへと駆ける。

「フフ……」

しかし、ソレは誘いだった。カーマインの眉間にルーチェのナイフが放たれる。カーマインは避けられない。

「カーマイン！！」

ティピが悲痛な声を上げる。が、カーマインはいつの間にか納刀したレギンレイヴの柄に右手を握らせ、宙のナイフを一閃し、バキイッ 叩っ壊した。

「よっしやあ！！」

ティピが思わずガッツポーズを取るが……、粉々に砕けたナイフは爆発した。ズドオツ 煙からカーマインが左手と両足を引きずりながら後方へ跳んだ勢いを殺して、着地する。

「フフ……フフ……！ 最高だよ、カーマイン！！ 君は俺の想像を遙かに上回っていた……。因子の力抜きでここまでやるとは……！！！」

「……チ……！！」

ガクウツと片膝を突き、ルーチェを見上げるカーマイン。

「あの爆発にも毒が！？」

「フフ……神経系の毒ガスを発生させた……。しかし……、本来ならアレで死ぬんだ……。咄嗟に縮地法で避けるとは……凄いや……。ルーチェの右手にフルンチングが具現化した。

「だが……コレで終わりだ」

チャキツと刀を頭上に掲げるルーチェ。

「させるか、ティピちゃ……んキイーク！！」

「邪魔だよ」

「きゃあ！」

バキィッ 蹴りを放とうとしたティピをアツサリと地面に叩き伏せる。

「……ここで見てなよ。君の仲間だと思っていたバケモノの最期を」

「………やったな」

「？」

ルーチエがうずくまったまま呟いたカーマインを見る。その身体から圧倒的な気が放たれていた……。白い煙が体中を覆い、瞳は金と銀の闇を彩る。

「ウオオオオオオッ！！」

彼から発せられたのは、獣よりも力強く恐怖を抱かせる異形の咆哮であった……。理解したルーチエは我知らず、一步退がる。

「バ……バカナ……！ ゲヴェル様……！？」

「……カーマイン？」

ティピが茫然とカーマインを見つめる。怖かった。一言でも発せば殺される……。それほどの殺意が、闇が、彼から放たれていたのだ。彼女は必死になって歯が鳴るのを耐えた。そして……彼は消えた。シュンッ

ズバアッ 次の瞬間、ルーチエの胸が裂けた。「ガハアッ」血を吐き、うずくまるルーチエ、前方を見ると同時に背後から強烈なソバットを入れられ、地面に叩きつけられた。ドゴオッ 土煙が舞う。その様は先程の強打撃の比では無い。

「馬鹿な……何故、欠陥品にコレだけの力が……！？」

背後に気配を感じ、ルーチエは異形の力を使って全力で斬りかかる。

「う………うおおおおお！！」

次の瞬間、ルーチエには宙に無数の斬線が見えた。風が、彼の身体をすり抜けた。ザンッ そして……奴は背後に立った。ビュンッ 絶刀を宙に薙ぐ。ソレが合図であったように、ルーチエの身体が

ら無数の紅い線が生じ、彼は己の出した血の海に前のめりに沈んだ……。
「ク……ソ……！俺は……負けない……！俺こそが……ゲヴェ
ル様の最高の作品……。他に関心を持たず、全てを殺す……。俺こそ
が……！！」

「……ティピを傷つけた代償、貴様の安っぽい命で払うがいい！」
その姿を見て、ティピは口を開いた。音を出せば殺されると言う
恐怖を呑みこんで、ティピは……叫んだ。

「カーマイイイイン！！！！」
レギンレイヴは、その声を聞くと同時に、下ろされた。鞘に納め
られ、リングへと戻す。カーマインはルーチエをゴミでも見るよう
に一瞥し、地面に倒れ伏したティピに向かう。

「……命拾いしたな？ 完成品」
去り際、ルーチエの耳にそんな言葉が聞こえた……。カーマイン
のいなくなった場所でルーチエは……しばらくそうしていた……。
「……殺してやる……。……奴を殺す為なら……俺は何でもしてや
るよ……」
いなくなった背を……狂眼の闇がジツと見据えていた……。

ティピはジツとカーマインの両手に包まれながら、窺うように彼
を見ていた。

「……ティピ」
「な……何？」

しばらくして、カーマインが声をかけて来た。怯えを隠し、ティ
ピは問い返した。

「……俺は、何をやった？」
「カーマイン……？」

「……俺と……同族の奴が、お前を地面に叩きつけてから……その

後の記憶が……無い……」

ティピは小さな瞳を大きく見開いて、カーマインを見据えた。泣いてなどいない……。しかし……表情こそ、いつも通りだが……

「……だが、殺そうと……した。……俺は……殺しを……俺は……殺戮を望んだ……！ ソレは……分かる。教えてくれ、ティピ……お前の瞳から見て、俺は……人間か、……それとも……」

「アンタは、アンタだよ……」

次の瞬間、ティピは思わず叫んでいた。それほどまでに、今のカーマインは消えてしまいそうなほど……弱かったからだ……。

「あんな奴と、アンタ……全然似てないわよ……！ アンタの方が格好……！！」

思わず口走りそうになり、頬を紅くしながら、ティピはそっぽを向いた。

「アンタはさ……、ルイセちゃんの兄貴で、シーティアの弟……、マスター・サンドラの息子で、アタシの……下僕……」

背中から光の羽根を生やし、両掌から飛び立つとカーマインの目の前に宙で止まり、腰に手を当てて、ニンマリと笑う。

「以上……！ 文句ある？」

「……フン」

「さ、皆の所に戻ろうよ……」

いつもの表情に戻ったカーマインを見、ティピはニコツと笑う。

カーマインはソレに「ああ」とだけ返し、歩を進めた。ティピが前を向いたのを確認し、余りにも優しく美しい微笑みを浮かべて。

「……もし、力に飲み込まれたその時は……お前が殺してくれ……。シーティア」

その呟きは風の音で消えてしまう程に静かで……小さかった。

27・分岐

謁見の間。

一行は、レティシア姫を送り届けた事をローランディア王に報告した。

「よくやってくれた。ではシーティア、お前の弟が見たという異形について調べてもらいたい。やってくれるな？」

「ハッお任せ下さい」

シーティアは代表して答え、その場を後にした。

シーティアは母の待つサンドラ邸に顔を出し、アルカディウス王からの命を告げた。

「でも、どこから手をつけるの？」

「それなら、俺の傭兵団が警護していたヴァルミエという鉱山街がある」

ルイセの言葉にウオレスが答えた。

「更にバーンシュタインに、俺が利き腕と両腕を失ったクレインという村がある。どちらを先にするかって話だな？」

「……まずは、ローランディアのヴァルミエからにしましょう？」

「よし」

シーティアの発言にウオレス達が頷いた。と、カーマインがシーティアの前に立った。

「? どうしたの」

「シーティア、俺は別行動をとらせてもらおう」

「?」

カーマインはザワツと騒がしくなるウオレス達を見ず、シーティアを見つめた。

「……ラシエルへ向かう」

「シュワルゼに会いに行くのか？」

「ああ」

「好きにしる」

シーティアの言葉に、ルイセが叫んだ。「お姉ちゃん!!」

「ルイセ、コイツのやりたい通りにしてやれ。……だが、用事が済んだら戻って来い……いいな？」

「……ああ」

それだけ述べるとカーマインはサンドラ邸を後にした。

「ティピ、アイツの事、頼んだわよ？」

「任せてよ!! じゃ〜〜ね〜〜!!」

ティピも元気良く、カーマインについて行った。シーティアはソレを見て、フウと息を吐いた。と、そこへ近づくと女性がいた。

「シーティア」

「母さん？」

サンドラが静かにシーティアの前に立った。

「右手を出しなさい。……貴女の封印を解きます。……貴女のレギンレイヴを」

「レギンレイヴを抜くほどの相手じゃない」

「何があるか分からない。ソレに……カーマインの抜けた穴を補うには、レギンレイヴが必要です」

「……ありがとう、母さん」

バアツ 母のかざした両掌の光が、シーティアのリングを粒子に変える……。

「コレ……ってお兄ちゃんの……!!」 「お姉さまのレギンレイヴ……?」

シーティアの手にあるのは、カーマインとまったく同じレギンレイヴが…… 絶刀が握られていた。ただし、その柄はカーマインのソレよりも倍近く長い。

「私の専用のレギン……。レギンレイジ……。コイツを手にするなら、この髪は邪魔ね……」

そう言つと、シーティアはジャケットのポケットから紐を取り出し、髪を高く結び上げ、後ろに垂らした。

「ポニーテール……！」「お姉さま、素敵です……！」

ルイセ、ミーシャが見蕩れる。それほどにシーティアの表情が変わつたのだ。シーティアは、レギンレイジをリングに戻すと、妖艶と微笑した。

「さ……行こう……！」

シーティア一行は、ヴァルミエへと向かつた……。

鉦山街ヴァルミエは、男たちの街だつた。行き交う人々は筋肉質で、浅黒い肌を持ち、野太い声で笑い合っている。

「……懐かしいな」

ウオレスはウムと頷いて街の空気を感じている。岩山の上に街を創つた……そんな武骨な街には、シーティア達は浮いて見えた。

「……なんだか、凄い所だね」

「ウン……！ いかにもオジサン達の街つて言うか……！」

ルイセとミーシャの言葉を尻目にウオレスは楽しそつだ。

「……さて、学院長に許可をもらったはいいが、何か頼まれたよな？」

「え……と、何でしたっけ？」

ウオレスは「オイオイ」と、ミーシャを呆れて見つめた。

「旧坑道で、鉦山から取れる魔水晶を横流ししているという噂がある。ソレを調べて来て欲しいと言つことよ」

「お姉ちゃん」

シーティアが二人の会話に答えた。ルイセが振り返つてくるのに微笑み、ウオレスを見る。

「それで？ 旧坑道つてのはどこなのかしら？」

「ああ、ついて来い」

ウオレスの案内で一行は早速、鉦山の旧坑道へ向かつた。

「ここは俺たちが調べている！」

「調査なら上でやるんだな！」

旧坑道の入り口で二人の見張りに無理やり追い返されてしまった。
「怪しいな……！」

ウオレスは遠目に二人の見張りを睨み付けながら言う。

「うん、私達を見るなり追い払うもんね」

「でも……、どうやって確認するの？」

「……それは……う……ん」

「見つからないで、中に入る方法って無いかな？」

ルイセとミーシャの言葉にシーティアがフムと頷いた。

「ルイセ、テレポートで母さんの所へ」

「？ どうしたの、お姉ちゃん」

「母さんの書棚に透明になる薬って言う本が置いてあったの」

「！ そうか、ソレを使って中に忍び込むんだね」

「そ！」と微笑み、ルイセの頭をなでる。

ローザリア。

サンドラの研究室に一行はテレポートして来た。

「？ どうしたのですか？」

サンドラはバルコニーで本を読んでいる姿勢で突如現れた娘達に
問う。

「なるほど……、確かにその方法なら誰にも悟られずに済みますね」

「？ ……ヤケに嬉しそうだけど、何？」

シーティアの怪訝そうな声にサンドラは慈愛に満ちた表情で返した。

「お前が、無駄な血を見ないと言ってくれたのが嬉しいんです」

「……別に。私はただ……」

「カーマインが居たら、きっと貴女と同じ事をしたでしょうシーテ

「イア。無闇に人を傷つけるのはやめなさい」

「……母さん、悪いケド、本はどこ？」

「……ついて来なさい」

「ヤレヤレと苦笑し、シーティアを連れて行くサンドラ。やがて、シーティア達はウオレス達の待つテラスへ戻って来た。

「分かったのか？」

「ええ。クリアノ草という薬草以外はここで用意したわ」
布袋を掲げてウインクするシーティア。

「クリアノ草か……。どこにあるんだろ？」

「ブレーム山っていう山だよ」

ルイセの言葉にミーシャが答えた。皆一斉に彼女を見る。

「その草なら、ブレーム山にあるって叔父様から聞いた事がある。

その本の著者が学院の教授だし……」

「ブレーム山……ヴァルミエと目と鼻の先だ……！」

ウオレスがフムと頷いた。

「早速向かおう、お姉ちゃん」

「そうね」

シーティアが頷く。とサンドラが前に立った。

「ちょうど良かった。お前に渡すモノがあります」

「？……何かしら？」

「入って来なさい、ピティ」

サンドラの言葉に、妖精を模したホムンクルスが扉から入って来た。
た。

「？……ティピ？」 「お兄ちゃんと一緒に行ったハズじゃ……」

「あの……その……」

シーティアとルイセの言葉にしどろもどろになる妖精。

「彼女の名はピティ。ティピのデータから創り出したホムンクルスです。本来なら、ティピ一人で貴女とカーマインを見るには十分だったのですが、別行動を取ってしまったので……。シーティア、彼女をお前につけます」

「ピティと言います。……よろしく願います、シーティアさん
ティピと違い、髪の色がグレーで服装も、違う。髪の長さもティ
ピよりは長い。だが……何より……

「……ティピと同じ顔、同じ声なのに……なんて素直なのかしら……
…！」

シーティアは感動しながら、ピティを抱きしめた。

「……気に入ってもらえて何よりです、シーティア」

「……ぶう」

その様をサンドラは呆れ気味に、ルイセは頬を膨らませて見てい
た。

ズドオツ バシャアンツ 激しい激突音と共に巨大な水しぶきが
保養地ラシエルの湖で立った。

「シュワルゼの勝ちイー！」

ティピの威勢の良い勝ち名乗りに、子供達が歓声を上げる。

「シュワルゼ兄ちゃん！！」「カーマインお兄ちゃん！！」

ザバアツ 水しぶきを上げて、カーマインは静かに地面に足を
つける。水が滴り落ち、彼をより一層艶めかしく、美しく見せていた。
ティピが話しかける。

「カーマイン、負けがこんでるわね」

「……そうだな」

ビュンツと刀・レギンレイヴを払って鞘に納め、リングへと戻す
シュワルゼ。

「テメエは目が良い分、ソレに頼って行動している。だから、一瞬
でも相手の姿を見失う……つまり、目晦ましをされるとほとんど相
手の動きが分からなくなる」

「……お前は違うのか？」

「当たり前だ。だから」

スツと瞳を閉じるシュワルゼに、カーマインがハイキックを放つ。

バキィツ 片手で止めるシュワルゼ。カーマインは廻し蹴りを上中に散らし、ローリングソバットを最後に放つも全て紙一重で見切られ、ゴォッ「!!」反対にシュワルゼの爪先が鼻の前で止められていた。

「……こういう事だ。見てから反応する事は、見なければ次の動きが出来ぬという事。ソレでは、実力を100%出し切れん」

「……」
「見ると同時に反応できるお前だからこそ、この弱点が生まれたのだ。良い事を教えてやる。俺にコレを悟らせたのは、人間だ」

「……………！」
と、そんな二人の元へ「カーマインさん、シュワルゼさん！」という声が届いた。

「……フン、飯時だ。………続きは後だ」

「ああ」

シュワルゼは子供達と共に保養所へと向かう入れ替わりにカレンが現れた。患者であったカレンはラシエルで看護師見習いの仕事をしていた。

「カーマインさん、ティピちゃん、ご飯ですよ」

「うん、有難う！ カレンさん!!」

「……あら、カーマインさんビシヨ濡れじゃないですか」

その言葉を聞いて、ティピがにんまりと笑う。

「まあ、してやられたのよ！ コイツ、進歩が無いからさあ!!」

「……まあ、直に追いついてやるさ」

カーマインは不敵に笑うと、カレン、ティピと一緒に歩き出そうとしていた。が、

「……済まない、用事を思い出した先に行ってくれ」

「え？ カーマインさん？」「ちよつと!!」

カーマインはソレだけ言うとその場を去って行った。

「……どうしたのかしら、カーマインさん」

「……………ゴメン、カレンさん！ アタシ、ちよつと!!」

「あ！ ティピちゃん！！」

ティピもカーマインを追って行こうと飛び、「ぐうぐう」

「……アイツ、後でティピちゃんキックだ……！！」

鳴る腹を押さえながら、ティピは去って行った。

28・デュラン

カーマインはラシエルを出て、街道のひらけた場所に足を踏み入れた。

「どーしたのよ、カーマイン!!」

「……ティピ」

バキィツ 凄まじい音が響き渡り、カーマインは後方へ仰け反った。伝家の宝刀ティピちゃんキツクがまともにカーマインの額に入ったのだ。

「フウ、スツキリした!!」

「……お前な」

満面の笑みのティピをうらめしげにカーマインは見据える。

「お昼でご飯抜いて来てんだから、コレぐらい当然よ!!」

えっへんと胸を張る。そんなティピに「ヤレヤレ」と溜息をついてから、レギンレイヴを具現させ、腰の鞘から抜く。

「……? ……誰か、いるの」

「ああ……!!」

ティピは静かにカーマインから離れた。どこから現れたのか、いつの間にか、カーマインの前に一人の騎士が現れた。仮面をつけた異形の騎士。

「……何故、一人になった」

「その方が良いだろう、お互いに」

静かな仮面の騎士にカーマインも静かに返す。騎士は背中に背負った剛刀を静かに抜いた。シュワルゼのモノよりは短いが、明らかに刀としては重厚で長い。

「……私の名はデュラン」

「カーマイン・フォルスマイヤー」

「……参る」

騎士、デュランは静かにカーマインへと駆け出した。ギィンツ

剣撃の音が激しく辺りに響き渡る。

「……クッ！」

「カーマイン!!!」

ギインギインツ 剣を打ち合う度、カーマインが一步步後退して行く。

「……どうした、その程度か？」

「なめるなよ？」

ギインツ 罅迫り合いになった瞬間、ビュンツ 縮地法にてカーマインは一瞬でデュランの背後に廻り込み、刀を一閃した。ガアキ
イツ 振り返り止めるデュラン。

「……どういっつもりだ？」

「？」

デュランは静かにカーマインを見据える。ギギギインツ 三合打ち合い離れる。手が痺れていた……、デュランの剣撃は、シュワル
ゼやゼノスよりも更に重い。カーマインは一端刀を納め、右手で柄
に触れる構えを取った。

打ち合いは不利。ならば一閃にて、決める。デュランはソレ
を知ってか知らずか、棒立ちのまま歩いて来た。ザツ 踏み入れた
瞬間、鯉口が切られた。ギインツ 風がデュランの目の前を通り過
ぎた。ジュリアンの神速抜刀術。しかし

「な!?!」

その一撃は剛刀を縦にして受け止められていた。見えない、見切
れない一撃をデュランはアツサリと防いだのだ。ズバアツ 次の瞬
間、カーマインの胸が逆袈裟切りに血を吹いた。

「ガハッ!!!」

片膝をついたカーマインに更なる上段からの一撃! ガアキイツ
そのまま刀を横にして受け止める。次の瞬間、間髪入れずに左廻
し蹴りがカーマインの側頭を薙いだ。ドガアツ 街道の脇の木々を
へし折りながらカーマインは激突した。

上げた足を静かに下ろし、カーマインを見据えるデュラン。ビュ

ンツ 次の瞬間、うづくまったカーマインが消えた。ティピが縮地法と気づいた時には、宙に無数の斬閃が描かれ、風を巻いてデュランに襲い掛かる。

「行つけえ、連続攻撃だ!!」

ズバババアツ 風がデュランを通り過ぎ、カーマインが剣を払った姿勢で止まった。デュランは……まったくの無傷……。

「嘘!? アレを全部……」

「防いだか、まあ……あんな手打ちではな」

「……」

ティピの後ろにいつの間にか、シュワルゼが立っていた。その隣にはカレンもいる。同時、カーマインが片膝をつき、全身を切り刻まれ、血を吹いた。

「シュワルゼ、カレンさん!」

「……フン、中々の相手のようだな」

シュワルゼは腕を組んでジツと二人を見据える。面白そうにデュランを見つめる。

「シュワルゼさん、カーマインさんの手当てをしないと!」

「引っ込んでいる。コレは奴の鬨いだ」

予想外のシュワルゼの言葉にカレンが絶句した。

「アンタ、何言ってるのよ!?!」

そんなシュワルゼにティピが吼えつけ。同時にカレンが彼を睨みつける。しかしそんな二人の耳に声が聞こえた。

「シュワルゼの言う通りだ。退がっていてくれ」

「……フン」

カーマインは静かに刀を左手に持ち、腰を落としてデュランを見ながら、ティピとカレンに先の言葉を告げた。

「……カーマインさん」「……アンタ」

もの言いたげなティピ達をよそに、カーマインはデュランに刀を構えなおす。まるで退く気の無い意志を相手に示すかのよう。

シュワルゼはそんなカーマインを愉快そうに見据える。カーマイ

ンの瞳が静かに煌き、リミッターが外される。

「……行くぞ」

「本気に成ったとて、お前に勝ち目は無い」

シュンツ　一瞬にてカーマインはデュランの懐に踏み込んだ。「

！」左手のレギンレイヴが真上から振り下ろされる。彼はソレを
読んだ。刀を横にする。

「上！」

ぎいんつと止めると同時に反撃しようとして、「！」ギインツ
気付き、縦にして横薙ぎを止める。

「……唐竹と同様に出される左薙ぎ……神速の十字斬……。中々の
攻撃だが、私のガードは崩せない」

「……………」

ガオンツ　二つの刀がぶつかり合い、ドガガガアッ　打ち合い
になる。先程までは押されていたカーマインだが、全く互角に切り
結んでいた。シュワルゼとの修行の成果か、ソレとも才能か。カー
マインには、デュランの剛剣を止める腕があつたのだ。斬り合いが
互角なら、手数ラッシュの勝負……。今一度、カーマインは“連続攻撃”を
仕掛けた。神速の連続攻撃。ただし、今度は手打ちでは無い。全体
重を乗せ、一打一打に全神経を集中させる。

「……フン、分かった様だな。ソレでいい……………」

「？　何がソレでいいの？」

「……奴は今までスピードだけを重視して、ラッシュを繰り出して
いた。確かに、相手に反撃させる暇を与えずに攻撃を繰り返すには、
スピードは必要。しかし、手打ちでは威力の欠けた威嚇にしかなら
ん」

「でも、さっきまでと同じだよ！　全部防がれてるじゃない！！」

「……本当にそうか？」

シュワルゼはニヤリと邪悪に笑い、カーマインを顎で指す。

「……あ！」

カレンが声を上げる。徐々に徐々に、デュランのガードが崩れ、

体制が崩されて行っている。ティピもソレに気付く。

「行ける、カーマイン!!」

「……相手が、並ならば……な」

「え?」

楽しそうに口元を歪めながら、シュワルゼが言うのと、ドガアツ
凄まじい音と共にカーマインが弾き飛ばされるのは同時だった。

「! カーマインさん!!」

地面に溝を作りながら、彼は倒れた。そこへ、デュランが剛刀を
かざす。その剣先から、ズドオツ 魔法の矢が放たれる。間一髪で
両手を地について、逆立ちし、そのまま大きく後方へ跳躍してかわ
すカーマイン。

着地と同時に縮地法で懐に飛び込み、ラツシュを仕掛けようとするも、

「!!」

カーマインの目の前にデュランが縮地法で現れた。大きく振り被
られた必殺の唐竹……。先ほどカーマインを弾き飛ばしたカウインタ
ーであった。ゴオウツ カーマインも真っ向から横薙ぎを叩き付け、
止めようとするもドガアツ 「!!」 圧倒的な一撃に弾き飛ばされ、
地面に背中から叩きつけられる。と同時にデュランは右手のリーヴ
エイグを天に掲げた。

「コレで……終いだ」

炎が地面に魔方陣を描き、爆発した。ドゴオアツ

「……ファイアーボールの高位魔法……フレア……か」

「そんな……カーマインさん……」 「……あ……!!」

爆炎に飲まれたカーマイン。デュランは静かにソレを見据え、ソ
レからシュワルゼを見た。口の端を邪悪に歪め、見返すシュワルゼ
……。

「……次は、お前だ……シュワルゼ」

「……待ちなさいよ……!!」

シュワルゼに剣をかざしたデュランに、ティピが怒りの形相で睨

みつけた。

「許さない……アンタだけは、ゼツタイに許さないから!!」

「ティピちゃん!!」

デュランに今にも襲い掛かろうとするティピをカレンが押さえた。
「放して……! 放しなさいよ!!」

暴れるティピを両手で掴み、胸に抱きしめるカレン。シュワルゼは淡々としていた。

「どうでも良いが、戦いの最中によそ見していいのか?」

「……何?」

次の瞬間、炎の熱線がデュランに放たれた。ズドオツと同時にデュランのフレアが真つ二つに切り裂かれる。

「!?!? 魔法剣だ?!?!」

ズドオウツ 剛刀で何とか防ぐも当たっていれば、まず無事では済まなかっただろう……。ソレ程の一撃だった。

「……貴様……不死身か!?!」

デュランは、仲間内でも放てる者は数える程しかない魔法剣を放ったこの男に畏怖した……。

「カーマインさん!!」

カレンが花の咲いた様に微笑み、ティピは呆然と彼を見る。彼は全く表情を変えず、冷徹とした眼差しでデュランを見据える。満身創痍の体を全く感じさせない気迫と覚悟が彼の眼から放たれ、全身に満ちている。カチンッ レギンレイヴを納刀し、抜刀の構えを取るカーマイン。

「……何故、立てる?」

「お前の殺気が、シュワルゼだけでなくカレンさんとティピにまで向けられたからだ……。お前は、俺とシュワルゼを殺した後……その二人も殺すつもりだ」

「ソレが、任務だからな」

「ならば、お前を俺は倒す!」

瞬間、縮地法で両者消える。ズバアッ 二人の影が交差し、互い

に背を向けたまま止まる。刀を繰り出した姿勢で止まっている。デュランは上から両手で振り下ろして、カーマインは横薙ぎに払った姿勢で……。

「……何故だ？」

互いに振り返り、構え合う……。デュランの袖から地が噴き出した。

「……先程もだ。背後を取ったお前は……何故、急所を狙って来なかった」

「……あ！」

ティピが気付いたようにカーマインを見据える。序盤の頃、カーマインは一度だけ、デュランの背後を取っていたのだ……。カーマインは淡々として言った。

「不殺の信念を貫いているんな」

「……不殺だと？ 命のやり取りをしているのに、不殺だと？」

「ああ」

「……その信念のために自分が死んでは意味が無い。生き残るために殺す。勝つために殺す。食うために殺す。ソレがこの世界の真理だ」

「お前の物差しで世界を測るな」

静かに告げるデュランにカーマインは冷静に返した。

「殺すだけが、勝つことじゃない」

チャキツと構えるカーマインにデュランは仮面の奥の目を細める。カーマインの眼は決して揺るがない。揺るがぬ信念を悟ると、デュランは語った。

「ならば……生来必殺の私の信念を打ち砕いて見る、カーマイン」
デュランの全身から白い煙が噴き上がる……。その瞳は金と銀の間に彩られていた。異形の“気”……“異質な力”……バケモノだ。カーマインは静かに刀を構える。

「……言われるまでもない、コレ以上好きにはさせない」

そう宣言したと同時に、カーマインから圧倒的な白い煙が放たれ

る。煙はやがてカーマインの体を覆い……圧倒的な光へと変化した。
「……なんだと!?」「カーマインさん!?」

その全身を覆う神々しい光の中、ソレと反比例するかのよう
にカーマインの瞳は絶望的な……救いようの無い金と銀の闇が彩られて
いた。バリバリッ 彼の体を覆う光に纏う異形の蒼き雷……。そし
て闇の中にある確かな信念……!!

「フン、昨日よりは今日……今日よりは明日といった強さだ……」

「? どういう意味なの?」

「奴は、俺と同等の力に目覚め、ソレを使いこなす為にここへ来た。
だが、奴と俺では決定的な違いがある。俺の“力”……強さは俺一
人のモノだ。最強を目指す俺だけの……! だが、奴は違う。仲間
の為……他者の為に力を振るう。人間の情……強さ……ソレがアレ
の力の源か」

「……カーマインの力の源……!」

シュワルゼはニヤリと笑い、自分と同等の存在を見据える。

「だが、だからこそ……我が宿敵ともに相応しい」

勝敗は既に決していた。カーマインの力は、己の主よりも強いイ
レギュラー。シュワルゼと同等だと理解した。勝てるハズもない……
……。なのに……!

「……何故、構える? 貴様に勝ち目が無い事は、誰よりも貴様自
身が知っているハズ……何故退かぬ」

「だからだ」

いつもよりも低く、邪悪で威圧的な声がカーマインの口から放た
れる。聞いているカレンやティピにすら、畏怖の念を抱かせる……
しかし、どこか魅力的で惹きつけられるような声……。デュランは
そんなカーマインに静かに返した。

「だから、私はお前と闘う……」

スウツとカーマインは瞳を閉じ、己の力を封じ、元の状態に戻っ
た。

「どういっつもりだ?」

「……いいから、かかって来い。人のみが持つ無限の可能性を教え
てやる」

「……いくぞ!!」

ビュンツ 異形の力を放つデュランは、人の限界を遙かに超越し
た動きを見せる。

「お前の倒し方は分かった。ソレも二つ……な」

「ほざけ……!」

ギギンツ 剣に弾かれ、カーマインが吹き飛ばされる。その敵
に切っ先をかざし、マジックアローを放つ。床でも壁でも平気で射
抜くその威力は、異形の力で倍増された結果だった。サツと左にか
わし、カーマインは突っ込んでくる。デュランはソレに倍する動き
で消える。ギギンツ またしても打ち合うリーヴェイグとレギンレ
イヴ。ガオンツガオンツ 凄まじいデュランの一撃をカーマインは
流し、捌き、己の絶刀を叩きつけていく……!

「……あの時と同じだ……! ジュリアンとの闘いで……暴走した
シーティアを止めた時と……!」

どんどんカーマインの動きが冴え渡って行く……! 美しく……
全てを魅了していくその姿……! その姿は……敵であるデュラン
さえも飲み込むほどに……

「ア……あれ……?」

カレンは涙も無く涙を流していた。彼の斬閃を見る度に心を打つ
何かがあった……。ガオンツ 中央でぶつかり合い、カーマインと
デュランは顔を寄せ合う。

「どうした……? 私の信念を打ち砕くのではなかったのか!？」

その言葉にカーマインは不敵に笑うと、剣に魔力を集中させた。

「……ぬ!？」

やがて光がレギンレイヴより発せられる。「チ!」舌打ちし、後
方へ縮地法で逃れるデュランに緑色の聖光が放たれた。

「ホーリーストライク!」

ホーリーの魔法剣か!?

理解したと同時にリーヴェイグで防ごうと縦に構え、片手で刀身を峰に添える。ズドオウツ

「……なんだと!？」

衝撃そのものは完全に防いだ……。元々、ホーリーは悪霊系、悪魔系のモンスターに有効で、人間にはほとんど効かない。せいぜい、目晦ましのできるマジックアローに毛が生えた程度の魔法だ……。

「だが、ゲヴェルの兵士である者には、この魔法は強烈だ……。なまじ眼が良い分……な」

カーマインはうづくまるデュランを尻目にチラリとシュワルゼを見た。彼は邪悪な笑みを返してきた。

「まして……今のお前は“力”によって身体を強化した状態にある」「うおおお!!!」

カーマインの声を聞き刀を振り下ろしてくる!　ズドオアツ　地面が衝撃で割れた。ティピとカレンが息を呑むも、カーマインは静かに横に一步退がって見切っていた。

「常人以上の苦痛だ。完全に視力は潰される……もつとも、再生能力のあるお前らには、大した問題でも無いが」

カーマインは静かに刀を構えた。
「目で動きを追う分、目が見えないと全く相手の動きが分からない。これは致命的だ」

そう……カーマインは人の力で闘っている為、見てから反応したとしても、デュランの動きに間に合わないのだ。見ると同時に避ける動作が出来るカーマインでも、見えなければ避けられない……。だからこそ、カーマインはあえて人の力で挑み、会得したのだ……。心眼を……!!

「……フン、もう覚えやがったか……!　……とんでもない奴だ……!!」

邪悪に笑うシュワルゼ……明らかにカーマインの強さを愉しんでいる……。

「……さあ、そろそろ見えて来ただろう?　勝たせてもらおうぞ!」

「……同じ手は二度と通じんぞ」

「二つ目の弱点が、お前の敗因だ!!」

言つと同意にカーマインが駆けた。縮地法で力強く走りこんで来る。ガアキイツ　ぶつかり合う……何度も何度も己の信念を刀に込めてぶつけ合う。やがて、カーマインが弾き飛ばされた。

「!!　カーマイン!!」

「カーマインさん!!」

デュランが縮地法で消え、カーマインの背後をアツサリと取る。

しかし、カーマインも反応していた。デュランは頭上に大きく振りかぶった剛刀を両手で振り下ろした……！　ゴオウツ

「終わりにしてやるっ」

そんな声が、デュランの耳に届いた。カーマインのレギンレイヴが右下から左上に斬り上げられた……。二つの刀が激突し、リーヴエイグは真つ二つに斬られ、そのまま絶刀はデュランの脇腹に吸い込まれていった……。ドゴオアツ

「ガハアツ」

天高く巻き上げられるデュラン……！　カーマインの信念を乗せた“必殺”の強打撃がデュランの武器のみを斬ったのであった……。5秒ほどしてドゴオツ　地面に叩き付けられるデュラン……。ソレを静かにカーマインは見下ろした。

レギンレイヴ……カーマインの意志を反映する刀……。カーマインが斬ろうと思えば何物をも斬り捨てる絶刀だが、斬る意志が無ければ鉄の棒と成る……。決して折れない鉄棒にして万物を斬り捨てる絶刀……。ソレがレギンレイヴ。

「……お前はここ一番……とどめを刺すとき、必ず両手で振り下ろす唐竹を使ってくる。だが、必殺の一撃はそう何度も見せるモノではない。何故、同じ手を何度も見せた？」

「……生きるのに、飽いたからだ。ゲヴェル様のために闘い、死ぬ。最初はソレで良い……正しいと思っていた。人間も、グローシアンも、フェザリアンも殺して来た……。だが、その度に仲間が……。俺

の兄弟達も死んでいった……。ソレも仕方無いと考えていた。創造主には逆らえぬと……」

カーマインは静かにデュランの言葉を聞いていた。

「逆らう者が現れた……。イレギュラーだ。シュワルゼは厳密に言えば、俺達とは違う……。彼はオリジナルより産み出されたファースト……。オリジナルを上回る目的で産み出された……」

ティピがシュワルゼとカーマインを交互に見る。カレンには何のことか理解できない。だが、ティピは感じてしまった……。聞いてはいけない事を……！

「故に、彼には自分で生きる目的があつた、強さという目的が……自我があつたのだ。ゲヴェル様はソレが原因と判断し、シュワルゼのクローン体に自我を芽生えさせず、己の波動抜きでは生きて行けない存在を創つた」

「……ソレが、俺達か？」

「そうだ」

ティピの顔が真っ青になっていた。カレンがティピを手に取り、「大丈夫か」と聞いて来るが、まるで聞こえていなかった。薄々感じていた事だつたから……。

「だが……その中からイレギュラーが生まれた……。ラルフ・ハウエルだ。奴はどういう訳かゲヴェル様の思考を断ち、同族のゲヴェルを斃し、その波動を取り込み、レギンレイヴを奪って去って行った……！ ソレからだ……。レイザーが生まれたのは……。ほんの少しでも裏切る素振りのあるモノは殺せ！」と

「……………」

「そして、俺は同族を殺めて来た……。だが、そこに何かがある？

何も無い……。自分達でさえ……。お互いを信じる事さえできぬ仲間……！ 故に、俺は……。アンタやシュワルゼ……。ラルフが羨ましかつた……。！」

「デュラン」

カーマインは静かにレギンレイヴを鞘に納め、リングに戻した。

「……今度は俺からの質問だ……。何故、アンタは俺を殺さなかった。後一步踏み込めば……斬らない刀でも俺に勝てたものを」

唸るようなデュランの声に、カーマインは静かな透明感のある声で返した。

「いや、後一步踏み込んでいたら、俺は負けてたさ」

カーマインの不殺の信念がデュランの必殺の壁を破ったのだった

……。

「……フ」

デュランは初めて穏やかに笑った。仮面騎士の微笑をカーマインは初めて見ていた。

「俺の負け……いや、アンタの勝ちだ。カーマイン」

そう言うと、デュランは静かに懐からナイフを取り出し、己の胸へと突き立てようとした。その時、ティピが叫んだ。涙を潤ませて

「フザケるんじゃないわよ!!」

声を震わせながら、ティピはデュランを睨みつける。

「主の命に従えぬ欠陥品は死ぬ……ソレだけの事だ。何故、止める？」

ドゴオツ 凄まじい音と共に、デュランは仰向けに倒れこんだ。

身の丈が己の手首から中指の爪先程しかないこのホムンクルスに蹴られたと認識するには、時間がかった。

「な……!?!?」

「命は、何にだって一つなのよ!! アンタ、他人から命令されて、死ぬなんて……! フザケんじゃないわよ!! 生きたくても生きられない命だっているんだ!! アツサリ死のうなんてするんじゃないわよ!!」

何も言い返せない仮面騎士にシユワルゼが告げた。

「そのチビの勝ちだ。まして、敗者が勝者の意に反するなど、勝負を汚す行為。デュランとやら……テムエの完敗だ」

「……」

カーマインは静かに右手を差し出した。

「立てるか？ 傷の手当をする」

「……………」

「生きていく理由……生きる意志……、生きる意味は……コレからお前自身の目で世界を見、答えを出せ」

穏やかに美しく微笑するカーマインにデュランは言った。

「ならば……アンタの剣に俺はなるう……。その答えとやらを見出すまで……………」

デュランはカーマインにひざまづき、王に従う騎士の礼をするのだった。

「何……………」

ヒクツと引きつった顔をするカーマインにシュワルゼがニヤリと言ってきた。

「当たり前だろう？ テメエの判断でコイツを生かしたんだ。コイツの面倒はテメエが見ろ……………」

「……………前途多難だぜ」

満面の笑顔で右肩に座って来るティピを見、空を見上げ、溜息を吐くカーマインだった。

シーティア達一行はヴァルミエの旧坑道に進入する為、透明薬の材料であるクリアノ草を採りにブレード山へと来ていた。

「ここがブレード山か……！」

ウォレスがジロリと魔法の眼を煌かせ、洞窟の入り口をにらみつける。

「……入ろうにも、毒ガスが噴出していて危険です。シーティア様」

「どうしよう、クリアノ草が無かったら、薬が完成しないよ。お姉ちゃん」

ピティ、ルイセの言葉にシーティアは静かに入り口を見据える。

その時、

「間もなく」

「え？」

一同は口を開いた者に目をやった。

「間もなくガスは一時的に噴出を止める。中へ入るなら、その時をおいて他に無いぞ」

紅い髪をおさげにした眼鏡の少女は……いつもの朗らかさとは全く異なる低くて老獪な声を出す。いち早くソレに反応したのはこの中で一番付き合いの長いルイセだった。

「ミーシャ！？ どーしたの、ミーシャ……！」

肩をゆすり、必死の形相でミーシャを見る。

「……？ どーしたの？ ルイセちゃん」

「どーしたのって……ミーシャ？」

「？」

すると、ミーシャはいつも通りの表情で能天気な笑いかけて来た。ソレにルイセだけでなく、ピティも怪訝そうな表情になる。

「シーティア様、コレって……！」

「……さあね」

シーティアは静かにルイセと話しているミーシャを見つめる。とそこへウォレスが声をかけてきた。

「おい、ガスが止まったぞ！」

「……ミーシャの言う通りって訳……！」

言い合う二人にミーシャは「？」と首を傾げるばかりだ……。

「ま、何はともあれ、中へ入りましょう？」

「……そうだな」「うん」

シーティアに促され、一行はブレイム火山へ足を踏み入れるのであった……。

ブレイム火山の中は入り口付近に洞窟のような内部、中部に溶岩が泡立つ石橋があり、モンスター達がうろついていた。

「火山活動が活発なんでしょうか……！　こんな所にまでマグマが」

「ピティ、私から離れないように」

「はい」

ピティがシーティアの肩に止まると、ルイセが袖を掴むのは同時だった。

「……お姉ちゃん」

「大丈夫、私が守るから」

ルイセの頭を撫でてやると、更にミーシャがくつついて来た。

「あたし、あたしも！　お姉さま……！」

「……ハイハイって……コレじゃ動けない……！！」

「又力った」と言わんばかりのシーティアにウォレスがヤレヤレと首を振ってブロードソードを抜いた。

「……ま、後は俺にまかせろ」

「援護射撃はするわよ」

「ああ……砲台に期待する」

言つとウォレスは、モンスター達に走って行った。ガーゴイル、スケルトン、ヘルハウンドの三体が反応し、迎え撃って来る。ドゴ

オツ 義手の一撃をガーゴイルに叩きつけ、最後に右手の刀で切り付けようとするスケルトンに、両手持ちの唐竹を打ち、ドガアツザンツ 刀ごとスケルトンの頭蓋を真つ二つにして見せた。

「凄いです……！」 「ウォレスさん……！！」 「強……い！！」

三人娘、ピティ、ルイセ、ミーシャの感想を聞いて、ウォレスは刀を鞘におさめながらニヤリと笑うのだった。と、シーティアがスツと手を前方へかざす。

「？ お姉ちゃん？」

一瞬後、強烈な炎の弾が放たれ、ウォレスの背後に居た影を直撃した。G y a a a a a ! ! 影はスペクターと言い、動物の礼が実体化したモンスターであった。

「ああいうのは、魔法の使えないあなたじゃ不利でしょ？」

「……大した威力だ」

半分以上呆れ顔のウォレスにルイセがクスクスと笑った。その威力は到底ファイアーボールの域では無かったからである。

グローシ안의娘が二人……か

ウォレスはそんな事を思いながら、四人娘の後を追って奥へ進んでいくのであった……。

未知の億は切り開かれた天然の広間だった。

「……アレですね。シーティア様」

「そうですね……。間違いない」

ピティの言葉に頷くシーティア。広間の入口の間正面 真反対側に芝生の生えた場所が一か所あり、そこに資料で見た写真と同じ草 クリアノ草が生えてあった。

「やったね、お姉ちゃん！！」

「早くアレを取りましょう、お姉様！！」

と言つてはしゃぐルイセとミーシャだが、その前にウォレスが静かに刀を抜いた。次いで、シーティアもグンニグルを一閃し、構え

る。

「 気をつける……敵の気配だ」

「 え！？ 」

いつの間にか、広間には数多くのモンスターたちが臨戦態勢を取っていたのだ……。

「 皆、クリアノ草を採る事を優先しつつ、攻撃！ ガスが吹き出しはじめたら、アウト！！ 分かっているわね！？ 」

「 おう！！ 」 「 ハイ！！ 」 「 うん！！ 」

「 皆さん、がんばってください！！ 」

シーティアの号令の下、戦闘が始まった。ルイセのファイヤーボール、ミーシャのブリザードが炸裂し、ウォレスの剛剣とシーティアの槍術が瞬く間に敵を薙ぎ払っていく。アツという間に勝負はつくかに見えたが ……！！

「 ！？ 」

岩陰からモンスター達が次々と現れ始める。

「 キリが無いよ……！！ 」

「 全滅させてから採るってのは無理っぽいな」

ルイセの言葉にウォレスも賛同する。

「 でも、クリアノ草を安全に採るには……！！ 」

ミーシャの言葉に皆、沈黙する。ピティがシーティアを見た。

「 いかが致しますか、シーティア様」

一同、シーティアを見る。

「 臨機応変に行きましょう！ 」

シーティアの答えは簡潔だった。皆一斉にその言葉で吹っ切れたか、一気に敵へ襲いかかる。シーティアは間隙を縫って縮地法で一気にクリアノ草へと向かった。ブチィツ 一気につかみ、引き抜いた。

「 やった！ お姉ちゃん！！ 」

「 流石です、シーティア様！！ 」

ルイセ、ピティが喜ぶも、当のシーティアは植物の蔓に四肢を絡

め取られた。

「……！」

姿を現したのは、植物系のモンスター三体だった。

「……デビルプラント」

ボソリと呟いたシーティアに周囲の焦った声が届く。

「シーティア様……！」 「お姉ちゃん……！」

次の瞬間、シーティアは手首をくるりと回転させ、右手のグンニグルで蔓を切り落とし、モンスターに槍を一閃！ 炎の竜巻は瞬間に三体全てを燃え尽くし、消えた。

ドガアツ 「グギヤアアア……！」 鈍い音がし、ガーゴイルがウォレスの義手による鉄拳で沈んでから、モンスター達は退いてしまった。

「……先程の植物のモンスターが親玉だったのですね？」

「みたいね。さ、急いでここを出るわよ！」

「ハイ……！」 「うん……！」

シーティアの号令に皆一斉に出口へと向かった。一気に来た道を駆け抜けて行く一行。もう少し出口と言う時に……！！

ゴゴゴゴオツ 「……！」 妙な地響きが聞こえ、心なしか体感温度が上がった気がした。シーティアがつぶやいた。

「……まさか……！」

次の瞬間　ゴオウツ　灼熱の溶岩が一行の後ろから一気に流れ込んで来たのだ。ウォレス、ルイセ、ミーシャもパニックになる。

「何だと……!?」「キャ……!!」「もうダメ……!!」

「ハアツ……!!」

シーティアがそのマグマに向かって槍を一閃し、レッドトルネードを放つ。炎の竜巻が壁となり、マグマの進路を防ぐ。

「ルイセ、今の内にレポートだ……！」

「うん……うん……!!」

ウォレスの言葉にルイセも答え、グローシュを集中させるが……。

「ダメ……！ テレポートが……使えない？」

「何ですって!？」

シーティアが驚きの声を上げた 瞬間 !

「……シーティア、左に跳べ」

「!」

その声は、今聞くはずの無い者の声だった。だが、本当に彼かを
確認するでもなく、シーティアは左に跳んだ。炎の竜巻が消え、一
気にマグマが流れてくる 。 いや、来ようとしていた 。

「ヴァハムート・フレア」

ズゴオウアツ 圧倒的な紅の熱線がマグマを蒸発させ、吹き飛ば
した 。

「……ス……スゴい……!」

「一体、誰が!？」

ピティの後、ミーシャが声の主を振り返った。そこに立っていた
のは、仮面を付けた黒髪の青年だった。

「……お前は……!」

「ラルフ……!？」

ウォレス、シーティアが彼の顔を見て言う。

「貴方……どうして、ここに……!」「ラルフさんって、お兄ちゃ
ん達と決勝で……!！」

「……話は後だ。……一旦退くぞ」

ラルフに一行は先導され、一気に出口に駆けた。

一気に外に駆け抜けた一行 ! だが、そこへガラガラアツ

「! 上から岩が……!？」

「又オオ……!！」

ピティ、ウォレスが叫ぶ。落岩の群れは、しかしズバアツ 一閃
の下にすべて斬り伏せられ、後方も無く燃え尽きて行った。トツ
静かにその数秒後ラルフが地面から数cm浮いて現れ、着地した。

「……皆、無事か!？」

「い、生きてる〜!」「……何とか……大丈夫みたい」「……ハイ」
ウォレスの叫び声にミーシャ、ルイセ、シーティアの肩からピテイが答えた。

「……………」

互いの無事を認識し合った所でシーティアが、ラルフに近寄った。
「……一応お礼を言っておくわ、ラルフ」

ラルフは闘技場で闘った時とは違った服装をしていた。ハイネットの黒い上服を着ていたのは同じだが茶色のベスト、金色のシヨルダーガードの入った空色の青い正装のようなジャケットと黒いベルトを通した白いパンツを着ていた。ルイセがおずおずと尋ねる。

「……その姿は?」

「この格好は商人としての正装だよ。ハウエル家の品位を下げる訳には行かないからね」

「ハウエル? ……バーンシュタインの貿易商……あの豪商ハウエル!?」

「クス……ああ」

ルイセ、ミーシャが素っ頓狂な声を上げる。その様をラルフは楽しげにそして、優しげに微笑した。ルイセが「……あ」と何かに気づいたような声を上げた。

「家が裕福なだけの放蕩息子だ。改まる必要はない」

「……ソレで? 何故ここにいるんだ?」

ウォレスがラルフを見つめ、問いかける。

「……貴方達が行こうとしている鉱山に用が有る。……まあ、ここに来たのは透明薬を作る材料を求めに来たんだが……」

「随分都合よく現れたわね……。あのマグマ……そのレヴァンティンで操ったんじゃないでしょうね?」

シーティアの瞳を仮面越しに見据え、ラルフは言った。

「生憎 レヴァンティンで操るなら、マグマじゃなくて火災になるよ。マグマは土属性が混ざってある。この剣は純粋な炎属性しか

操れないんだ」

「……その言葉を信じるって？」

「できないか？」

「ええ……、理由は二つ。一つ目は、貴方が現れたタイミングとその剣の属性　そしてテンココマンドメントとデュアル魔法……。これらを使えば不可能では無いハズ。二つ目は　自分の件の性能、手を見せるって言うコト」

シーティアの言葉を聞きながら、ラルフは笑っている。

「なるほど、ごもつともな意見だな。……ソレで？」

「……以上よ」

「では敢えて聞くが、私が嘘を吐いているとしたら、何が目的だ？」

「ソレは、解らないケド……！　嘘を吐いている奴と行動を共にはしたくない」

シーティアはジツと仮面の奥のラルフの双眸を見据える。ラルフはスツと笑みを引つ込め、言った。

「少なくとも、君たちと敵対するつもりは無い。ソレと　先程の言葉に嘘も無いよ。私は商人だ……自分の易にならない方便は使わない。何より信頼が第一だからな」

「……OK、信じたげる」

しばらくラルフをジツと見つめ、その態度に何かを理解したのか、シーティアは頷いた。

「ラルフ・ハウエルだ。よろしく」

こうして一行にラルフが加わったのであった。

「……ねえ、お姉ちゃん。ラルフさんって……お兄ちゃんと似てない？」

「カーマインに仮面をつける趣味は無いと思うよ。本人が聞いたら全力で否定すると思うし……」

ヴァルミエに帰る途中でルイセがシーティアにだけ聞こえるように話しかけてきた。肩の上のピティが首を傾げる。

「ソレに、ラルフさんはシーティア様達と決勝で闘ったのでしょうか？　なら、カーマイン様と同一人物とは……」

「うん、もちろん　ラルフさんがお兄ちゃんだって言う気は無いよ。でも……」

仮面をつけていても　似ていると解る。声、背格好　黒髪

。そして何より　優しげで自信に満ちた表情……。すべてが見れば見るほど自身の兄と似ているとルイセは感じていた。

そのラルフはウオレス、ミーシャと共に前を歩いている。

「ま……何にせよ、まずは鉱山に入らないとね」

「うん、そうだね」

シーティアの言葉にルイセは深く頷いた。

鉱山の旧道前に来た一行。やはりこの間と同じく水晶鉱山の入口には二人の見張りが立っていた。

「……コレが、水晶鉱山……。山そのモノが水晶なのは知識として知っていたが……立って見ると感動するな……！」

ラルフが静かに感嘆の意を表した。シーティアが「そうね」と答える。

「……ソレで、やはりその薬を使うのか？」

ウオレスがシーティアを見て問いかける。

「素直に通して来れないんだモノ……性が無いわ」

シーティアが粉を取り出して皆に振りかけた。ソレだけで、一行の姿が完全に消えてしまう。

「ね？　凄いでしょ？」

「本当に……凄いです、シーティア様」

「さ、今の内よ！」

一行はそのまま一気に入口を通り抜けた……。内部の壁は日光を

反射してキラキラ光っていた。

「……綺麗。水晶の宮殿みたい」

ルイセがウツトリと言い、ウォレスが苦笑した。

「確かに見た目は美しい。だから盗掘する奴が後を断たない。俺達が警備の為に雇われたのも、その所為だ。この水晶は、美しさの裏にとんでもない力を秘めてやがる……」

ウォレスは突然言葉を切った。シーティア、ラルフも同時に気配を断つ。ピティが小声で囁いた。

「奥の方で……人の声がしています」

「ええ！？ やっぱり……街の人が言つてた幽霊！？」

「……いえ、そんな不明瞭な感じでは……」

ルイセの言葉に流石に呆れるピティ。ウォレスが口を開いた。

「やはり、誰かが忍び込んでいるらしいな」

「水晶を盗掘するために？」

「恐らくな。だが、水晶の盗掘はケチな泥棒には無理だ。組織的な力が無いと……」

「行ってみましょう」……

シーティアの言葉にラルフがこくりと答え、二人を先頭に足音を殺して坑道の奥へ進む。人の声が近付いてきた。数人の男達が話しているようだ。

坑道は、天井の高い広間のような場所に続いていた。一行は岩陰に身を潜めて、中の様子を窺った。七人の男達が作業をしている。

台車に掘り出された水晶が積み重ねられてあり、運び出す所だったようだ。

「グレンガルのダンナももう買って来れないらしい……。ここらが潮時かもな」

「……たく、このご時世に稼ぎ相手がなくなるなんて……！」

そんな会話が聞こえてきた。シーティアはグレンガルという言葉に頭を刻んでおく……。聞き覚えのある名前の気がした。

この名前……どこかで……！！

そんな事を考えながら、静かに広間の入口へと立つ。一斉に盗賊達がこちらを向いた。

「誰だ！？ テメエら……！！」「見張りは何やってんだ！！」

「お前達！ 大人しく縛につくならいいが、抵抗するなら容赦しねえぜ？」

「フザケンな！！」「ぶつ潰せ！！」

そう言い合いながら山刀を抜き、斬りかかって来る面々を尻目にシーティアは静かに問う。ウォレスはニヤリと笑った。

「何なの、今のは？」

「一度やってみたかったんだ」

「へえ」

等と言い合っている内に一気に賊が押し寄せてくる。次の瞬間、ルイセとミーシャが目を見開いた。杖を前方にかざす。

「ファイヤーボール！！」「ブリザード！！」

ズドオアツ わずか数秒で勝敗は決まった。

「何だ！？」「どうした！？」

爆発音で駆けて来た見張りはラルフとウォレスが気絶させる。結局、一人残らず盗賊達はつかまって、ローランディア兵に引き渡されていった……。

「……アイツらが、幽霊騒ぎの犯人か」

「幽霊の正体見たり、枯尾花……」

ウォレス、シーティアが兵士に連れられて行く賊を見据え、言った……。

「ねえ、お姉ちゃん！ この壁を見て！！」

ルイセが奥の壁の一角に立ち、指差した。男達が作業していた辺りの壁が崩れかけており、その更に奥に空洞が続いている。

「……道があったようだな。崩れているが」

そう言いつつ、ラルフは腰の剣をスツと抜こうとした。ソレをウォレスの義手が制した。

「……下がっている」

ウォレスは静かに左手の中指に意識を集中させ、金の指輪を見据えた。指輪は金色の光と化し、一振りの双身刀へと変化した。ミヨルヴィルムである。ミーシャが感嘆して問いかける。

「ウォレスさん、凄い……！ どこで!？」

「……その仮面の兄さんからだ」

答えるのもそこそこに、ミヨルヴィルムを握りしめるウォレス。左手一本で大きく振り被ると、袈裟切りに壁に斬りつけ、更にドゴオツ 間髪入れずに右拳を叩きつけた。

ミヨルヴィルムで真つ二つに斬られた所を鉄拳で叩きつけられ、壁は大きな穴を開けた。剣を指輪へと戻し、奥へ歩を進める。

「スツゴオ……イ!!」 「コレで先へ進めますね」

ミーシャが叫び、ピティが頷く。一行はウォレスに続き奥へと進んで行った。ラルフの体から静かに気が立ち上るも、一瞬ですぐに納めた。ソレに気付いたのは、シーティアだけだ。

「あ……!!」

シーティアの瞳がラルフから前方の妹達へと向けられた。ウォレスは静かにルイセ達が驚愕の声を上げた視線の先を見上げながら近づいていく。

「……何でしょうか？ 不自然なまでにくぼんだ壁ですね。自然にできたモノとは……!!」

「ていうか……人の形をしてない、ピティちゃん？」

ピティが眉根を寄せるのに対し、ミーシャはこの大きな壁にできた穴の形を素直に口にした……。10mを超えるほどの巨大な人形の窪み……。

「……こんなに大きいんじゃ、巨人だね」

「間違いねえ……！ 十年前……奴はここから出て来たんだ」

ウォレスが眉根を寄せながら重々しくつぶやいた。

「……と言う事は、こんな鉱山に住んでいたのかしら？ ソレとも、この鉱山には、こんな化け物が何体も眠って……」

「5体だ……」

「……！」

皆、一斉に声の主を見据えた。ラルフである。

「どこに封印されているかまでは解らない……。だが、5体のゲヴェルがこの魔水晶に、封印されていた。現在……一体は既に始末したが、もう一体が動いている……。後の三体は未だ眠ったままだ」

「ど……。どうして、ラルフさんが……？」

ラルフは静かに微笑する……。そして。

「……！」

ズドオアツ 大地が揺れ、大気が震え、皆が声を出せずに棒立ちした……。理由は……。ラルフだ。彼の存在が明らかに変わったのだ。全身を眩い白の光が纏い……。薄緑色の雷が奔っている。

皆……。声を失っていた……。彼の背後に何か得体の知れない化物の影が見えたのだ……。神々しい光を放っているのに……。邪悪な闇の気配が確かにする……。ウオレスが畏怖を露わに言った。

「……その力……。！……。お前……。！！」

「コレが……。答えだ。私は……。ゲヴェルを追い……。奴らを殺す為に旅をしているのだ……。！！」

声も低くなり、不遜な印象を受ける。が、すぐにラルフはその力を消した……。ドサツ 蒼醒めた表情でルイセ、ミーシャが膝を付き、ピティはシーティアの肩に留まる。そのシーティアも眼光を滾らせてはいるが、体温は冷え切っていた……。

「……もし君達が、奴を追い続けるつもりなら、今が奴の力だという事を覚えておけ。私にできるお節介はそれ位だ」

「……貴方は……。一体……。！！」

ルイセが震えながら、ラルフに問いかける……。すると彼は寂しそうに笑ってこう言った。

「……化け物さ」

「待ちなさい、話は済んでないわ」

シーティアが背を向けたラルフに対し、そう言った。

「貴方は……。アイツとも関係があるんでしょ？」

「……カーマインか。だが、その答えは奴が決める事だと以前言った」

そう言い合う二人にルイセが話し掛けた。ラルフが振り返る。

「お兄ちゃんとラルフさん……やっぱり何かあるの!？」

「ルイセさん、今は……!」

ピテイがたしなめるのも聞かず、ルイセは話し掛ける。

「シュワルゼさんって言う……お兄ちゃんそっくりの人がいました。その人も強かったです。ラルフさんのように……そして、お兄ちゃんのように」

「……シュワルゼにまで会っていたとはな」

「もしかして……貴方は……!」

ラルフは優しく……美しく微笑した。仮面越しだというのに、その魅力はルイセを黙らせるのに十分だった。

「え……お兄様……!」

今の微笑み方はミーシャが一目ぼれしたカーマインそのもの……。実際に彼の微笑みを見た事がないのに、ミーシャは何故か、カーマインだと確信した……。ウオレスが話し掛ける。

「……お前は、ゲヴェルについて知っているんだな」

「ああ……。それが何だ？」

「ならば……俺達と行動を共にしてくれ。ローランディアの正式な要請なら、旅人として行動するよりも、制限は無い。おまけに自由度もそこそこ高いしな」

「……私を同行人に？ 正気か」

「ああ……お前が得体の知れない奴だとしても、お前の力が、そしてあの化け物への知識が必要なんだよ。俺達には」

「……次のアテはあるのか？」

「クレイン村だ……。その滝の麓で、俺は襲われた」

「……バーンシュタインか。……いいだろう。少しの間だけ、貴方達と行動しよう」

こうして、一時的にだが　ラルフ・ハウエルという異形の青年

がシューティアの一行に加わった。

30・不本意な再会

謁見の間にて。

「　　と言う訳で、鉾山の中にゲヴェルが眠っている可能性がありますが、注意して下さい」

シーティアはアルカディウスに報告をしていた。王は静かに頷き、言った。

「大義であった。鉾山を見つけても安易に掘らぬよう釘を刺しておこう。また、お前達のおかげで盗賊達を一網打尽にできた事も見事だ」

「……ハツ、有難きお言葉、勿体無うございます」

「……だが、お前達にはまだやってもらわねばならんことができた。実は……！！」

謁見の間にいたシーティア、ウオレス、ルイセは表情を変えた。シーティアの肩の上からピティが声を出す。

「……そんな、戦争が起きてしまうなんて！！」

「グレッグ卿が……リシャル王に斬りかかった？……失礼ですが、何かの間違いでは……？」

シーティアは温和な貴族の顔を思い出し、問いかける。

「……事実らしい。……レティシアはガルアオス監獄へと送られる予定という事。何とかして、助けてくれ、シーティア！！」

「レティシアが……！！　ガルアオス……」　「……そんな……！！」　ウオレスがシーティアを見ながら言った。

「ガルアオス監獄か、あんな所へ入れられちゃ、助け出すのは不可能だ。終局の意を持ち、有事の際は要塞として使える監獄には侵入も、脱出も難しい……！！」

「ラージン砦にブロンソン將軍が待っている。彼と協力し、レティシアを……娘を助けてほしい！！」

「シーティア様」「お姉ちゃん!!」

ピティ、ルイセもシーティアを見つめる。シーティアは静かに瞑目し、それから目を開け……言った。

「必ず、姫をお救い致します。陛下」

謁見の間を後にし、シーティア達はラルフとミーシャの待つサンドラの研究室にいた。そこで事情を二人に説明する。

「ええ!? レティシア姫が……助けに行かなきゃ!!」

ミーシャは開口一番、友達を助けに行こうと叫んだ。ルイセも「ウン」と嬉しそうに微笑む。シーティア、ウォレスはラルフを見据えた。

「……バーンシュタイン国民である私にローランディアの味方をしろ、と?」

「やっぱり無理かしら?」

シーティアは肩をすくめて問いかける。ラルフはフムと答える。

「……ハウエル家は商家だ。下手な事をして信用を無くす訳にはいかない。だが……気にはなる」

「? バーンシュタインの人間がローランディアの姫を助けられない事が?」

「この事件だ……。戦争に発展する事など誰にでも解り切った事だ……。それなのに……グレッグ卿は斬りかかった?」

と難しい顔をするラルフにシーティアがジツと見据え、問う。

「とか言いながら、大陸一の美姫と言われるレティシアを見たいだけってんじゃないでしょうね?」

「生憎、そこまで下世話じゃない」

「えと……つまり、協力してくれるんですか、ラルフさん?」

二人の会話を聞いてピティが問いかけて来た。ラルフは苦笑して答える。

「余リアテにするなよ? 私はバーンシュタインの商人なんだから

な」

「ソレで十分よ」「有難う、ラルフさん!!」

シーティア、ルイセが頷き、ミーシャが明るく言った。

「ソレじゃ、姫を助けに行こうよ！ お姉様!!」

「……まったく、勇ましい娘達だ」「……ごもつとも」

ウォレス、ラルフが先頭を切るシーティア達を見て、苦笑していた……。

ラージン砦

ルイセのテレポートで一行は、砦の前に現れた。見張りの兵士はギョツとして見ていたが、シーティアが前に出るとコクリと頷き、門を開けた。

シーティア達はブロンソン将軍のいる作戦室へと通された。そこにはブロンソンが地図を広げ、手を顎にやって眺めていた。

「失礼します、將軍！」

「おお……！ 来てくれたか」

ファフニールの到着にブロンソンも表情を明るくする。

「済まないな、前線に君を呼ぶ事になるとは……!!」

「いえ、ソレよりも状況は？」

シーティアの言葉に「ウム」と頷き、ブロンソンは表情を硬くしていた。

「実は、ここより東に位置する渓谷にバーンシュタイン軍が橋をかけて来ていて……。迎え撃つ準備をしていたという訳だ」

「……なるほど。迷いの森から北上してくるよりも、渓谷を抜けて来た方が早いですね」

「……姫様の救出を行いたいのは山々だが……!!」

シーティアもブロンソンの隣に立ち、ジッと地図を見据える。ウ

オレスにも傍に来てもらい、ブロンソンの説明を聞いていた。

「アレ？」

ミーシャはふと、周りを見回し、人が足りないのを確認した。ソーツと作戦本部を後にする。すると、外にラルフが立っていた。

「ラルフさん……！ どうしたんですか？」

「……いや、あの場においてもする事ないんでな。私にできる事をしようとしたんだ」

「？ できる事？」

「一緒に来るかい？」

「え……と？」

と後ろを気にするミーシャにラルフは優しく笑い言った。

「シーティア達には目で確認したから、大丈夫だ」

「そう言う事なら！」

ラルフの言葉にミーシャは頷き、微笑みかけてきた。ソレにラルフは苦笑する。

「……ヤレヤレ。人をすぐに信じるのは美德だが……少しは疑った方が良い」

「え？ でも。嘘じゃないんでしょう？」

ニコリと笑いかけられ、ラルフは本当に苦笑した。こうして、ラルフとミーシャは砦を出て行った……。

「あ……！ ここで、レティシア姫がインペリアルナイトに迎えられたんです」

東の平原で、ミーシャはラルフに笑顔で説明していく。ラルフも嫌な顔一つせず、彼女の話の話を聞いている。

「だから、姫が狙われた場所だけど、私とルイセちゃんが姫の友達になった大切な場所でもあるんです……！」

ラルフは優しく笑うと、その平原を東に歩いて行く。ミーシャもラルフと肩を並べて歩き出す。

「あ……でも、やっぱり変ですよね……！　一国の姫と友達なんて……！！」

「？　何故？」

そこで初めてラルフから口を開いた。本当に訝しげに問うて来る。「私には君達が羨ましいよ。私には、友達と呼べる者がいなかった。皆、立場を越えては来なかったよ。勿論　私にも問題があるのだらうけど……」

「……ラルフさん……あの」

「私はこの仮面をつける前、商人の子供として生きていた。いろいろあったよ。金持ちの両親と仲良くする為に自分の子供を使う親とか、私の見た目が他と違うからと言って謂れの無い迫害も受けた。そんな私を手放して愛してくれたのは　ハウエル家の両親だけだった」

ミーシャはジツとラルフを見上げる。仮面をつけたその顔はソレでも優しげだった。

「そんな両親の期待に応えて一日でも早く彼らの手助けをしたかった……。本当の子供では無い私を育ててくれたあの人達に。だから友人を作る必要は無かった。表面的な好青年の仮面を被っていれば良かったんだ……。だが」

ラルフは一旦そこで言葉を切り、また話し出した。

「両親は今はいない……。いなくなつて気付いた。もう永遠にあの人達に恩を返す事は出来ない……。そして　、その為だけに生きていた私には、何も無い事にも　。だから、私は両親の愛したハウエル家だけは守りたい。もう恩返しはできないけれど　せめて、あの人達の作った商家を　私は、残したいんだ」

「……ラルフさん」

「その為にも、ゲヴェルを倒し　平和な世にしなければならぬ。そう考えているんだけど、ソレだけでは無いんだ。ソレだけじゃダメなんだ」

「え？　どうしてですか？」

「私は 許せないんだ。両親は、私を構ったから殺された。私の為には ゲヴェルに……」

「……！」

ラルフの言葉は淡々としていて、むしろ、冷淡だった。だが、その奥にあるモノはミーシャを怯えさせるのに十分だった。

「だから、私は人を捨てた。元々人では無いのだから、奴を殺す為に、私は奴の同族を殺し、その力を奪った」

「……何て言うか……」

「私にも友がいたら、もう少し変わっていたかな？ ……後悔はしていないが」

そして、ラルフはミーシャを見据えた。

「 憎しみに彩られた者は、その先は無い。だが、君達は違う。

目的をやり遂げた時、何も手元に残らない私のようになるな？ 立場に縛られて、自分を捨てるような事はするな。君が姫を本当の友達だと言うのなら 尚の事だ」

そう言って笑った彼はとても穏やかで 優しくかった。かつてあった懐かしいものを愛惜しみ、しかし決して戻らぬモノだと理解している 。そんな優しく、穏やかで 暖かくて 悲しい

美しい微笑み。異形の青年の本質だった。

ミーシャは何も言えず、ただ ただ、胸が締め付けられていた……。

「……悔しいです。……私……ラルフさんに何も言っておげられない！ ……私、バカだから……！！ ラルフさんの背負っているモノとか、孤独とか……どうする事も……！！」

ポロポロと涙を流す少女に、ラルフはソツとハンカチを渡し、笑った。

「有難う 。やはり……人間は、暖かいな」

マイン

そして、ミーシャが落ち着くのを静かに待って、ラルフは東に歩き出した。ミーシャも後を追う この人が、孤独では無いように

そう願う一方で……

お兄様……？ ……どうして……お兄様を思い出すの……？

ミーシャの胸は、カーマインの事で 一杯に成りつつあった。

「おい、いつまで寝てやがる！？」

スツと瞳を開けると、異形の影を背負った金と銀の闇の双眸を持つ男が、白き光を纏って見下ろしていた。青い雷を纏ったその姿は異形。自分と同じ存在。シュワルゼ・ロード。

「フン、ラルフめ！色々と気を回し過ぎる！！」

ズゴオアツ 不機嫌にそう言い放って気を爆発させ、カーマインは立ちあがった。レギンレイヴを一閃する。ガアキッ まともにも止められる。

「クク……！ いい兄弟ではないか」

「フン、余計なお世話だ！！」

ウォオオオオッ！！ 二匹の異形の影を背負った光の剣士二人。ラシエルの空き地で再びぶつかり合うのだった……！

二人とも同じ異形 ラルフ・ハウエルこえの精神を聞きながら……！！

ラルフとミーシャはついに、バーンシュタイン兵が作業を行っている溪谷へと辿り着いた。なるほど、既にこちらと向こう側を繋ぐ二本の網が渡っており、両岸から足場を工員が作って行っている。……ここがそうなんですな

「ああ、幸い橋ができるにはまだかかりそうだ」

「どうするんですか？」

ミーシャの問いに応えようとするが、ラルフは急に動きを止め、ミーシャの手を掴んで岩陰に身を潜めた。

「え？ ええ！？」

パニックになっているミーシャに「シッ」と注意し、前方を見るすると、ラルフ達の立っていた所にローランディアの兵が五人と女の騎士が現れた。

「あ」

女の騎士の姿はミーシャをして見惚れてしまうほど美しかった。白銀の甲冑を身にまとい、背中まであるストレートのブロンドヘアをなびかせた姿。

輝く鎧の左胸には、バラの意匠があらわれている。腰にさげた長剣の柄には、王家の紋章が施されてある。軽量化された鎧の下に着ているのはスカートだ。レティシアと同じスミレ色の瞳と整った顔立ちでミーシャは気付いた。

「あの人……！ 白銀のバラ……！！」

「……噂に名高いシルヴィア姫か」

ラルフは静かに現状を把握しようと観察する。

「まだ、橋は出来上がっていなかったか」

シルヴィアは冷徹とした眼差しで、状況を見つめる。

「ですが、姫様……！ 時間の問題では……！！」

左の兵がソレに応えるがギロツと殺気を込めた瞳をぶつけ黙らせる。

「姫……だと？」

ローザリア騎士団の団長として行動している時は、姫と呼ばれるのを嫌う。まだ十七歳にして、剣を取らせれば右に出る者無し、国と民を守る為に自ら前線に出る女傑である。

だが、第二王女が前線に出るといふのは、批判的な意見が多い。王女を守るうとして、適切な作戦が取れなくなる可能性があるといふのだ。彼女はソレらの意見に対抗する為、団員に“団長”と呼ばれる事にしている。

「も……申し訳ありません、団長」

「……エリック、あの人数ならば我々だけでも橋を落とせるな？」

「だ……団長!?」

チャキツと腰の刀“光の魔剣”を抜くと、目の前にいるバーンシユタイン兵を睨み付けた。エリックと呼ばれた副団長エリック・ハインは、ローザリア騎士団の中で最高齢の二十三歳。何の変哲もない黒髪の男だが、部下達の評判も良くシルヴィアも信頼を寄せている。

「重要な任務だ。我々が負ければ後は無い!!」

その凜とした声には、いつにも増した意志の強さが感じられる。

エリック達はソレに気付くと、コクリと頷いた。

「ハッ！ 了解しました!!」

騎士団が構えるのと、バーンシユタインの見張り兵が気付くのは同時だった。

「貴様ら……ローランディアの者か!？」

バツとその声を聞いてバーンシユタイン兵がグレートソードと呼ばれる両手の両刃剣を抜いた。ローザリア騎士団も静かに腰の刀ブロードソードを抜く。シルヴィアが一歩前に出た。

「我こそは、ローランディア第二王女、シルヴィア・ヴィー・ローランディア!! 命惜しき者は即刻去れ!!」

戦姫は表情を変えず、クールに言い放った。すると、男達はニヤリと笑みを浮かべた。

「面白い！ 白銀のバラなど、我らに敵うはずもない!!」

「貴様の首を我が陛下の眼前へと贈り届けてくれる!!」

ソレに対し、ローザリア騎士団が鬼のような表情と化した。

「何を!!」

「無礼な!!」

その中、一人だけ冷静な戦姫は冷厳な眼差しを強くし、静かに冷たく言い放った。

「ならば、斬る!!」

シルヴィアの号令の下、一気に騎士団が斬りかかった。少数精鋭の騎士団達は、個々の能力も高い上、チームワークをしっかりとこ

なして行く。バーンシュタイン兵はその硬い鎧と数、剛剣にモノを
言わせてくる。

両軍の能力は互角に見えた。一人の騎士を除いて。ズババアツ
斬閃を一気に斬り払い、表情を変えずにシルヴィアは敵を一気に斬
り裂いた。

彼女一人にバーンシュタイン軍は劣勢になつて行く。

「凄~~~~い！ 流石、シルヴィア殿下！！」

「……確かに。……だが、余りにも強過ぎる者は、孤立しやすい。
誰も追いていけないからな」

「ソレって……フォローが無いって事ですか？」

「ああ……。一騎当千の騎士と言えど、戦略抜きでは勝てない」

ラルフの言う通り、シルヴィアは一人で敵陣に斬りこみ、騎士団
はその後を遅れて走って行く。シルヴィアは誰よりも早く駆け、敵
を真つ二つに斬り裂いて行った。

「……理屈抜きで、強いな。流石インペリアルナイトと比肩する白
銀のバラ」

「本当に凄~~~~い！」

ラルフをして思わず声を漏らす程、戦姫の力は圧倒的だった。

「おのれ……！」「流石、ローランディアの姫將軍……！」

バーンシュタイン兵をしてそう言いしめる程の實力、勝敗は明ら
かに見えた。だが

「団長！！ 奴ら、向こう側から橋を繋げました！！」

「 何？ ……遅かったか……！」

バーンシュタイン兵達は橋を両側から創っており、ローランディ
アの岸の兵が時間を稼いでいる内に橋を繋げてしまったのである。

「フン……！！ 覚悟するがいい……！」

「同胞の仇め……！」

一気に吊橋をバーンシュタインの本陣が駆け渡り、シルヴィア達
を取り囲んだ。

「……大した指揮だ……！ これほどの軍を一気に渡らせるとは……」

…よく訓練されているな」

シルヴィアは周りを取り囲んだバーンシュタイン兵を眺めながら静かに刀を構えた。

「……この作戦は私の負けだ。一度体勢を立て直すぞ！！」

光の魔剣が輝き、ホーリーライトが剣先から放たれた。ローランディア兵は心得たもので、自分の目を庇っている。だが周りを囲んだバーンシュタイン兵達は、ホーリーライトで吹き飛ばされ、範囲外にいたモノも目を一時的に見えなくされた。

「ぐおお！！」「しまったあ！！」「おのれい！！」

と叫び合うバーンシュタイン兵、その内にシルヴィア達は包囲網を抜けた。が、西に退却する騎士団の中、シルヴィアは橋に向かつて行った。

「！！！ 姫様！！」「団長！！」

エリック達が声をかけるも、シルヴィアは風のようにバーンシュタイン軍の合間を縫って橋の柱に立った。

「この橋を落とせば……！！」

シュンツ 刀を振り下ろしたその時、ギインツ 横から斬閃で止められた。

「！！！」

見つめた視線の先には、城を基調とした大陸で知らぬ者の無いバーンシュタインの近衛騎士団・インペリアルナイトの制服を着た青年がいた。

「……この私に気配を悟らせんとは……！ 貴公が新しいインペリアルナイトか」

「ジュリアン・ダグラス。覚悟して頂こう……シルヴィア皇女！！」
「そのセリフ、貴公にそのまま返すぞ！！」

二人の美しき剣士は剣をまともにぶつけ合う。圧倒的な強さを誇る二人の闘いに周りの者は誰も踏み込めない。だが、両者の斬り合いは徐々にジュリアンが押してきた。

「バカな……！！ 姫様が遅れを……！！」

「だが……二人の実力に差はほとんどない!!」

ギインギンツ 剣を交えながら、徐々に後退させられていくシルヴィアを助けようとローランディア騎士団が向かうも、圧倒的な数の差で押され、包まれていく。

「バカ者ども!! 早々と退却しろ!!」

「しかし……姫様!!」

「私の命令を聞けぬなら、貴様たちの騎士の位は剥奪するぞ!!」

ギインツ 火花を目の前で散らせながら、それでもその瞳は揺るがず、強く述べるシルヴィア。

「……姉上を頼む」

それだけを告げると、シルヴィアは最早後ろを見ず、ジュリアンにのみ神経を集中し始めた。ギインギンツ 剣戟の音が更に激しくなる。

「どうして、シルヴィア姫の剣があの人には見切れるの!？」

ミーシャの目から見ても、シルヴィアとジュリアンの実力差はほとんどないように見えた。ラルフが静かに応える。

「あのインペリアルナイトは、シルヴィア姫が剣を振っている姿を見ていたんだ。特に、あの剣が魔剣である事を見られたのは致命的だ。シルヴィア姫は剣の間合い、斬閃を見切られた上に、光の魔剣も封じられている」

ガイインツ 長刀と魔剣が激突する。

「降伏するか？」

「 相手を見て物を言え!!」

顔をつき合わせ、述べ合う二人の美剣士。シュンツ ピツ 銀髪の前髪が何本か斬られた。ジュリアンの金色の瞳が細められる。

流石は白銀のバラ……。そう簡単には行かないな……!!

たったアレだけの観察で、ここまで見切ってくるとは……、

流石インペリアルナイト!

ガキイツ ズバアツ 終にジュリアンの剣がシルヴィアの胸を斬った。ガクウツと膝を付くシルヴィア。甲冑が真つ二つに斬られて

いる。

「ウオオオー!!」

「姫様ー!!」

ローザリア騎士団員達が遠くから叫んでいるのを見、シルヴィアは穏やかに笑った。

「……姉上……申し訳ありません。後は頼んだぞ、シーティア」

「……少し諦めるのが早くないか？」

そんな声がシルヴィアの前から聞こえた。良く澄んだ低い男の声……。目の前に見知らぬ青いジャケットを羽織った貴族風の黒髪の青年が立っていた。腰の刀シエルオープナーを抜き、ジュリアンの長刀ギンナルを止めている。

「! 貴様……!!」

ジュリアンの瞳が鋭く細められた。対して青年・ラルフは静かに微笑した。シルヴィアもジュリアンも、この仮面の男がいつ現れたのか、まったく理解できなかった。

「……退け」

シルヴィアに対し背を向けたまま、ラルフはポツリと告げた。退けと言われて動ける程、傷は優しくない。その時、赤髪の三つ編みおさげの眼鏡をかけた女の子がシルヴィアの傍らに座り、ヒーリングを唱えた。

「……貴方がたは……?」

そう問いを与えたシルヴィアに眼鏡の女の子ミーシャは笑って答えた。

「姫様の味方です!!」

およそ、血生臭い戦場には似合わない、明るい向日葵のような子だと、白銀のバラにしては珍しく、戦いの中で戦いを忘れた。

ギインツ ダアンツ 彼女の意識を元に戻したのは剣戟の音と激しい着地音であった。見ると、ジュリアン・ダグラスが押され、橋の上へ戻されている。

「……何だと? インペリアル・ナイトを退けた!？」

「チ……！ 少しは出来るようだな」

シルヴィアとジュリアンは同時にラルフを見据えた。ラルフは静かに微笑すると、シエルオーブナーを構えた。

「退け、怪我人は増やしたくない」

「……！ ナメるな……！」 「うおお……！！」

ラルフの言葉に、一斉にバーンシュタイン軍が斬りかかって来た。

「……！ 待て、お前達……！」

ジュリアンの制止も聞かず、一斉に周囲を取り囲み、叩き潰そうとする。

「……判断は悪くない。ただ、相手の実力を把握する前に行動したのが、お前達の敗因だ」

その声と同時にラルフは軽く爪先で地面をトオンツと押した。次の瞬間、彼の姿は消え、青い斬閃が宙を疾った。「グハアツ」「グアツ……！」

ラルフの刀が一閃される度に、次々とバーンシュタイン兵は倒れて行く。一閃にて四、五人を叩き潰して行く。

この男…… 剣閃をどこかで見た事が……！！

ラルフの動きは、人間離れしていて幻想的だが、その剣閃は鋭く迅く、無駄が無い。ジュリアンはコレと似た剣の使い手を一人知っていた。

「カーマイン……！！」

ラルフの剣はカーマインのソレに良く似ている。いや、同じモノだ。ドサドサアツ 最後の部下が今、地面に崩れ落ちた。シルヴィアやミーシャ、ローザリア騎士団は呆然として、ジュリアンはジロリと目の前の敵を見る。

「なるほど……、ローランディアにこれほどの使い手がいたとはな

……！！」

「…………」

ラルフは静かに手をかざすと、彼の周囲に黄金の魔法陣が浮かび上がった。

「!?」

次の瞬間、バーンシュタイン兵はその姿を消した。

「レポート……! 貴様……部下達をどうした!?」

「貴方の後ろだ、インペリアルナイト」

「……!?」

橋の上にいるジュリアンが後ろを振り返ると、反対側の騎士に兵達が倒れ伏していた。「ウウ……!」うずくまり、皆唸っている。

「……一人も殺さずに倒したとは……凄まじい使い手だ。部下に手心を加えてくれたのには礼を言う。返礼とし、私も全力で応えよう」
ジュリアンの瞳が金色に輝き、白い煙が体中から噴き出る……。

「! ……その力……まさか」

「我が王より教えて頂いた 己の中に眠る力を最大限にまで高める術 “武神息吹”!! ゆくぞ……!!」

ジュリアンの動きが圧倒的なモノに変わった。地を蹴り一瞬にてラルフの背後を取る。「!」ズバアッ しかしギンナルは空を斬り、ラルフは宙を舞う。バキィッ 妖麗な動きでの蹴りは軽く爪先が肩に触れただけ ! しかし、ラルフのソレはジュリアンを橋の向こう岸へと蹴り飛ばす程の威力だった。ザンツと着地したジュリアンはラルフに斬りかかろうと構えた瞬間、ザアンツ ガラガラッ と橋が斬り落とされた。橋の上にあったラルフは、着地と同時に橋を切ると、そのままシルヴィア達 ローランディアの岸へと跳び移る。トンッ

「……おのれ……!」

「まだその力を使いこなせていなかったようだな。大きな力も使いこなせねば意味は無い」

ラルフの言葉にジュリアンはぐつと唇を噛んだ。

「……勝つただと?」

シルヴィアは静かにラルフを見据える。正直、自分の世話を焼いてくれる少女や騎士達の相手を疎かにしてしまっていると解っているが、それでもインペリアルナイトとバーンシュタインの圧倒的な

軍を相手にし、勝った青年から目が離せなかった。

その時、ローランディアの側 西側から援軍が現れた。

「!? コレは」

シーティア、ウオレス、ルイセの三名である。

「……橋を落とすのに手こずっているのかと思っただら……、流石ねラルフ」

「済まなかったな。インペリアルナイトがいたんでな」

「……そう」

とシーティアは橋の向こう側を見た。ルイセもシーティアもそして、ティピと同じ記憶を持つピティも目を見開いた。もっともそれはインペリアルナイトも同じだったが……。

「ジュリアンさん……!!」

「何……? どこだ」

ウオレスが見えぬ目を凝らして聞いてくる。

「橋の向こう岸です。バーンシュタイン軍の指揮官のようです……!!」

「あの制服……インペリアルナイト……!!」

ジュリアンは静かに表情を改めて、シーティア達を見据えた。

「久しぶりだな。どうやらあのペンダント、願いが叶うというのは本当だったようだ……! まさか、こんな形で再会するとは思ってもみなかったが……!!」

「……そうね、私も思ってなかった。折角再会できたのに……残念ね」

「そうだな」

寂しげなシーティアに、ジュリアンは静かに返す。

「ジュリアンさん……インペリアルナイトになれたの?」

「そうだ。そして……貴様らの敵としてここにいる……!」

ルイセとミーシャが竦み上がる程の気迫をジュリアンは見せた。

「……グレッグ卿が斬りかかったのは本当なのね? ……そして戦争か」

「当たり前だ！ あのような非礼を受け、かつてのような友好関係を結べるはずも無い！！」

「でも……、私は退けないわ。たとえ、貴方を倒す事になっても」

「……ああ、次に会う時は容赦はせぬ」

「……私もよ」

ジュリアンはそう言つと、気のつき始めた部下達を連れ、引き上げて行った。

31・ローランディアの美姫と異形の青年

「昨日の友は今日の敵か」

ウォレスは静かにつぶやく。シーティアは視線をシルヴィアに向けた。

「大丈夫、シルヴィア？」

「ああ……。そちらの方々に助けて頂いた。礼を言う」

シルヴィアはスツとラルフ、ミーシャに頭を下げた。

「姫様！」「將軍！」

一般人を相手に頭を下げる行為に批判の声を上げる騎士達を睥睨し、黙らせる。

「この方々はローランディアと我々を救ってくれたのだぞ。ソレに
応えずして何が騎士か！」

「ハッ！！」

「何かお礼をさせて頂きたい」

シルヴィアは美しい顔を穏やかに微笑させて問うて来た。ソレだけ
でミーシャは顔を真っ赤にする。

「え……。えと、別にいいです！ 友達の妹さんですし！！」

「……姉上のご友人の方……？」

「ハ……。ハイ、身分違いで甚だしいけど……。ルイセちゃんと私は
……」

「そうか……。重ね重ねのご無礼をお詫びする。貴方達は姉上を助
ける為に力を貸して下さったのだな」

更に穏やかになるシルヴィアにルイセ、ミーシャはしどろもどろ
だ。そして、シルヴィアはラルフを見つめる。

「礼は不要……。私は私の目的がある。その為に彼らに力を貸して
いるに過ぎないからな」

「……ソレ程の腕を持つのなら、私の下へ来て頂けぬか？」

「……身に余る光栄だが、私の剣は私の物だ。他の誰の物でもない」

「残念だ。気が変わったら来てくれ……ラルフ殿」

「いいのか？ 私はバーンシュタインの人間だぞ」

その言葉に、騎士団が身構える。シルヴィアも緊張するが……すぐに元に戻った。

「祖国に仇なしてまで、貴方はやるべきことがあると？」

「ああ」

「……そうか」

それ以上は言わず、シルヴィアはシーティアを見た。

「やっとこっち向いたわね」

「……礼を言っておく。姉上の為にもな」

眉根を寄せて言うシルヴィアに肩を上げて、応える。

「相変わらずね、シルヴィア」

「お前もな……。ところで」

とシーティアの前に顔を寄せ、小声で聞いて来た。

「どこで見つけた、あの掘り出し物……！ ……私に出来ないか？」

「……残念、アイツは私に手を貸してるだけよ」

「……欲しければ掴み取れという事が、面白い」

「貴女ね……」

物好きなど言いたげなシーティアにシルヴィアは女性らしく笑って答えた。

「私は欲しい物を手に入れる為には手段を選ばん」

「……知ってる、ま……頑張んなさい」

シーティアはそう言いながら、作戦成功の報告の為に皆へと戻る面々の一人……ラルフを見るのだった。

シーティア達はブロンソン將軍の待つラージン砦へと戻った。シルヴィアの姿を確認すると門番は慌てて開門を宣言する。

「……流石、第二王女！」

「その手のおべんちゃらは好かん」

わざとらしく感嘆するシーティアにシルヴィアは懔然と返す。騎士団連中や他の者が口にしたなら即、叩き伏せられるだろうが、嫌いなながらも認めているシーティアになら許す。それがシルヴィアであった。

一行はブロンソン將軍の待つ作戦司令室へと進んだ。

「おお、戻ってくれたかシーティア！」

「橋は落とした。姉上の救出を考えてくれるな、將軍？」

「……シルヴィア皇女殿下……！！！」

シーティアの隣に立った皇女に將軍は言葉を失った。

「何故こちらに……北のノストリッジに向かっていたと……！！！」

「ベルナードから話を聞いた。姉上の危機だ……ジツとしてはおれん。ブロンソン、貴公なら何か手を考えているのではないか？」

「……その話ですが……」

ブロンソンの話に一同は凍りついた……。

「なんだと……姉上がもう……ガルアオスへ向かっている……！？」

「いくらなんでも早過ぎる……！ 橋を落とされるのを分かっているてこんな事をしたのかしら……」

二人の言葉にミーシャがキョトンとした。

「どうして橋を落とされるのが分かっていたら、レティシア姫を……ナント力監獄へ移送できるんですか？」

「あの橋を使えば、ガルアオス監獄は目と鼻の先だ。もっとも、あの場で橋を落とさなければ、意地でも橋を取り返そうとしてくるだろうからな。落とした事は正解だ」

ウオレスがラルフを見据えながら応える。

「……策はある。私の商売道具を使えば良い」

「そう、貴方商人だったわね」

「そろそろ、忘れられている頃だとは思ったよ」

肩をすくめ、ラルフは応える。シルヴィアはラルフに向き直る。そつと手を取り言った。

「頼み申し上げる。姉上を救う為にも」

「……ああ、参せておいてくれ。……正直、これ以上戦争に関わりたくはないが、目的の為だ」

「それで構わない。頼りにしている、ラルフ殿」

「……そろそろ、手を離してくれないか？ 姉を助きたい貴女の気持ちはよくわかったから」

困ったように苦笑して言うラルフにシルヴィアは女性らしく微笑むと

「ツレないな……。私は殿方に興味を持ったのは初めてだというのに」

「？ ……何か？」

小声のシルヴィアの声はラルフの耳には届かなかった。シルヴィアはそれを知っていて尚、「フフ」と笑い今度は腕を組んで来た。

「お……おい？」

「手が触れるのは嫌と仰るからな。腕を組むしかあるまい？」

「……どういう理屈だ」

「さあ！ 姉上をお救いに向かうぞ、ラルフ殿！！」

シルヴィアはそのまま、ラルフを引っ張って行った。シーティアはソレを心底呆れたという表情で見つめ、一同はポカンとしていた……。

「……まあ、そう言う訳で……私達がなんとかします、將軍」

「そ……そうか……。では、エリック……お前達は私の指揮下に入れ」

その言葉に、エリックを始め、ローザリア騎士団は反発した。

「我々の力では姫様をお救い出来ぬと仰るか！？」

「我らの力が女子供に劣ると！？」

ソレに対し、ブロンソンは言った。

「明らかに騎士団のお前達よりも、彼女達の方が敵も油断しよう。

それに何より、シーティアの強さ……知らぬ訳ではあるまい？」

「そ……それは……！」

「更に、盲目の剣士はあの名高きウォレス殿、二人のお嬢さん方は

魔法学院の生徒とはいえ、強力な魔法使いだ。これ以上の説明は不要であろう。即刻持ち場へつけ!!」

「……ハッ!!」

騎士団は静かに退がって行った。シーティアは最後、こちらを憎々しげに見たエリックに目を光らせた。

一見、無害で人の良さそうな顔をしてるけど……肚の中は何かドス黒いのを抱えていそうね

スツとブロンソンに向き直り、シーティアは言った。

「では、將軍……！ 行って参ります!!」

「ウム、頼んだぞ紅龍の姫士ファフニールよ!!」

「その名にかけて!!」

こうして、一行はラージン砦を発った……。

シーティア達はジュリアンと再会した溪谷へと辿りついた。ラルフは静かにバーンシュタイン兵が見張りを行っていた高台へと移動した。

「それで、どうするんだ？」

ウォレスがラルフへと問いかける。するとラルフは静かに袖の下からリングを二個取り出した。二つのリングはソレゾレが黄金の粒子へと変化し、やがて漆黒の鞘とラルフの身の丈を超える剛弓へと姿を変えた。

「鞭の銘はビフレスト、弓の名はアルテミス。この二つを使えば、簡単に越えられるさ。よく見ておけ」

レイピア剣並の矢が弦から生じ、ソレにビフレストを巻き付けると、ビシッとラルフは弓を構え……矢を放った。ズドオウツ 矢は見事に向こう岸の岩壁へと突き立った。スツとアルテミスをリングに戻し、手首に巻き付けたビフレストを外し、自分の背後にあった適当な大きさの岩に巻き付けた。

「……後は、ブロンソン將軍から預かった吊紐を使って向こう岸まで滑ればいい」

「まずは俺から行こう。向こう岸に立った時、敵の残党がいなくても限らんからな」ウオレスはそう言いながら、カチリツと固定具をつけ、吊紐でしっかりと体を固定すると、「ソレ！」一気に向こう岸へと滑り渡って行った。

「……次は？」

「私とルイセが行くわ」「ええ!?!」

一気に二人で行くと宣言するシーティアにルイセが不安そうな声を上げる。その腰をしっかりと抱きしめ、吊紐を体に固定させていくシーティア。ピティは彼女の肩へとしがみつく。

「お……お姉ちゃん、無茶だよ……!」

「大丈夫！ お姉ちゃんに任せなさい！ ソレ!!!」

「キャ……!!」

そのままシーティアは、ルイセを連れて行ってしまった。向こう岸へと見事に渡り切る。その様を確認するとラルフはミーシャを見た。

「次は……君か？」

「うう……楽しそうな……でもやっぱり怖そうな……!!」

「大丈夫だ」

ラルフは優しく微笑み、ミーシャの手を取るとしっかりとロープに固定させた。

「……よし、行くぞ？」

「ちょ……ちょっと待ってラルフさん!! まず深呼吸を……!!」

ああ、でもでも……。途中でロープが切れたら谷底へ真っ逆さま……

……!!

ラルフは苦笑しながらポンツと頭を撫でた。「……あ」「ミーシャが熱に浮かされたような表情で彼を見つめる。

「落ち着いて、下を見るから怖いと思うんだ。私を信じて、もっと遠くを見るんだ。ホラ、シーティア達が待ってるぞ」

「あ……ハ、ハイ！」

スツとロープに向き直るミーシャにラルフはフウと息を吐き、ソツと離れる。ミーシャが「ヨシ」と行こうとした所で、慄然とした声が聞こえた。

「早く行け！」

ドゴオツ 背後から靴底でミーシャの背中を思い切りシルヴィアが蹴り飛ばした。

「キャ~~~~、ひどいよー！！」

ミーシャはそう言いながら、向こう岸へと渡って行った。「!？」ラルフは驚愕の表情でシルヴィアを見つめる。対してシルヴィアはスツと優雅に手を差し出した。

「では、参ろうか。ラルフ殿」

「……あ、ああ……」

とシルヴィアにロープを巻きつけようとしたが、グイッ「？」ラルフの顔を逆に引き寄せ、その首っ玉にしがみついた。咄嗟にラルフはシルヴィアを支えようと腰を抱きしめる。

「では……行こう」

「……そう言うコトか。貴女を少し誤解していた。もつと遠慮するタイプかと」

「フフ……私は欲しいモノを手に入れるのに手は抜かん」

「……ヤレヤレ、困ったお姫様だ」

スツと岩に巻き付けたビフレストを外し、黄金の粒子へと戻した。矢のみが向こう岸に残されている。ラルフは静かにシルヴィアをお姫様抱っこすると、トオンツ 地面に爪先立ちし、地を押しようにして蹴って宙に浮くと消えた。スウツと音も無く姿を現したラルフは地から数c m程浮いて、そのままトンツと着地した。

「……な？」

「着いたよ、お姫様」

スツとシルヴィアを下すラルフ。その周りにはシーティア、ウオレス、ルイセ、ミーシャがいた。

「……シルヴィア、アンタね……！」

シーティアがミーシャの頭を撫でながら抗議する……。

「……聞いて　ないわね」

が、熱に浮かされたかのようなシルヴィアを見つめ、半眼で呆れながら述べるのだった。

「お姉さま〜！」

「よしよし……」「……もう、ミーシャったら」「……」

自分の胸に顔を寄せ泣くミーシャの頭を撫でるシーティア。ソレをルイセとピティがジッと見ている。ウォレスは静かにラルフを見た。

「……なんなんだ、この状況は？」

「さあ……？」

シルヴィアにくつつかれたまま、ラルフも首を傾げた……。

ガルアオスへと続く吊橋を、500を超えるバーンシュタインの軍兵が三列に編成し、渡って行く。その軍の丁度半ばに堅牢な創りの馬車を通っている。

ザツザツと隊列を乱すことなく歩いて行く軍兵だったが、一番先頭を歩く兵が足を止めた。一人の男が、彼らの行く手を阻んでいた。

「ん？……何者だ、そこをどけ」

「我らはこれより、ローランディアの罪人をガルアオスへと送るのだ」

「邪魔立てすれば、貴様もローランディアの者とみなすぞ！！」

男はゆっくりと肩を鳴らし、その金と銀の瞳を挑戦的に煌めかせ、不遜に笑い、背の剛刀をガチツと鳴らす。

「……ウルセエぞ……、人間共……。俺は弱い者イジメする気は無い。テメエらの馬車の荷を置いて行け。死にたくなければな」

「この人数を相手に？」「たった一人でだと！？」「バカが……！！」

兵士達は一斉に戦斧、長剣を構える。その様を見、男……シユワルゼはひどく退屈そうに言うのだった。

「弱者をいたぶることほど、俺の嫌うモノはない」

バキィッ 次の瞬間、一人の兵士が吹き飛ばされていた。それは一瞬の事で、肘鉄を喰らい、吹き飛ばされている事など、当人はおろか、周囲の者も気付かなかった。シユワルゼは吹き飛ばした男の手から奪った三メートルはある鉄柄の巨大な斧を片手でビュンツと振り、バーンシユタイン軍を見つめる。その表情 不遜。

「うおお〜！！」「踏みにじれ！！」

「虫ケラめ」

狭い橋の上を一斉にバーンシユタイン軍が、驚愕から醒め、突進して来た。普通であれば対象は確実に挽肉と化すだろう。ドガアッ 普通でない対象……シユワルゼ・ロードは戦斧を横に地面と平行にし、一群の突進を微動だにせず、受け止めた。

「……な!？」

五百からなる隊列は見事に足を止めた。驚いた表情の兵士にシユワルゼはひどく面倒臭そうに言った。

「……これで、最後だ。本当に命はいらんだな？」

その右眼が黄金に煌めき、圧倒的な力が彼の体から噴き出る。

「お、……おのれ!!」「バケモノめ!!」

前列の兵がソレでも戦斧を振り下ろそうとした。ギィンツ 一旦斬り払い、シユワルゼは一足跳びで後方へ退がる。ザッ 着地と同時に地を 駆ける。ビュンツ その姿は 消えた。中に青い斬閃が一つ 疾った。

次の瞬間 五百の兵団は全員真っ二つに両断された。馬車にのみ、傷一つない。

「……二度も命を助けてやるほど、俺はお人好しじゃない」

シユワルゼはにべもなく言い捨て、戦斧の柄を肩にポンツと当て馬車に近づく。馬車の御者は、周りの光景にすっかり怯え、まったく動けない。堂々と馬車の戸に手をかけ、開ける。中には姫が逃げ

ないよう、監視の兵がいた。

「ウオオ~~~~!!」

バキィツ 剣を振り被ろうとした男の喉笛に戦斧の柄の先を当て、自らの勢いで気絶させる。ドサアツと倒れ伏した男を見もせず、シユワルゼは大陸一の美姫と呼ばれるレティシア・レミィ・ローランディアを見据えた。

「……………テメエが、レティシア姫か？」

「！ 貴方は……………カーマインさん？ ……違う」

「俺の名は、シユワルゼ・ロード。少し付き合ってもらおうぞ」

シユワルゼは言うなり、レティシアの両手を縛る縄を外し、彼女を外へと出した。

「！……………これは」

「ああ……………大人しくテメエを渡しておけば、死なずに済んだバカ共だ」

「そのような言い草はありません。彼らは自らの職務に殉じたのですよー！」

「命よりも大切な何か……………仕事とやらか？」

「……………それは、人によって違いますが……………。少なくとも、彼らはそうしなければ……………自分の帰る場所が無くなってしまつのです」

「帰る場所？」

「貴方にも在るのでしょう？ 大切な人……………心地良い空間。彼らはソレを守る為に己の使命に命を賭したのです」

「……………使命？ ……??」

シユワルゼはレティシアの言葉に首を傾げ、眉根を寄せる。レティシアはその様に軽い驚きを持った。

「あの……………私の説明は 分かりづらかったですか？」

「うむ サツパリだ」

シユワルゼはひどく端的に返した。

「俺は俺の為にしか生きぬ。何にも誰にも屈さぬ。俺は、俺のやりたいように生きる。つまり……………最強となる事……………これぞ、我が野望

「!」

「……可哀想なお方」

「あん？」

「貴方は……人を愛した事が無いのですか？ 誰かを愛おしいと、守りたいと 想う気持ち 愛がないのですか？」

「……？ ……ソレがないと、何故可哀想なのだ？」

レティシアは静かにシュワルゼを見つめ、言った。

「ソレでは 貴方は孤独です」

「……フン、そんな事か」

「え？」

「テメエの考えで勝手に俺を憐れむな。いいか、レティシア姫。最強者とは常に孤独、闘いとは、常に孤独よ。だが だからこそ、面白いのだ」

今度はレティシアが目を丸くし、シュワルゼを見る番だった。

「……ム、俺の説明が解らんか？」

「あ ハイ」

「……まあ……ソレならソレで構わんが。こういう事だ」

「え？」

「テメエと違う価値観の者も中には居る ましてや、俺はテメエ等とは違う存在だからな」

「あ……」レティシアはハツとして気付いた。自分の考えが正しいと教えられてきた。王家の教育とは こういうモノだ。ソレが正しいと しかし、シュワルゼの言葉には嘘も偽りも悪意もない。

酷く利己的で、決して善ではないのに何故か、純粹で 美しい。

「……私、自分の考えが正しいと他者に押しつけるなんて……！ シュワルゼ様……。命だけではなく、私の考えまで改めてくださり、有難うございます」

「あ？ 俺は俺の考えを述べただけだ。礼を言われる義理は無い」
「……違う存在とは……身分の事ですか？」

レティシアはソレが気になった。自分と目の前の青年との考えの差は身分にあるのかと。少なくとも、彼は悪人ではない。態度こそ不遜だが、何の見返りも無しに自分を助けに来てくれた事だから。彼が知りたい。

「違う。存在だ。種族と言ってもいい。……テメエ等人間な身分など。俺は知らん」

「……貴方は……人では無い？ ……ならば……何なのですか？」
「フン」

シュワルゼは邪悪に口の端をつり上げ、言った。

「バケモノだ」

その表情は誇らしげであり、そうである事を心から望んでいる表情であった。

「……そろそろ行くぞ。テメエをローランディアに連れて行くのが依頼なんぞな」

「分かりました。……誰の依頼なのですか？」

「カーマインとティピだ」

「ああ……！ お二人から……！！」

レティシアは感動したような表情でスツと、胸の前に手を結んだ。レティシアをジツと見つめ、シュワルゼはフンと笑った。

「成程。ソレが愛と言うヤツか？」

「……そうですね。友愛です」

「……愛とやらには……種類があるのか？」

「ハイ。とても」

「ややこしい。！！」

心底から言い捨てるシュワルゼが面白く、レティシアはクスクス笑ってしまう。

「最も強いのは……男女の愛。恋愛でしょうか。親子の間にも愛はありますが、どれが最も愛を感じるかと言えば……恋愛だと

私は思います」

「……何故だ？」

「最も自己を見失ってしまうからだそうです。その人の為ならどんな事でもできる。その人の幸せの為なら自分はどんな事でも出来るけれど、その人の幸せは 自分から与えたモノ以外認めない。醜く 高潔な ソレが恋愛」

「ほ……う……？」

レティシアは眉根を寄せ、脂汗を流し始める青年にまた笑ってしまう。五百の兵を平気で叩き潰した男が、自分の他愛無い話を真剣に聞き、頭を悩ませる……。レティシアはこのままずっとこの青年と歩いていたい気持ちになった……。清らかで激しく、痛みを伴う感覚だが ソレがとても心地よい。気を抜けば紅くなった頬が緩んでしまうのを堪えながら、レティシアは一つシュワルゼに願った。「シュワルゼ様……ひとつお願いしてもよろしいですか？」

「？ ……何だ？」

「私の事はレティシアと呼んで下さいまし」

「？ ……『レティシア姫』が名ではないのか？」

その言葉に、レティシアは今度こそ本当に外聞もなく声をあげて笑ってしまった。シュワルゼはソレを見ながら「フン？」と首を傾げている。

と、そこへ新たな気配を感じた。シュワルゼはソレを感じ、ニヤリと笑った。

「レティシア！？」「姉上！？」「レティシア姫え！？」

「シーティア、シルヴィア 皆さん ……！」

シュワルゼ達が向かっていた道の先から、シーティア一行が現れたのだ。

「何で、お前さんがここにいる。シュワルゼ」

「フン カーマインとティピの依頼だ。……まあ……テメエがいる事が驚きだがな、ラルフ・ハウエル」

ウオレスの問いに答えながら、シュワルゼは仮面の男を見据えた。男 ラルフもシュワルゼを見返す。

「私の与えたレギン・スローターは中々気に入ってもらえているよ

うだな？」

「ああ……コイツのおかげで俺はさらなる高みに登れた　礼を言うぞ」

ブンツ　戦斧をラルフに向け、シュワルゼはニヤリと笑う。

「相変わらずだな、シュワルゼ・ロード」

ラルフは苦笑し、己の腰のシエルオープナーを抜いた。シュワルゼはソレに目を細め、ニヤリと笑う。

「ええ！？　ちょ　ラルフさん！？」

「シュワルゼさん、やめて下さい！！」

ミーシャ、ルイセが慌てて二人を止めるが、ビュンツ　次の瞬間にシュワルゼが消えた。

32・シュワルゼvsラルフ

ガアキイツ 巨大な戦斧がラルフの刀に止められる。ゴオウツ
その衝撃で辺り一面に風が起こる。

シルヴィアが腰の剣を抜こうとするのをシーティアが止めた。

「何故止める!？」

「あの二人の闘いを見てから言いなさい」

「……何だと?」

訝しげにシルヴィアはラルフとシュワルゼの二人の闘いを見た。

シュワルゼはバーンシュタインの戦斧をその細身の体で苦も無く振り回し、斬閃は神速の域にあった。並の者 恐らく自分でもさばききるのは難しいと思えるスピードである重量。だが、ラルフ・ハウエルはシュワルゼの繰り出す攻撃を紙一重の所で捌いていく。ガキイツ 細身の刀で戦斧を片手で受け止めるラルフ。シュワルゼはニツと笑い戦斧を繰り出す。

「……な……!?!」 「に……!?!」

シルヴィア、ウォレスの二人は余りの強さに愕然とし、言葉も出ない。それほどまでにラルフとシュワルゼ 両者の動きは凄まじかった。誰一人として踏み込む事などできぬ戦斧の竜巻をそよ風の如く捌き切る。シュワルゼはニイツと笑い、両手で打ち下ろした。ズバアツ 次の瞬間ラルフが爪先立ちをし、トオンツと地面を押し、離れた。スウツと消えたラルフ。その影を断つように斧が振り下るされるも、ピシイツ 斧に斬閃が疾り、「!!」ドサアツ ガチヤアンツ 真つ二つになった斧はそのまま地面に崩れて行った。

「お見事!!」

「……何という男^{ヤツ}……ラルフ・ハウエル」

シルヴィアが歓声を、ウォレスが感嘆を表し、ルイセとミーシャはレティシアと共に緊張して見つめる中、シーティアだけが 静かに二人を見据えていた。

「……どうしたのですか、シーティア様？」

「始まるわよ、今のはただの余興！　ここからが、本番」

「え！？」

肩に留まったピティに伝えるのもソコソコに、シーティアは静かにラルフとシュワルゼを見据える。

「……流石だな……！　俺の繰り出す斧をここまで見事に捌き、切り捨てるとは」

「……お前もだ、シュワルゼ。　考えていたより、ずっと強いようだな？」

「フン」

シュワルゼは静かに、背負った豪刀に手をかけた。瞬間、ラルフもシエルオープンナーを腰を落とし、正眼で構える。ゴオウツ　一つ遅れて音、風が届く。ソコにラルフはおらず、剣はラルフの足元を通り過ぎていった。ラルフは咄嗟に見切り、宙へ飛んで避けたのだ。

トツ着地し、背後に立つラルフに振り向き様一閃、ガアキイツ　まともにラルフは止める。ギインギインツ　互いに剣と剣をぶつけ合う。激しく打ち合いながらも、両者の刃は刃こぼれ一つしない

。シュワルゼの上段の振り下ろし一撃を両手で刀を水平に構え止めるラルフ。その状態のまま、一旦止まる。

「　どうした、テンコマンドメンツとやら　見せてみる！！」

「　お前こそ、バケモノの“力”はどうした？」

互いに全力を出せと挑発し合う二匹の異形。美しく、純粹で、畏しい、二人の姿は否応なく周囲の人間を取りこんで行く。

「……フン」

シュワルゼは一瞬だけ笑うと、「！！」ガクウツ　鏢迫り合いの状態から消え、ラルフの背後を取り、蹴りを放った。ゴオウツ　捉えたラルフは影　。影はグニヤリと揺らぎシュワルゼの四肢を縛り上げようとする。ズバアツ　苦もなく切り捨て、ガキイツ　右の空間に斬りつけた。

するとスーツと両手持ちで止めた姿勢のまま、ラルフは現れた。

ラルフの刀は妖魔刀へと変化していた。

「ようやく出したか、ソレでこそ　面白い!!」

「!!」

ガキイツ　ギインギインツ　激しくぶつかり合うレギンスローターと妖魔刀。ギインツ　ラルフは静かに後方へ退がり、嵐のような剣戟をやり過ぎた。

「……………」

ババアツ　しかし、シュワルゼの剣閃は触れてもいないラルフの体を切り裂く。シーティアの瞳が細められる。

「バカナ……!?　何ていう剣圧だ!!」

「あんな豪刀を　あそこまで使いこなすとは」

ウオレス、シルヴィアの驚愕を余所に、ラルフは静かに己の肉体に刻まれた紅い線を見据え、ポツリと呟いた。

「成程　大した剣閃だな」

ビユンツ　次の瞬間、ラルフの持っていた刀が変化した。その刀身が縮み、商人などが愛用する護身刀へと姿を変えている。

「初めて見るな、カーマインの時には出さなかった武器か」

「　そうね」

ウオレスの呟きにシーティアは静かに応えた。シュワルゼは「フン」と笑み、構い無しに豪刀を振り下ろした。ガキイツ　またしても止められる。ギインツギインツ　しかし、今度はシュワルゼの剣風はラルフを刻まない。ソレ所か、シュワルゼの豪剣が、まるでそよ風のように捌かれている。次々と繰り出される剣閃は完全に捌かれる。

「盾の剣　グラディウス」

「それが、どうした!!」

ガアオンツ　剣速が更に上がり、炸裂音が上がる。

「音……変わったよね……?」

「うん……、お……お姉ちゃん」

ミーシャ、ルイセが不安そうにシーティアを見るが、当人は二人

の闘いにすっかり夢中だった。否、三人の戦士と言うべきか。

「あのシュワルゼが　攻めあぐねている？」

「　このまま行けば、ラルフ殿の勝ちだ」

ウォレス、シルヴィアの言葉にレティシアが述べた。

「私、剣術の事は全く分かりませんが、シュワルゼ様がこのまま負けるとは到底思えません」

「レ……レティシア姫……」　「……姉妹揃って　物好きな」

ルイセが気丈なレティシアに怯み、シーティアはこの姉妹に気に入られた二人の剣士を呆れ顔で見据える。ガオンツ　衝撃音、だがラルフは苦も無く捌いて行く。　そう見えた。

「　どうやら、レティシアの言う通りみたいね」

「何だと、ラルフ殿が押されているというのか？」

シーティアはラルフの足元を見て言う。徐々に　ラルフが後方へ退がっている。シルヴィア、ウォレスが唸る。ガクウツ　上段からのシュワルゼの一撃を止め、ついにラルフの膝が折れる。態勢の崩れたラルフに凄絶な笑みを浮かべ、シュワルゼは右袈裟に斬り下した。

「ラルフ殿！！」

シルヴィアの絶叫。が、この時、シュワルゼとシーティアのみ氣付いた。ラルフの刀がまたしても変わっていたのを。その剣は

地を断つ剣

「地の剣　グラム」

ラルフも両手持ちで自分の頭の上から唐竹に振り下ろした。レギンスローターとグラムがぶつかり合う。「！！」シュワルゼは刃を合わせた瞬間、体を横っ跳びに躲した。グラムの刃は豪刀が完全に止めているが、その地を断つ力がそのまま、シュワルゼに迫っていたのだ。シュワルゼの脇を目には見えない力が断絶していく。ドガアッ　一瞬遅れて、地面が見事に裂けた。その威力は、山をも断つ

「　フン、流石にやるな。ラルフ・ハウエル」

「寝めるのが少し早くないか？」

ガオンツ 豪刀の一撃がラルフを後方へと吹き飛ばす。トオンツが、優雅にラルフは着地する。シュワルゼはソレを見、邪悪に笑う。ラルフの剣がまたしても変化している。

次の瞬間、ラルフ・ハウエルが30人ほどに増えた。「！！」刀の銘は音速剣

「音の剣、フィランギ」

「しゃらくさい！！」

30人のラルフがソレゾレ異なった構えを取り、一斉にシュワルゼに斬りかかる。シュワルゼも縮地法で消え、宙に無数の斬閃を描いた。

「！ アレはお兄ちゃんを倒した技！！」

ドガガガガアツ 両者の剣がぶつかり合い、次の瞬間、ドゴオアツ 二人を中心とした地面、空間が微塵切りにされ、土煙と爆発が巻き起こる。その一瞬後、ドガガアツ 二つの影が反対方向に弾き飛ばされ、地面に叩き付けられた。

「相殺したのか……！？」

「……まったくの互角って訳」

シルヴィアの言葉にシーティアが目を細めて、立ち上がった二つの影を見据える。ラルフ、シュワルゼとも服こそボロボロだが、その肉体はほとんど無傷であった。

「これ程の惨劇を創りながら、ほとんど無傷だと！？ バカな」

ウォレスがその見えぬ目を凝らして、二人の様子を窺っている。

「流石だな、ラルフ・ハウエル……！！」

シュワルゼはソレだけ言うと、己の中に眠る力を引きずり出した。「ウオオ！！」異形の咆哮が口から発せられ、圧倒的な白い光と蒼い雷を纏った。

その瞳は金と銀の闇に彩られ、刃の煌きが宿っている。

「こ……この力……！！ラルフさんと同じ……！？」

「コレが シュワルゼの全力……!!」

ルイセがガタガタと震え、シーティアが顔面を蒼くさせながら、毅然と睨みつける。ウォレス、シルヴィアでさえ、この異形の出現に何も言えない。

「あのバケモノと ヤツも関係があるのか……!？」

「え、それじゃ……お兄ちゃんも!!」

ウォレスの唸りにルイセが問い返す。シーティアはこちらを見てくる、ルイセとピティを見ず、ただ、シュワルゼを見据えていた。

「流石だな、最強のロードよ」

「フン、称号ロードに興味は無い。それに最強かどうか これから分かる」

「私を利用して か？」

「そう言うコトだ」

静かに問うラルフに、シュワルゼは不遜に笑って答えた。次の瞬間、ラルフも剣を一闪 その手には焔を発する魔剣があった。シュワルゼはソレを見、邪悪に笑うと豪刀をしっかりと握りこむ。

「ヤレヤレだ」

ラルフは静かに為息をはくと、仮面の奥の瞳を鋭く細める。シュワルゼが地を蹴った瞬間、ラルフも消えた。ガオンツ ガガアツ 凄まじい雷にも似た音が周りに連続して響き渡る。衝撃で地が裂け、焔が唸り、木々が薙ぎ倒され、土がせり上がる。そのせり上がった土を斬るかのようにシュワルゼは動き、ラルフをして防戦一方となつている。

シュワルゼの刃にラルフは自らの焔を駆使し、何とか攻撃を防いでいた。

「フン、喰らえ!!」

「!!」

ガオンツ 斬撃の一つでラルフを弾き飛ばし、シュワルゼは豪刀を一閃。その剣閃から炎が生じ、ラルフに疾る。

「フレア・アタック……!!」

「魔法剣……！！」

シーティアが静かに呟き、シルヴィアも刮目して見る。

（この男、シーティアと同じように魔剣の力を借りず、単独で魔法剣を使えるというのか？ ……何て魔力と制御力　そして、剣腕だ……！！）

シュワルゼを見据え、その実力と圧倒的な力に最早、彼女に残されて行っている行為は驚愕しかなかった。それ程の化け物と　真っ向から斬り合う男　ラルフには、感動さえ憶えた。

「このレヴァンティンに炎で挑むとはな……！！」

「ぬ……！？」

迫り来る炎を相手にラルフもレヴァンティンを振るった。ラルフは自らのフレアアタックにレヴァンティンの炎を爆ぜると炎は紅い光となってシュワルゼに迫る。

「ヴァハムート・フレア」

「！！　アレは、溶岩を蒸発させた術！！」

一撃必殺とも言えるその剣を　しかし、シュワルゼは傲岸不遜に笑って見据える。シュワルゼのフレアアタックをアツサリと散らす、紅い熱光線に豪刀を構えると、刀を持つ両手からソレゾレ青白い光を生じ　、ソレが豪刀に吸収され、周りの物全てを輝きに包みこむ　。青白い光の豪刀をシュワルゼは一閃した。

「デュアル・ソウル・ストライク……！！」

バシユオウツ　「！！」ラルフの放った紅い熱光線はアツサリと破られ、シュワルゼの放った青白い光線が全てを吹き飛ばしてラルフに迫る。咄嗟にフィランギの音速で避けるが、余りの威力から生じた衝撃波で体勢を崩してしまう。

ゴウツ　その背にシュワルゼが豪刀を振り被って現れた。斬、空間が斬られたのがハッキリと分かる青い斬閃、音も無くラルフはフィランギのスピードを利用して避ける。バツ　しかしシュワルゼの剣風はラルフの肩を裂いている　。

「　　フン、いよいよ体力が尽きて来たようだな」

見た目は確かにボロボロだが、眼光も鈍らず、息も切らさぬラルフにシュワルゼはニヤリと笑って問いかける。

「さあ……そろそろ成ったらどうだ？ テメエも」

「正直に言えば、成っても構わないが、……他に例したい事がある」

「フン、なら引きずり出すまでよ!!」

言つとシュワルゼは一気にラルフに駆けた。ラルフもレヴァンテインを構え、迎え撃つ。激しい剣と剣のぶつかり合い。火花が散り、炎が猛り狂い、青い斬光が煌く。超人的なシュワルゼに対し、魔人の如き動きで惑わせるラルフ。

お互い一步も退かない。ガオンツ レギンスローターとレヴァンテインが中央で激突し、両者そのまま鏝迫り合いとなる。

「フン、こうなると今のテメエじゃ勝てねえぞ」

ググ ツとラルフの方に苦も無く豪刀が傾く。ラルフの肩の手前で、シュワルゼの手が止まる。ラルフは静かにシュワルゼを見据える。

「フン」

シュワルゼはその落ち着きように何かを感じ取ると、躊躇なく刀を振り下ろした。ズバアツ そのまま苦も無くラルフが斬られ、一刃両断される。

「な!?!」「ラルフ殿!!」

シーティア、シルヴィアが声を上げ、他の者は絶句してしまふ。

しかし、斬られたラルフの体は紅の炎へと変化し、シュワルゼに纏わりつき、

「又ウ……!?!」

その周囲を焼き尽くして行く。「フン!」ドオンツ 気合いを入れ、炎を弾き飛ばす。が、レヴァンテインの炎はシュワルゼの放つ白い光でも消えない。

「ほう?」

「ヴァハムート 神龍の炎 レヴァンテインの力……甘く見る

な、シュワルゼ」

「フン……ならば とつておきを見せてやる」

シュワルゼは炎の外から声を放つ男に対し答えると、豪刀を眼前に掲げ、青白い光を纏わせる。「ウオオオ〜！！」次の瞬間には己の全周囲を斬り裂いた。ズゴオウアツ その斬閃が描かれた地面から青白い光の炎が生じ、全てを吹き飛ばした。

「！！！」

ガアキイツ その返す刃で炎の後ろにいたラルフに斬りかかり、ドゴオアツ 吹き飛ばした。地面に叩き付けられ、土煙りが周りに漂う。シュワルゼはその土煙りに向かつて話しかける。

「テメエの炎が凄いの分かった。だが 俺の刃も伊達じゃねえ……。テメエが神龍なら、俺は血の刃を放つ邪龍……。ブラッドヴェインだ」

「ニズヘグの邪龍、か」

ラルフは静かに立ち上がり、その言葉を呟き返す。シーティアが静かに言った。

「二十年ほど前に三国の軍を叩き潰した黒い悪魔……。確かそいつの名がブラッドヴェイン」

「隊長がいなくなつてしばらくしてから現れた謎の剣士か」

ウオレスはシーティアの言葉に返す。ピティがソレに対してもっともな意見を返した。

「ですが、シュワルゼさんはどう見てもシーティア様達と同世代の方ですよ」

「年を取らないのかしら、アイツ」

「そんな……！」

かつて、ローランディア、ランザック、バーンシュタインの三国がその力を欲する余り、軍を差し向け ソレを返り討ちにして行った剣鬼ブラッドヴェイン。……伝説にして最強と言われた剣士は、突如としてその行方を晦ました。

「”最強”のブラッドヴェイン……か」

ウオレスが唸るように言い、ルイセとミーシャ、レティシアは小首を傾げる。シルヴィアにしても同じであった。「最強の剣鬼」と称された目の前の男の正体。だが、ラルフは静かに炎の刃を相手に向ける。

シユワルゼと同じく伝説とされる神龍ヴァハムート　ソレを倒した伝説の勇者が使ったとされる刀を

「　　見せてみる、テメエの力を！！」

「私の力がどれ程の物か……その身に刻み込むがいい！！」

ズゴオウアツ　異形の影を纏い、白い光と薄緑色の雷がラルフの全身を覆う。力の余波で仮面が割れ、ラルフの素の眼差しが金と銀の闇に彩られている事も窺える。

「……………！　　やっぱり、お兄ちゃん……………！」　「ラルフさんが　お兄様と同じ顔　！？」

「　　シーティア様　　コレは」

ピティ達の方を見て、シーティアは一言。

「私にも解らないわ。　　教えて欲しいくらいよ、アイツらに」

「　　何やら、ゲヴェルとお前達兄弟　　そして奴等には何がしかの関係があるようだな」

　　と言つウオレスに対し、ルイセ、ピティが叫ぶ。「ウオレスさん！！」

「良い、本当の事だから。……………そうね、そう考えるのが妥当ね」

「　　まあ、お前等というより　　カーマインと言つた方が良いな」

……………
　　そんな一行の会話など、吹き飛ばしてしまうほどの一撃が、ラルフとシユワルゼの間で生じた。ドゴオアツ　二振りの絶刀が激しくぶつかり合う。先程までとは両者の動きも、力も、反応速度もそして魔力も　　桁が違う。

「　　どっちもバケモノだ　　！　　クソツタレ！！」

ウオレスが震えだした膝を意志の力で押さえつけながら、悪態を吐いた。否　　最早、化物というレベルでは無い。人智の及ばない

力と力のぶつかり合いは、神か悪魔を思い起こさせる。

隊長に匹敵する強さの者が二人……！！ ソレもあの化物と闘った時の隊長と同じだ……！！

ウォレスはシュワルゼとラルフの闘いを見ながら、己の尊敬して止まぬ「隊長」の姿を両者に重ねていた。

ラルフの炎を纏った剣閃が、シュワルゼの青白い斬閃が疾る度、胸を打つ何か。この闘いには意味も益も無い。なのに、何故これ程までに見ている者の心に彼等の剣は響くのだろうか。

シュワルゼが豪刀を斬り下げれば、ラルフも魔剣を振り上げる。一進一退の攻防 というよりは、目まぐるしく、攻守が入れ代わる。どちらが攻め、どちらが守りなのか 最早肉眼では追えない。気配のみで両者の動きを追う戦士達。

「この二人 どこまで真つ向勝負なんだ」

「ホント、呆れた奴ら アイツにそっくりだわ」

互いの剣と剣をぶつけ合い、決して退こうとしない両者……。美しく、純粹で、見る者の心を捉えて放さぬ二人の剣士。光の異形

二匹！

ラルフの斬閃を見、シュワルゼはニヤリとした。

「フン、いい加減に見飽きた！！」

「！！」

ガオンツ またしてもシュワルゼの強打撃。ラルフをして全身を軋ませる程である。

「そろそろ、終わりだ！！」

「！ アレは先程の」「連続攻撃！！」

宙に無数の斬閃が描かれ、シュワルゼが消える。ギギギギギインツ 交差法気味に連撃を叩きこみ、シュワルゼは後方へ姿を現す。ズザアツ その時には ラルフは宙を舞っていた。

「！！」

ズババアツ 宙で体に無数の紅い線を刻み、地面に叩きつけられる。ドゴオツ 土煙りが舞い、シュワルゼは静かにそれを振り

返る。

「どうした。テメエの力は、その程度か!！」

ズゴオウツ 剣閃から青白い光の槍を ソウルフォースの魔法
剣・ソウルストライクを放ち、挑発しながら土煙に叩きこむシュワ
ルゼ。

「フン」

しかし、シュワルゼはすぐに構えを解き、右側面を向く。

ズドオアツ

炎の熱線がシュワルゼに放たれる。斬、苦も無く、レギンスロー
ターで斬り捨てる。目の前に自身と同じ顔と目を持つ男がいた。ガ
キイツ 炎の刀と豪刀が激突する。

33・異形による闘い

「……フン」

シュワルゼはそのラルフを見て、ニヤリと笑う。その全身をズタズタに切り裂かれている姿のラルフを。当のラルフは全く表情を変えず、シュワルゼを、その金と銀の闇に彩られ、刃の煌めきを秘めた瞳で見据える。

「どうした、それで精一杯か？」

「いい攻撃だ……」

「……又？」

ラルフはそう述べると、レヴァンティンを握り直した。ギインツ今度はシュワルゼが後方へ吹き飛ぶ。ザンツ 苦も無く着地するシュワルゼが視線を戻した時、ラルフの刀が変化していた。

炎が集束し、鏢の部分の宝玉へ吸い込まれて行き、レヴァンティンはその鏢を变化させ、成長し 刀身はレギンレイヴにも匹敵する絶刀の煌きを宿していた。

「……これが真のレヴァンティンの姿だ。覚悟はいいな、シュワルゼ」

「フン……、それがどうした!？」

鏢迫り合いをやめ、豪刀を振り下ろすシュワルゼ。ガオンツ 炸裂音が響き渡り、しかし ラルフは、真っ向から受け止めて見せた。

「……又!？」

「どうした? 来ないなら こちらから往くぞ!！」

ラルフはそう宣言すると、レヴァンティンを振り上げた。その両手持ちの上段の構えは

「グラム? まさか!！」

シーティアが叫ぶのと、シュワルゼが飛び退いたのは同時
ラルフの刀は振り落とされた 。 斬! グオアアア !

！ 炎の剣山がシュワルゼの脇を通って行った……！ シュワルゼはソレを見てニヤリとする。

「……凄えパワーだ……！」

もう一度 グラムの両手上段の構えを取るラルフに、シュワルゼ「だが！」

ゴオウツ 振り下ろされた斬閃を豪刀で 強打撃で吹き飛ばす
！！ ドガアツ 炸裂音が一瞬後に響き渡る。

「斬閃が丸見えだぜ！！」

後方で着地したラルフの体勢が整う前に、勝負をつけようとする……！ だが、次の瞬間、ラルフが一気に増えた ……！！ その数

30人程度 ……！！

「凄い ……！ フィランギじゃないのに ……！！」

「ラルフ殿は 分身が使えるのか！！」

ルイセ、シルヴィアが同時に驚愕する。それに、シュワルゼは不遜な態度を崩さない。そして傲岸に言った。

「分身などしない……！！ 本体は常に一つだ！」

ガオンツ 30人の内の一人が斬りかかろうとした時、シュワルゼはその一人を選んで袈裟がけを放った！ ズバアツ 斬られたラルフは炎と成り霧散する。

「 随分、現実的な意見だな？ シュワルゼ・ロード」

目の前にラルフが現れた。刀を左掌に握り込み、右下段に構える
その構え

「ア………！ アレって………！？」

「お兄ちゃんの ……！！」

ピティ、ルイセの言葉が言い終わる前に、ラルフの刀は左上に斬り上げられた……。ドゴオウアツ 凄まじい爆風が生じ、圧倒的な一撃がシュワルゼを捉えた………！！

土煙が巻き起こる中 静かにラルフ・ハウエルは立っていた

。ヴァハムートの炎に包まれ、レヴァンティンの刃によって吹き飛ばされたシュワルゼ・ロードを静かに見据えて

「クク……クク　ハハハハ……ハアツハハハハ！」

ズドオウツ　気の振動　ゲヴェルの波動で煙を吹き飛ばしながら、シュワルゼはラルフの前に立つ……。

「……フン」

ラルフも静かに口の端を吊り上げて、笑う……！　スツとラルフは刀を鞘に納め、抜刀術の構えを取る。……そして、ガオンツ　風がシュワルゼの前を通り過ぎ　遅れて、衝撃がシュワルゼの両腕を軋ませた……！

「ジュリアンの神速抜刀……！　カーマインが盗んだ技ね」

「では　ラルフさんはカーマインさんから……！」

シーティアの言葉にピティが反応した。

シュワルゼは、それをアツサリと受け流し、強力な右斬り下しを放った。ガキイツ　それをラルフは苦も無く受け、斬り返して来るが

「……！！」

刀を振り被ったラルフは炎と化し、霧散　！　シュワルゼが同時に背後へ豪刀を構えると、ガキイツ　構えた箇所丁度レヴァンティンが迫っていた。

ガキイツ　火花が散り、両者の凄まじい剣戟の威力によって、辺に衝撃波が生じた。

「キヤアア！？」「グウウ……！！」

ルイセをシーティアが、ミーシャをウオレスが、レティシアをシルヴィアが庇う！　シーティアの肩の上でピティは二人の異形を目の当たりにした。

鏢迫り合いをしたまま、ラルフが30人に分身し、一気にシュワルゼに襲いかかるのを、シュワルゼも“連続攻撃改”で迎え撃つ！　ドガガガガガオンツ　雷鳴が轟いたような爆音を生じさせる両者だが、今度は互いに吹き飛ばない……！

「……テンコマンドメンツの力を　異形力でカバーして使っているラルフ……！　それに平然と追って行くシュワルゼ　レベル

は互角ね」

シーティアが冷静に両者の激闘を見据えて言った。それにピテイ、ルイセが驚く。

「ええ！？ でも……お姉ちゃん」

「異形力なら、シュワルゼ様も出しています。テンコマンドメンツの分を異形力で補っているのなら　ラルフ様の負担は……！」

応えは、シーティアでは無くウォレスが言った。

「応えは直に出る……。黙って見てろ！ ……こんな勝負……滅多に見られるモンじゃあねえ……！！」

どちらも　まるで一撃が決まらない……。互いの技を繰り出し合いながら　互いの技を潰し合う……！！

「あ……当たらない……！？」

「……何て奴らだ……！　言葉も出ねえ……！！」

レイシアとウォレスがそう述べ合う中、無数に斬り結んで両者着地した。そして、互いに構えを取ったその時　ガクウツとラルフの膝がついに崩れた。一時的にだが、ラルフの異形力が底をついたのである。

「もらったあ……！」

次の瞬間、シュワルゼは己の強盗にすべての異形力と、グロッシュを注ぎ込み、青白い光の豪刀へと成ったレギンスローターをラルフに向け、一閃した……！！

「デュアル・ソウル・ストライク……！」

全てを飲み込む青白い光の光線ヤリがラルフに向けて放たれた……！

「アレは先程の……！！」

「桁違いのパワーだ……！」

「まともに行くな、逃げなさい……！」

ピテイ、ウォレス、シーティアの叫びに　しかし、ラルフは反応できない。一時的だが、体が硬直してしまったのである。

「ラルフ殿……！」

「お……お兄ちゃん!!」

シルヴィア、ルイセの叫び声とともに　ズゴウアツ　炸裂するシュワルゼの超必殺技……!!　余りにも理不尽なその破壊力に　シーティア達は言葉も無い……。

シュワルゼは静かにその金と銀の闇の煌きを秘めた瞳で土煙を見据える。完全に振り切った体勢　ソレは、シュワルゼをして一瞬の硬直を避けられない究極の魔法剣……!!　その隙を突いて、レヴァンティンが炎を纏った。

「　ヴァハムート・ソウル・ストライク!!」
「しま　!!」

ゴオウアツ　神龍の紅炎を纏った青白い光の一撃がシュワルゼの前に現れた……。シュワルゼは、静かに光の中へ消えて行く……!!　その中で……ラルフの思惑に気付いた。

俺のデュアルを……目晦ましにしゃがった!?

土煙が　爆風が　!　ほとんど同時に上がり　、両者は互いの絶技の直撃を浴びた……!!

「ど……どうなったんだ……!?!」

ウォレスが　ジツと両者の闘いの場を身を乗り出して見据える……。少しの気配も逃さぬよう　。

ラルフがソウル・ストライクの強化魔法剣を使い、シュワルゼを巻きこんだのを確認できたのは　、シーティアだけであった。ウォレスやシルヴィアには、シュワルゼが自爆したように見えていた。ルイセ達に至ってはまるで見えていない。

爆風が晴れた時　満身創痕のラルフが現れた。貴族風の服装はボロボロで、見る影もない　。互いの絶技を防ぐ互いの絶刀　!　そのラルフの見据える先には、ラルフと同程度にボロボロな、シュワルゼが不遜に笑っていた　。それにラルフもニヤリと笑う。
「……ち……、相撃ちとはな　!　レギンが無ければ危うい所だったぜ……!!」

「決着は　着かなかつたな」

互いに刀を鞘に納め、リングへと戻す。その様をピティ、ルイセ、ミーシャの三人が胸を撫で下ろして見つめ、レティシアとシルヴィアは、それぞれの想い人の下へと走り寄って行った。

されるがままになるラルフとシュワルゼを見据え、ウオレスが戦士の笑みを浮かべた。シーティアだけが二人の異形を表情を変えず、真剣に見つめていた。

アレが……ゲヴェルの力……！ 私達はあるなモノに挑もうというの？ そして

「……イヤね、自分が取り残されたみたい……！ 気に入らない」

「？ どうしたのですか、シーティア様？」

「……何でもなくいい」

「……？」

ピティには、シーティアが何故そんなに不満げで どこかスネたような顔をしているのか 見当がつかなかった……。

「 好都合だ……、アンタ達二人をここで殺せる……。ツイてるな」

場が和やかな空気に包まれようとした時 。一人の仮面騎士が現れた……。その声 ラルフ、シュワルゼと同じ ！

「……ほう、同族か」

「まさか、連戦する事になるとはな」

シュワルゼ、ラルフの二人はレティシアとシルヴィアを退がらせ、刀を具現化させて構える……。その仮面騎士は、存在が歪んでいた。その騎士は、無手であった。その騎士は、正まさに闇であつた……。イレギュライレギュラ

「……さあ、俺の血と憎悪を癒してもらうよ、欠陥品……！」

フツと姿を消した騎士。ラルフは腰のシエルオーブナーで側面に斬りつける。ガキィツ 騎士がスツと現れた 。一撃を止めた刀の銘は毒の刀 フルンチング。ギィンツ 剣で捌き、騎士をその妖麗な蹴りで吹き飛ばす。ドゴオツ すぐに後方へ着地した騎士の背後に音も無くラルフは現れ、刀を振り下ろした。受け止めたフル

ンチングごと騎士の頭を断ち切ろうとした。しかし、フルンチングを咄嗟に騎士は手放し、縮地法でラルフの剣劇を避けていた。

「……流石は、あの方が認められた者……。カーマインと同じく一筋縄じゃ行かない……か」

騎士はニヤリと笑い、スツと右手と左手につけているリングを掲げた……。

「だけど 俺もレギンレイヴを手に入れていたとしたら どうする？」

ラルフ、シユワルゼが目を細めて、あるいは不遜に笑って見つめる中……ルーチェの両手に、10本の刀身が指の先端に着いた黒手袋がはめられていた。

「邪爪ガリアン・クロウ……！ 妖刀クロムレアを10振りに分けて創られたレギンレイヴだ」

「詳しいな、ラルフ。流石はレギンのコレクターだ」

「成程……、確かに厄介な武器だが、それがどうした？」

「その意見には、同感だ。まさかレギンレイヴだけで俺達を殺せると吐かすか？」

すると騎士も妖艶に笑い、バサアツとマントを脱ぎ捨てズバアツ粉々に斬り裂いた……。

姿を見せたのは黒い装束を着た死人のように白い肌の、ラルフ達と、カーマインと同じ顔の男であった。

「……さあ、続きを始めよう」

「 斬る」「よかろう！！」

三人とも、超スピードで一気にシーティア達から離れ、闘いの場を求めて行ってしまった……。

「……アイツも同じ顔……。いよいよ、アタシ達の出生はゲヴェルが関わってるってワケ……！」

「……フン、似ても似つかぬ。それより、ラルフ殿達を追わぬのか？」

シルヴィアの言葉にウォレスが応えた。

「お言葉ですが、今の我々では、彼らに追いつくのは難しいでしょう。もし仮に追いつけたとしても、我々には、あの闘いに介入できない。それより……」

「今は、レティシアを救出できた事を、一刻も早く王に報告すべきね」

その言葉に、皆が頷いた。それにシルヴィアが渋々といった感じでした。……分かった」

「我慢してね、シルヴィア。レティシアも……」

「分かっています、シーティア」

「分かった」

王女姉妹を納得させると、レティシアが口を開いた。

「では……、まずラージン砦へ向かって下さい」

「分かったわ」

そう応えたシーティアに、シルヴィアが問う。

「だが。どうやってローランディアに帰る？ ラルフ殿やシュワルゼという男もいないぞ？」

「大丈夫です！ ルイセちゃんのテレポートがありますから……！」

「……そうか、シーティアの義妹はグローションと聞いていた。成程……貴女がそうか」

それにルイセが頬を赤らめて、「ハイ」と応える。

「じゃあ……行くわよ、ルイセ！」

「うん……！」

シーティアの合図でルイセはテレポートを唱えた。こうして、一行はローランディアへと帰って行った。

それにしても……。ゲヴェルとかいう謎の兵……、自分達の国にどうにかして引き入れられまいか……！

シルヴィアは、ラルフやシュワルゼの姿を見て 増々欲しいという想いを強くしていた……。

誰もいない、荒野に移動した三人のゲヴェルは、静かに互いに構え合う。

「フフ……体力の回復し切っていないアンタ達を殺してもつまらない……。体力の回復は出来たかな？」

それにシュワルゼが不遜に笑った。

「クク……テメエ如きガキが……、強者に意見するか？」

そして、豪刀を構えて言い切る。

「笑わせるな」

ラルフも静かにシエルオープンナーを構える。ただし、両者の動きに対応できるように、である。シュワルゼが味方とは、ラルフには思えなかったのか。

ルーチェはその瞳を金と銀の闇に彩らせると 昏い光を宿す、異形が姿を見せた。ラルフ、シュワルゼも力を解放する……。三人の光の異形が現れた……。ラルフには薄緑の、シュワルゼには蒼い雷が纏っている。

唯一、ルーチェだけが何も無かった。

「……始めようか、主に認められし者よ……！！」

「成程、ソレがお前の闘う理由か？ イレギュラーでありながら、ヤツの気を引く私達が気に入らないか？」

「気に入らないね……！ あの方に対する無礼も何もかも……存在そのものが……！！」

「……シュワルゼの言う通り、ガキだな」

激昂するルーチェにラルフはクールに述べた。

「その稚拙さが、お前に何人の人の命を奪わせたのか知らないが……！ 知りたくもないが、それでも……私にはお前を斬る理由がある。復習と言う名の正義がな……！！」

「あの方に生み出された存在が、創造主に逆らう？」

その愚かさの方が、俺には罪深く思えるよ……。憎悪の海は心地良いかい？ ……ならば、血の海に溺れて死ね！！ ラルフ・ハウエル……！！」

ガキイツ 両者のレギンレイヴが激突し、火花が散る。が、そこへ第三者・シュワルゼが豪刀からマジックアローを発生させた。ズドオ「！！」ラルフとルーチェは共に離れる。どいつもこいつも下らねえ……！！ 強えか弱えか……闘いとは、ソレが全てのハズだ……！！ 下らねえ大義も理由も、関係ねえ！！ 強者が誰か……決めるぞ！！」

「……望む所だ」「やってみなよ……」

シュワルゼの発言に、ラルフはクールに、ルーチェは妖艶に笑って答えた。ソレを受け、シュワルゼも不遜に笑う……。

「始めるぞ！！」

シュワルゼの豪刀が、ラルフ、ルーチェに向かって振り払われる。ラルフはソレを見切って躲す。ルーチェがソレを見てニヤリと笑い、ガオンツ 交差させた10指の爪が豪刀を受け切る……！！

「……ほう？」

「フン……、この程度かい？ シュワルゼ・ロード」

「面白い！！」

三人は互いのレギンをぶつけ合わせ、互いに斬り結びあう……。ラルフもシュワルゼも、相当の深手を負っており、力も回復していない。そんな圧倒的不利な状態でも、ラルフ達は自分達より身体能力の上がつているルーチェと全く互角に斬り合っていた……。

「 成程、本物のロードはとんでもない化物だ」

「フン 怖気づくか？」

「まさか ! こんなに楽しい殺し合いに、どうして胸が高鳴らない？」

ルーチェはそう返すと、シュワルゼを右爪で突き、退がらせると同時に、左爪を後方へ薙いだ。ガキイツ そこにはシエルオープンナを振り切ったラルフがいた。

「フフ、テンコマンドメントを使うだけの集中力も無いのかい？

……ソレにシュワルゼ……、アンタも魔法剣はもう打てない……。打てたとしてもマジックアローだけだ」

「 だから何だ？」「ソレがどうした！！」

ラルフもシュワルゼも、ルーチェの言う通りその刀でしか攻撃できない程に弱っている。身体能力を強化するゲヴェル因子も、元の状態よりマシな程度にしか上がっていない。ソレでも 異形の力を出した自分と対等に二人は闘ってみせる。

「フフ……強い ! 楽しい、楽しいよ……！！ ヴァハムートにブラッドヴェイン ! ! ! どちらも本当に強い！！」

「 テメエも中々のモンだ…… ! ルーチェ」「……誰だろうと斬り捨てるだけだ」

ズバアッ 三つの影が交差する ! 異形同士の闘いは こ
こからであった ! ! !

ラージン砦へと一旦立ち寄り、レティシアの奪還に成功した事をブロンソン将軍に伝え、砦を発とうとした一行に、シルヴィアが声をかけた。

「では、ここでお別れだ。父上によるしく言っておいてくれ」

「……ヤレヤレ、相変わらずね。ノストリッジに向かうの？」

「ああ、バーンシュタインが宣戦布告して来たのなら、迎え撃たねばならん」

そう言って、白銀のバラ騎士団を引き連れて去ろうとするシルヴィアに、レティシアが声をかけた。

「シルヴィー」

「？ 姉上」

そつと手を取り、額をつき合わせて、レティシアは祈るように言った。

「絶対に、無茶をしないで下さいね」

「……ハイ、姉上……！」

こうしてシルヴィアはシーティア一行と別れた。シーティアは、その中でエリックという副団長の顔をジツと見据えている。

「？ どうしたのですか、シーティア様？」

「何でも無いわ、ピティ」

そう言っつて小さいピティの頬を愛しむ様に撫で、ルイセを見つめる。ルイセはこくりと頷くと、テレポートを唱えて去って行った。

現れた先はローランディア東門であった。

「！ レティシア姫、ご無事でしたか！？」

「流石はシーティア殿……！」

「さ、お早く王へ報告を……！」

口々に述べて来る兵達を制しながら、一行は街中へと入って行った。

「……やっと着きましたね」

「そうね、疲れた〜!!」「ウフフ……!!」

ピティの言葉に伸びをするシーティア。ソレを見てルイセはニコニコ笑う。

「……皆さんに……お聞きしたい事があるのです。……どうして危険を顧みず、私を助けに来て下さったのですか？」

急にレティシアが口を開いて質問して来た。ソレにミーシャが一言答えた。

「だって、友達じゃないですか？」

「……友達……!!」

レティシアは目を大きく見開いてミーシャを見る。ソレにルイセが続ける。

「姫様は仰つてくれましたよね？ 私達と友達になりたい、と」
にこやかに笑うルイセの隣で、シーティアの方からピティが言った。

「ティピの記憶からも、間違いありません」

「だから、助けに来たのよ。貴女じゃなければ、私は動かないわ」

シーティアがいたずらっぽく言い、ウオレスが渋い顔をする。

「皆さん　!!」

レティシアは瞳に涙を溜めて、笑いながら頭を下げた……。

「本当に　ありがとう……!!」

皆がソレを見、穏やかな雰囲気になって行く所で　ウオレスとシーティアが同時に反応した。

「？　どうしたのですか、お二人とも」

「シッ、……何か来る」「……争う音……？」

ウオレス、シーティアは同時に南の階段を見据えた。ピティ達もソレに習って南側の階段を見据える。

「うわああ〜!!」

悲鳴　そして、女の子と見紛う程の整った顔立ちの美少年が階段を昇って来た……。

「……あの子」「エリオット君……!」

シーティア、ルイセの言葉にエリオットが反応した。

「え? ……あ、シーティアさん! ルイセさん……!」

金髪の少年、エリオットはこちらに気付くとすぐに叫んだ。

「助けて下さい……!」

と言った瞬間、ウォレスが腰のブロードソードを抜いて投げつけた。ギインツ　投げられた刀はエリオットの背後からブレードを振り被っていた男を退けた。

「　　チツ!」

「うわああ……!」

エリオットがまたしても逃げようとするのを、ポンツと頭を撫でる手が止めた。目の前に美しく色っぽいシーティアが居たのである。その金と銀の瞳に目を釘付けにされている少年の頭を抱き、縮地法にて元の位置へ。そのころにはウォレスが双身刀ミョルヴィルムを具現させており、ミーシャやルイセも杖を取り出していた。レティアがそんな中、エリオットを見つめ、何かに気付いた。

「……!　彼は　!」

「姫は退がってて!　ここはアタシ達で何とかするから……!」

「!　ハ、ハイ……!」

ミーシャの言葉にコクリと頷くレティア。先程、エリオットに斬りかかった男は両手に仕込んだブレードを構え、シーティア達を見つめる。と言ってもその顔は覆面を被っており、よく分からない。……アレは、レティア姫か……!　奴らが救いだしたのか……!」

エリオットが、シーティアの甘い香りと感触にとろけそうになっていた思考を取り戻し、覆面の男に問う。

「どうして、ボクを狙うんですか……!」

「仕事だからだよ……!」

答えたのは覆面の男とは違う北側の階段の上から聞こえて来た。

そこにいたのは、片手斧を両手に持つ青い鎧の男……

「オズワルド!!」 「また、アンタ !」

ルイセ、ピティが叫ぶ中、ウンザリとシーティアは言った。それに、オズワルドも答える。

「ウルセエ!! テメエらが、いつも邪魔しやがるんだろっが!!」

「……随分とエリオットにご執心のようだが、一体どういう理由がある?」

ウォレスが冷静に問いかけると、オズワルドが得意げに答える。

「仕事だよ……! 理由なんざ、その覆面のダンナに聞きな……!」

「!

「……口が過ぎるぞ! 黙って働け!!」

「へ、へい……!」

覆面の男に言われ、オズワルドが恐縮して返事をしていた。

「……今の声……どこかで……!」

「? ウォレス?」

シーティアがその様子に気付き、問いかけるが、その前にピティが叫ぶ。

「気をつけて下さい!!」

その声と共に、盗賊達がどこからともなく現れる。町は大混乱に陥った。

「……こんな町中で……! 許せない!!」

ルイセがその瞳に怒りの色を浮かべた。グローシユが全身に満ち、黄金の輝きを身にまとう……! ミーシャがソレに感動する。

「ルイセちゃん、すっごおい!!」

「……警備兵は何をしているのかしら?」

その隣で、シーティアがごく普通に周囲を確認して言う。これ程の騒ぎになれば、警備隊が現れるハズである。が、その気配がまるで無い。

「……オズワルドの仕業かしら?」

「フフン……!!」

「当たり前みたいね……!! ホント、他人の迷惑とか、嫌がる事をやらせたら天才ね」

「ホメてねえだろ!!」

思わずツッコみを入れるオズワルドを無視して、シーティアはジツと周りを見回す。

「市民を傷付けさせる訳には行かない……。短期決戦が望ましいわ」

「解った」「ウン!」「ハイ!!」

シーティアの言葉に三人が返事をしてきた。ソレに対し、ニコリと笑みを返すと、

「まず、ルイセ……!! 貴女は、市民を襲おうとする盗賊を片っ端から魔法で叩き潰しなさい。ミーシャは町の人達とエリオットに補助魔法をかけた後、ルイセをサポートして。ウォレスは、あの覆面野郎の足止め……!! オズワルドと残りは私が叩く!!」

シーティアはそう告げると、一気に縮地法を使って階段を駆け上がり、ウォレスも覆面の男に走る。ルイセはすぐに詠唱を始めた……。ミーシャもつたないながらも補助魔法を唱え始めている。

オズワルドの指示で盗賊達も山刀を抜いて襲いかかって来た。

「邪魔する奴は皆斬り殺せ!!」

「了解、お頭!!」

エリオットを狙って駆けて来る盗賊達……。混乱している町民達はその間に立つてしまった。盗賊は邪魔な町民に刀を振り下ろそうとする。

「キャアア……!!」「助けてくれ!!」

賊の刃が一般人に迫った時、ドゴオツ その賊は後方へ吹き飛ばされた。目をつぶって恐怖の時を為すすべく迎えようとしていた一組の男女はゆっくりと目を開いた。目の前には、信じられないほど美しい黒髪の女性がその長い足を天に向けて突き立てている光景があった。

女性は静かに足をおろし、右手の双頭槍をブンツと一閃してオズワールドを見据える。

「このアマ……!!」

「今回は、アイツもないから 思い切り叩き潰してあげる」

「ぶっ潰せ、野郎ども!!」

オズワールドは自分の部下達に女性・シーティアを叩き潰すよう、命令を下した。シーティアは艶然と笑うと、地を蹴り、壁を駆けてグンニグルを払う。ズバババアツ たちまち二、三人の盗賊は悲鳴を上げる間もなくその場に崩れ落ちていく。そんな哀れな敵に目もやらず、シーティアは迂回してこようとする別の賊を見据える。広場に造られた水場の上に浮かぶ石畳のスペースには、騒ぎから逃げようと固まった民衆が立っている。

「フレア」

シーティアは詠唱する事無くいきなり中級魔法を唱え、ゴオウツ爆風の中へ賊を消し飛ばした。カーマインのような魔法剣は、詠唱する必要は無いものの、それ以上の時間をかけて、大気もしくは自分の気を高めて溜め、剣閃から放たなければならない。このため魔法剣は打つ前なら魔力を止める間、剣で時間を稼げば良いが、打つ後に凄まじい脱力感が生じ、一時的に硬直してしまう。

詠唱時間の必要な中級魔法は、詠唱中こそ無防備だが、撃つた後隙は全くない。初級魔法は、両方の良い点を兼ねているが、威力が低い上に単体にしか効果を発揮しない欠点がある。

しかし、シーティアは中級魔法を詠唱する事無く発動させて吹き飛ばしてしまう。

「何だと、中級魔法を初級魔法と変わらずに撃てる!？」

「……そう言えば、そんな事が出来るんだっただな……! クソツツ!」

オズワールドが驚愕し、覆面の男が悪態をつく。ウォレスがミヨルヴィルムを男に斬りつけながら言った。

「……お前……シーティアを知っているのか？」

「知っている……！　だが、無駄口をきくつもりは無い……！！
その小僧とレティシア姫の命は俺が貰い受ける。どけ！！」

「言われて退くわけが無いだろう」

「ならば、くたばれ！！」

両手のブレードでウオレスに斬りかかる男。それに対し、ウオレスはミヨルヴィルムを一閃。斬　　！！　男と同程度の力任せの初撃ではなく、熟練した技の一閃。

「く　！？」

男のブレードは半ばから断たれ、粉々になった……。レギンレイヴの恐るべき切れ味とウオレスの剣腕であった。

「良い腕をしているが、経験が不足している。それでは俺には勝てない」

「　チ！　何て武器だ……！！」

「武器なしではもう闘えまい？　大人しく退がれ」

早くも、ウオレスと男の決着はついたように見えた。ウオレスの圧勝である。その時、ルイセの瞳が見開かれ、グローシユのオーラを全身にまとうて唱えた。

「最上級魔法・メテオ！！」

「補助魔法グロー・レジスト！！」

巨大な流星がオズワールドを始めに、その手下達を巻き込んでいく。究極の魔法メテオだが、その威力の為、詠唱時間が長く、敵味方を問わず吹き飛ばしてしまう。しかし、町人達は光の壁が守護していた。それこそ、ミーシャの魔法の効果である。

この為、ミーシャは街中の人に補助魔法を唱える必要があった。シーティアの指示とタイミングによって、二つの超大な魔法が発動し、見事に盗賊だけを殲滅した。哀れな彼等は悲鳴を上げる間もなくその場に倒れ伏した。

「チ……　チクシヨウ……！！　覚えてやがれ！！」

オズワールドは一人だけ持っていたアミュレットを握りしめ、メテオに耐えると、一目散に逃げて行った。残るは　覆面の男一人…

…。

「……シーティア様……！ あの男の姿」

「ええ、母さんの研究所に忍び込んだ賊ね」

ピティの言葉に頷き、ビュンツ 縮地法で一気に階下に降り、静かにウオレスの傍らにやって来ると覆面の男に対峙した。

「残るは、貴方一人だけど？」

「フン、流石に強いな」

男はそれだけ言うと、両手のブレードを地面に投げ捨て、懐に手をやった。取り出したのは、刀身のない両手剣の柄であった。シーティアは静かにソレを見据える。

「だが、俺はお前らのような卑怯者に負ける気はしねえ……！！」

「……どういう意味？」「！？ お姉ちゃん！！」

男の体から、白い煙が昇り やがてソレは光へと転じ、男の全身を覆う。シュワルゼ達と同じ 光の強さこそ小さく、オーラそのものも僅かにしか無いが、シュワルゼ達と同じ現象だ。

ソレだけでは無い。ウオレスにも匹敵する筋肉はどんどん細くなり、スリムな体格へと変化した。

「……カーマイン達と似てるケド……。コレは、ジュリアンがやってた技？」

シーティアは眉根を寄せて、ジツと男を観察する。男の全身に力が漲っているのが良く分かる。また、男が持っている柄からまるで男の負の感情をそのまま吸い取ったかのような漆黒の刀身が生じた。

「行くぞ、卑怯者！！」

長身の男の胸まで有りそうな漆黒の刀を大きく振り被って、男が消えた。

縮地法……！？

「クツ！！」

ガキイツ 咄嗟にグンニグルを前に構え、斬撃を受け止める。シーティアの両腕が軋み、膝が折れそうになる。

「シーティアー!!」

ウォレスがミヨルヴィルムで現れた男に斬りつける。凄まじいウォレスの斬撃だが、男は超人的なスピードで反転し、ウォレスに斬りかかって来る……! ガオンツ 二つの刀身が激しくぶつかり合う。

「……又ウ……!!」

「どうした、さっきの勢いは!？」

「バ……バカな……!! この力 ……!!」

今の覆面の体格は身長こそウォレスと同じ長身であるが、一回りも二回りも細い。それなのに、変身前の時よりも力がある。まさに怪力である。

ウォレスの脳裏に目と腕を奪った者の影がチラつく。ギインツ ついに力負けし態勢を崩したウォレスに男の斬撃が迫る。も、男はピタツと斬線を止め、大きく後方に跳躍した。男の立っていた場所に刹那のタイミングで炎の竜巻が通り過ぎて行った。

「……クツ!!」

ウォレスが膝をつき、呼吸を整えている間に、シーティアが男にグンニグルを叩き付けた。ギインツ 影の刀に受け止められる。止められたのを悟ったシーティアは逆の刃で連続突きを放つ。ズドドドドオツ 穂先が無数に増え、男に襲いかかる。

男はそれを全て己の長刀で流して捌き切ると、強烈な右上段からの斬り下しを放って来た。絶妙のカウンターに、シーティアは縮地法で背後を取り、横薙ぎの強打撃を放った。が、男は神速の反応で振り向き様、剣を振り下して来た。ドゴオツ 吹き飛んだのは、シーティアであった。男はシーティアに構わずレティシアに向かって駆ける。

「レティシア姫、覚悟!!」

「……!!」「危ない、姫!!」

棒立ちになったレティシアをミーシャが庇って突き飛ばし、ズバアツ 彼女を男の兇刃が襲った。ドサアツ そのまま、ミーシャは

地面に倒れ伏した。その体からじわじわと紅い血が地面に広がって行く。

「ミーシャさん!!」

「ミーシャ!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

レティシアが悲鳴を上げ、ルイセがその瞳をジッと男に据える。

「……許さない。……私の友達を傷付けて……! 罪の無い人達を巻き込んで……!!」

「 黙れ!! お前達が蒔いた種だろうが!!」

と男が刀を振り被り、神速で斬りかかって来る ! ルイセはソレに対し、ファイヤーボールを放った。ドゴオアツ 直撃 !

しかし、男の白い光が炎を男に触らせない。

属性の魔法が効かないんだ……! だったら

迫り来る斬撃に目も瞑らず、ルイセは唱えた。

「ブラスト!!」

「!?! 何だ……!?!」

青白い、人の頭ほどの光弾が男の胸に直撃し、男を遙か後方へ吹き飛ばした。

「……ハアツハアツ……! ミーシャ!!」

ルイセはミーシャの方を見て駆け寄った。レティシアがミーシャの傷をキュアの光で治していた。

「レティシア姫……?」

「簡単な回復魔法なら、私にも使えます」

その隣には、少年 エリオットがいた。彼もキュアの光をミーシャに放っている。

「エリオット君……!!」

「すみません……、僕の所為で……!!」

「ううん、エリオット君の所為じゃないよ」

ルイセが優しく言うと、エリオットが気弱な面に泣きそうな笑顔をした。レティシアはジッとエリオットを見据えている。

ギインツ とルイセのすぐ後ろで火花が散った。「え?」振り返

ると、ウォレスの背中があつた。その向こうには「チツ」と舌打ちした覆面がいる。

「闘いは終わつて無い、気を抜くな!!」

「ハ、ハイ」「うゝん、ウォレスさんの声大きい……!!」

ルイセが素直に応じると共にミーシャが呑気な声を上げて目を覚ました。レテイシア、エリオット、ルイセがミーシャに駆け寄る。

「さて、お前さんの相手は俺がやるう」

「フン、簡単に言つてくれるな。……行くぜ!!」

またしても、縮地法で消え斬りかかる。だが、ウォレスは見事に反応し、男の刀を自身の刀で受け止めて見せる。ギインツ、ギギインツ

「何故、斬れない!!……厄介な武器だ……!!」

「武器の性能に頼つてばかりじゃ、一人前にはなれんぞ」

「黙れ!!」

激しさを増す剣と剣のぶつかり合い。男の豪剣をウォレスも剛力で打ち返して行く。パワーなら男、スピードもシューティアに匹敵する男が有利。だが、ウォレスには男にはない経験と技が有つた……!

しかし、互角に見えた闘いは徐々にウォレスが押されていく様相になる。男は、ウォレスの数倍の運動量だと言つのに、息一つ乱れていないのだ。

この力、似ている……!!

仮面の騎士達を思い起こし、ウォレスはこめかみに嫌な汗をかくと、男が後方へバックステップし、縮地法で消えた。

「!?!」

男は目の見えないウォレスでは無く、エリオット達の方へ高速移動する。エリオット達では到底反応できないスピード。ウォレスにせよ、目が見えていない上に、自分に放たれたモノではないので、反応できない。

兇刃がエリオットの眼前に迫る。そこで、やっとエリオット達の間にも見える。悲鳴を上げる間もなく驚愕の表情のまま脳天から叩

き斬られようとした時、ギンツ　横合いからの槍の一撃が男を止めた。

「……………！　テムエ……………！！」

意識を取り戻したシーティアが、エリオット達を庇うように立っていた。斬り払い、男を退がらせると、彼女は自身の胸元に手を突っ込み、茨を象った首飾りをブチツと引き千切った。一瞬、シーティアの全身を気が疾り、彼女の気配が強くなる。シーティアはそのまま、自身の長い髪を首飾りで結い上げた。

その瞳は静かな沈黙を保ち、その表情は端然としていて、凄艶な色さえ含む程であった。明らかに先程までとは気配が違う。グングルが光の粒子となり、指輪へと戻った。そして

「レギンレイジよ」

シーティアが呟くように言うと、彼女の右手に絶刀・レギンレイヴが現れた。静かに、彼女はカーマインのソレよりも倍近い柄のレギンレイヴを　レギンレイジを握りしめる。そして、構えた。

両手剣の柄を持った刀　それがレギンレイジ。長い柄は、刀をより扱いやすくさせ、リーチを長くとることが出来る。刀身は片手剣と同じなので、バランスも良い。レギンレイヴをより使い易くした武器であった。

「私の友と妹　私の大切なモノを傷付けた罪は、お前の血で償え」

35・似ている顔

宣言と同時にシーティアは駆けた。

「お姉ちゃん、本気だ」

「ええ、ファフニールになりましたね」

ルイセ、レティシアが今のシーティアをそう見て取った。ウオレスが「ほう……！」と感嘆した声を洩らす。それほどまでにシーティアの気配が鮮明になっていたのだ。

男の闇の刀が振り下ろされる。その刀に自身の絶刀が叩きこんだ。ギインツギインツ 男のスピード、パワーは人間の限界を遙かに凌駕している。いわゆる化物である。

しかし、彼女は一步も退かず、真つ向から斬り結ぶ。スピードとパワーに物を言わせる男の豪剣に対し、シーティアは剣技を持って答える。ガアキィツ

「！ テメエ……、刀使だったのか！？」

「元々、私は刀使いだ。槍は己の身分を隠す為のモノに過ぎない。ファフニールの名は、隠密をするには少々有名過ぎるんでな」

「！ ファフニールだと……？ 紅龍の戦姫がテメエだというのか！！」

男の気配に動揺が走るのを、シーティアは見逃さない。ズバアツ 絶刀が男の胸板を斬り裂いた。ガクウツ と片膝を突いた男をシーティアは静かに見下ろす。

「やった！」 「流石です！！」

ルイセ、ピティが歓声を上げる。ウオレスも構えを解き、エリオツト、レティシア、ミーシャがほっと一息をついた。

「言え、誰の命令であの子を襲った？ 貴様の背後には誰がいる」
シーティアはスツとレギンレイジを男の喉元へ突き付ける。男が苦々しげに言葉を吐いた。

「やはり、まぐれじゃなかったか」

「質問をしたことにだけ答える。貴様の戯言を聞く気は無い」

ズ……ッ 刀が男の喉元に食い込み、プツと紅の玉が浮き上がる。ルイセ達が思わず竦み上がる程に、シーティアの表情は怖かった。全く、何の感情も表わさない能面のような無表情の下にある 氷のような殺気……。

ソレは直接対峙していないルイセ達さえも身動きが取れないほど、冷たい。凍てついた瞳は、金と銀の冷たい輝きを放っていた。

「答える、でなければ殺す」

「へ……！ 断る！！」

男は覆面の下で笑ってシーティアに言い切った。その答えにシーティアは何の躊躇も無く、刀を振り下ろした。

「ならば 死ぬ」

だが、男は己の力を限界まで高め、その刀へと送っていた。ズバアッ 斬閃が疾り、男は自身の周囲を薙いだ。そこから青白い炎が生じ、男の全周囲を炎の壁が立ち昇った。

シーティアは男の全周囲攻撃に何の動揺も見せず、斬りつけた。刃は炎を斬って男の居る空間に届いたが 手応えがまるで無かった。

「……………」

シーティアは青白い炎の壁を静かに見据えると、ビュンツと刀を払って鞘に戻した。パチンツ 彼女がレギンレイジを指輪に戻したのと同時に炎も消えた。

「 まだ、その辺にいるハズだ。ここは俺に任せて、奴を追え」
「分かった。ルイセ達を頼む」

それだけ言うと、シーティアは一気に縮地法でこの場を離れ、男を追った。だが、ビュンツザザッ 街のメインストリートに出て、シーティアは高速移動を止めた。一般人をシーティアのスピードでは巻き込んでしまうからだ。

彼女は凍てついた瞳を辺りへと注いでゆっくりと歩き出した。と、その肩へ後方からピティが飛んで来た。

「シーティア様、ご無事ですか!？」

「……ああ」

優しくピティを自分の肩へと乗せるとシーティアは前だけを見据えて歩き出した。

「? シーティア様？」

「……」

シーティアはそのまま、メインストリートを出て、少し外れた下水道のある広場に出た。そこには、「あ!」ピティが思わず声を上げる。白銀の鎧と金の籠手をつけた剣士が立っていた。剣士は、シーティアに手を上げて答える。

「よう! どうしたんだ、血相変えてよ？」

「ゼノスさん!」

ピティが肩から剣士の名を呼ぶ。ゼノスは「ん?」という表情になった。

「どうしたんだよ、ティピ? 随分よそよそしいじゃねえか? カーマインは一緒じゃねえのか? 確かラシエルにいたハズだが……?」

「……そういう貴方はここで何をしている、ゼノス?」
驚くほどに冷たく、シーティアはゼノスを見て言った。

「何だか、随分印象が変わったな。カーマインよりも無愛想だぜ?」

「あの、ゼノスさん……! 実は……!!」

シーティアの肩からゼノスへピティは事情を説明した。

「成程……! そうか、お前はティピの妹でピティって言うのか……! 随分しつかりした妹だな」

「あ……!! あの……!!」

「おお、そうだったな。こつちには誰も来てねえぜ。第一そんな覆面野郎が現れたら、ここに居る人達も気付くだろ?」

「そうですね……!」

ピティがフーツと溜息を吐いて落ち込む。ゼノスはそれを見てハッとなった。

「なあ！ その姫を襲った賊つてのを捕まえりゃ、報奨金が出るか？」

「？ ……恐らく、出ると思いますケド……」

と。ピティが答えると、ゼノスはパシィツと拳を掌に叩きこんでニカツと笑った。

「よし……！ カレンの治療代を稼ぐチャンスが来た……！ ツイてるぜ……！！ ソレにカーマインには、カレンの面倒を見てもらってるからな……！ 借りを返すいいチャンスだ……！」

「！ 有難うございます、ゼノスさん……！」

「じゃ、俺は早速当たってみるぜ！」

言つとゼノスは一気にその場から駆け出して行った。ピティはソレを見送つてシーティアを見上げ、言った。

「……大変ですね、ゼノスさん。でも、彼が手伝ってくれるなら心強いですね！」

「 ねえ、ピティ」

「？ ハイ？」

「絶妙のタイミングで、頼りになる奴が来たものだな？」

シーティアは口の端をつり上げ、「フン」と笑つてルイセ達の待つ公園へと歩み始めた。ピティはその肩で小首を傾げている。それに気付かぬフリをして、シーティアは結び上げた髪を元に戻し、首飾りを首に下げる。

すると張りつめていた彼女の気がいつものソレへと戻り、表情も女性らしさが戻った。

「 行くわよ、ピティ！」

「あ、ハイ！」

シーティアがいつも通りの微笑みで、いつものように優しく名を呼んでくれたので、ピティは安心して、シーティアに答えた。彼女が何に気付いたのかを確かめることもなく。

シーティア達が公園に戻ると、レティシアがエリオットを見て何事かを話している。ソレにエリオットは困惑しているようであった。「? どうしたの、レティシア?」

「似ている」

シーティアはレティシアに歩み寄ると、問う。レティシアは簡潔に答えた。

「似ているのです……。バーンシュタイン王　リシャールに!」

「ああ　でも、彼の名はエリオット。彼とリシャール王は無関係よ」

「……しかし……。リシャールと同じ腕輪をしているのです」

「……?」

見ると、エリオットの右腕には確かに豪華な腕輪をしていた。

「あ……。ホントだ……。!」

商品を直に手渡された表彰式の際に、リシャールがしていた腕輪を思い起こし、ルイセがコクリと頷いた。

「……シーティア、どうする?」

「とりあえず、王城で保護してもらいましょう……。!　話はソレから」

「そうするか……。!」

ウォレスの言葉に答え、一行はローランディア城へと向かった。

玉座にて。

アルカディウスはレティシアの姿を見るなり、声を震わせた。

「おお……。!　よくぞ、無事に戻ってくれた……。姫」

「ええ……。!　私もこの城へ帰って来られるとは思っていませんでした。本当にありがとうございます、皆さん」

「私からも礼を言うぞ、シーティア……。!」

その二人に、シーティアは頭を下げたまま「いえ」と否定した。
「姫をお助けしたのは、シュワルゼと言う男……！ 私達は姫を城までお連れしただけです」

「？ シュワルゼ？ ……何者だ？」

レティシアが頬を紅く染め、言った。

「誰よりも純粹で、美しく、何人にも屈さぬ誇り高き殿方です。…

…私の命の恩人であり、心をも救って下さった御方……」

「……フム？」

アルカディウスが首を傾げるのを見て、シーティアが言った。

「……ブラッドヴェインです」

「！？ あのランザックがその力を欲する余り、軍隊を送り、ソレを悉くじゆうく返り討ちにした伝説の剣士か……！！ 我がローランディアやあのバーンシュタインでさえも手に入れる事敵わなかった最強にして、孤高の伝説……！！」

「ハイ、三国の軍事力を根こそぎ叩き潰したと言う伝説の剣士です」

「……！ なんと……！！ ……彼には、礼をせねばならんな」

「……陛下、他にもう一つ用事がございます」

「？ どうした、改まって」

シーティアはスツと頭を下げ、自身の後方にて頭を下げている少年を指した。

「 彼の名はエリオット ! 両親とはぐれて盗賊に襲われて、ローランディアに逃亡したのですが またしても命を狙われまして。彼の顔、そして腕輪がバーンシュタイン王 リシャールに似ているとレティシア姫が仰り、気になって連れて参った次第です」
「……フム。確かに……似ている……！」

エリオットは、自分が置かれている状況を話した。デリス村にて、カーマイン、シーティア達に出会って助けてもらったこと……。ローランディアへと連れて来てもらったのは、デリス村で別れた両親の言葉に従ったから……。国王に事情を話し、手紙を渡せと、国王宛の手紙を受け取った事を話した。

「して、その手紙は？」

「それが……宿屋で襲われた時に奪われて……！」

「……フウム……、せめて内容や差出人は分らんか？」

「勝手に中を読むような事はできません……！ただ……、差出人はヴェンツェルという名前でした。父と母がその方の名を出していましたから」

と、その時に今まで黙っていたサンドラが口を開いた。

「成程、話が見えてきましたね……！」

「そうね……。母さんの師匠であるヴェンツェル老の名が出るってことは……この子」

「……ええ。師はバーンシュタインの宮廷魔術師であった。彼の出生に師が関わっているのなら、師に確認を取る必要がありますね」

サンドラ、シーティアは同時に玉座の王を見上げる。王は「ウム」と頷く。

「確かヴェンツェルは今ランザックにいと噂で聞いた事が有る……。これは丁度良い機会だ。シーティアよ。ランザックに対し同盟を結ぼうと思うのだが、この書簡をランザック王に渡してもらえぬか？」

「陛下の命に従います」

「もつとも、休暇の後に行ってもらうつもりだ。そう気取るな」

「ハッ、有難うございます」「やったあ、ルイセちゃん！」

「もうー！ ミーシャー……！」

シーティアの隣でミーシャがはしゃぎ、ルイセがたしなめる。ウオレスがこめかみを押さえていた。

36 ジュリアン

休暇先でルイセ達が向かったのは、保養地ラシエルであった。ゼノスの言葉によると、ここにカーマインがいるらしい。シーティアとルイセは保養所へ足を向けた。

「さて、アイツは元気かしら」

「早く、お兄ちゃんに会いに行こうー!!」

「ハイハイ」

シーティアは「そう言えば」とピティを見て言った。

「ピティはティピと初めて会うの？」

「いいえ、私とティピは生まれた元が同じ……。ですから、お互いの事は誰よりも深く知っています」

「……双子ゆえって奴かしら？」

三人は笑い合いながら中へ入って行った。

「え〜、お兄ちゃんがないんですか!？」

ルイセが場所を忘れて大きな声を上げた。

「どこに行っただんですか、アイリーンさん!？」

ルイセの剣幕に、アイリーンはたじたじになりながらも答える。

「コムスプリングスへ向かったわ。カレンさんのリハビリって彼を護衛につけたの」

「そ……そんな……!」

「カレンさんとカーマイン君ってお似合いだと思って……!」

「お! お姉ちゃん!」

アイリーンの言葉にルイセは泣きそうな顔でシーティアを見つめる。

「……ふうん、まあ……アイツは大丈夫と思うケド？」

「お姉ちゃん!」

「ハ……ハイ!」

この子……ミーシャがついて行くって言う前にここへテレポ

「トトしたから……大分独占欲強くなつてたのね……！」
おかげで、ウォレスも留守番である。シーティアはヤレヤレと首を振ってルイセと一緒に跳んだ　　！

「うっくん。やっぱりコムスプリングスっていいよね〜！」

ティピが温泉街を見ながら、カーマインの肩で伸びを言う。

「カレンさん、大丈夫か？」

「ハイ……！　凄い活気ですね」

カーマインがカレンの体調を気遣い、カレンはそれに答えるとティピの真似をして伸びをして見せた。二人は土産物屋に入ったり、アイスクリームを買ったりと、ほとんどデートのような事をしていった。

「楽しいです……！」

「ゼノスとは来ないのか？」

「兄さんは忙しいから」

そう言つて寂しそうにするカレンにティピが憤然と言つた。

「全くさあ……！　可愛い妹に心配させてないで、ゼノスも傭兵なんて辞めちゃえばいいのに……！」

「本当です！　カーマインさん、貴方もルイセちゃんやシーティアさんに心配かけさせないであげて下さいね」

突然に自分に言つて来たカレンに対し、カーマインは不敵な笑顔を向け、

「　嫌だ」

と返した。

「そんな！　ルイセちゃんが可哀想です！」

「安心して、カレンさん！　コイツがそんなマネしたらアタシのキツクをお見舞いするから……！」

ティピが元気よく言い、カーマインは

「……………」

と黙ってうつむいた。その様にカレンはクスクスと笑う。とカレンの目に土産に丁度良い物が入って来た。

「カーマインさん、アレを見てもよろしいですか？」

「ああ」

カレンがそちらに向かおうとした時、つまづいてしまふ。「きやつ！？」それを見事にカーマインが抱き留めた。至近距離で見つめ合う二人……。カレンは呆然とカーマインは平然と見つめ合う。

「……兄さん……？」

「？ カレンさん？」

ポツリと呟いた一言を無視し、カーマインはカレンに問いかける。カレンはハツとして顔を真っ赤にすると、カーマインから離れた。

「ご……ゴメンなさい！」

「別に、気にしていない。それより、早く土産を買おうぜ」

「え……？ ……ハ、ハイ！」

二人がそう言うって土産物屋で買い物を買ませ、店から出て来ると、鋭い声がカーマインの背後からした。「待て！！」

「ゲ……！！ この声……！！」

「？ どうしたんですか、カーマインさん、ティピちゃん？」

カレンは固まった二人と声をかけて来た主を見る。そこに居たのは、インペリアルナイトと呼ばれる白を基調としたタキシードを着た青年であった。白銀の髪と黄金の瞳がジツとカーマインとティピを睨み付けている。ジュリアン・ダグラスであった。

二人はそろりと言った感じで背後に向き直った。

「ここで何をしている！ 今は戦争中だぞ！？」

「温泉に入りに来たんだ。それ以外に用はない」

「温泉だと？」

カーマインが静かに応え、肩の上からティピが答える。

「そーよ！ このカレンさんの傷を癒すには温泉が良いって言うから、ローランディアにはないここへ来たんじゃない！！」

カレンがきよんとして、カーマインとジュリアンを見つめる。

ジュリアンはカレンを見た後、カーマインを睨みつけて言った。

「何を考えているか知らんが、私の前でおかしな真似をしたら、即刻捕らえるからな!!」

ジュリアンは憤然として言うと、その場を後にした。

「……あの人……どうかしたんですか?」

「ううん、ただの石頭の知り合いよ! それより、もう少し楽しもうよ!!」

とティピがカーマインに言うが、カーマインはジッと去って行くジュリアンの背を見つめ呟いた。

「追っぞ」

「へ? どうしたの?」

「様子がおかしい。歩き方がいつもと違う」

「え? ……そうかな?」

それ以上は言わず、カーマインはジュリアンの後を歩いて行く。

その後をカレンが追いつて来た。

「……本当ですね。具合が……」

「うん……」

カレンの言葉にティピも頷いた。今のジュリアンはそれほどまでに顔色が悪かったのである。ジュリアンがこちらに気付いて向かって来た。

「また、お前達か」

「……疲れているのか?」

「うるさい、私のどこが……!!」

ジュリアンは言葉の途中で倒れそうになり、カーマインが咄嗟に腕を掴んでいなければ、地面に落ちていただろう。ジュリアンはカーマインに抱き留められて、気を失った。

「言わんこつちやない!!」

「すぐに宿に行って手配を!!」

ティピが嘆き、カレンが行動を開始した。カーマインは気を失ったジュリアンを抱き上げると、カレンが向かった宿に足を運んだ。

宿の一室で、ジュリアンはカレンの呼んだ医者に診察を受けていた。カーマインとティピ、カレンは廊下で待っている。

「すまないな、せっかくの旅行に」

「いいえ、十分楽しかったです。有難う、カーマインさん」

「そう言ってもらえると助かる」

無愛想な面に、ほんの少しすまなそうな色をカーマインは浮かべた。カレンはそれを優しく見ている。

「なぐによ、綺麗なお姉さんの前だからって良い子ぶっちゃって！」

「……どこをどう見たらそうなる？」

ティピとカーマインのいさかいにカレンは口許に手を当て、クスクス笑う。そこへ、医師が診察を終えてやって来た。カレンが医師に尋ねた。

「彼の容体はどうなんですか？」

「ああ……。あのお嬢さん、少し頑張りすぎだったようじゃ。ただの過労じゃよ。しばらく安静にしておればええ」

「……え？」「お世話になりました」

キョトンとするカレンに変わって、カーマインが礼を述べた。医師はそのまま、その場を去って行く。

「……お嬢さんって……！」

ティピがカレンを見て言うと、カレンも首を傾げ、部屋の中へ入って行った。しばらくして、二人はカーマインの所へ帰って来た。

「……驚きました」「確かにお嬢さんだったわ」

「……………」

カーマインは静かにジュリアンの眠っている部屋のドアを眺めた。「どうする、カーマイン？」

「別に、どうもしないという理由があって性別を偽っているのかわからないが、それでもアイツがインペリアルナイトである事は変わらない」

カーマインは淡々として言った。それにティピも顔をほころばせて笑った。

「そうだね、ジュリアンはナイトになる努力をいっぱいしたんだもん。邪魔する事無いよね」

「そう言う事だ」

カーマインはそれだけ言うと、カレンに自分達の宿に戻る旨を伝え、宿を出た。カーマイン達三人が外に出たその時、

「お兄ちゃん!!」

ドサアツ「？」柔らかい何かが、カーマインにぶつかった。カーマインはそれが何なのか確かめるまでもなく、その何かの頭をポンツと撫でてやる。

「ルイセちゃん!？」

ティピが頓狂な声を出した。カレンも目を瞬かせている。カーマインはジツとルイセの頭を撫でながら、前を見た。そこには呆れ顔で溜息を吐く姉・シーティアが立っている。その肩に留まるホムンクルスにティピが声をかけた。

「……ピティ、アンタがここにいるってコトは……！シーティアのお目付け役になったんだ」

「ええ……。これからよろしくね、ティピ」

そう言い合う二人にカーマインが静かにピティを見、ティピを見てから「フーツ」と溜息を吐いた。ドゴオツ その横顔に蹴りがヒットしたのは刹那の時であった……。

コムスプリングスでの休暇を終え、シーティアとルイセ、ピティはローランディアへと戻った。ローランディア内での休暇である。「悪いが、俺はまだ一人で特訓する必要がある。それにジュリアンとカレンさんもいるしな」

カーマインはそう言って温泉街へと残った。ルイセはそれ以降、機嫌が悪い。シーティアはそんなルイセの為にクツキーを焼いた。

「うわあ……！ 美味しそうです、お姉様……！」

「お姉ちゃん……！！」

シーティアはクールな美貌に温かな笑顔を浮かばせて、言った。

「さ……、食べましょ！」

「うん……！」 「ハイ……！」 「いただきます」

ルイセの機嫌が治ったことに内心ホツとしながら、シーティアは仲の良いピティ達と三人を見ている。ふと、部屋の隅に居るウォレスに声をかけた。

「貴方は食べないの？」

「……俺は甘いモノはどうもな」

「あ……そ！」

シーティアは少しだけ同情を込めてウォレスを見据えた……。

「そうだ……！ 今度は私がお姉ちゃんにクツキーお返しするね！」

勿論、お兄ちゃんも一緒に「

「アリガト、楽しみにしてるわ」

無垢な妹の言葉にシーティアは穏やかに礼を述べる。彼女達はこうして安らかな一時を送るのであった。

コムスプリングスの朝は、街の湯気と朝霧のおかげでほとんど前が見えない。まだ誰も歩いていない広場で、カーマインは静かに立っていた。

ビュンツ 風切り音に反応し、左に避ける。カーマインの顔があった空間に拳が通り過ぎていった。それで終わりではない。左ローキック、左廻し蹴りと次々とカーマインの前にいる男は攻撃を繰り返して来る。

カーマインは静かに攻撃を捌いて行く。バツ 目の前に居る男は攻撃をやめ、とどめの一撃とばかりにローリングソバットを放つて来た。カーマインも同時に跳び、男のソバットに合わせて蹴りを繰り出した。ドガアツ

威力、リーチ、スピード共に互角。同時に着地する。男が縮地法で駆けようとした時、カーマインが目の前に現れていた。ソレはほんのコンマ何秒の差だ。その差で、カーマインは態勢を立て直して見せた。

ゴオウツ 互いに蹴りを繰り出し合う。男の蹴りはカーマインの左掌で避けられ、カーマインの蹴りは男の眼の前で止まっていた。

「ハイ、終了〜〜！」

ティピの明るい声が二人の間に割って入った。両者は互いに足を下ろす。

「朝から付き合わせてすまないな」

カーマインは一息ついて、男 デュランに声をかけた。デュランは「いや」とだけ答える。カーマインと同じ存在のデュランは、マスクを破ってその瞳を隠し、着ている服はローランディアの騎士となったカーマインが城から支給された正騎士の服であった。

男 デュランはカーマインと共に行動する事で、今後の自分の歩み行く道を決めるつもりであった。だから、カーマインはデュランを引き受けたのだ。

「昨日は済まなかったな。泊まる宿を手配してくれて」

「……アレくらい、どうという事は無い」

「そうか」

カーマインも無口、無愛想、無表情だが、デュランのソレは更に一枚上であった。必然的に沈黙し合う事になる。

「……二人して暗いんだから、もっとパーツとしなさいよ！」

「お前のようにはなれない」

「何？ その反抗的な目？」

ティピはニコニコ笑ってカーマインを見、カーマインはジッとティピを見る。そこへ

「あ、カーマインさん！ ティピちゃん、デュランさん！」

「あゝ、カレンさん」

カレンはこちらに駆け寄ってきて、三人を見つめた。

「朝、早いですね」

「……そうでもないんだが、暇でね」「……………」

カーマインの隣に立つデュランは本当に影のように何も喋らない。ただ、そこにあるだけだ。カーマインはやれやれと首を振った。その時には、デュランはもうその場にはいない。

「アンタ以上に人嫌いみたいね」

「……人付き合いが苦手と言え」

などといったもの調子な二人をクスリと笑ってカレンは見つめる。

そして、ふと思いついたかのように言った。

「そう言えば、カーマインさん。ジュリアンさんが貴方を待っていました」

「？ ジュリアンが？ なんだろ？」

「さあ…………？」

カレンの言葉にティピが小首を傾げ、カレンも応じる。カーマインは静かに頷くと、コムスプリングスの中心街へと足を運んだ。

ジュリアンはカーマイン達が使っている宿の入口に立っていた。

彼はこちらに気付くと、いつもと違い、気弱そうな色の瞳でカーマインを見据えた。

「具合はもういいのか？」

「……その事で、お前に聞きたいことがある。見たのか？」

カーマインは淡々と、ジュリアンは不安げに問いかけて来た。カーマインは声音を変えず

「何の事だ？」

「とぼけるな！ お前は知ったハズだ！！」

ジュリアンは興奮してカーマインの疑問の言葉を遮った。二人は互いに見つめ合う。そこへティピがジュリアンに問いかける。

「ジュリアンが、女だつてこと？」

するとジュリアンは剣幕を納め、気弱な瞳に戻る。

「やはり知ってしまったか。……お前は何故、私が女である事を公言しない？」

「……それに何の意味がある？」

「私が女なら、インペリアルナイトの称号は剥奪され、指揮権を失う。ローランディアにも悪くない要件だと思うが？」

ジュリアンの瞳をカーマインは見つめ、答えた。

「もし、お前が俺の立場なら話したか？」

「何だと？」

「……それで不服なら、勝負の借りを返す為と言っておく」

「……勝負だと？」

「ああ。あの時　二人がかりでお前にやられた借りは、正々堂々と勝たなければ意味が無いからな」

「正々堂々」

カーマインの言葉を咀嚼し、吟味するようにジュリアンは繰り返す。

「そつだよ、勝負は正々堂々とじやなきや！！」

カーマインの肩の上から、ティピが威勢良く宣言する。

「……成程な」

「話はそれだけか？」

「聞かないのか？　何故私が性別を偽っていたのか？」

ジュリアンが納得したのを見て取ると、カーマインは去ろうとした。それをジュリアンが止める。カーマインはくるりと踵を返し、

「人の秘密を勘ぐる下衆な趣味は無い」

と言い切る。その背にジュリアンは続けた。

「……私は幼い頃から父に剣術を教えてもらっていた。剣の腕が強くなればなる程、父は私に笑いかけてくれた。父に褒められたい一心で、私は剣を磨いた」

カーマインは静かにジュリアンに向き直った。カレンも静かにジュリアンを見ている。

「だが、弟が剣を習い始め　ある日、私は弟に負けた。……その時の父の喜ぶ顔が、今でも目に浮かぶ」

ジュリアンは寂しそうな瞳で話を続ける。

「それからはただ一心で剣の腕を鍛え、弟と再戦した時、私は弟に勝った……。だが、父は残念そうに溜息を零していたよ」

「ヒッドゥゥい！」

「私が嫌いな父の言葉を教えてやろう。“お前が男だったなら”だ」

「……それで、剣を振る理由が無くなって……！」

「ああ。デリス村でお前達と 出会った」

カーマインは静かにジュリアンを見据え、

「それでも、お前は父親が大切なんだろ？」

「ああ……！」

「優しいな」

カーマインは淡々と言った。ジュリアンが穏やかに微笑む。

「そう言われると思わなかったよ」

「俺なら、一発ぶん殴る」

さも当然のように、カーマインは言い切った。ティピも隣で

「ウンウン！ そんな時は、許す……！」

と激しく同意する。カレンとジュリアンが同時に口許を綻ばせる。

「……これまでは、私の邪魔をする嫌な奴の弟だったが……これは、一人の騎士として、お前と決着を着けるよ。必ず」

「ああ、その時を楽しみにしてるぜ」

ジュリアンは静かに、不敵に笑うと、カーマインに背を向け、去って行った。

「良かったですね、ジュリアンさん。カーマインさんのおかげで彼女は迷いを断ち切れたんです」

「……別に。そんな大層な事はしてない」

素気なく言うカーマインに、カレンは穏やかに微笑む。

その日の正午に、カーマインとカレンはラシエルへと帰って行った。

37・死の商人

シーティア達は休暇を終えると、王に渡された書簡を懐に入れ、ランザック王国へ向かい出立した。

ラージン砦の南へと向かって歩き出すが、その途中に迷いの森と呼ばれる深い森があった。渡された通行手形はランザックの都市ガラシールズまで問題無く行く事のできる商人用手形であった。

「お姉ちゃん、何だか同じ所を歩いてるみたいだよ」

ルイセが不安げに聞いてくるが、シーティアは平然と言った。

「大丈夫よ。周りの景色が木しか無いから仕方ないけど、同じ所は二度も通っては無いわ。……後五分もすれば、森を抜けられる」

「凄いですね、お姉様……！ 道を全て記憶していらっしやるんですか？」

「まあね」

そんな事を述べ合いながら、道中現れるモンスターをアッサリと叩き斬る。シーティアのグンニグルとウォレスのミヨルヴィルムの前には、森のモンスターとて力不足だったようだ。

やがて 森を抜け、ランザックとの国境に辿り着いた。

「？ ……関所ね。早速手形が役に立つわ」

「ウム」

一行はそのまま、ランザック兵の守る関所へと向かった。

「止まれ……！ これより先はランザックの国土だ。手形を掲示してもらおう」

「分かったわ」

シーティアは早々と通行手形を差し出した。

「うん？ 商人用の手形だな？ ……何の目的で国に入る？」

「俺達は武器商人だ」

「……何？ ローランディアの潜入員ではなかるうな！」

ウォレスの言葉に、ランザック兵は警戒する。と、シーティアが

リングを掲げた。

「取り出しましたるは、ただの指輪……。しかし」
「シオオオウツ 指輪は黄金の粒子となってグンニグルへと変化した。」

「……………！ これは……………！」

「どう？ ウチの新商品は？ ローランディアとバーンシユタインが戦争するんなら、ランザックにも勧めるべきものでしょ？」

「確かに、凄まじい武器だが。……………余り欲が過ぎると身を滅ぼすぞ」

「忠告は感謝するわ」

一行は難なくランザックへと足を踏み入れた。関所が見えなくなつてから、

「……………言ってみるもんね……………！」

「もう、お姉ちゃんつたら。危なかつたよ！！ ちゃんと準備しなきゃ！！」

「ハイ」

「……………もう……………」

そんな姉妹のやり取りに溜息を零すと、ウオレスは言った。

「とにかく、ランザックへは入った。まずは」

「はい、ガラシールズへ向かいますよ！！」

ピティがウオレスの後を継ぎ、皆がコクリと頷いた。

ランザックはその国土の8割方が砂漠で出来ており、国土は三大陸で最も大きいものの、都市と呼べるような町は王都とここオアシスの街・ガラシールズの二つだけである。

その軍力はバーンシユタインにも匹敵すると言われている。ただし、ランザックの兵は魔法を使えないと言う者が多い。これは、ごく最近までランザックに魔法が普及していなかった為である。

砂漠の多い国土は、もともとは緑の多い国であったが、長年にわ

たる戦争行為と樹木の伐採等で現状の通りとなってしまうたのである。

この為、ランザックに国土を奪われ、占領されて滅された小国は、数えきれないほどであった。

「……ここが、ガラシールズ。この手形ですと、ここまでしか来れないようですね」

「そうね……。さて、どうやって王都まで行こうかな？」

ピティの言葉にシーティアは頷くと、フムと首を捻ってみせた。そして

「とりあえず、ここがどんな街なのか、調べてみましょう？」

「！ お姉ちゃん、あれ……！」

「？」

ルイセが、ガラシールズの街には似つかわしくない、鉄製の重歩兵を指差した。間違える筈も無い。バーンシュタイン兵である。ミーシャが別の方を指差した。

「お姉様、あつちにも……！」

「……至る所に、バーンシュタイン兵がいる？ どういう事かしら？」

「調べてみる必要があるな」

ウオレスの言葉に皆はコクリと頷いた。

一行は街の人々に話を聞き終わると、ウオレスの指示で宿に向かった。今、現在はランザックの英雄ウエーバー將軍と、バーンシュタインのガムランという騎士が会合を開いていると言う話でまとまった。

「どうしたんですか、ウオレスさん」「何か分かったんですか？」

ミーシャがあっけらかんと、ルイセがキョトンとして聞いてくる。ウオレスはソレに重々しく

「ウム……」

頷くと、続けた。

「実は、ウエーバーと言う男は俺の傭兵時代の仲間だ。そして、ガ

ムラン」

「……ということは……、先にバーンシュタインに同盟を結ばれちゃった!？」

「可能性だが……9分9厘な」

ウォレスの言葉に皆がシンと静まり返る。

「陛下へ報告した方が良いわね」

「……でも、密談の内容が気になる……!」

ミーシャの言葉に、ピティが答えた。

「では、私が偵察に行きましょう。この身体なら、そう簡単には見つけられません」

「無理しちゃダメよ、ピティ?」

「ハイ」

シーティアは窓から飛んで行ったピティに声をかけると、一向に向き直った。

「密談の内容は、先にラージン砦のブロンソン將軍に伝えるべきよね?」

「……そうだな。將軍に報告しなきゃ軍も対応できねえしな」

ピティが、しばらくして戻って来た。会談の内容を話し始める。

「迷いの森を使ってローランディア軍を挟撃する作戦か……。内容を聞いておいて正解ね……。戦争の最中に想定外の事が起こってしまえば、態勢の立て直しは不可能だわ」

「それじゃ、お姉ちゃん。ラージン砦へ向かうのね?」

「お願いね、ルイセ」

こうして、一行はルイセのテレポートにより、ガラシールズを後にした。

ラージン砦の門の前にルイセはレポートした。一行の姿を確認した門番は、開門の合図をして、門を開けてシーティア達を迎え入れた。

一行は脇目もふらず、作戦室のブロンソン將軍の所へ行つた。

「? どうしたんだ、そんなに慌てて」

「落ち着いている場合じゃないです!」

「戦争の覚悟なら、とつくに決めている。今更慌てふためいても仕方が無いさ」

ルイセの言葉にブロンソンは落ち着いた言葉を返した。

「だが、ソレはバーンシュタインとの戦争だ……。ここへランザックが攻めて来るとしたら?」

「何だと!? この上、ランザックまでも……!!」

ウオレスの言葉にブロンソンは動揺を露わにした。

「実は、將軍。バーンシュタインとランザックは」

シーティアが事細かく要点を絞って、密談の内容を伝えた。

「……成程、厄介な状況だな」

「あおう……部隊を二つに分けちゃつたらどうでしょう?」

ミーシャが頭に思い浮かんだ事をそのまま口にした。

「でも、半分の力で二つの軍を一度に相手出来るかな?」

「ルイセの言う通りだ」

ウオレスが頷き、続ける。

「かと言って防衛網を下げる訳にはいかねえ……!」

「? どうしてですか?」とピティが問うと、ブロンソンが答えた。

「それだけ、ローランディア国内に戦場が近くなる。抜けられれば、王都の対応も遅れる」

皆が「うゝん」と頭を捻る中、シーティアが口を開いた。

「迷いの森を発動させては、將軍?」

「……成程、グローシアンの遺跡を使ってローランディアへ挟撃を仕掛けるハズのランザックを、バーンシュタインの背後に回らせるのか?」

「ハイ。そこへ我々が出向き、両軍をかき乱して、同士討ちさせ、仲違いを起こす事が出来れば、同盟は解消されます」

「成程……理に適っている。よし、遺跡への立ち入り許可は出して

おく。だが」

と続けようとするブロンソンを遮ってシーティアが答えた。

「分かっています。ピティ、母さんに魔水晶を用意しておくよう伝えて」

「? どうしてですか?」

「遺跡を起動させるエネルギーがいるの。それでよ」

「分かりました……。……。ハイ、整ったようです」

「じゃあ、ルイセ」「うん!」

ルイセのテレポートでローザリア王都へと一行は向かった。

ローランディア城の一角にあるサンドラの研究塔。シーティア達はそこへテレポートし、サンドラの姿を探した。

「待っていましたよ」

探すまでも無く、サンドラは目の前に立っていた。袋に入った魔水晶をシーティアへと渡す。

「これが私の持つ最後の魔水晶です」

「アリガト、母さん」

「シーティア。貴方の行動により、ローランディアの運命が左右します。心してかかりなさい」

「ええ」

サンドラはそう述べると、ウオレスを見つめ言った。

「ウオレスさん、子供達をよろしくお願いします」

「任せて下さい」

ウオレスは力強く、サンドラの言葉に頷いた。

迷いの森の遺跡へと、シーティア達は来ていた。一番最深部のコイントールルームに、台座があった。シーティアは早々と台座に魔水晶を置いて、システムを起動させた。

「？ お姉ちゃん、どうしてこの機械の使い方が分かったの？」

「……さあ？　　なんでだろ？　　なんとなく」

ルイセの問いに、シーティアも本気で首を傾げていた。システムが起動され、モニターに迷いの森の地図が映し出された。

「！　この動いてるのが、ランザックですね！」

「あ……！　道を間違えた！」

ミーシャの言葉通り、ローランディアの背面へ周るハズのランザックは、バーンシユタインの背面へと周ってしまった。

「作戦成功ですね、シーティア様！！」

「そうね……。行きましよう」

シーティア達が遺跡の入口まで引き返していた時、ドゴオウツ凄まじい爆発音と衝撃が起こった。

「！　出入り口の方からね　　！！」

「シーティア様、入口が　　！！」

ピティが自分達が出ようとしていた入口を指差す。扉が自動的に閉められようとしていた。

「チー！」

シーティアは縮地法にて一気に距離を詰めると、グンニグルを具現させて一閃させた。ズバアツ　苦も無く扉が斬り裂かれる。

「……面倒くさいことを　　誰がしてくれたのかしら？」

ルイセ達がシーティアに遅れて出入り口を通り、外へ出た。

「おい　　誰がいるな？」

「ええ、そうね」

ウォレス、シーティアがソレゾレの武器を構える。闇の向こうから声が聞こえて来た。

「やるじゃねえか　　気配に気付くとはな　　！」

現れたのは、正規兵の姿をした二人の男……。ただし、腕前の方はかなりのモノの様だ。そして、その二人の間に立つスキンヘッドの眼帯の男。

「……！　あの人、インペリアルナイトに　　！」

「ほう、弟を知っているとは　？」

ルイセの言葉に男はニヤリと笑って答える。

「　弟？」

シーティアが淡々と訊き返すが、

「無駄口を叩くつもりはねえ……。死になー！」

男は問答無用でバトルアクスを具現化させ、斬りかかって来た。

シーティアがグングルで止める。盗賊風の二人組の男は、ウォレスとルイセ、ミーシャに斬りかかる。

戦闘が始まった。男二人の姿はランザック兵のモノであったが、巨大な戦斧をまるで棍棒や、マサカリを扱うように機敏な動きをして来る。

ウォレスは二人の猛攻を己の双身刀ミヨルヴィルムで捌きながら二人をジツと観察する。ファイヤーボールとブリザードが、ウォレスの両脇から二人の男に放たれた。男達は身軽な動きでソレを躲して見せた。

「今のタイミングで！？」「うつそ〜、躲された！？」

ルイセ、ミーシャが不満げな声を上げる。ウォレスはそれに我が意を得たりと頷いた。

「やはり　コイツら、ランザックの兵じゃねえ……。！　動きが正規の兵隊のモノじゃない」

「え……。ですが、ランザックの兵の姿を……。！」
「偽装だ」

ピティの言葉に力強く断言して、ウォレスは答えた。ギインツその前方では眼帯の男とシーティアが、互いの得物で斬り結んでいた。

「やるわね」

「　フン、手応えねえじゃねえか？」

「何ですって　？」

ギインツ　男はシーティアのグングルを自身のバトルアクスで斬り払うと、酷薄で残忍な笑みをその凄みのある顔の上でしてみせ

た。

「そのテメエの顔には、見覚えがある。フェザリアンの女王を奪っていったバケモノにそっくりだ……！ 奴に似ているから警戒していたが、この程度とは……！」

「成程。ステラ女王を傷付けて幽閉したのは、アンタってワケ？」

「シーティアは男にグンニグルを斬りつける。ギインギインツ 長柄の武器が激突する。」

「アリオストの飛行装置を使ってフェザールランドに行ったみたいね？ ……あんたの後ろにいるのは誰かしら？ 魔法学院の関係者

それも重役ね？」

「……ほう……！ 大したモンだ。今の一言でよくそこまで気付いたモンだ」

「少し考えれば大体分かるわ。ランザックとバーンシユタイン、ローランディアが戦争する事で得をする者……。アンタの正体リング・ウエポン……。成程、アンタ武器商人ってワケ……！

どうりで 安物のリング・ウエポンを使ってるワケ」

「フン、レギンレイヴ リング・ウエポンと呼ばれる先人の武器の中でも、今も尚語り継がれる伝説の鍛冶師が鍛えたリングか。確かに厄介なシロモンだが……、テメエ等を殺せば、そんな凄まじい武器が二つも手に入るってワケだ」

「物は考えようね……」

「全くだ……！」

ギギインツ 斧を払い、男に幾度目かの斬りつけを行うも、男も巧みな体捌きで避ける。シーティアは縮地法を使った。

「！ 縮地法か……！」

目の前から消えたシーティアに男はニヤリと笑い、斧を側面へ薙いだ。ギインツ

「……！」

その場に火花が散り、シーティアがグンニグルでアクスを受け止

めていた。

「やるわね……！」

「フフン……、そろそろ飽きたぜ　死にな」

「……！」

アクスの斧の刃から、光が生じてソレが爆発した。ドフォツ

「！　お姉ちゃん！！」　「シーティア様……！！！」

小規模の爆発により、煙が生じ、シーティアの姿が見えない。ズバアツ　煙の向こうから伸びて来た銀光に男は見事に反応して止めた。ガキイツ

「いいのか？　俺に迂闊に仕掛けて」

「……！！！」

止めた姿勢のまま、男の斧の先端が爆発し、シーティアを吹き飛ばした。

「……フン、あのバケモノと比べたら大した事ねえな」

「あんなのと、一緒にされるのは迷惑だわ」

煙の向こうから、ボロボロになりながらも凜とした気配を全身から発して、シーティアは立っていた。呼吸も乱さず、眼光も鈍っていない。

「……そろそろその斧を破ってあげる」

「できるモンなら、やってみろ！！」

ゴオウツ　振り下ろされ、次々と繰り出される斧を紙一重で捌いて行く。ガキイツ　捌き切れなくなり、グンニグルで止める。

「バカが　……！！」

男がニヤリと笑い、斧が爆発した。しかし、煙が晴れた時に男が見たのは、上空へと捌かれた斧と、金と銀の美しい瞳が目の前に迫る光景であった。

（……この女、衝突して爆発を生じさせる前に俺の斧を撥ね上げやがった！？）

ドゴオツ　凄まじい蹴打が男の水月に入り、「ゲフウツ」のけ反った男に間髪入れず、横薙ぎを叩きこんだ。ドゴオツ　斧の長い柄

で受けるが、そのまま上空へ吹き飛ばされる。

「吹き飛ばへー!!」

シーティアは更に上空にいる男へ向かって言い放つと同時に、横薙ぎからレッドトルネードを発生させる……! 男が絶叫した。

「ウオオ~~~~!!」

炎の竜巻が上空へと立ち昇り、男は上空へ舞い上がりながら、渦の内部に取り込まれ、そこで荒れ狂う魔力の衝撃に全身を撃たれ続ける。渦にもみくちゃにされながら、小型の爆発物をいくつも叩き付けられて、男の体は宙であちこちにと跳ね回った。

シーティアがス…… ツと槍を上段に構え、振り下ろす。空気がぴたりと止み、炎の竜巻が姿を消した……。

全ての騒音を吸い込んだかのような素振りの後に、男が地上に落ちて来た。ダアンツ 男は地面に叩きつけられる前に着地した。

「……成程……! ナメすぎたようだ……!!」

「今更? 残るは、アンター一人よ?」

「何?」

男が二人の手下の方を見やると、ウオレスがミョルヴィルムを両手で振り上げて回転させ、その遠心力を使って力任せに二人の男を弾き飛ばし!

「又オオ~~~~!! 今だ!!!」

「ブラスト!!!」「サンダー!!!」

ウオレスの両脇から青白い光と雷が疾った。男達はウオレスによつて武器を撥ね上げられ、その武器は宙で無残に両断されて崩れていく。

更に態勢の崩れた二人にルイセのブラストとミーシャのサンダーが直撃「グアア~~~~!!」悲鳴を上げ、男達は爆発に飲み込まれて行った。男が頷いた。

「成程! 大したモンだ」

「それで、降参するの?」

「フン そうだな」

シーティアは男をジッと観察する。男がどんな攻撃を仕掛けて来ても対処できるようにしている。

「とりあえず、ここは退散させてもらっぜー!!」

「!!」

言つと、男は自分の周囲を斧で斬り裂き、ドドドドオンッ 爆発の連鎖を生じさせて、爆炎の中へその身を隠した。

「しまった　!!」

「アバヨ　!!」

煙の向こうから男の声がして来る。それにルイセが叫んだ。

「ムリだよ！　グローシアンでない貴方じゃ、この森を出られっこない!!」

「残念ながら、俺にはグローシユ結晶がある」

「え？　……ソレってお母さんの……？」

煙の向こうの男の気配が薄れて行く。シーティアはもう追えないことを確認し、ジッと煙を見据える。

「俺の名は　グレンガル。また会おうぜ」

男　グレンガルはその言葉を残し、消えた。

「……奴の狙いは何だ？　武器商人だと言っていたが」

「それに、お母さんの研究のグローシユ結晶まで持ってた」

「フェザーランドに行つて、アリオスト先輩の装置を使って　しかも女王様を攫つた……!!」

「　それに、もう一つあるわ」

「　え？」

皆が一斉にシーティアを見た。シーティアはグレンガルが消えた方向を見ながら、言った。

「水晶鉱山を盗掘していた奴等の取引相手の名前……。ソレがグレンガルってワケ」

「　これらの事は、どのように繋がっているのでしょうか？」

ピティがジッとシーティアを見据え、ルイセ、ミーシャも答えを待っている。

「だが、今は他に優先する事があるだろ？ ローランディアを何とかして救う為にも……な」

「そうね。バーンシュタインとランザックを仲違いさせるのが、今の私達の目的……」

ウオレスの意見に、シーティアも頷いた。ルイセ、ミーシャも、その言葉に深く頷いた。

「バーンシュタイン軍の背後に周って、まずバーンシュタインを攻撃……その後に来たランザックへと攻撃を仕掛け、両軍が闘いを始めたら、撤退する……ってコトでいい？」

「ああ。それでいい」

シーティアが作戦を立て、ウオレスがコクリと頷いた。シーティアは顔を上げ、一行に宣言した。

「行くわよ！ ローランディアの為に必ず成功させる！！」

「うん！！」「ハイ！！」「分かりました！！」

こうしてシーティア、ウオレス、ルイセ、ミーシャそしてピティ一行はグローシアンの遺跡にて迷いの森を発生させ、ランザックをバーンシュタインの後方へ移動させると、両軍を争わせる為にローランディアとバーンシュタイン軍が争っている主戦場へと向かって行った。

38・紅龍の戦姫（前書き）

ノートからパソコンに打つのが非常に面倒なことに最近気づきました。どうぞお楽しみください。 m () () m

38・紅龍の戦姫

かつて、レティシア姫と共にバーンシュタインのインペリアルナイトを待ったその平原は、今　多くの兵士達が集う戦場と化していた。

シーティア達は、ローランディア軍とバーンシュタイン軍が争う平原を迷いの森を使って迂回し、バーンシュタインの背後を取る事に成功した。

「バーンシュタイン軍の後方部隊……。成功です、シーティア様」

「ここにいる奴等に攻撃を仕掛け、遅れて来たランザック軍と戦わせる事が出来れば……」

ピティの明るい言葉に、ウォレスがいつもの彼に似合わず、緊張した口調で作戦を噛み締めるように呟いた。ルイセ、ミーシャも緊張で顔が強張っている。

そんな中シーティアは一人、紅い紙紐を懐から出して自身の髪をポニーテールに結わえる。そして、一歩前に踏み出しながら、絶刀を具現化させた。

静かに刀を剣帯に通し、前を見据える。

「シーティア、お前……！」

ウォレスが何か言葉を放つ前に、シーティアが口を開いた。

「ウォレス、今回は私に任せてもらう」

年頃の少女の雰囲気は消え、その冷徹とした眼差しは、バーンシュタイン軍に向けられている。ルイセがその言葉に不安気に、強く反論する。

「お姉ちゃん、一人じゃ無理だよ……！」

「え！？　お姉さま、一人で戦うつもりなんですか！？」

ルイセの言葉に、ミーシャも怒ったように眦をつり上げる。自分を心配する二人の少女に穏やかに微笑し、シーティアは言った。

「これぐらい、造作もない。全滅させるわけではないし、味方の数

が少ない方が混乱もさせやすい。何より、私の闘い方は一対多に向いている」

「でも、ファフニールは有名だよ!? 刀を使ったら」
「一歩も退こうとしないルイセに、シーティアは美しい笑みを浮かべた。」

「バーンシュタイン軍が今から戦うのは、ローランディアのファフニールじゃない。ランザックの一兵士。　　そういうことだ」

「シーティア様」

覚悟を決めた様子の子のシーティアに、ルイセが絶句する。ミーシャも納得いかないと強い眼で訴えかけて来る中、ピティがシーティアの傍らに飛んできた。

その様を見て、ウオレスが静かにシーティアに問いかけた。

「本当に、大丈夫なんだな？」

「ああ。　　むしろ、こういうのは一人の方がやりやすい」

余裕すら窺える表情で笑い、シーティアはウオレスを見る。

「ルイセ達を頼む、ウオレス」

「　　そうか、分かった」

ウオレスの力強い頷きを確認するとシーティアは、縮地法で一気に戦場に駆けて行った。

その様を、ルイセとミーシャが慌てて追いかけてよつとする。

「　　行くぞ、ルイセ。ミーシャもだ」

「でも、ウオレスさん!!」　　「　　そうですよ、お姉さまが!!」

「今の俺達が不要だと判断したから、アイツは俺達を置いて行ったんだ。そこを忘れるな」

ウオレスの淡々としたもの言いに、ミーシャがやるせない表情で自身の気持ちを叩きつける。

「どうして。　　どうして、そんなに冷静でいられるんですか!？」
ウオレスはそんなミーシャとその横にいる何も話さないが、強い光を宿した瞳のルイセを順に見返し、言った。

「そうなる必要があるからだ。　　戦場ではな」

一人のバーンシュタインの兵士が妙な気配を感じ、振り返った。
「ん？」

ソレと同時に、一斉に周りの兵士達も武器を構える。彼等は常にインペリアルナイト等の強い騎士達と訓練している。よって、気を読むことに長けた者が多く、大陸中最強の軍隊と言っても過言ではない精兵の集団である。

だが、その時の風は強烈だった。一瞬で自分達を飲み込むかのような、勢いと共に、殺気が一気に充満し、白刃の斬閃が無数に宙に描かれる。

「なんだと!?!」

ズバババアツ 二人の重歩兵が叩き斬られ、地面にひれ伏した。

指揮官が彼らの上げた血しぶきによって、やっと気付く。敵襲であることに。

「何故、後方から敵襲が!?! まさか、ランザックが!?!」

バーンシュタイン軍が指揮官を庇うため、各々の武器を構える。

そこに現れたのは、氷のように冷たい金と銀の瞳をした長い黒髪の女。

「女、だと!?!」

両手剣の柄を持つ業物の刀を右手に持って、女神が如き美と共に、死神が如き殺気を撒き散らして、彼女は現れた。

「正体は分らんが、この殺気。敵のようだな!」

「フン、たった一人でこのバーンシュタインに攻め込んでくるとは
…!?!」

「バカめが!?! 無謀と勇気の違いを知らんとは」

嘲り、蹂躪しようとする兵士達が隊列を組んで静かに歩みよってくる。その様を見ながら、シーティアは静かにピティに語りかけた。

「ピティ、私は今から、多くの人の命を奪う」

「シーティア様?」

「ソレは、許されないことだ。どんな大義名分があるうと、な」

呟くような口調。落ち着いていて、どこか物哀しげな声で。シーティアは切りかかってくる兵士に冷徹な瞳を向ける。

「自分の生活を守る為に他者の命を奪う行為は、一種の傲慢だ」
剣を振り下ろしてくる兵士達の間を縫うように高速で移動し、刀を一閃、二閃する。

「それでも」

ズバババ次々と兵士達は鎧ごと断ち切られ、血しぶきを上げて倒れて行く。シーティアはソレ等を確認せず、仲間が切り倒された事で、驚愕状態に陥った別の兵団に一気に駆け寄り、切り捨てて行く。

「生きたいんだ」

ファフニールが駆け、銀光が煌めく時、血しぶきを上げて、重歩兵、槍兵が切り裂かれて行く。血しぶきという命を噴き立たせて。

ビュンツ刀に着いた血糊を払い、シーティアはその氷の様な金と銀の瞳をバーンシュタイン軍に向ける。そして静かに冷たく、告げた。

「彼等に、詫びるつもりは無い」

「シーティア様」

「……うおおおお!!」「……」

凄まじい怒号と共に、兵団が隊列を成してシーティアに殺到しようとするが……。彼女と兵士達とのちょうど中間辺りに、強大な火柱が天に向かって生じた。

「……ぐあああああ!!」「……」

「フレア」

詠唱もなく、突如現れた炎系上級呪文。その炎の中へと勇猛な兵士達は断末魔を上げながら消えて行った。その炎の脇を通り抜けて、数人の兵士が斬りかかってくる。

「ピティ、私と共に来るのなら……この光景を。死体の山を見続ける事になる。母さんに私のお目付け役を命じられたからと言って、

このまま私に付いてくる事は無い。ここからは、貴方が決めて」

そう告げながらも、二人の兵士達を返り討ちに切り刻む。兵士達を細切れにして尚、女の瞳は冷厳と冴えわたっていた。

「シーティア様、ソレを私に決めさせるために…?」

ピティの純粹な瞳の質問を受け、シーティアは笑った。

「……ルイセ達に、本当の私を見せる覚悟が出来なくてね。本当に人を斬り殺している私を見て、あの子達は、これまで通りの付き合いをしてくれるのか……。それが、不安だった」

口元を皮肉気に吊り上げ、自嘲的に笑う。ピティはそんなシーティアの表情をジッと見据えると

「分かりました」

そう応え、ジッとシーティアの姿を目に焼き付けようと見開く。

見続けよう。この方がどれほどの人を殺し、その先に何が有るのかを見届ける為に……！そして

「シーティア様を決して一人にはしません!!」

力強い笑みと共に、ピティはシーティアに告げた。一瞬、シーティアも氷の瞳を溶かし、キョトンとした表情を見せたが

「モノ好きだな……！だが、ありがとう。ピティ」

バーンシュタイン兵の死体が転がる戦場で、シーティアは女神の如き微笑をピティに向けていた。この場に彼女を見つめる者がいれば、間違いなくそのモノを虜にするだろう微笑み。

だが、この場に居るのは、彼女を殺そうとする殺意の塊だけであり、彼女の笑みはピティ以外に確認されることはなかった。

「魔女め!」「切り捨ててくれる!!」

口々に叫びながら、兵団が第一陣、第二陣と隊列を組んで襲いかかってくる。ソレを眺めやり、冷たい瞳に戻った彼女は言う。

「判断が鈍いな」

シーティアは、縮地法で降り注ぐ矢の雨を一気にかいくぐり、兵団の前に躍り出ると、刀を横薙ぎに放つ。ズバアアアッ 銀閃が一気に兵士達を吹き飛ばし、穴が開いた兵列に斬りかかると、兵士達

後、刃にかかった兵たちは糸の切れた人形のように崩れ落ち、辛うじて刃から逃れた者達も、同時に起こった三連爆発に飲み込まれていく。

そうやって、シーティアによる一方的な殺戮が続いて行く中で、ピティから声が上がった。

「シーティア様、後方から！」

「どうやら、ここまでの様だな」

シーティアが後方を確認すると、迷いの森の遺跡によって、バーンシュタインの後方へ迂回させられていたランザック軍が闘場となる平原の東側に今、現れた。

「……何？ 何故、バーンシュタイン軍が我らの前に？」

「どういう事だ？ バーンシュタイン軍が攻撃を受けているぞ？」

ランザックの言葉を聞き流しながら、シーティアは両軍に良く聞こえるよう、大声を張り上げる。

「これより、私の役目は終わりだ。バーンシュタインよ、同盟と言つのは裏切られる事もある事を知るがいい！！」

「……！！！！」

両軍が驚愕の表情で止まる。次にバーンシュタイン軍の顔が怒りに、ランザック軍の顔が困惑に歪む。そして、バーンシュタイン軍は確信する。ローランディア軍を挟撃するはずだったランザックが、自分達の後方に、つまり、ローランディアと戦う自分達を挟んだ体系を取った事に。

「おのれ……！！ よくも、裏切ってくれたな！！」 「ランザックども、覚悟しろ！！」

「ま、待て……！！ 何かの間違いだ！！」 「何故、我らが後方に！！」

ランザック兵が声を上げようとしますが、そこへシーティアが縮地法でランザックの兵団の中に駆け抜けて行った。

「……？ 何！？」 「アレは、先の女……！！？」

「逃がすな……！！」 「追え……！！」

更に困惑するランザック軍にバーンシュタイン軍が侵攻して来た。
「な、何のつもりだ！？ 早まるな！！」

「黙れ、この裏切り者共が！！」

ズバアツ　バーンシュタイン兵の一人がランザック兵を斬り伏せた。血しぶきを上げて倒れて行く彼に目もくれず、バーンシュタインはこちらに向かってくる。ソレを見たランザック兵達もついに剣をバーンシュタイン軍へと向けるのだった。こうして、ランザックとバーンシュタイン両軍の大混戦が始まった。

シーティアは縮地法で一気にランザック軍を突っ切ると、その後方にある迷いの森まで駆け抜けた。ランザック軍は誰も、この女に興味を示す余裕が無い。迷いの森の入り口付近で、彼女は茂みの中から両軍の状態を確認した。

「　やりましたね、シーティア様！！」

「ああ　。これで」

ピティの言葉に、シーティアがようやく表情を緩めようとしたその時、戦場でまたしても混乱が起こった。

「？　何だ　？」

目を凝らし、状況を確認するシーティアの目の前には、新たな光景が広がっていた。正体不明の4人組が突如、戦場に現れてランザックとバーンシュタインの両軍の兵士を切り捨てていたのだ。

両軍が入り乱れる戦場に、一際実力の違う四人の男が現れたのは、シーティアが身を隠してすぐだった。

「　將軍、どうやら我らが仕掛けるまでもなく、連中は仲違いを始めたようです」

四人の中でも一際、背が高く体格の良い壮年の男に、フルプレートの鎧とフルフェイスの兜を着こんだ3人の内、一人　青年が声をかける。男は静かに口を開いた。

「あの黒髪の女　。我らと同じ目的で仕掛けていたか」

男は銀の胸当てを付け、腕に金の籠手を付けただけの軽装で、他の3人の兵士たちとは違いノースリーブのシャツと黒色の長ズボンという出で立ちであった。その鋼の様な両の手には、ソレゾレ肉厚の刃を持つ二振りの双身の剛槍が有った。

ドオンツ　男は驚異的なスピードで戦場の北側から一気にランザツクとバーンシュタイン軍の戦場まで跳躍して見せた。その様、正に弓から放たれた矢の如きスピード。

ズザアツ　足を地面に擦りつけ、土煙を起こしながら着地。その様に気付いたランザツク兵、バーンシュタイン兵が剣を向ける。

「何だ、貴様ら……!!」「おのれ、ランザツクの援軍か……!!」

「我が一撃、受けて見よ……!!」

男は空気を震わせるような声と共に、左右の2つの刃を持つ槍を一閃。ズバアツ　その強力な一撃を前に、二人の兵士は為す術なく崩れ落ちて行った。

「な、何……!?!」

「何だ、あの男……!!」

ランザツク、バーンシュタイン両軍の兵の首を見境なく刎ねた。その事実が、双方の軍の注目を集める結果となった。しかも、相手は筋肉質の2メートル近い身長の子。注目を浴びない訳が無い。

「我が名は、フォーマルハウト・ヒュッケンマイヤー……!!　20年前に貴様ら三国によって滅ぼされし祖国　ボルギナを取り戻す為、今一度我が全力を持って、貴様らに挑もうぞ……!!　そして祖国の再建をここに宣言する……!!」

その男の言葉は、凄まじい意味を持っていた。かつて、この三国大陸には数多くの小さな国が存在し、血で血を洗うような戦が後を絶たなかった。その為に、国家は強力な傭兵団を雇ったり、隣国を吸収することで力を付けて行った。

力無き弱者を喰らい、強者が生き残っていったのだ。そして、最終的にこの大陸は三つの国が納める事になる。ソレが、三国大陸の始まりだ。

この男が言い放ったボルギナと言う国は、三国が大陸を支配する以前にあつた小国の中でも強大な力と肥えた大地があつた。故に最後まで、支配されること無く闘い抜いた国であり、一番最後に滅ぼされた国でもあつたのだ。

「!?　ボルギナだと!!!　20年前に我がランザックが占拠した小国の名前!!!」

「この場にいる貴様等は既に現実のボルギナを知らぬであろうな!!!　だが、そんな事は問題ではない!!!　命惜しき者は下がり、我が祖国の再建をソレゾレの国へ伝えよ!!!」

男　　フォマルハウトの名乗りを受け、戦場が震える。一人のバインシュタイン兵が気付いた。その名乗りに。

「フォマルハウト　?　ボルギナの伝説の將軍の名前だ。20年前に悉くバインシュタインやランザックの侵攻を防いだという猛将にして知将!!!」

「バカな!!!　当時の將軍は若くても20歳以上のはずだ!!!　あのように若い訳が無い!!!」

両軍が混乱の渦に巻き込まれていく時、静かに三人の甲冑の剣士がフォマルハウト將軍の傍らに控えていた。この三国のどの国にも当てはまらない格好の鎧。そして　ソレゾレが手にしている武器は　片刃で刀身が反っているのだが、肉厚で幅広の姿をしている。ちょうどローランディアとバインシュタインの剣を足して2で割つたような格好。

その剣の銘は　カトラスといい、ボルギナの兵士が好んで使っていた斧の様な扱い方をする刀だ。現にその柄は刀と同程度の長さしか無く、片手でも扱える事を意味している。

「キルギス、ケイマン、クウェート!!!　アルバ殿とミストが新たな力をこの地で手に入れるまで　粘るぞ!!!」

「ハッ」「この命、將軍と共に!!!」「お任せください!!!」
「祖国ボルギナを再び!!!」

たった四人のボルギナ軍。だが、その力は圧倒的だった…。キル

ギス、ケイマン、クウェートの武器は、刃こぼれ一つせずつに相手の武器や鎧を紙のように切り捨てて行く。

「!? 何だ、コイツ等の武器は!?!」

両軍にとつて更にとんでもない事に、この三人の剣士は魔法にも長けていた。単体でファイヤーボールやトルネード、サンダーを放つことが出来る。この上コンビネーションを駆使して、一気に敵兵士を叩きつぶしていく。

その隣では、他に類を見ない剛槍の二振りをもれず片手で操り、次々と屍を増やしていくフォマルハウト。重戦士と思われた彼は、フレア、ブリザードやサンダーストームと言った強力な高位魔法も扱うことができ、混戦は更に深まっていく。

この様を、シーティアとピティは茂みの中から観察していた。

「…シーティア様、コレは…!」

「私達の動きを見て、誰かが横槍を両軍に入れたようだな。ボルギナと言ったか?」

淡々と冷静に現状を認識して行こうと、シーティアは口に出しながら状況を整理している。ピティもソレに合わせた発言を取っている。

「ボルギナと言うのは、20年程前にランザックに滅ぼされた小国と言っていましたね」

「100年程前は、大陸は三国で形成しておらず、様々な小国同士での戦争があつたそう。資料で読んだことがある、私達の知るグランシルもかつては違う一つの国家だつたそう」

シーティアの言葉に関心したようにピティは彼女を見上げる。対してシーティアは戦場の状況を分析していた。ボルギナと名乗る4人の兵士の内、3人の兵士は似通った鎧兜に身を包んでいる。

その三人の共通武器は、先に述べたカトラスと呼ばれる特殊な剣である。その形状はバーンシュタインの両手剣。ローランディアの刀、ランザックの戦斧のいずれでも無かつた。

だが、シーティアが注目したのは武器の形状ではなく切れ味の方だった。並の武器では歯が立たないその切れ味は、名刀シエルオーブナーにも匹敵している。ソレほどの刃。

アレほどの武器を標準装備としてボルギナは所持しているというのか？ いや、いくらなんでもそんな名匠が何人もいるわけではない。考えられるとすれば リングウェポン。しかし それでもアレほどの武器をどうやって集めた？

シーティアの瞳が鋭く細められる。リングウェポンとは古代の魔導技術によって作られた指輪から武器となる優れた兵器だ。これは特殊な方法で生み出されており、今現在では新たなリングウェポンを作る技術は無い。

しかし、現在の研究の成果で量産・複製ができることが新たに分かっていた。つまり、一からリング・ウェポンは作れないが、強力なリングが一つあれば複製させる事が出来るのだ。通常のリング・ウェポンに限りだが

「間違いない。あれがリングウェポンなら、その切れ味は正にレギンレイヴ」

「レギンレイヴ？ ソレは」
伝説の鍛冶師レギンが創った武器をリング・ウェポンとした究極の武器。その切れ味足るや同じリングウェポンをも切り捨てると言われている。

「リングウェポンの中でも、一級品のモノをそう呼ぶが、奴らの武器はそう呼んで指し支えない」

シーティアは小声で何かを呟いた。ピティはソレに、ちらりとシーティアを見上げてから、両軍を相手に正に孤軍奮闘する4人のボルギナ軍を見る。彼女はこう言ったのだ。

「奴らの狙いは、何だ？」

ソレが、シーティア自身への問い掛けであった。ソレを察したピティは彼女の思考の邪魔をしないよう、静かに現状を確認していたのだ。

38・紅龍の戦姫（後書き）

ボルギナ公国は、グローランサー？のネイラーン王国を基にしています。

フォマルハウト〓ロツクバイン將軍

キルギス〓フェルナンド

ケイマン〓グローマー

クウエート〓ビリー

と、なっています。

迷いの森　木々が鬱蒼と生えたこの森はグローシアンの遺跡の力によって脱出できない樹海と化す。先に述べたグローシアンの遺跡は、迷いの森西南部に位置し、石造りで出来た門が特徴的だ。

バーンシュタイン軍とランザック軍が同士討ちを始め、さらには亡きボルギナ公国の残党が入り混じった混乱の戦場より数キロ離れた　グローシアンの遺跡。

本来ならばすぐに辿りつける遺跡も、樹海と化した今では地の果てに向かうようなものとなった。

その遺跡の入口に、あの戦場でバーンシュタイン軍やランザック軍を相手に暴れまわるボルギナ公国残党と同じ甲冑を着た兵士が10数名、立っていた。遺跡の中には誰も通さない、彼らの表情がそう、物語っている。

そんなボルギナ公国残党達の前に、一人の青年が現れた。

「止まれ！……何だ、貴様は！？」

ボルギナの兵に呼び止められ、青年は静かに足を止めると、頭を掻きながら深いため息を吐いた。サラサラの黒髪に艶やかな白い肌を持つ青年は、その美しい見た目に反し、無骨な黒いグローブを両手に付け、アンダーシャツの上に蒼い半袖のジャケットを着、黒い長ズボンに動きやすそうな白銀の膝当てを兼ねたブーツを履いていた。

妖艶にして絶対の美を持つ青年の瞳の色は、金と銀のヘテロクロミア。彼の両手には光り輝く黄金の指輪が嵌められている。

「金と銀の瞳　左右で瞳の色が違う者。情報通りだな」

「やはり、現れたか！！　アルバ殿が仰っていた通りだ！！」

ボルギナ兵の言葉に、青年は整った美しい顔を歪めた。

「俺は、無駄な争いはしたくない。怪我しない内にアンタ等の待つている人の所へ帰りな。俺は　その遺跡の中にある兵器を破壊しに来ただけだ」

青年の言葉にしかし、兵士たちは耳を貸さない。いや、むしろ余計に抵抗の意志を強めていた。

「そう言われて退くと思うか!？」

「我等の狙いは、その兵器の起動よ!!」

ボルギナの兵士達は、自身の指に嵌まっている銀色の指輪を一瞥し、強く握る。すると蒼い光と共に山刀の如き刀身の太いサーベルが生まれる。ボルギナ軍専用の剣　カトラスである。

その様を　武器の有り様を見て青年はますます顔を歪めた。

「　何で、分かんねえんだよ。ソレは　人を殺めるだけのモノじゃねえか!　無駄に血を流して、何になるってんだ?」

不快気に言う青年は、その冷たい美貌に反し、人間的な表情を作る。

「変わりやしねえよ、アンタ達が　兵器を手に入れば、ソレを超えるモノをまた人は探し出す。そうやって　殺し合い続けるつもりかよ?」

青年の言葉に、ボルギナ兵が剣を構え、吼え返す。

「祖国を取り戻し、民に温かな暮らしを与える為　、その為には必要なコトだ!!」

「邪魔立てするのならば、貴様から斬る!!」

青年は静かに、左右の肩に背負ったショートソードを抜き放つ。

反りのある片刃の剣。片手剣カタナを　。

その刀は、通常の刀より、一節程短い。その左右の手に有る脇差を、逆手に構えると、太陽の光を浴びて、その刀身が蒼く光る。

ビュンツ　一瞬後、風を纏って青年が兵士たちに向け、駆け
た。

「な...!？」

「は、早い!?」

辺りに無数の斬戟が刻まれ、風と化した青年は　ズザアツ　つ
ま先から靴底を地面に擦りつけながら、姿を現した。

一瞬の間の後、ボルギナ兵は血しぶきを上げて、その場に崩れて
行った。青年は、微かに悲しそうな顔で振り返る。

「…人が手に入れちゃいけないモノだよ。グローシアンを滅ぼした
研究で生み出されたモノだから」

再び、世界を滅ぼさせるわけにはいかない。ゲヴェルに　人は
関わるべきじゃない。そう、自分と同じ顔のアイツは言っていた
。

「…行くか」

遺跡の入り口を見据え、静かに自分の刀を払って、鞘に戻すと
。入口に向かって歩き出そうとした直後。

「　　ッ!」

青年は大きく身を後方へ反らした。彼の目の前には、鋭い斬戟が
通り過ぎて行った。

(　　コイツ!?)

バーンシユタイン兵が使う、両刃のグレートソード。両手剣と呼
ばれる武器で、その長さは180センチから200センチが標準サ
イズだ。一般的には重装歩兵の装備武器である。しかし、彼の前に
現れたのは　。青年と年がそう変わらない、針金の様な鋭い黒髪
と鷹の様な鳶色の瞳をした軽装の20代前半くらいの見た目をした
男だった。

「…ほう?　流石にやるな。今の不意打ちに気付くとは」

男は感心したように呟く。男の出で立ちは、身長180センチ前
後、体の肉付きは無駄なモノが無く、研ぎ澄まされていて、筋肉質
だが細身。茶色の半袖革ジャケットに黒いシャツと籠手、黒の革ベ
ルトと靴、ジャケットと同じ色の革の長ズボンといった服装。その
額には、紅い炎の様なバンダナが締められていた。

「へえ…。どう見ても軽戦士の格好なのに、重装武器を軽々と振り

回すとはね。アンタ、何モンだい？」

青年の問いに男は淡々と応えた。

「俺の名はアルバ。　　アルバ・ザードだ。　　お前は、ゲヴェル
だな？」

アルバと名乗る男に、青年はその金と銀の瞳を大きく見開いた。

「アンタ　俺の顔を見て、ゲヴェルと言ったな？　まさか、グロ
ーシアン支配時代の武器レギンレイヴや遺跡に眠る強化兵士の事を、
ボルギナに伝えたのは…！！」

「そうだ、俺だ」

アルバは、気負うことなく平然と　その言葉を口にした。自分
の持つ、白銀の刀身の両手剣を見せつけるように正眼に構えて。

「レギンレイヴ、か　。　偉大なる者の遺産”なんて呼ばれちゃ
いるが、ソレは　結局、人を殺める肉切りに他ならねえ」

「　この遺跡に眠っていたのでな。ついでにもらって置いた。そ
の肉切りに助けられているのはお前もだろう？　その二振りの小太
刀、レギンレイヴに他なるまい？」

青年は　その瞳の陰を鋭くして睨みつけると同時、左右の肩に
納めた小太刀を抜き放ち逆手に構えた。

「　戦争を引き起こそうってヤツに言われたくねえな」

アルバはニヤリと笑い、殺気を鋭くする。

「ならば、俺とどう違うのか　この剣で試してやるう！！」

ゴオウツ　強烈な唐竹の一閃。青年はその凄まじい一撃を紙一重
の所でバックステップして躲す。アルバは続けざまに、斬り上げ、
横薙ぎ、逆袈裟を放つも、青年は　サイドステップで斬り上げを
左に見切り、横薙ぎは　左手の小太刀で脇に流し、逆袈裟が放た
れると同時に交差法で切り返した。　ギインツ

甲高い音が辺りに響き渡り、火花が散る。小太刀の攻撃力では、
両手剣の重みには耐えられない　。　だというのに、この異形の青
年　自らの移動速度、瞬発力で補って見せている　。

大剣を相手に小太刀二刀で、眉ひとつ動かすこと無く、挑んで来

る青年の度胸に、アルバは笑みを強くさせる。

「中々、骨があるな……。ゲヴェルの兵士は自我を持たず、奴の言いなりだと聞いたが、お前は違うようだ。名はあるのか？」

「ジキル・スカーレット。ソレが俺の名だ!!」

青年 ジキルは名乗ると同時に、軽くステップを刻み、強く言い放つ。アルバはその名乗りに、益々笑みを深くする。

「面白い。人形相手では、物足りないと思っていた所だ!!」

「やれるものなら やってみやがれ!!」

小太刀を静かに握りしめ、突っ切る。すれ違いざまに、両手の刃をクロスさせ、斬りつける。大剣を縦に構え、一閃を受け切るアルバ。

「コレが俺の刃、フレイズ・ベルグだ!!」

ジキルは風を纏って、アルバに斬りかかる。ギーンツ 火花を散らす刃と刃。

「グツ……!!」

「スピードと剣の冴えは大したものだが 物足りんな」

歯を食いしばるジキルに、アルバはニヤリと笑う。すぐさま、切り返すジキル。スピードを生かし、縮地法で翻弄する。

だが、アルバの鷹を連想させる瞳は、ジキルをしっかりと捉え、大剣を振り下ろしてくる。凄まじいスピードで剣が交差し合う両者。しかし アルバのパワーは圧倒的だった。

小太刀二刀をして、攻め込むすぎが無い程の剣の腕と、大剣を軽々と操るそのパワーは、そしてソレだけの攻撃を繰り出しておきながら、息一つ乱さないタフネス。

ジキルは、繰り出される大剣の一撃をスピードで避けながら、アルバを見据え言った。

「この力、アンタ まさか!!」

ゲヴェルである自分の反応速度に軽々と付いてくる身体能力。尋常じゃないパワーとタフネス。そして、自分の身体能力の高さを自覚し、卓越した剣技。考えられる正体は 一つしかない

い。

「グローシアン支配時代の生体兵器、か？」

確認を込めた問いに、アルバは静かに意志の強さを示す瞳で答えた。

「フン：知りたければ、俺に勝つことだ」

「…へ、面白れえ…。受けて立つぜ！！」

好戦的な 悪戯小僧のような笑みを浮かべ、ジキルは更にスピードを上げる。その俊足術こそ 縮地法であった。

風を巻いて斬りかかるジキル。その場から動かず、来た時に合わせて大剣を振り切るアルバ。ガキイツ 両者の斬戟にまた火花が散る。

ジキルのスピードに慣れて来たか、アルバは剣速を上げ 連撃を放つ。

「！！！」

その斬戟の一つ、一つの風切り音が普通ではない。その一撃、一撃が確実にジキルを追い詰めて行き、ついに ジキルが岩を背負った。後方に逃げる事が出来ない。振り下ろされる斬戟。

「……………！！！」

ドゴオウツ しかし次の瞬間、アルバの瞳が見開かれた。斬られたのは後方にあった岩だけ。ジキルは超スピードでアルバの後方へ回り込んでいた。

アルバが振り返って大剣で横薙ぎを一閃すると同時、ジキルは頭上に高く跳び上がり、宙に蒼い光の球を生み出し、ソレを左手の小太刀を空で一振り、二振りする。と、斬線から蒼い光の小さい矢弾が無数に飛び、アルバに放たれる。

「！！ 魔法剣、か！！！」

放たれたマジックアローは単発のソレではなく、空中に無数に放たれる弾丸だった。アルバはニヤリと一つ笑うと、大剣を横に構え、ギイギイギインツ 全ての矢弾を弾き落とす。

「ム！！！」

だが、ジキルは既に 空中には居ない。既に着地し 縮地法
でアルバの懐に入り込んできていた。

「ぬおおおおお!!」

怒号と供に放たれたのは 両手持ちでの斬り上げ。ゴオウツ
斬線が宙を描く。ジキルはギリギリでバックステップして避け、自
身の小太刀が届かない間合いまで離れると、再び、マジックアロー
の魔法剣を放つ。

放たれた光の矢弾を、アルバは振り切った姿勢のまま舌打ちし、
凄まじい反応速度で脇に飛んで避ける。

アルバが体勢を整えようとした時、ジキルが一陣の風と成って、
アルバの眼前に迫る。咄嗟に大剣を縦に構えたアルバを 風が通
り過ぎると同時。

ギギギギインツ 耳障りな金属音がぶつかり合う甲高い音が森
に響き渡る。

（ 迅い！ 今のが、マックススピードか…!! ）

アルバは、口元に笑みを浮かべて強い意志の光を灯した金と銀の
瞳の青年を睨みつけると、すれ違った青年の背に斬りつけようと振
り返る。ジキルの後頭部に放たれる右手一本の突き。

しかし、ソレが空を斬ると同時に、下に視線を向けると、こちら
を振り返って屈んでいるジキルが居た。同時 アルバは首筋に寒
気を感じ、首を後方へ反らす。ミリ単位の見切りは、ジキルの左刃
を紙一重の所で避けて見せ、バックステップすると同時に、アルバ
は右袈裟がけを放って、ジキルを後方へ下がらせる。

互いに刃を構え合う。

「 流石にやるな、ゲヴェルよ」

「 アンタもな！」

ジキルはニツと笑い返した。その笑みに邪気は無く、子供のよう
に無垢でありながら、一方で己自身の力を知る男の瞳を持っていた。

「 惜しいな」

アルバは静かに構え直す。先ほどまでと雰囲気が違う そのこ

とに気付き、腰を落として静かに構え直すジキル。

「その勝負の勘…。実力は　素晴らしい。だが、お前はまだその力を真に使いこなせていない。ソレでは、絶対に俺に勝てん」
ジキルは目を見開いた。自分の中にあるゲヴェルの波動・因子を使いこなせていない。ソレは　人間に初めて指摘された瞬間だったのだ。

「俺の正体を知りたいのだったな。お前の力を認める証として、見せてやろう」

アルバの体から、白銀の煙が現れ始める。その姿に　思わず、ジキルは目を見張る。

（　　やっぱり。　コイツ…！！　　）

煙はやがて炎と化し、アルバの身を覆い尽くす。その鷲色の瞳が黄金の闇に彩られ　鬼気を発している。

「　同じゲヴェルの波動を使う者ならば、因子を使いこなす者が勝つ。お前では　俺に勝てない」

「　……アンタ、やっぱり　！」
「　そう、俺は奴隷としてグローシアンに仕えていた剣士だ。だが、当時の主に見初められてな、ゲヴェルとの融合計画の実験体を選んでもらったのだよ」

ニヤリと笑うアルバに、ジキルは驚愕の表情を取る。平民が強化人間の計画で、実験体にされる話は、知っていたが　、ソレを自分から望んでなつたと、この目の前の男は言い切った。

「　さて、そろそろ死んでもらおうか？」

「　…そう簡単に行くと思うなよ。勝負つてのは、やって見なければわかんねえ！！」

スツ　構え直し、ジキルも異形の力を発する。その身に纏うのは白い煙だった。炎に比べれば、明らかに頼りない煙。だが、ジキルは一步も退かない。

「　……行くぜ！！」

ジキルはその瞳を金と銀の闇に彩らせ、低くなった声で吼える。

更に磨きを上げるスピードと反応速度、技の切れ。

アルバの剛剣にまともにつき合えば、ナマス切りにされると悟っているからこそ、唯一のアドバンテージであるスピードで、翻弄するジキル。しかし、身体能力においては、因子を使いこなしたアルバに分がある。

移動しながらの斬り合いは互角。二刀をもつてしても、大剣の斬戟から反撃出来ない。防戦一方のジキルだが、アルバはその事実后感嘆していた。圧倒的な力を放つ今の自分を。この青年はスピードと剣の腕だけで押さえこんでいる。

（動きに磨きがかかっている）
身体能力が上がるだけだと、なまじ同じ力を持っているからこそ、アルバは考え違いをしていた。彼等は。自分達とは根本から違う。人間の姿を模しているが。その正体は、自分の体に融合させられた異形と同じ存在であると。

（ゲヴェルとは、その闘争本能を極限まで高めた種族である、か。俺も、信じる気になったぞ！）

太い笑みを浮かべるアルバ。その顔面に向けて、ジキルは宙で左の小太刀を一闪。蒼い光弾の魔法剣を放つ。

「…!？」

ソレはただの、マジックアローの魔法剣ではなかった。風を纏い、空気の抵抗をギリギリまで無くして放たれた光の矢弾は、音速の弾丸と化した。

「ソニック・ブリッド…!!」

「コレは。デュアル魔法剣!？」

マジックアローと共に、風系の初級魔法。ウィンドを唱え、剣閃にて同時に放った。ソレは正に、初級ではあるがデュアル魔法に相違ない。

この事実に関く驚いたアルバだったが、冷静に脇に避けようとする。その彼に、ジキルは空気の摩擦を風系の補助魔法。クリックで殺した上で、更に縮地法で一気に駆け抜ける。

そのスピードは、通常の縮地法の約3倍だった。

(魔法剣と同時に、斬り込んで来るだ…!?)

「俺のスピードは、縮地法を使える同族の中でも、ちょっと早いぜ?」

一陣の風と化したジキルは、ソニックブリッドに追いつくと同時に、交差後方気味に左右の小太刀で十字に袈裟がけを放った。

スピードと剣の鋭さを極めた、刹那の斬戟。ジキルの中でも最高の技だった。自分よりも強力な力を使いこなせる格上のアルバに、加減をしている場合じゃない。いくらスピードに優れると言っても、それだけでアドヴァンテージを取れる程ゲヴェルは甘い種族ではない。

ズバアツ 血が噴き出る。片膝を付いたのは、ジキルだった。

「クツ!!」

胸を深く斬られ、ジキルはアルバを睨み上げる。対するアルバは淡々としていた。

「確かに、素晴らしいスピードと鋭い斬戟だった。だが、そこにパワーが無い。お前の力では、今の俺の腕一本斬り落とせん。ソレが、因子を使いこなす者とお前達との差だ」

静かに語りかけながら、アルバは大剣をゆっくりと振り上げる。

「とは言え、見事だったぞジキルよ。その名は忘れぬ」

が。大剣は振り下ろされる事は無かった。咄嗟にアルバは大剣を構え直したのだ。ガキイツ 凄まじい金属音と火花が散る中 鐔の小さい長刀から放たれた横薙ぎを受け止めるアルバ。

「…!!」

しかし、その一撃はフルパワーを使うアルバを後方へ弾く程に強烈な一撃だった。後方へ下げられたアルバに、普通の刀より二回りほど細身の剣。ソレを、片手での確に放って来るジキルと同じ顔の者がいた。

「貴様等…!!」

ギギギンツ 高速の斬戟の打ち合いは、アルバをしても大剣で防ぎきれず、腕にかすり傷を負っていく。

「チィッ」

舌打ちと共に、強烈な横薙ぎを放ち、後方へ下がらせると。細刀の青年の背後から先に横薙ぎの一閃を放った長刀の男が素早い踏み込みと同時に、一閃。ガアアアンツ 大剣と長刀がぶつかり合う。

「ぬうー!!」

気合いと同時、大剣を払い長刀の男を弾き飛ばした。この男も、ジキルと言う青年と同じ黒い髪に金と銀の瞳を持つ美丈夫だった。

剣を振り切り追撃を放とうとするアルバに、細刀を右手に持つ青年が、左手でマジックアローを放って下がらせる。ズドオオツ 光の矢は寸分たがわず直撃し、爆発した。

「お：お前ら：、遅すぎんだろ！ バール、ホープ！！」

ジキルは自身と同じ顔の二人の青年に怒鳴りつけた。ソレに応えたのは胸まで有る長い刀を持った、白い半袖のシャツに茶色の長ズボン。革のグローブを付けた出で立ちの青年が応える。

「しょうがねえだろ？ ラルフの旦那が、遺跡の場所をきちんと教えてくれなかったんだ」

彼の名は バール・ハイド。ジキルと同じ異形にして、ラルフに拾われた同族。もう片方の青年は呆れながら言い放つ。

「全く お前も私と同じ兄弟ならば、もう少し優雅に振る舞うことを覚えるのだな、ジキルよ。美しくない」

細刀を持つ、高級そうな緑のワイシャツは胸元まで大きく開かれ、その白い肌に黄金のネックレスを覗かせて、シルクで出来た白のスイーツの長ズボンを履いた青年の名は ホープ・ワーグナー。

バーンシュタイン領の小さな貴族の跡取りとして拾われた、自由気ままで、美しいことやモノに拘るゲヴェルである。

バールは片膝を付いたままのジキルに回復魔法キュアを放った。優しい緑の光がジキルを包み込み、たちまち傷が治っていく。

「さて、と」

三人のゲヴェルは、自分たちより格上の波動を放つ人間を見据えた。

「アンタが、グローシアン支配時代の強化兵か。キールから聞いた通り、ヤバそうな奴だな……」

バールが長刀で肩を叩きながら言った。その後をホープが継ぐ。

「今更、蘇って何をする？ 醜いグローシアンの支配時代を蘇らせるつもりか？」

アルバの答えは簡単だった。

「俺の目的は一つ。我が主の復活だけよ。それ以外に興味はない。邪魔立てするのであれば、全て切り捨てるのみ、だ」

淡々と言いながらも、殺気を増すアルバに、ジキル達も白銀の煙を纏う。

「言つとくがな、俺達三人が揃ったら 前の様にはいかねえぜ？」

「美しき連携、ご覧に入れよう」

不敵に笑うジキルの横で、ホープも強い宣言をする。

「三人で行くのは気が引けるが、一つ恨みっこ無しってことでよろしく！」

最後の一人、バールもその瞳に鬼気を宿して、アルバを睨みつけた。

「面白い。ゲヴェルのコンビネーションを見せてもらおう!!」

アルバは白銀の炎を纏うと、その瞳に鬼気を宿して、吼えつけ、大剣を正眼にかまえた。

39・生体兵器（後書き）

ボルギナ公国軍は、グローランサー？のキャラを基にしています。

アルバ・ザード＝ジークバルドです。

40.ゲローシマンの王子(前書き)

ようやく、アイツが登場です。
いや、長かった…！

40・ゲローシ안의王子

真つ先に攻撃を仕掛けるのは俊足のジキル。そのスピードを知ってはいてもマックススピードで交差法気味に斬りつけて行く彼に、アルバが返す技は無い。大剣を盾にして、連続斬戟を防ぐだけだ。一秒間の間に十数回の金属音が響き渡る。ソレに気を取られていると 目の前に、ホープいが細刀を握って駆けこんでいた。

「チイ……!!」

鋭く的確な中段片手一本突きは、大剣を縦に構え細刀の刀身の腹部分をいなして、脇に流し、そのまま返し唐竹を放とうとするのだが。

「……!!」

背後に回り込んでいたジキルが風を巻いて襲いかかってきた。振り返り大剣で切り返す。凄まじい剣と小太刀二刀のぶつかり合い。ギギギギインツ だが、打ち合いはその連撃の重みの差で勝敗を分かってしまう。ジキルはアルバの剣撃の数倍のスピードで斬りかかっているが、重い一撃に全てをチャラにされてしまう。

一発でも捌ききれなければ、致命打だ。そのジキルを助ける為、ホープが後方から細刀 イーヴァルデイで斬りかかった。

「……!!」

咄嗟に地面へしゃがみこむアルバ。頭上にて激しくジキルとホープの剣がぶつかり、火花が散る。ゴオウツ しゃがみこむと同時に、アルバは大剣でジキルとホープの足を払う。咄嗟にバックステップして躲しきる二人。

「……!!」

大剣を払ったアルバの目の前には、長刀の柄に鞘を連結させ、長柄の長刀にした武器 ギザームハシュを、頭上で風車のように振り回し、遠心力を加えて、振り下ろそうとするボールが現れた。

否。既に、頭上に刃が迫っている。しかし、

「又おおお!!」

アルバはその一撃さえも、脇に避けて見せ　大剣を右手に握りながら、左手に魔力を集中させ　放つ。

「サンダーストーム!!」

雷の嵐は、ジキルとパールを中心に同心円状に広がり、範囲内の者を黒く焦がしていく。

「ぐああああ...!!」

ゲヴェルの因子を纏っていても、その威力は凄まじく、二人の異形の青年は悲鳴を上げた。だが、二人は　笑みを浮かべている。

「引つかかったな」

「頼んだぜ、ホープ!!」

パールが笑い、ジキルが叫ぶ。

青年達の言葉に　アルバは目を大きく見開き、上空を見上げた。ソコには、青白い雷を細刀に凝縮してこちらに振りかぶっている、ホープの姿があった。

「デュアル魔法剣...!　貴様も使えるのか!!」

「ライジング・ブラスター!!」

雷系の高魔法ライトニングと物理系の中級魔法ブラストを重ねがけて突きと共に放つ、ホープ最高の魔法剣。光の蛇はその鎌首をアルバに向けて走る。範囲魔法を発動中のアルバに避ける術は無い。

(し、しま...!!)

白銀の炎を纏うアルバを、雷光が撃つ。

「グハアツ　!!」

その威力、ゲヴェルの因子でも防ぎきれず、後方へ弾き飛んだ。直撃したアルバはそのまま、遺跡の壁を壊しながら地面に叩きつけられる。

「我が魔法剣。ただ美しいだけではなかるう?　古代の兵士よ、ホープが勝ち誇ったかのようにその口元に気障な笑みを浮かべて

言い捨てる。ソレを確認することなく、ジキルとパールは前のめりに倒れた。

「や、やべえ……！！ 力を使いすぎた」

「苦……しい……！！」

そんな二人の兄弟をやはり、ホープは呆れて見下ろしながら言い放つ。

「ヤレヤレ……。本当に、今一つ決まり切らん奴らだ」

そんな言葉に、二人の青年は恨めしげな瞳を向けた。

「アルバ・ザード様……！！」

遺跡の中から、新たな気配が二つ。一人は赤毛の美女。深緑を基調としたボルギナ公国の女性士官の制服を身に纏っている。しかし、ジキル達が目を向けたのは、その隣の男だった。

「この波動、テメエも、ゲヴェルとの融合兵器か……！！」

「待て、ジキル。コイツ、さっきの奴と違って、グローシアンの波動を感じる」

パールが冷静に、相手を見据える。その顔たちは、どこか、ジキル達に似ている。右目が銀、左目が翡翠の瞳。黒髪の青年。その服装は、この世界のどこにも存在しない、軍服だった。赤髪の美女は倒れているアルバに駆け寄った。

「ミストか」

「アルバ様、よくぞ 御無事で……！！」

ミストと声を懸けられた美女の相手もそこそこに、アルバは青年の方を向く。

「そして、久しいな。わが王よ」

青年はアルバを一目見ると、言った。

「紛い物相手に後れを取るとは、弱くなつたな……アル」

「フン、言ってくれるぜ」

口の端を歪めるアルバに、青年は口の端をつり上げて笑う。

「ゆっくり休んでいる。紛い物は俺が、叩きつぶす……！！」

「…ドレイク」

「この　グロウヴィル・ドレイク・ヴェンツェルが…！」

全身に白い光を纏い、黄金の翼が背に現れる。　。ソレは　相
反するゲヴェルとグローシユの波動を、同時に顕現させた　有り
得ない姿だ。

「…何つつ気だ…！！」

「ヤベエな…！！」

ジキル、バールが思わず漏らすほど圧倒的なその力は、先のアル
バ以上　。因子を使いこなしている上に、グローシアンの方まで
顕現している等、反則的である。だが

「フム、だが退かぬのだろうか？」

ホープは笑う。気障に決めて　、いつもどおりに問いかける。

「当然…！」

その言葉に、間髪いれずジキルは力強く頷いた。隣ではバールが
「フッ」と長いため息を吐きながらも長巻となった長刀を構える。
そんな三人の顔を見据え、青年　ドレイクは嗤った。

「　どこかで、見た顔だと思っていたが。なるほど、親父殿は余
程　異母姉あまのつえにご執心ということか。クク…女々しいモノよ」

そのドレイクの言葉は、誰かを侮辱しているようだった。自分達
の顔を見て、想う相手　それは。バールが思考を深めていると、
隣のジキルが素直に聞く。

「何の事だ」

しかし　予想通り、ドレイクはその質問に答えない。

「これから死ぬ貴様等に、説明する義理は無い。…死ぬ…！」

ドレイクの左手には、頑丈そうな片手用のラウンドシールドにボ
ウガンを取り付けたレギンレイヴが握りしめられる。銘を　ダイ
ナルーヴ。そして、その右手には　雷光を放ち続ける両刃の片手
剣が握りしめられていた。

銘をライティオス　。二振りの異なったレギンレイヴは、共に
グローシアン専用に改良された、魔剣　魔弓の類である。そ

んなとんでもないリングウエポンを二つも同時に具現化させる精神力。

ジキル達は 自分達の知る炎の魔剣を持つ同族を思い起こし、冷や汗を頬に浮かべる。

「へ…！ こりゃ、やべえかもな」

「…やれやれ、ツイてないね。全く」

ジキル、バールがボロボロの体に鞭を打って前に出ようとするのを、ホープが止めた。

「けが人は、引っ込んでいたまえ。ここからは 私の独壇場だ」

ホープの言葉に、嘲笑を浮かべて ドレイクが睨みつける。

「ほう？ このドレイクに、一人で挑むと言うのか？ 紛い物」

力の強さが全てではない。闘い方というのがあるのだよ。ソレに 君には教授しなければならぬな」

ホープのその言葉に 興味を示したか、目をやる。

「雷光とは、スタイリッシュなモノ。力任せに出しっぱなしと いうのは、私の美学に反する」

「下らんコトを。ならば、その美学とやらで、この俺を止めて みる」

「無論。そのつもりだよ」

互いに述べ合うと、剣を構え合う。一瞬後、両者 縮地法にて 姿を消し、一気に斬り合う。ホープの的確な針の糸を縫うかのような刺突に、ドレイクは余裕の笑みすら浮かべて左手の盾で防いでいく。

「どうした？ 大口を叩いて置いて この程度か？」

右手の剣を、同時に振り下ろしながら、問いかけるドレイク。その雷光の斬戟を、紙一重でホープは見切った。

ミリ単位の見切り。その見事なスウエーバック（上体を後方に反らし）に、ジキルが拳を握りしめる。

「ホープ…！」

「 剣の腕前は、凄えんだが 性格がね」

ボールが頬を掻きながら呟く。もう少し、もう少しで体が言う事を聞くほどには回復する。先のサンダーストームの威力は二人の異形を確実に追い詰めていた。だからこそ。ソレ以上の力を誇るであろう、この男に。ホープが負ける前に、攻めなければ。

縮地法がアドヴァンテージにならない以上、因子を多く使えるドレイクが身体的に圧倒的に有利である。ジキルのように補助魔法のクイック等の風系の魔法を習得していれば、スピードだけでも、対等に戦えるかもしれないが。

ドレイクの凄まじい斬戟。しかし、ホープは、その斬戟に目をつむること無く、的確に捌き突いて行く。ほんの少し、穴の様な安全地帯を冷静に見極めて、雷撃を、斬戟を凌いでいく。

「なるほど、捌くのは得意なようだ」

「力だけでは、美しくないと言う意味、理解していただけたかな？」

「フン」

ビュンツ　一旦ドレイクは間合いを切り、後方へ下がる。ホープはソレを追おうとはせず、静かに見据える。一方のドレイクは不快気だった。

「力無き弱者の分際で　このドレイクを阻むというのか？　クズが！！」

更に身に纏う光を強める。力を高めて行く。

「小手先の技術等　圧倒的な力の前では、無力である事を知るがいい！！」

「やはり、君とは気が合わないようだな。力だけが　全てなど、美しさからはかけ離れた俗世の論理だ」

あきれ果てたと言わんばかりのホープに、ドレイクが吼える。

「ならば、俗物の貴様には、似合いの最期だな！！　俗世の論理に敗れるのだから」

静かに構え直すホープの両脇に、ジキルとボールが並び立った。

「！　怪我はもういいのか？　凡人ども」

ホープが存外不服そうに、二人の青年を見る。

「へ、オマエだけに格好つけさせるわけにや、いかねえ……!!」
ジキルが満面の笑みで、ボールが肩をすくめてみせて応えた。ソレに　ホープは気障に笑うとドレイクを見据え、告げる。

「では、美しく舞おうか」

そんな三人のゲヴェルを見据え、ドレイクは凄絶に笑った。

「……雑魚どもが……!!」

全身にオーラを纏うと、ドレイクは一気に間合いを詰めて来た。凄まじい突進力である。ズゴオウアツ　ソレと同時に右手の刀を横薙ぎに払う。

狙われたのは、アルバとの闘いで一番負傷した、ジキルだった。

「上等だぜ!!」

ガキイツ　両手の小太刀二刀の十字斬でジキルは交差後方に斬り返した。二人の影が摺れ違い、同時に制止する。

しばらくして、ス……ッ　とドレイクの服の裾が斬られた。

「雑魚の分際で　吼えるか」

そう述べると同時、ジキルの胸が深く切り裂かれていた。

「ゲウ……!!」

うずくまり、出血する胸を押さえる。その様を見ていたボール、ホープの瞳が鋭く細まった。

「　悪いが、今のでアンタを殺したくなったよ」

低い声で、そう告げるボールにドレイクが笑う。

「犬同士が　慣れ合うか？　無様な……!!」

「他者を、大切に思うことの何が無様なのかね？　ソレを理解できぬ君の考えの方が唾棄すべき感性だと　私は思うが？」

ホープが鋭い声で、告げると更にドレイクの口の端がつり上がる。
。その瞳に殺意を灯して　。

「吼えるわ　。雑魚ども……!!」

ビュンツ　二人の異形と一人の強化兵は、同時に縮地法で姿を消

す。宙に蒼い斬線が奔り、紅い火花がそこかしこで散らばっている。

「コレが、ゲヴェルとの融合体の力…?」

赤髪の美女ミスト・アルファードは、目の前で起こる圧倒的な戦いに、目を丸くする。

「そつだ よく見ておけミスト。お前達の国を取り戻す我が王の力を」

「は、はい！ アルバ・ザード様…!」

アルバの言葉に背筋を伸ばして答え、ミストは三者の闘いを見据える。圧倒的な身体能力で魅せる ゲヴェル達を。

ズザアツ 地面に足を擦りつけながら、長巻を握りしめてバールは舌打った。

「…チ！ ジキルみたいに風系の魔法を覚えとくんだったぜ！

折角の縮地法も、自分より上の身体能力の使い手が相手じゃ意味ねえ…!!」

「スピード、パワー。どれを取っても、私達を上回っているからな。しかし、力の優劣で勝敗は決まらんよ」

ハイスピードの攻防を演じながら、毒づくバールにホープは戒めとも言える言葉を告げる。そんな二人の異形の会話を聞いて、またしてもドレイクが嗤った。

「フン…中途半端な力を持つ者は、早死にすることを 貴様等の身を持って知るがいい!!」

「…何度も言わせるな。力ある者が強いのではない」

ホープが静かに だが、揺らがない意志をその瞳に宿して、告げる。

「力なくとも、意志を貫けるモノが 強いのだ」

ガアアアツ 力強い言葉と同時に、雷を纏った魔剣と鋭い細刀が中

央でぶつかり合う。

「…ッ!!」

「フン …!!」

罅迫り合いの姿勢のまま、互いに因子を高めあい、刃を相手側に押し付けようとしあう。両者の白銀のオーラが螺旋となって天へと昇る。しかし、力比べは 一瞬で終わった。

「 雑魚が!!」

「…!!」

ギインツ 凄まじい剣弾にホープが後方へ弾き飛ばされる。森の中へと突っ込むホープにドレイクは左手の魔弓を構えた。

「 させるか!!」

バールが長巻を横薙ぎに払う。強烈な遠心力を伴っての一閃。ガアアアッ 辺りに響く炸裂音。しかし、その一撃は右手の魔剣で軽々と止められていた。

「 な!?!」

「何を驚く? 因子を全開に出来ぬ貴様如きに俺を吹き飛ばすほどの力があると思ったのか? それとも」

ジャキイツ 魔剣を縦に構えた状態から滑らせ、長巻を巻き込んで下に押さえつける。

「アルバに通じたからと言って、このドレイクに通じると思ったか? 考えが浅いわ!!」

ズドオウツ 構えた左手の魔弓に蒼い光を纏わせる。それは物理系中級魔法のブラストを纏わせた ダイナルーヴでの一撃。

蒼い光の矢は槍へと変化し、森の中に炸裂した。

「…!! ホープ!!」

「 他者を気遣う余裕があるのか?」

バールがホープに気を取られたと同時に、ドレイクの右手の魔剣に蒼い光が生じる。ソレは元々あった雷と一つとなり、強烈な光を放っていた。ドレイクは その光の剣を横薙ぎに斬りつける。

「…ッ!!」

紙一重で斬閃を避けたボールだが、光の斬戟は一瞬後　炎の壁と成って彼に迫っていた。　。全周囲攻撃　である。

「しま　!!!」

ズドオオアアツ　青白い炎の壁はボールを、青白い光の槍はホープをソレゾレ弾き飛ばし…、

「　クソっ」

立ち上がるうとしたジキルの目の前に縮地法で現れるとギインツ左手のダイナルーヴで一閃。弾き飛ばす。こうして三人のゲヴェルを一か所に、ドレイクは纏めると凄絶に嗤った。

「消え失せる、人形ども!!!」

右手のライティオスにソウルフォースを、左手のダイナルーヴにブラストを纏わせると　、まず右手の魔剣を横薙ぎに払ってソールストライクを放ち、そのままの勢いで左手の魔弓を嵌めた籠手で拳を突き出す。

放たれたソウルストライクは、正しくデュアル魔法剣。

「ソウルストライクの魔法剣!?!」

「しかも、デュアルかよ!!!」

ジキル、ボールが驚愕の表情で放たれた蒼い強烈な光を見据える。

「　スプラッシュ・ソウルストライク!!!」

ズドウアツ　凄まじい光の暴力が全てを飲み込んでいく。三人の青年はソレでも退かない。　。光に向かって吼えつける。

「力を上回る絆　見せよう!!!」

「へ、ホープ!!!　言ってくるじゃねえか!!!」

「タイミングを合わせて、押し返すぜ!!!　二人とも!!!」

ホープの言葉に、ジキルとボールがソレゾレ得物を構える。因子を気力で引き出し、ソレゾレが最強の魔法剣を放つ。

「ライジング・ブラスター!!!」

雷を放ちながら、青い鞭が唸りを受け

「ソニック・ブリッド!!!」

トルネードのジャイロ回転を加え、貫通力を底上げた光の矢が

空を穿ち

「行くぜ……!!」

バールの長巻が頭上で風車の如く回転され、斜め下から斬り上げる。フレアとトルネードのデュアル魔法剣。

ソレは シーティアのレッドトルネードの上位互換魔法。

「フレア・テンペスト!!」

三つのデュアル魔法剣が一つになり、ドレイクの魔法剣と激突した。ズゴオウアツ 圧倒的な光と光のぶつかり合い。

「又ウ……!!」

アルバがミストを庇いながら、唸る。ソレほどの力がぶつかり合っていた。ミストはアルバの腕の中で 自分達を導き、ボルギナ公国を再建する若き王の姿を見ていた。

ズドオウアツ やがて二つの光線は中央から爆発し、全てを飲み込んで行った。土煙が晴れた時、現れた4人の影。

「ば、化け物かよ……!!」

「完全に 相殺したってのか。俺達の渾身の魔法剣を」

ジキル、バールがその事実には 驚愕して立ち尽くし、ホープは静かに自分達相手に たった一人で打ち勝った魔剣士を見据える。

三人とも 既に、魔力も体力も底を付き、剣を握る力さえ

残っていない。その前で 悠然とドレイクは服一つ乱すこと無く立っていた。

その様を確認し、その余りの強さに陶醉した表情のミストに、アルバは力強く頷く。

「コレが、王の力だ。奴はゲヴェルでもあり、グローシアンでもある。ただのグローシアンではない……。グローシアン最後の王の血を引く者。ソレが、ドレイクだ!!」

「……素晴らしい、これほどとは……!!」

彼ならば、我が祖国を取り返す事など造作もないだろう。

異形の騎士三人を相手にこれほどまで、圧倒的に打ち勝った。彼ならば。

ミストはこの時、確信した。自分達の国は、この男によって取り返されるだろうと。

静かに 睨み据えるホープとは対照的に、ジキルは肩で息をしながらも、ドレイクを睨み据える。

「まだ 俺達は、負けてねえ……!!」

「ほう？ まだ、そんな気力が残っていたのか？ 大したものだ」

「 るせえ!!」

逆手に小太刀二刀を握り、縮地法で斬りかかるジキルに、ドレイクは邪悪に嗤う。

「 バカめ!!」

同時に縮地法で駆ける。あちこちで土がせり上がり、剣がぶつかり合う。しかし、ソレも長くは続かない。ズドオツ 強烈な一閃に、後方へ弾き飛ばされるジキル。

「 ジキル!!」

バールが立ち上がるうとし、ホープが細刀を構えようとするが、それよりも早く、ドレイクがジキルに斬りかかった。

「 死ねイ!!」

「 しま …!!」

ジキルが剣を構えるよりも早く、強烈な斬閃が振り下ろされる。彼等に、交わす術は無い。

ギインツ しかし その刃はジキルに届くことはなかった。
「 な!？」

目を見開いたジキルの前に 紅いジャケットを羽織った自分達と同じ顔をした青年が、ドレイクの剣をいとも簡単に退けていたの

だ。

「！ また一人 雑魚が増えたか」

「アンタ…！！」

ジキルはキョトンとして、こちらを見向きもしない 青年を見上げる。

パールがその目を見開いて、突如現れた青年を見据える。自分達と同じ顔をした、彼は 　しかし、どこか自分たちとは違う。

「あのドレイクって奴の斬戟を、ああも簡単に打ち返すなんてホープは静かに、その瞳を細める。」

「なるほど、彼が 全てのゲヴェルを救う者、か。ラルフに良く似ている」

しかし その一言は、余りに小さすぎて、誰かに聞きとられることは無かった。

ドレイクの方を冷静に見据える青年に、ジキルは茫然とした表情のまま呟いた。

「同族、か？ シュワルゼ いや、ラルフに似てる…！！」

その言葉を自覚せぬまま呟き、質問を投げかけた。

「味方なのか、アンタ ！」

すると青年は初めて、こちらに向き直り 声をかけてきた。冷静な声音で。

「…アイツ等を知っているのか？」

「ああ。アンタ ！」

何かを問いかけようとするよりも早く、青年はジキルを助け起した。そのまま、彼等三人を庇うかのようにドレイクの前に立ち、正面に見据える。

「…貴様。他の奴等とは雰囲気が違う…！　ただ者では無さそうだな」

「別に。普通だ」

ドレイクの言葉に、青年はクールに応え　自分の腰に挿してある絶刀を鞘から抜こうと手をかけた　。　と同時、小さな影が青年の顔めがけ、急接近してきたのだ　。

「ちょ　」

青年が焦った声を上げると同時、ドゴオウ　という鈍い音と共に、声が響き渡る。

「ティピちゃん、キックー！！」

青年の横顔が思い切り歪み、その場にうずくまってしまふ　。　ソレほどの威力だった　。　放ったのは掌サイズの淡いピンク髪の本ムンクルス。

「一人で行くな　　って言ってんでしようが、カーマイン！！」

「ティピ」

蹲りながら、うめくように応えるカーマイン。ドレイクの剣を弾き返すほどの使い手である彼が　アツサリと蹴られた事实に、ジキル達三人はキョトンとしてしまふ。

「カレンさんも何か言っちゃってよ！！　デュランも！！」

ティピはまだ苛立ちが治まらないのか、自分と一緒に来ていた看護師見習いの女性と、カーマインと同じ顔の紅い軍服を着た剣士に意見を向ける。

「ティピちゃんの言う通りですよ、カーマインさん！！」

美しい顔に眦をつり上げて、人差し指を指し示し、「めっ」とばかりに叱ってくるカレン。ティピとカレンに責められ、蹲るカーマインにデュランは静かに告げた。

「これ以上…何を、言えと？」

「なあ？」

カーマインもようやく味方を得られた事に、満足したのか、立ち上がる。

「つつか、もう少し　周りの状況とか、空気とか読もうぜ。二人とも」

少々　フラつき気味なのは、仕方が無いとして、精一杯の抗議をしてみるのだが　、綺麗なお姉さんと可愛い妖精に、同時に凄いい顔で睨まれてしまう。

「　　すいませんでした」

そう、応えるしかないカーマインであった。その殊勝な態度に、ようやくティピが

「ウンウン、分かればいいのよ」

とにんまりと笑いかけ　カレンが優しい笑顔で告げた。

「はい　。良いお返事です」

そんな二人に何か　釈然としないカーマインであった　。

40・グローシアンの王子（後書き）

次回、カーマインが活躍します。ご期待下さい。

ボルギナ公国軍はグローランサー？のキャラを基にしています。

ミストIIアレスタで、

ドレイクは立場上、ヴィットーリオですが、性格・生い立ちを変えています。

41・『最強』の魔法剣(前書き)

カーマインの戦闘力、戦い方が この辺りから完成されていきます。

41. 『最強』の魔法剣

カーマインは一つ、咳き払うと 腰の刀レギンレイヴの鞘に左手をかけ、鯉口を切って、こちらを値踏みするように見ている相手

ドレイクに向き直った。

「 永らく、待たせたな」

ドレイクは嘲笑を浮かべて応える。

「 大した余裕だな 。 このドレイクを前にして、ただの阿呆で無い事を期待するぞ」

「 試してみるよ」

不敵に笑い、抜刀術の構えを取るカーマイン。対するドレイクは、右手の魔剣を強く握りしめた 。

「 いいだろう ！！」

一瞬の静寂 。 圧倒的な緊張感が、迷いの森に充満して行く 。

誰もが、二人の剣士の動きを逃すまいと、目を見開く。先に仕掛けたのは、ドレイクだった 。

「 ゆくぞ ！！！」

ドオンツ 凄まじいダツシュと共に斬りかかるドレイク。対するカーマインはすぐさま、縮地法からの抜刀術で切り返す。

ズバアツ 両者の影が交差し、互いに立ち止まり 振り返る。

「 …なるほど…！」

パツ とドレイクの肩の部分から血が噴き出る。同時にカーマインの肩からも血が流れていた。

カーマインは静かに肩に目をやると視線をドレイクに戻し、腰だめに構える。

「 ウオオオオオオオオッ ！！！」

異形の咆哮と共に 白銀の鬼の影がカーマインの背に現れ、消

えると同時に、彼の体を白銀の炎が纏う。その瞳は金と銀の間に彩られ、凄まじい鬼気が発せられる。

その姿 正に白銀の異形。その光の異形を正面に見据え、自らも白銀の光と黄金の翼を背にして、ドレイクは邪悪に嗤う。

「面白い……!!」

カーマインはソレに、口の端を不敵につり上げ、言い放った。

「いくぞ」

両者同時に、地を蹴り 消えた。ガオンツ 絶刀と魔剣が中央で激突。互いに右手一本で刀と、剣を振り回している。

ギインギンツ 片手一本での剣の腕は互角。元来の剣術とは違い、片手剣術は腕力とスピード、テクニックが必要な闘い方である。両手構えとの決定的な違いは、バランスの難しさ、片手の為、防御が困難、威力が軽い等のデメリットがある。

しかし メリットとしては、両手で剣を持つよりも腕を伸ばせるため、リーチが長くなり、攻撃範囲が広がり 使いこなせば、素早い打ち込みが可能となる。

「剣術は互角。ならば!!」

ズドオウ ドレイクの左手にある魔弓から、ブラストを込めた矢弾が放たれた。咄嗟に左に身を躲し、避けるカーマイン。と同時に、彼の左手に蒼い光の魔力弾が生まれていた。

「お返した」

ズドオツ 身を翻しカーマインも光の矢弾で反撃、一気に4、5発の矢を放つ。

「フン、グローションに魔力で挑むとは。身の程を知れ!!」
ズドドドオウツ しかし、その光の矢はドレイクの放つ魔弓からのブラストにより、軽々と射抜かれる 否、カーマインのマジックアローを的にして、敢えて射抜いてきたのだ。

「チツ」

舌打ちと同時に、右手の刀で二本、弾き落とす。と同時に、身を翻し 残りの魔力弾をミリ単位で見切って すり抜けた。素晴

らしい剣術と体術に　しかし、ドレイクは勝ち誇った笑みを浮かべる。

「接近戦は互角　。だが、魔力弾に差が有り過ぎる。遠距離の差を、どう埋めるのだ？」

「……フン」

対するカーマインはニヤリと不敵に笑むと、静かに右手の刀を水平に構え、魔力を集中し始める。

「……何！？」

ドレイクが目を見開くと同時に、カーマインの刀が青白い光を放ち始める。咄嗟にドレイクは、ダイナルーヴを構え、魔力弾を放つ。数は　4発。

同時　カーマインが刀を大きく振りかぶり、右手一本での袈裟がけを　ドレイクに放った。

「ソウルストライク　！」

ズドオアツ　一人を軽々と飲み込むほどの強大な魔力の光線。バシバシバシツ　カーマインの魔法剣は、ドレイクの放った魔力弾を悉く弾いて消し飛ばし、次の一瞬でドレイクまでも飲み込んだ。

「　よっしゃあ！　ラルフ相手に放ったソウルフォースの魔法剣だああ！！」

ティピが拳を握りしめ、言い放つと同時に、森の中　強大な爆発が起こり、土煙が生じる　。

その様を、呆然とジキル達が見据えていた。

「ま、マジかよ……！　とんでもねえ、威力だぞ」

「最強魔法　ソウルフォースの魔法剣。あの兄さんも使えんのかよ……！」

ジキル、バール共に目を丸くして、自分達と同じ顔の青年　カーマインを見据える。

当のカーマインは、喜ぶでもなくただジツと目の前の土煙を見ている。一瞬後、ズドシューツ 三本の光の槍が煙の向こうから現れ、カーマインに迫る。

しかし ギギギインツ カーマインは右手の刀を横薙ぎ、唐竹、真下からの切り上げ の三つの斬戟で苦も無く弾き落としてしまふ。

「ば、バカな…！ 光の矢弾に 何故、対応できる!？」

ミストが驚愕の表情で 、光速の矢弾を見切ったカーマインを見据え、アルバは静かに 黙考する。

(アレが ゲヴェル、か)

見ると同時に反応することができると言う人を遥かに凌駕する種族 。だが、光を見切ったと言う事は、光のスピードを見極めたと言う事に他ならない 。アルバは、思う。

(光を見切る事は、物理的に不可能 。とすれば、この男 予測したと言うのか？ ドレイクが煙の向こうから攻撃を仕掛けて来るのを？ まるで 人間の剣士の様に)

人を遥かに凌駕する身体能力を持つ彼等 ゲヴェルの穴は、予測をしない事に有る。高い身体能力に任せて、攻撃を仕掛けてくれれば 歴戦の経験を積んだモノならば幾らでも攻め入る機会はあると言うモノだ 。

だが、この青年にはソレが通じない。

「どれほどの 死闘を繰り返したのか知らぬが、この男。 本物だな」

そう言い、アルバは瞳を細め、ドレイクと対峙するカーマインを睨みつけた。

次々と放たれる矢弾を全て叩き落としたカーマイン。その目の前に、ドレイクは縮地法で駆けていた。

「クズが 、死ね!!！」

「フン」

罵りながら横薙ぎを放つドレイクに、カーマインも口の端を吊りあげさせ 斬り返す。ズバアツ 互いに剣を 刀を振り切った姿勢で摺れ違ふ。着地後、今度は立ち止まらず ドレイクは両手で剣の柄を握り、斬りかかる。カーマインも刀を握りしめ、縮地法で高速移動しながら斬り返していく。

高速で斬戟を放つ二人の實力は 伯仲していた。

「ドレイクと互角、とはな…！」

アルバが更に深刻な表情で、この戦いを見据える。

（これほどの剣士を、ゲヴェルは生成できるというのか？ ドレイクと互角に斬り合う程の 剣士を！）

「アルバ様…！」

そのアルバの表情を窺い、ミストは胸のあたりで拳を握りしめ、剣を交えるドレイクを見据える。自分如き、人間では立ち入ることできない 圧倒的な闘いを。

「やっちゃえ、カーマイン！」

ティピが吼えたくり、握り拳を天に突き上げる。その横で、カレンは心配そうに眉根を寄せて、両手を胸の辺りで組み 祈るように、カーマインを見据える。

「カーマインさん」

周りの声など、当の二人には聞こえていない。それでも、彼女は祈っていた。カーマインが無事であるように。

ドレイクが距離を開いて魔弓を放とうとすれば、カーマインがしつこく詰め寄ってくる。追いかけて来るカーマインを斬戟で押し返すしか、距離を取る事が出来ないと悟ったドレイクは カーマインの連撃に受けて立つ。

「クズが…！ どこまで俺に食い下がる…！」

忌々しげに吼えるドレイク。対するカーマインは鬼気を発する瞳で 低く、静かに応える。

「 無論、貴様を倒すまでだ」

「ほざけえ!!!」

更にドレイクの剣速が上がる。カーマインも鋭い斬戟を返していく。互いに後続の斬戟を放ちあいながら、隙を見つけようとする両者。

ズバアツ ついに拮抗が敗れる。カーマインの放った唐竹の一閃が空を切った。斬られたのは ドレイクの影。高速移動で背後を取ったドレイクは左拳を振りかぶった。

「遅いぞ、クズ!!!」

ドゴオツ 左手に嵌められたダイナルヴごしにカーマインを殴り飛ばすドレイク。吹き飛ばされたカーマインは咄嗟に身を翻し、レギンレイヴで受けて直撃は避けていた。

しかし 距離は開いた。ドレイクはここぞとばかりに魔力で出来た黄金の翼を生じさせ 一気に魔法の威力を倍加させる。グローシアンの中でも王族にのみ使う事が許された文様の翼を広げて。

「消え失せる、スプラッシュブラスト!!!」

ドレイクの放つ光の槍は無数にその穂先を増やし、威力もけた違いに上がっている。

ズザアツ 未だ宙にいたカーマインは何とか地面に足を擦りつけて制止し、目の前に迫る無数の光の矢弾を、俊足を利用した左右の足一本でのサイドステップで網の目を縫うように捌いて行く。だが

「!!!」

「破あ !!!」

ドレイクが縮地法でサイドステップで避けるカーマインの目の前に現れ、カーマインに右手の剣を振り下ろしてきた。

刀を咄嗟に縦に構えて止めようとするカーマイン。だが、突進の威力を利用し且つきりもみに旋回しながらのドレイクの一閃は、苦も

なくカーマインを後方へ弾き飛ばした。
ズドオツ　カーマインは背中から地面に叩きつけられ、土煙を巻き上げる。

「!!!　カーマイン!!!」

余りの威力とスピードの一閃にティピが思わず悲鳴を上げる。隣のカレンも顔を真っ青に青ざめさせた。

「ああ!!!　カーマインさん!!!」

更に追い打ちとばかりの魔弓での矢弾が、無数に土煙の中に叩きこまれる。その様をアルバがニヤリと満足そうに笑って見据えた。

「流石は…我が王」

「コレが…私達の王。…ドレイク様」

ミストは、その余りの強さに瞳が潤み、頬を赤らめさせてドレイクを見据える。

「……」

ドレイクは静かに、煙を睨み据えていた。やがてその煙の向こうに一つの人影が無造作に現れる。

「……!」

ドレイクが瞳を鋭く細める。と同時に、ズオウツ　白銀の炎が煙を真ん中から断ち割り、吹き飛ばしてカーマインがこちらに向かってゆっくりと歩いてきていた。

その姿を見て　ドレイクは笑う。

「防いだか　大した腕だ」

異形の青年は　無傷だった。その強さをドレイクはようやくく認めめた。だからこそ

ドレイクは腰を落とし、更に集中力を高めていく。

対するカーマインはニヤリと不敵に笑い、その金と銀の鬼眼でドレイクを睨み据える。

「クズ一つ片づけられん男が　何様だ？」

「…ほざいたな」

挑発に更に気を高めるドレイク。対峙するカーマインは、右手の刀を左手に持ち替え、斜に構えて腰を落とす。　同時

ドドオンツ　凄まじい爆音と共に両者、縮地法で駆け　斬り合う。互いの全力のスピードは周りの木々を思い切りなぎ倒し、地面をせり上げ、吹き飛ばして行く。

互いの斬閃が宙を奔り、地面を　岩壁を、木々を容赦なく、自然の景色を切り裂いて行く。　ものすごいパワーとスピードのぶつかり合い。

両者、魔法を全く使わずに己の剣　刀と体で闘う。やがて…血が舞いあがった。ズババアツ

「チイツ」

斬られたのは　ドレイク。カーマインの神速の十字斬が、ドレイクを下がらせ、体勢を崩させた。

その様を見据え、ミストが声を張り上げる。

「ドレイク様…！！」

ドレイクは舌打ちと同時に、左手の魔弓ダイナルーヴを構え、三本の光の矢弾を放つ。ズドオウ　同時に放たれた三つの光の矢弾は　しかし、高速でジグザグに移動するカーマインを捉えきれない。

「ク…！！」

目を見開き、右手の魔剣ライティオスで懐に飛び込んでくるカーマインを斬ろうと振り下ろす。　が、それよりも早くカーマインのレギンレイヴが一閃され、ドレイクの一撃は弾き落とされる。　いや、ソレで終わりではない。

よく見れば　カーマインは両手で刀の柄を握りしめていたのだ。

同時、ティピが拳を握って叫んだ。

「ボコボコにしちゃえ〜!!」

ドレイクの瞳には、これまでとは比べ物にならない程ハッキリとした網の目の様に奔る、無数の蒼い斬戟が映っていた。

「何だと…!?!」

「一気に決める」

カーマインが一陣の風と化し、縮地法で交差後方にドレイクを通り過ぎ、すれ違いざまに斬りつけて行った。ズババアツ

「グハアツ」

一瞬後、ドレイクの体を無数の斬戟が襲い、竜巻にあつたかのように弾き飛ばされ、ズドオツ、地面に叩きつけられて、土煙を生じさせた。

その斬戟の威力と剣速は、片手の時と比べるべくもなかった。

「イヤツタア!!」

ティピが満面の笑みで快活に、カレンがホツと息を吐いて凄まじい斬戟戦を制したカーマインを穏やかに見る。

「バカな…! ドレイクを正面から力でねじ伏せたと言うのか?

あの凄まじい斬戟を…!?!」

「ドレイク様…!!」

アルバが唸り、ミストが悲鳴を上げる中、カーマインは静かに倒れ伏したドレイクを睨み据える。

やがて、ドレイクはゆっくりと立ち上がってきた。

「ククク…やってくれる。だが、貴様の剣の正体、見えたぞ」

ドレイクという言葉にカーマインは特に反応を返さない。ジツと鬼眼でドレイクを睨み据えるだけだ。一瞬後、ドレイクの体を無数の衝撃が襲い、体中にある服だけを斬った不思議な斬戟痕から覗く肉の部分が、溝の形を作ってへこませた。

「グハアッ」

血を吐き、ドレイクの体を支える両の足が揺れる。　だが、彼は怯むことなく、話しかけた。

「貴様の刀　そして剣術。シーティアのソレに似ている」

「…貴様、何故シーティアを知っている？」

カーマインは訝しげに瞳を細め、ドレイクに問いかけるも　ドレイクはニヤリと笑い、魔剣を軽く宙で払って構える。

「どうやら、奴もこの時代に蘇っているようだな…！」

カーマインは今一度、問いかけた。

「…貴様は、シーティアの何だ？」

その問いに　ドレイクは口の端を大きく裂くように嗤って見せた。

「シーティアは　俺の異母姉だ。　紛い物…！」

「…ッ…！」

ビュンツ　宣言と同時に一気に斬りかかってくるドレイク。対するカーマインは予測していたのか、すぐさま斬り返していく。足を止めての高速斬戟の打ち合い。両者、とてつもない威力の斬戟を無数に繰り出し合い、宙で火花を散らしていく。

ギギギイン…ガガガアンツ　金属音が炸裂音に変わっていく。　やがて

「グウ…！！！」

ズザアッ　ドレイクが撃ち負け　後方に下がらされる。だが、その空いた距離は　魔法剣の距離だった。

「　バカめ…！」

凄絶に笑み、ドレイクはジキル達を戦闘不能にしたデュアル魔法剣の体勢を取っている。

「…やべえ…！」

ジキルがソレに気づき、ティピが警告の様な鋭い声を上げる。
「カーマイン…！」

カーマインは静かに 両手で持つ刀を水平に構え、刀へと魔力を集中させて行く。やがて絶刀レギンレイヴは蒼い光を放ち始めた。

「スプラッシュ」

「終わりにしてやろう」

カーマインは脇構えの体勢から一気に 左手一本の袈裟がけを放つ。と同時に、ドレイクは右手の魔剣を横薙ぎに払った。両者の剣閃から圧倒的な青白い光線が放たれる。ズドオウツ 両者の光が中央で激突し、周囲の物を吹き飛ばして行く。カーマインの魔法剣は、先の右手で放ったものより二回りは強力だった。

人一人を軽く飲み込むほどに強大な光が二つ。互いに押し合いをしている。

「又ウ…！」

呻くドレイクの後方の地面に亀裂が走っていく。

ドレイクが押されている！？

その事実は、ゲヴェルの青年達にとっても驚愕すべき事態だった。

「…冗談だろ？ アイツの魔力は ドレイクを、グローシアンを上回るってのか？」

ジキルが驚愕し。バールが眉間にしわを寄せ

「魔力もそうだが、剣閃の威力も ドレイクを凌駕している…！」

あの兄さん、左利きか ……！」

最後にホープが気障に笑った。

「あの強さ。なるほど、全てを超越している」

淡々と告げたしかし、その言葉は ジキル達を呆然とさせるには十分なカーマインの実力を明言していた。

「だが」

バールの言葉

その言葉を　アルバが継いだ。

「我が王はまだ、左の魔弓を抜いておらん　！」

「ソウルストライク　！！」

ズドオウツ　横薙ぎに払ったドレイクはその勢いのまま　左拳を正面に突き出し、魔弓を　放つ。

「　！！」

一気に魔力が倍加され、ドレイクの光線がカーマインのソレを上回り　光を押し返していく。

「カーマイン！！」

「カーマインさん！！」

押され始めたカーマインを見据え、ティピが眦をつり上げ、カレンが悲鳴を上げる　。

「我が王を相手に、よく闘ったものだ…！！」

「ドレイク様の　勝ちだ！！」

アルバとミスト　二人の兵士は、自身の王の勝利を確信する。

そんな二人の言葉に　ティピは強く、強く　言い返す。

「まだよ…！　アイツが　カーマインが、あんな奴に負けるもんか…！！」

その強い言葉に　純白の想いに　、カーマインと同じ顔の

ローランディア近衛騎士の制服を着た青年　デュランが頷いた。

「そつだな　。不思議だが、アイツは必ず打ち勝つ　。そんな気がする」

自身の言葉にもう一度、デュランは頷いた。

「カーマインが、奴より弱いとは　俺にはどうしても思えん」

「　デュランさん…！！」

その言葉に、カレンは瞳を丸くしてデュランを見た。　　これま

で、何の感情も見せなかったデュランが今　カーマインを信じて、言ったのだ。

ティピがソレにニツと笑い、力強くカーマインに宣言する。

「あつたり前よ!!」

ティピの啖呵に　ドレイクが凄絶に笑って　カーマインを見据える。

「　ならば、見せてもらおう　！　カーマインとやら!!」

ドレイクの背に　またしてもグローシアンの翼が生じ、魔力が一気に跳ね上がる　。その威力は　この遺跡一帯を跡形も無く消し飛ばしてしまう程　。

カーマインのソウルストライクが小さく見える程の光　。ドレイクは勝ち誇る。

「圧倒的な力の差に絶望したか？　さあ　死ぬがいい!!」

そのドレイクの言葉を　魔法剣を受けて、尚　カーマインは「　フン」

不敵に笑った　。そして　静かに、瞳を閉じ　意識を集中させて行く。真綿に染みらせるように　静かに。

(観念したか　!?)

その姿を　ドレイクは、そのように判断した。無理も無い　。目の前に圧倒的な、どう足掻いても打ち勝つことのできない魔力が迫っているのだから　。しかし　カーマインの意識は、既に　そんなことを気にしてはいなかった。彼はただ瞳を閉じて思う。思い描く　、今まで自分が戦った強敵達を。

闘技大会でのニツク、ゼノス、シーティア、ジュリアン。自分と同族のラルフ、ルーチエ、デュラン　そして。

不遜な笑みを浮かべ、悉く自分を跳ね返す　最強の異形　シ

ユワルゼ。

「何だと…!!」

カーマインの全身に漲る白銀の炎が、より一層強い光を放ちだし、彼の背に一瞬 異形の影が現れる。その力 そのゲヴェル因子はドレイクをして

(冷や汗、だと…!?!? この、俺が…? このグロウヴィル・ドレイク・ヴェンツェルが恐れているというのか…!!)

その事を自覚した時、ドレイクは睨み殺さんばかりに カーマインを見据える。

「キ…サ…マ… ああああ!!」

カーマインは凄まじいばかりの鬼気を 黄金と蒼銀の闇に彩られた瞳を ドレイクに据える。ドレイクの怯えすらも 見透かすように。

カーマインは静かに 刀の柄に右手を添える。正眼に構え更に、刀に右手の分の魔力を注ぐ。圧倒的な光が 一気に膨れ上がる。そして 今度は八双に刀を構えると、大きく振りかぶり、今一度 袈裟がけを放った。両手持ちでの、一閃を。

「吹き飛べ、デュアルソウルストライク!!」

一気に 押し返される光。その事実には ドレイクは大きく眼を見開く。グロウシアンだの、ゲヴェルだのを超越した 圧倒的な力 凄絶な光を見据えて。

「バカな…!! ソウルストライクのデュアル魔法剣だ…?」

ソレは 余りに強力な魔法剣。膨大な魔力と超一流の剣閃を兼ね備えて放つ最強の魔法剣。だが例え、放てたとしても 体がまらず保つハズが無い。ソウルストライクの反動は 術者に多大な負担を強い、ソレの二段重ねとなれば 確実に、体を壊す。

たとえ ゲヴェルでも、だ。なのに カーマインは、放つた。まるでムリなく 自然に放って見せた。ソレは 間違いなく、この魔法剣を使いこなしている証。

「何故　貴様如き、紛い物に　こんな、こんなバカげたことが……!!」
ズドウアツ　理不尽そのモノと言える光が　力が、ドレイクの放った光をアツサリと飲み込み　ドレイク自身も飲み込んで行った。

「グアアアアアッ!!」
ドレイクが放つ絶叫が光の中に消えて行く。そして、大爆発が生じ　迷いの森全体を照らすほどの圧倒的な光の柱が天を衝いた。

光の柱は　空にいくつかあった白い雲をふっ飛ばしてしまった。
。その余りの威力に　誰もが、開いた口が閉じられない。

「す、凄え……!!」
ジキルが

「こ…こんな魔力を練られるモンなのか…!!」
ボールが子供ののように眼を丸くし　、自身と同じ容姿の青年を夢でも見ているかのように　見る。

光の柱が治まり　土煙が巻き起こる中。

「　終わりだ」

カーマインは静かに告げると、レギンレイヴの剣先を下ろし、瞳を閉じて自身の体に漲る白銀の炎を納める。次に瞳を開けた時彼の金と銀の瞳には、人々を魅了する輝きが戻っていた。

「お…おのれ…!!」
立ち上る土煙の向こうから　ドレイクが姿を現した。ダイナルーヴとライティオス、グローシアンの翼と言う三つの防御壁…。ソレほどの盾を　自分の持つすべての能力を盾に使ったと言うのに、彼の体は立っているのがやっとという程　痛めつけられていた。

既に　ゲヴェルの波動もグローシアンの翼も、消え失せている。
「一瞬とはいえ…、この俺に　恐怖を与えたな…!!」

誰の目にもドレイクはこれ以上の戦闘は無理であると分かった。カーマインは静かに刀を鞘に納刀し、右手に嵌めた黄金のリングへと戻す。

「ドレイク様！！」

ミストが今にも崩れ落ちそうなドレイクを脇から支える。

「邪魔だ、女　！　構えろ、カーマイン！！」

剣を構えようとするドレイクだが、腕が全く上がらない。

「　ッ！！」

その事を確認すると、ドレイクは一気に意識を手放しそうになる。ミストが脇に体を入れて両手をドレイクの胸に廻して抱きしめる。

「行けません、これ以上は　！！」

か細い女一人、払いのけられない今の体に　思わずドレイクは舌打ちする。

「我が王よ、ここは退くぞ」

そんなドレイクの前に　アルバが静かに立つ。そのアルバを霞む金と翡翠の目で睨み据え　ドレイクは言った。

「貴様も　俺に逆らうか。アル」

「何とでも言え。　今の状況では、勝てん」

にべも無く告げるアルバに　ドレイクは殊更、不快気に表情を歪める。その彼を心配そうにのぞきこむミスト。ドレイクの血に塗れながらも赤髪の美女は　その体を決してドレイクから離さない。そんな二人に諦めたのか　溜め息を一つ吐くとドレイクは、カーマインを今一度睨み据える。

「…カーマイン。…貴様は、必ずこの俺が殺す…！！」

鬼の形相で、ドレイクはカーマインを睨み据え　大きく宣言した。

「この　グロウヴィル・ドレイク・ヴェンツェルが！！」

そう言ってレポートで　ボルギナ兵ともども去っていく。

ソレを受け　カーマインは別段どうという反応もせず見送った。

「 女の腕に抱かれて言っても、今一決まらんな」

ポツリと、そんな感想を漏らす彼の肩にティピが飛んできた。

「ど〜んなモンだい!!!」

エヘン、と胸を張り ティピの勝利宣言が、迷いの森の遺跡・
入口に響き渡った。

41・『最強』の魔法剣（後書き）

次回、ラルフとジキル達の関係について。
ホープの語るラルフの過去を、ご期待下さい。

42 連鎖する怨嗟（前書き）

少々、長くなりました。楽しんでくださると幸いです。

42 連鎖する怨嗟

迷いの森の遺跡。その入り口付近にいたボルギナ兵は、ドレイクの敗走と共に気配を消していた。恐らくはこの場を去ったのだろう。ソレを感じ取るとカーマインは静かに刀を鞘に納め、改めて先の3人の青年に向き直った。すると

「すまねえ、助けられちまったな」

先ほど、カーマインが庇った同じ顔の青年の一人が、屈託のない笑顔で話しかけてきた。

「いや、俺の名はカーマイン。カーマイン・フォルスマイヤーだ。アンタ達は、ラルフの仲間か？」

カーマインは順に自分と同じ3人組の顔を見て行く。カーマインの名乗りを受け、初めに話しかけた屈託の無い笑顔の青年が返す。

「ラルフは、俺の　俺達のダチだよ！　俺、ジキル。ジキル・スカーレットってんだ！　よろしくな！！」

ジキルと言う青年は、カーマインのジャケットを黒くした無骨な革の上着を着て袖をめくり上げ、その下に青色のシャツを着ている。黒のレザーパンツはカーマインのソレとよく似た作りではあるが、靴が膝当ても兼ねた鉄骨のブーツと言うのは、動きやすさと頑丈さを取り入れた実戦的な代物だ。その両の肩には小太刀と呼ばれる刀より一節短い片刃の剣が対角線上に背負われている。

ジキルが名乗ったことでその横に立つ二人もカーマインに名乗り始めた。

「俺の名はバール・ハイド。ラルフの旦那以外に同族でこんな強い奴がいるとは、驚きだね」

バールと言う青年は飾り気の無い白い半袖のシャツに、茶色の長ズボン。手に黒色の革グローブを嵌めている。武器はデュランと同じ長刀だが、その鍔は小さく、その柄は刀の鞘と連結できるような作りであり、長巻としての機能も有している。

彼はソレを肩から対角線上に一振り背負っていた。

「私はホープ・ワグナー。先のグローシアン相手に見せた剣技、中々に美しかった。良い趣味をしているよ」

ホープと言う青年は白いシルクスーツの長ズボンに、胸元を大きく開いた緑のワイシャツを羽織り、黄金のネックレスをその白い胸元から光らせている。何処となく、先の二人よりも服装と己のスタイルにこだわりがありそうな服装である。

彼の持っていた指の太さ程度の細刀は、カーマインと同じようにリングへと形態を戻し、右手の中指に嵌められている。

そんなホープの発言に、カーマインの肩に座るティピが呆れた様な顔と声で告げた。

「趣味って」

隣のカレンはカーマインとデュランを見比べて、ジキル達を改めて見直した。

「カーマインさん達と同じ顔なのは、今更驚きませんけど。性格が全然違うんですね」

「……」

デュランは何も言わずにただ、カーマインの傍らからジキル達を窺っている。

カーマインは静かに、彼等に話しかけた。

「アンタ達に、聞きたい事がある。……少し、いいか？」

「俺達で答えられる事ならな」

ジキルの答えに、カーマインも頷く。こうして、彼らは話し合う。自分達の出生の事。遺跡に眠っていた支配階級のグローシアンの事を。

「なるほどな。つまり、アンタ達はグローシアンの遺跡に眠らされている生体兵器の存在を知り、彼等が再び世界を支配しようとするのを防ぎつつ、ゲヴェルの動向も探っている、ということか」

説明を受けたカーマインは確認を込めて問いかけた。すると、バールが肩をすくめて応えてくれた。

「そんなに御大層なモンじゃない。俺達は、ただの使いっばしりだよ。ラルフの旦那の」

そんな風に言うバールの様子がシレっとしていて、カーマインの自分が誉められたときの態度に似ており、カレンは思わずクスリとしてしまった。

「……教えてくれるか？ ゲヴェルってのが何で、何のために生み出されたのか。何故、アイツはグローシアンの命令が無くても人を殺そうとするのかを。俺達の様な存在を生み出してまで」

カーマインのその言葉に、ホープが傍らのデュランを見据えて問う。

「ソコに居る彼から教わったのではないのかね？」

「……俺達は、人を殺す為に生み出された。ソレ以上のことは知らねえ」

デュランは淡々と応える。だが　ホープはソレに心得たと言う表情をした。

「なるほど。立場以上のコトは知らないし、今まで聞こうともしなかった　か。実に仮面騎士らしい反応だ」

「……テメエは違うのか？ その顔は、俺達と同じように創り出されたんだろ？」

「その通りだ。だが　私やジキル達は人の世の情報を得る為に赤子の状態で生み出された。人に育てられ、いつか人間達を人の立場から滅ぼすように、ね。君達はゲヴェルの手足となって働く為に常に成人となった状態で生み出されている。ゲヴェルの側で生きる君たちと、人の世に送り込まれた私達。違いはソレくらいだな」

ホープが肩をすくめてみせるのをデュランがその瞳を細めて問いかける。

「つまり、テメエ等も人間の世に送り込まれて人に加担するイレギユラー、か」

「平たく言えば、そのとおりだ。イレイザーだろ、君は？」
ホープの言葉に、デュランは何も返さずその瞳をただ向けるだけだった。

「だが 君は仮面騎士でありながら、自我を持っているようだな？ 初めて見たよ、君の様なタイプは」

「……」

値踏みするかのような同族の視線にも、デュランは表情を崩さない。そんな彼を庇うかのように、カーマインが前に出た。

「ソレで 俺の質問には、応えてくれるのか？」

「ああ。ソコの美的センスのかけらも無い野猿達も言っていたが私の知る限りならば」

ジキル達を見て言い切るホープに、言われた二人は苦虫をかみ殺したような顔をした。

(野猿、野猿って、しつこいつつうに！！)

(つうか。自分も同じ顔だろっての)

そんな事を小声で言い合う二人に構わず、ホープは話し始めた。

「君は、ゲヴェルについて何処まで知っているんだ？」

「支配階級のグローシアンに作られた生体兵器だということは分かった。だが 文献には“グローシアンは、いかに優れていて人間はいかに低俗か”という内容が強調されていて、肝心のゲヴェルについてはよくわからない。精々、強靱な生命力と桁はずれの戦闘力、再生能力、弱点は魔法であり、グローシアンに対しては力を半減されるっていう いわば、特徴だけだ」

カーマインの言葉に、ジキルが首を傾げた。

「 “人間を殺す為に作られた生体兵器” じゃ、納得できないのか？」

「 ああ。それだけの存在なら、わざわざこんな手の込んだ事をしないだろ？ むしろ俺にはゲヴェルは“兵器” じゃ無く、知識と心を持った“命” に感じられる」

「そりゃ ？ 言われてみれば、アイツの力なら人間なんか一人で殺せる。いくらグローシアンに弱いつて言っても 」

「俺は　　ゲヴェルがどんな奴なのか、知りたいと思っている。俺達の様な人型の同族を創り出し、人間社会そのものを滅ぼそうとする伝説の異形の中身を。その生い立ちを、考え方を　　。でなければ、恐らく俺達は勝てない」

眉根を寄せて考え込むジギルに、カーマインが告げる。勝てない、ただの兵器ならば単純に特徴をとらえればどうとでもなる。だが相手は知識を持った存在だ。

「己を知り、相手を知れば　　何とやらってヤツか。真面目だねえ……ニイサン」

茶化すように言ってくるバールの横からホープが微笑みながら口を開いた。

「なるほど。ゲヴェルを救う者と言われるだけはある。君ならば　　人とゲヴェルの共存を示せるかもしれない」

「？　　どういう事だ……？」
「　　教えよう。ゲヴェルが何故、人をこれほどまでに憎み　　私達が何故生み出されたのかを。そして　　忌まわしいグローシアンの歴史を」

ホープのただならぬ言葉の重みに、ティピとカレンが思わず息をのむ。彼は　　ゆっくりと話し始めた。

ホープの語るグローシアンとゲヴェルの歴史は、ほとんど古文書や歴史書の通りのモノだった。ただ　　、まるで彼は見て来たかのように風景描写や説明をしていく。ティピもカレンも、そして説明を受けるカーマインの脳裏にすら、ありありと浮かぶように。

時空融合計画によって元の世界と新世界との次元を重ね合わせ、人々は移住する。新たな世界に居たのは先住民ゲーヴ。ユングやゲヴェルに良く似た大型の生命体。

彼等の主食は他の生命体の肉。彼等は、すなわち捕食者であった。

人間を遙かに凌駕するゲーヴの身体能力は凄まじく、元の世界から移住してきた人々は魔法を使う事が出来ずに一方的に蹂躪されていく。移住した世界には、グローシユと呼ばれる魔力の素が無かったのである。

人間達は、魔力を使わずに自分達と共に移住してきた背中に羽を持つ美しい種族。フェザリアンに守られて生きて行くしか無かったのだ。フェザリアンは人間に比べ体力や腕力などで劣る。

彼等は魔法とは違う力を持っていた、高度な知識から生み出された科学と言う力を。彼等はソレを操ることでゲーヴを退けて行った。しばらくして、グローシユがこの世界にも元の世界より漏れてきている事を発見する。このグローシユを利用する為に、人々は送魔線と呼ばれるグローシユを世界に均等に送る技術を、フェザリアンと共に開発。

初期レベルの簡単な魔法を何とか使用することが出来るようになる。こうして人間とフェザリアンは力を合わせて　ゲーヴを相手に闘っていった。

そんな時　先天性魔力保持者と呼ばれる、生まれながらにして強力な魔法を放つことが出来る人間が現れる。彼等はグローシアンと呼ばれた。

グローシアンの力は凄まじく、普通の人間とは比べ物にならない強力な魔法を次々と放って、ゲーヴを駆逐して行った。

やがて　彼等は自分たちこそが選ばれた存在であると、主張するようになり　人間とフェザリアンを見下し、全ての世界を自分達のモノにしようとする。人間は奴隷として扱われ、ソレに反発した人々は闘いを挑む。

人間同士の殺し合いに　フェザリアンはあきれ果て、闘いに巻き込まれないよう時空制御塔の中で生活を始める。しかし、グロ

ーシアンは彼等の科学技術も手に入れよう侵略を開始した。

コレに対し　フェザリアンは先住民ゲーヴを基に一つの生命体を創り出す。その生命体こそが、生物兵器　ゲヴェルである。

「　！？　まさか、フェザリアンがゲヴェルを……！！」

「……！！」

カーマインが驚きに目を見開く。隣ではデュランも愕然とした表情を浮かべていた。ホープはそんな二人の同族を静かに見やると話を続けて行く。

しかし、戦争の為に創り出された生命体　ゲヴェルは、グローシアンによって捕獲され改造を施される。グローシアン達に歯向かえないように、戦争で多くの反逆者を一掃する為に。

彼等ゲヴェルの生きる目的は　人を殺す事だと、それ以外の感情は無用だと、徹底的に精神を操作され、憎しみ以外の感情を抱くことの無い兵器に仕立て上げられた。

グローシアンに改造されたゲヴェルの様を見たフェザリアンはついに時空制御塔を捨て、空に自分達の生活を移住した。人間の持つ欲深さとどす黒さに辟易して　。

ティピが神妙な顔で口を開いた。

「……コムスプリングスで、ダニーさんが言った通り。フェザリアンは、人間に愛想を尽かしちゃった」

「人々の欲が　二つの種族に今も続く対立感情を残してしまっただんですね」

カレンも美しい顔を歪ませ、口元に細い指を当てて、悲しげにつぶやく。

ある時　グローシアンの中から人々に協力するモノが現れた。彼等は人間と力を合わせて支配階級のグローシアンと戦った。後に人々に　グローランサーという称号を彼等は与えられた。

グローシアンは人々に協力するグローランサーを目障りに感じ、ソレを凌駕する力を得ようと生体兵器ゲヴェルに注目する。

初めはゲヴェルの強化にだけ、注目していたグローシアンだが、彼等は自分達とゲヴェルが融合することで圧倒的な力を生み出せるのではないかと思い付く。そして　奴隷である人間達を使ってゲヴェルとの融合実験を繰り返して行った。

そうして得た実験結果を基に　グローシアンの中でも力のある王族やその騎士団は次々とゲヴェルとの融合を果たしていく。しかし、唐突に実験は失敗に終わった。

グローシアンの王がゲヴェルとの融合に失敗したのである。その時の暴走により、支配階級のグローシアンはほぼ、全滅してしまっ

た。
。「人とゲヴェルとの融合、だと？」

カーマインが眉根を寄せて問いかけると、ジキルが一つ頷いて応えた。

。「アンタも先刻、やり合った奴がそうだ。アイツはグローシアンとゲヴェルの融合体らしいけど、な」

。「　そんな事を、聞いてるんじゃない!!」
眉根をつり上げ、明らかに怒りの感情をむき出しにして、カーマインは怒鳴った。ソレにジキルも神妙な顔で頷く。

。「ああ　。人間を道具としか思ってねえ……。最低な奴等だ」
人間とゲヴェルとの融合。力を得る為だけに、どれだけの人が、ゲヴェルが犠牲になったのだろうか？　生きる自由は彼らにもあった

はずなのに、道具として、奴隷として犠牲になって。ソレを当たり前の様に実験と称する。カーマインはこの時、心の底から支配階級のグローシアンに対して言いしれぬ怒りを覚えた。

「確かに、胸糞は悪いけどよ。だからって俺達に言われてもな。もうそいつ等の大半は死んじまつてるんだし、よ」

隣のパールは片眉を上げて、肩をすくめてみせる。ソレにカーマインは眦をつり上げた鋭い視線で問いかける。

「アンタ達に怒ってる訳じゃない。だが、未だに奴等が犯した事に苦しめられるモノが居る。違うか？」

「グローシアンの遺跡に眠る融合体然り、ゲヴェル然り、ね……！正直、やってられねえよ。俺は」

パールがどこか投げやりに言っただけで見る。しかしその顔は、彼等の不憫を憐れんでいるようでもあった。

そんな彼の表情に、カーマインも何も言えない。そこへ、ホープが口を開いた。

「カーマイン、話を続けても良いかね？」

「……ああ。取り乱して、悪かった」

頭を下げるカーマインにホープは特段気にすることも無く、話しを続けていく。

残されたゲヴェル達は 自分達に残された人間抹殺という任務を行う為に、人間を標的に虐殺を開始した。ソレ等を防いだのがグローランサーである。

彼等は、自分の命と引き換えに魔水晶を作り上げ ゲヴェルをその中に、封印したのであった。長い年月をかけてゆっくりと自分の体を蝕んでいくグローシュの波動。ゲヴェルは生きたまま 永遠ともいえる責め苦を味わされた。

そんな彼を救ったのは またしても、人の欲望だった。人々が

水晶鉱山と呼ぶ強大な水晶の塊は、魔力を含み　人間はソレを利用して己の欲望のままに彫り進めて行った。

結果　ゲヴェルは、目を覚ましたのだ。

語り終えたホープに、誰もが声をかけられない。静かに　ホープは続ける。

「目覚めたゲヴェルは　人間をいかにして殺そうか。ただそれだけを考えた。自分を生み出しておきながら封じたグローションを、グローションを生み出した人間を、そして　この世界の、全てを憎んだ奴は、ソコで初めて自我を持ったのだ」

ティピもカレンも、その事実には思わず眉根をしかめてしまった。ゲヴェルもまた　被害者なのだという事実には。

「奴は　人をただ殺すのではなく、自分が味わった苦しみを全ての人間に等しく与える為に、人間の社会そのモノを壊そうと企てた。人間に似せた姿　形の自分を生み出すことで」

「……ソレが、俺達だっというんだな？」

カーマインの確認に、ホープは微笑みを浮かべるに留める。

「君が何者であるのか、ソレは　君がコレから決める事ではないか？」

「……アンタ、ラルフと同じコトを言うんだな」

「フ　。私も、彼に言われた言葉だからね」

微笑むホープに、カーマインもやつと笑みを浮かべた。

「アンタ達に会えて良かった。教えてくれて、有難う」

そう言って踵を返し、その場を立ち去ろうとするカーマインだがその耳に、ホープの声が届いた。

「　ここからは、私の独り言だ。聞き流してくれて構わない」

「　？」

振り返るとホープは明後日の方向を見ながら続ける。

昔、とある豪商の家に一人の黒い髪の執事が居た。

その執事は、常に仮面を付けており、屋敷の主人や奥方ですらもその素顔を見た事が無い。その屋敷には、子供がいなくてね。このままでは、屋敷が衰退すると、家の使用人たちは嘆いていたそうだが。そんなある日　執事は一人の赤子を拾ってきてね。子供のいな夫婦は大切に　彼を育てた。やがて　彼は美しくも遅しい一人の青年へと育つ。

同世代の青年と遊ぶ機会はほとんどなく、彼はひたすらに商いの仕事を覚えて行った。自分の大切な　両親を助ける、ただそれだけの為に。

友達と呼べる者は無くても、彼は自分を育てて愛してくれた両親と屋敷の者が居れば、ソレでよかった。

仕事で少し屋敷に帰るのが遅れた彼は、いつも通り夫婦の待つ居間に向かった。

「　ただいま。父さん、母さん。今日はある程度品を固める事が出来たよ！」

扉を開けるなり、彼はその場で立ちつくす。何故なら　厳しくも優しい父が、温かくて穏やかな母が、血塗れで部屋に倒れていたからだ。すぐさま部屋に入り、彼は叫ぶ。

「!?　何だ、父さん…!　母さん…!　誰か、誰か来てくれ…!」
取り乱しながらも両親の元へ駆け寄ろうとしたその時　彼は自分の目の前に黒い影が立っている事に気付いた。まるで　常世の闇の様に、暗い影が。

「お前は……!!」

ソコに居たのは　仮面を付けた執事。その手には、おびただしいほどの返り血を浴びた刀が握られていた。

「何故……!?　お前が何故、こんな事を…!」

「貴方が、目覚める為ですよ　坊ちゃん」

「　何だと!?」

執事はゆつくりと仮面を外した。その顔は　彼と瞳の色こそ左右反対であったが、その他は鏡を見るかのように同じだった。背丈も、髪の高さに至るまで。

「そ、そんな……!?!」

執事の目を見た時　彼は声を聞いた。

“奪え……。奪え……。目の前に居る人間を殺せ……。！　全ての人間を殺せ……。!!”

「な、何だ……!」

「ようやく、私達の主の声をお聞き下されたようですね。さあ参りましょう」

執事は優雅に一礼し、手を差し出す。彼は　その言葉を聞かなければいけない気がした。だから　手を掴もうとする、その時。

「ら……。ル……。!」

「！　父さん、母さん!!」

息も絶え絶えに父は彼の名を呼び、母は最後の力で微笑みかけた。
「生きて　私達の、むす……。こ」

ソレを皮切りに　彼等は二度と　その瞳を開ける事はない。

ソレを理解した時、彼の中で何かが切れた。

「　殺す。……。殺してやる!!　貴様等……。!!　皆殺しにしてやる、この薄汚い化け物ども!!　　ゲヴェル!!」

ウオオオオオオオオオオツ!!

白銀の炎を纏い、彼はその時に目覚めた。ゲヴェルとしての自分に。そして　ゲヴェルを殺す為に、人間である事を捨てた。

全ての同族を殺す為に　自分の親と同じ異形を水晶鉱山から見つけ出し、殺してその波動を取り込んだ。世界各国に散らばったグローシアンの武器。レギンレイヴを探し当て、装備して行った。

全ては　ゲヴェルを殺す為に。

カーマインは静かに、ホープを見据える。

「その話は」

「独り言だと言ったろう？」

ホープは軽く肩をすくめながら気障に笑い続けた。

「自分の大切なモノを奪われて　鬼に成った哀れな男の話だ。復讐することでは自分が生きる理由を見いだせなかつた男の」

「……」

カーマインは金と銀の迷い無き瞳を、ホープに向けた。彼はその瞳を受け、頷く。

「だが　人は、人。いくら心を捨てようとしても、人を愛するがゆえに人の心を捨てられん。ならば　人を否定するしか、私達ゲヴェルは生きていけないのだろうか？」

その言葉に、カーマインははつきりと首を横に振った。

「醜い心は誰にだってあるモノだ。ソレから逃げずに、受け入れる事で人は成長できると俺は信じている」

カーマインはそのまま強く続けた。

「俺は　人として生きる事を選んだゲヴェルだ」

その言葉に、ジキルとバールが目を大きく見開き、カーマインを見据えた。デュランさえも瞠目している。

「カーマイン、さん」

カレンが眩しげに宣言したカーマインの横顔を見据え、ティピが彼の肩で「どんなモンだ」と胸を張る。ホープはしばらく、カーマインを見据えた後、笑った。

「それでこそ、救世の光」

こうして彼等は遺跡の入り口で別れた。

カーマイン達と別れてしばらくしてから、ジキルは訝しげにホープに問いかけた。

「何で、ラルフのコトを話したんだ？」

「ソレについては、同感だね。ちょっとお喋りが過ぎるんじゃない

か？」

隣からパールも辛らつな口調で話しかけて来た。ホープは肩を竦めて応える。

「何……。彼ならば出来るかもしれないと思ってね」

「……ラルフを生かすコトを、か」

ジキルの言葉に、ホープは頷くことも否定することもせず続ける。

「どちらにせよ、話して置いて損はない。あの男には」

「……ソレも、全ての理を見抜く石のおかげか？」

パールはホープの右手に嵌めた蒼い宝石をみつめ問いかける。

「経験からくる予測だ。こんな無粋なモノに頼る気はない」

「……」

気障に笑うホープにジキルはキョトンと、パールは呆れたように見つめ返す。そんな三人が森道を進んでいると、炎の様な紅い高貴な印象を受ける巻き毛を腰まで伸ばし、嫣然と微笑みかけて来る翡翠と黄金の瞳の美女が現れた。

服装は、見たことも無い異国の服装。ただ　ハッキリと体のラインが強調されており、その形よく大きな乳房を見せつける様な胸元が大きく開いたデザインだ。

「　？　アンタは」

ジキルが問いかける。何故か　彼女は自分を見ているように思ったのだ。ソレに　美女は更に笑みを強めた。

「フム　。貴様に決めたまぞ」

「……は？」

美女の髪は太陽の光に透けて黄金に輝いたように、ジキル達の中に映った。

迷いの森の街道で。デュランは、自分の前を歩くカーマインの背中に問いかけた。

「何故だ？ 何故あんたは迷うことなく仮面騎士と同じ奴らを助けた？」

先の遺跡にて、グローシ안의融合体 ドレイクと名乗る男との戦闘。その際に居た3人のゲヴェルは自分と同じ存在……。人に害をなすかもしれない相手……。

しかし、カーマインは迷うことなく、ジキル、パール、ホープという3人の異形の青年を助けた。それがデュランには理解できなかった。

「そんな事、決まってるじゃない！ あの友達と仮面騎士達って全然違うわよ！ アタシ、一目で分かっちゃった！！」

その疑問に応えたのは、彼の肩に座るティピだった。

「…何？」

訝しげなデュランに微笑みかけながら、カーマインの隣を歩いてきたカレンが問いかける。

「…デュランさん。彼らの眼を見ましたか？」

「眼？ 一体何の事だ」

首を傾げる彼に、カーマイン・フォルスマイヤーは静かに話し始めた。

「俺の知る仮面達とあいつ等が違う理由、か？ 簡単だ。彼らの瞳に宿る強い意志。共に闘う仲間達を想い、自分も強くあるうとする絆。俺はこれまでの旅で幾度となくあの眼をした者達に合ってきた。やけに自信ありげなそのセリフに、デュランは力が抜けた。」

「…それだけ？ たったそれだけの理由で、助けたと言っのか？」

「彼等が悪党ではないと言い切れる理由など、それで十分だ」

カーマインは、足を止めて静かにデュランに向き直った。強い輝きを灯した瞳で。

「いくら姿が同じでも、いくら剣の腕がすごくても、所詮仮面は傀儡にすぎない。成し遂げなければならぬ目的、その為に戦う覚悟は、半端な意思じゃ乗り越えられやしない。あの瞳の輝きを……」

「……アンタは」

カーマインの言葉は淡々としていた。だが、その奥にある熱いモノはデュランの心を震わせる。

「俺は、あの輝きを持つ人の為に闘いたい。力は無くとも今を懸命に生き、平和に生きている人々の為に。そして力を持って己の利益の為にだけに、それらを壊す者から 彼等を守る為に、俺は剣を振る。それが俺の意志。俺が剣を振る理由だ」

カーマインの真つ直ぐな瞳を、デュランは眩しげに見る。

「お前なら 必ず見つけられる。剣を振る意味を…！」

「…剣を振る理由」

チラリとデュランはカーマインの指輪を レギンレイヴを見やる。ソレに、カーマインは力強くうなずいた。

「俺は お前を信じている」

その言葉に、デュランは静かに自分が握った拳を見る。

「ねえ、これからどうするの？ さっきの奴はシーティアを知ってるみたいだったよね…」

「カーマインさん、一度シーティアさん達と合流した方が…」

ティピとカレンの提案に、カーマインは首を横に振る。

「引き続き、ゲヴェルの搜索と調査を続けよう」

「！ ですが…！！」

カレンがシーティア達を心配して抗議するが、カーマインは静かにデュランを見た。

「シーティア達の所には、デュラン お前に行ってもらおう」

デュランはその真意を汲み、改めてカーマインに問いかける。

「俺にアンタの代わりに守れってのか？ アンタにとってかけがえの無い“命”と“仲間”を」

「そうだ。だから お前に頼む」

ハッキリとカーマインはデュランを見据えて応えた。

「俺に見つけられるだろうが、アンタの言うかけがえの無いモノが。ゲヴェル様の支配を超える“何か”が」

「仮面騎士であった頃の自分の行為に疑問を持たたお前なら…必ず、

見つけられる」

「……このデュラン。貴方の頼み、謹んでお受けする」

几帳面なデュランの一礼に、カーマインも微笑みを浮かべた

。

42 連鎖する怨嗟（後書き）

まだまだ、これからのGL。よろしくお願いします。

43 メッセンジャー

迷いの森。三国大陸の境界線にもなる広大な森は、大陸の約4割を占めるほどの面積を誇る。木々が生い茂るこの場所は、奥に行けば樹海と呼ぶにふさわしく太陽の光さえ遮る薄暗い道が続いていた。

そんな場所を、腰まで届く長い黒髪の美女と、彼女の傍らに飛翔する灰色の髪をした妖精が進んでいた。ローランディアの紅龍の戦姫、シーティアとピティである。

彼女たちは、ランザックとバーンシュタインの同盟を決裂させるために戦場で大量の兵士たちを相手にした。無事に二国を仲違いの状況に追い込むことはできたが、それでも彼女たちの表情は冴えない。

「……シーティア様、ボルギナという国は何をしようとしているのでしょうか？ 20年前に奪われた土地を取り返すといっても、この時期に どうして」

ピティが物憂げに、シーティアの顔を覗き込んでくる。

「この時期だから、かもしれないわ。三国が争って互いに国力を削ぎ、大陸中が混乱している時期だからこそ、名乗りを上げたのかも」

ただ、それが長続きするとはどうしても思えない」

確かにボルギナの兵士たちは強力だったし、武器も素晴らしい業物だった。だが 足りない。どう考えても、たった4人で国を相手取ることなど、できるわけもない。あんな場所に4人しか現れなかったということは、人数が圧倒的に不足しているからだとしてティアは見ている。

でなければ、強大な三国の内、バーンシュタインとランザックという二国を相手取り名乗りを上げて勝利しなければならぬ場所、数人しか連れてこないなど愚かといしか言いようがない。

「ただ 私たち、ローランディアにとっても悪いことになるかも

しれない……」

「！　そんな、どうしてですか！？　バーンシュタインとランザックとの仲違いに成功したし、ボルギナはローランディアに対しては宣戦布告をしていません！！」

「……ピティ。私たちは誰と戦い、誰と同盟を結ぶはずだったかしら？」

シーティアは静かに、冷静に問いかけてきた。ソレにピティもかわいらしい眉根を寄せ、答える。

「こちらに宣戦布告してきたバーンシュタインを防ぐために、ランザックと同盟を　！」

「そう　。　だけど、自国の領地がいきなり独立宣言をして攻撃を仕掛けてきたのよ？　ランザックは同盟に応じられるかしら？」

「　！！　　そ、それは……！！　！」

髪を下したシーティアに先ほど、戦場で見せた冷徹な表情は無い。普段の女性らしい美しさを見せる表情と話し方に戻っている。それでも　彼女の表情は深刻だった。

ピティが、そんな彼女を気遣いながらも、自分の疑問に思っているもう一つの事を口にしてみた。

「先ほど　森の西側の方から空に向かって放たれたあの青い光の柱。アレは　ソウルフォースでしたよね。それも、考えられないほどの強化を施された。一体、だれが　」

自分の疑問の確認の為に伝えた言葉だったが、不安げに見上げる。余計にこの方を不安にさせてしまうのではないかと。だが　シーティアは顔を前に向けて微笑みを浮かべていた。

戦いで見せる不敵な笑顔でも、普段見せる明るい笑顔でもない。大人びた　慈愛と、厳しさを兼ね備えた美しい微笑み。普段彼女を見なれているはずのピティをして　見とれてしまうほど。

「……シーティア様？」

（ティピの記憶で見た覚えがある　。　この笑い方は、確か一度だけ。グランシルの闘技場で　）

自分の姉に当たるホームンクルスの記憶を思い起こしながら、ピティはシーティアの顔をじっと見据える。

「あの魔法剣」

「え？」

シーティアの唇から言葉が紡がれ、思わず聞き返してしまった。

「さっきピティが言った光の正体は、魔法剣ソウルストライク。

シュワルゼがラルフに放った究極の一撃。だけど　今の撃ったのはシュワルゼじゃないわ」

確信を込めて言うシーティア。その表情にピティは思わず聞いてしまった。

「？　どうしてですか？」

「ん？　……何となく、かな」

そう返す彼女は、しかし自分が導き出した答えに絶対の自信があるようだ。鼻歌まで歌い始め、森を歩いていく。あれ程表情を曇らせていたのに、今は　いつも通りのシーティアだ。

（　私じゃない。シーティア様を不安から救ったのは　あの魔法剣を放った人。　一体、誰……？）

そんなことを考えながら、ピティはシーティアの肩に座る。

二人がウォレス達との待ち合わせ場所までもう少しというところまで近づいた時、道が開けローランディア城の訓練場位の大きさの広場に足を踏み入れた。

その広場の中心に一人の黒い影がシーティア達に向かって立っていた。

「シーティア様……！」

警戒を呼び掛けるピティにシーティアはそつと手をやり、自分から離れるように促す。ピティは即座に頷くと宙空へ飛翔、シーティアと共に男を見据える。

男は　ラルフと同じ仮面舞踏会などで付けるマスクを目元に付け、執事服を着ていた。髪の色は黒。

「やはりその顔、感慨深いモノがありますね。貴女が、シーティア様でよろしいですか？」

「……仮面を付けた奇妙な執事に名を呼ばれるとは、ね。一応聞いておくけれど、私と面識あったかしら？」

丁寧に淡々と尋ねてくる男。声からして青年に、シーティアは肩をすくめて答えた。

その瞳には警戒の色が浮かんでいるが、当の執事はまるで意に介していない。

「失礼。貴女と出会うのは初めてですよ。私は、知っているだけです。貴女を」

「……へえ？ まるで以前から知っていたみたいなおぶりね」

そう言いながら、シーティアは右手に嵌ったリングを触る。いつでも戦いに臨めるように。腰だめに構える。

執事は静かに口元を歪めた。

「ええ……。貴女ご自身よりも、貴女をよく知っていますよ。フアフニール」

「……名前、聞かせてくれないのかしら？」

表情を真剣にしながら、シーティアは冷静に問いかけた。自分を知るといつこの執事の言葉、何故か。戯言だと笑い飛ばせない。

「私の名は キール。キール・ヴェンツェルと申します」
「……！！」

キールと名乗った執事は爪先立ちになると、地面を押すようにして宙にフワリと浮かび、消えた。

ビュンッ

咄嗟に身を屈め、頭を脇に逸らす。一瞬後、シーティアの頭があった空間を黒い靴底が通り過ぎて行った。

（ラルフと同じ、体術！！）
「シーティア様！！」

ピティの悲鳴が森の広場に響く中で、シーティアは右手にグンニグルを具現化させた。同時、まだ空にいるキールに向かって横なぎ

を一閃。

ブウンッ

ツ…ッ キールはその刃に触れるように手をそつと付け槍の穂先に付け、宙返りしながら体勢を整える。なんと、キールは蹴りを放つてから数秒の間、空で止まって見せている。

(何だと…！？ コイツ、なんとというバランス感覚だ！！)

しなやかな筋力と身のこなしを併せ持たなければ、重力で地面に落ちる。ソレを この男は止まって見せた。思わず呆然としてしまったシーティアに、鋭い蹴りが放たれる。

ガキイツ

咄嗟に顔の前にグンニグルを置き、受けるが その威力たるや、広場中央から彼女を一気に森道に戻してしまふほどだ。シーティアの体が後方に飛ぶ。まるで空中を泳ぐかのようなキールの流麗かつ鋭い動き。

靴底で地面を掻きながらようやく槍を構えるシーティアの前にキールは静かに着地した。

「噂通り、いい動きですね。ラルフ坊ちゃんに試合とはいえ勝つたというのは、あながちマグレではないかもしれません」

「アンタ。ラルフの師匠か何か？」

グンニグルを腰ために構えながら、油断なくシーティアは執事服の男を睨み据える。対するキールは 軽く笑った。

「師匠 というほどでもありません。私は ただの執事ですか」

「……アンタみたいな執事が、並^{ただ}？ それじゃあ 近衛騎士の面目丸つぶれね……！」

皮肉気に笑いかけるシーティアに、キールも穏やかに笑い返す。

「そうですね。貴女のお力をもつと私に示してください。殲滅の紅」

「いいでしょう、受けて立つわー！」

シーティアは宣言と共に、縮地法で一気に距離を詰めて切りかか

る。対するキールも地面につま先立ちした状態で滑るように動いていく。

そんな二人の戦いを見ながらピティは思わずつぶやいた。

「 どうして？ シーティア様は何故この人と戦うの？」

（仕掛けてきたのは向こうだけれど、シーティア様が何の理由もなく戦いを受けるなんて 。それに この人）

そこで、ピティも瞳を鋭くする。そう 同じなんだ。黒い髪に、白い肌。細くしなやかな筋肉を纏った体。髪型に、背丈 。

「似ている 。ラルフさんやカーマインさんに……！！」

そのことが、ピティが最も警戒している点である。

シーティアは大きく槍を回転させ、切り上げ、逆袈裟の要領で斬りつけていく。しかし、その素早く鋭い斬撃もキールは僅かに身を後方へ逸らしたり、あるいは脇にすり足で移動するだけで捌ききつてしまう。

左に斬撃を避けたキールは、シーティアの右脇腹を狙って左の貫手を放った。ビュンツ 最短距離をノーモーションで放たれる一撃は、シーティアが回転させていた槍を脇に持つてくることでその刃の部分で受ける。

ギインツ 槍の穂先に防がれる左貫手。その爪が穂先の腹とぶつかり火花を散らしながらシーティアを後方へとずらす。

「……くっ！！」

「非力ですね 。それでは、私の体術を捌ききれませんよ」

「 なんですって！？」

シーティアはキールに体勢を向き直し、構えなおす。その前に、すさまじいキレの右回し蹴りが放たれた。咄嗟に槍の長柄の部分で受ける。ガキインツ まるで 刃を相手にしているかのような音。キールは続けざまに蹴りを放つてくる。速いなどというものではない、圧倒的なスピードかつ、縦横無尽に放たれる左右の蹴り。ど

んな体勢からでも放たれる足技は鋭く、気を抜けば瞬間にシーティアをなます切りにする。

その圧倒的な体術にシーティアは逆に心を落ち着けていく。そして放たれた。回し蹴りではない、槍をつくかのような真っ直ぐな蹴り。

「！！」

シーティアは長柄の部分を使って自分の脇に足を逸らす。

「これを」

そのまま、体を入れ替えるようにキールの側面に滑り込み、流した槍の勢いを加えた遠心力ある横なぎを放った。

「待っていたのよ！！」

ドゴオウツ すさまじい一撃は、キールを後方へと弾き飛ばし、樹海に炸裂音を響き渡らせる。

キールは咄嗟に魔力の盾を作り出し、刃を受けながら後方へ飛んだ。フワリと着地する。

「なるほど コレは素晴らしい。勝利に必要なモノとして、冷静な判断を忘れない。重要なことですよ」

ソレだけを言うとキールは静かに右手に嵌めた指輪を一撫でした。指輪は黄金の粒子となって宙を漂い、二振りの長刀を象る。白柄の長刀と黒柄の長刀。二振りは、カーマインやシーティアのレギンレイヴと呼ばれる絶刀によく似ていた。

「……その造り、レギンレイヴの」

シーティアが静かに問いかけるとキールは我が意を得たりと頷いた。

「白柄の長刀は聖剣デュランダル。振るうものの願いを叶えると言われています。黒柄の長刀は狂刀リーヴェイグ。狂戦士と呼ばれたリーヴェイグの魂が宿るとされ、振るうものは死を恐れない殺人鬼へと変貌すると言われます」

「……共に、レギンレイヴよね？」

キールは穏やかに笑った。静かに二振りの長刀を左右の腰の剣帯

に吊るす。

「さあ 次は、ファフニールを見せてもらいましょうか？」

事もなげに言い捨てるキールは、抜けば狂うとされる黒柄の長刀、リーヴェイグを抜き放った。その怪しい切っ先をシーティアに向ける。

対するシーティアもズボンの右ポケットから赤い紐を取り出す。

そしてソレを使って自分の髪を高く結び上げる。瞬間、凍るように冷たい金と銀の瞳がキールを射抜く。

「……ほう、素晴らしい殺気だ。なるほど美しい。血の中にあつてこそあなたの美しさ、磨き上げられるのでしょうね。 - 流石は、ファフニール」

「……」

シーティアは何も言わずに双頭槍グンニグルの長柄を両手で掴む。カシツ 柄は中央から左右対称に分かれ、二振りの刀 ランドグリーズへと変化した。

「さあ。続きと行こうか、執事殿」

口調も冷たく、無機質なモノへと変化している。

「存分に堪能させていただきましょう。ファフニール様」

キールは、まるでダンスの誘いを受けるかのような優雅な一礼で答えた。

同時 シーティアが縮地法で切りかかる。風を巻いての左右からの連続斬撃。的確かつ鋭く、炎の様な苛烈さを持つ攻め。だが

キールはその全てを柳のように受け流していく。

「なるほど。炎のごとき良い攻めの剣ですね。才能に満ち溢れ、さりとて努力を怠らず、訓練を積んだ動きだ」

キールは世間話をするかのような口調でシーティアの左刀の逆袈裟を捌き、右刀の突きは半身を切って避け、翻しての左刀の横なぎを刀で受ける。ガキツ

「 振れば狂戦士となるのではないのか？ このホラ吹き執事が」
シーティアの言葉に、キールは静かに笑った。

「心弱きものならば、アツサリと取り込まれるでしょう。対策は一つ。心を無にし悟りを開くことができるか、それとも自身の強き意志によって狂刀の気をねじ伏せるかです」

シーティアの剣を捌きながら、キールは肩をすくめて見せ、こう続けた。

「私は 前者ですがね。後者はあくまで机上の空論。それほどまでに強き意志を持つ者がこの世にいるとは思いません」

「柳の如き悟りの境地、か。しかし お前に心があるのか？」

「……ほう？」

シーティアは剣をはじき、後方へ下がるとキールの仮面の奥の瞳を覗き見るかのように見据えた。

「こうして、対峙してみたがお前からは何も感じられない。感情の起伏も気も、何一つだ。心を封じる術は戦いに置いて誰もが求めるモノだが貴様のソレは度が過ぎている」

生き物ならば気がある。人間ならば心がある。ソレが この男にはまるで感じられない。刃を合わせても、つばぜり合いをしても、呼吸そのものが感じられない。

「お前、本当に生きているのか？」

シーティアのその言葉に、キールは今度こそ声を上げて愉快そうに笑った。

「フフ、これ程までに人の心を悟れるものがあるとは。しかもその歳で、素晴らしい」

「アツサリと認めるな。……生きていないとしたら、幽霊のようなものか？」

淡々と告げながら二刀を静かに腰ために構えるシーティア。対するキールは両手持ちの正眼に構える。二人の間の空気が秒単位で薄くなっていく。二人の間に立つものが居れば間違いなくそう感じただろう。それほどの緊張感を放っている。

シーティアの言葉に、誰よりも焦りを感じていたのはピティだ。

自分如きで止められる動きではないが、もしキールがシーティアの言うような存在、幽霊だとしたら

(シーティア様でも、勝てない……!!?)

そんな考えたくもない答えが導き出されてしまう。

シーティアは自分から仕掛けず、相手の出方を待ってみた。柳の如き受けで捌かれるのならば、まともに攻撃を展開しても当たらない。

「なるほど、今度は受けに回るといいますね？ では」

「!!」

シーティアは次の瞬間、瞳を大きく見開いた。いきなり眼前に何の脈絡も無く刃が振り下ろされていたのだ。油断などしていない。自分はこの男から瞳を離さずに攻撃に備えていたはずだ。

一足飛びとか、そんなレベルではない。奴はまるで膝を曲げることも強く地面を蹴ることも、ラルフの様に爪先立ちになって飛び上がるということもしなかった。ただ足を一步無造作に前へ踏み出したただけだ。

ソレだけで 5メートルはある距離を一瞬で詰めたのだ。おまけに刀を無造作に振り下ろしてくる。全くのノーモーションで。

「……クウ……!!」

ガキイツ 咄嗟に首を捻り且つ体を左後方へ捌きながら、振り下ろされる刃に左刀の一閃。その袈裟懸けは振り下ろされる刃を何とか逸らすことに成功した。シーティアの眼前を白銀の刃が通り過ぎていく。

咄嗟に後方へ縮地法を使い、距離を取るシーティア。彼女の前にはキールが泰然としてゆるぎなく立っている。

不気味な斬撃だった。早くも鋭くもない。ただ、見つらい。動きがあまりにも自然すぎて、全く戦う動作には見えなくて。気が付いたら、懐に入り込まれ、振り下ろされてしまう。

カーマインやシュワルゼの様な空間を切り裂くほどの真っ直ぐな

剣でも、ラルフの様にトリツキーな体術から放たれる鋭い剣でもない。

そもそも、この動きは 剣術のソレではない。日常の生活動作から無理なく生まれた自然な動き。ソレを剣に取り込んでいる。

(気を抜けば、一瞬で斬り殺される。コレが、ラルフの師匠の剣)

無造作に振り下ろされる斬撃は強力で、下手な攻撃では軌道を変えることさえ難しい。否、下手に手を出せば返し技で一気に主導権を握られる。そんな予感がシーティアの中に生まれた。

キールは攻めてこない。静かに口元に笑みを浮かべ立っている。

「何故、攻めてこない」

自分が完全に今の動きに惑わされていることは、気づいているはずだと、暗に告げてみる。だが キールの返答はこうだった。

「今の攻めで 私の剣は大体把握できたものではありませんか？」

「なるほど。だから、破ってみるといふのだな？ お前の剣を」

シーティアの言葉にキールは静かに口元に笑みを浮かべるだけだった。その笑みに対し、シーティアは静かに右刀の切っ先を相手に向ける。

「いいだろう。ファフニールの剣、とくと見るがいい」

ビュンッ

縮地法を使い一気にキールとの距離を詰める。左右の刀が届く間合いになったその時、シーティアの連続斬撃が宙を網の目の様に走る。

キールは静かにその場で刀を正眼に構えると僅かに切っ先を動かす。ガキィッ 強烈な一閃に刀と刀が火花を散らす。左右交互の斬撃だが、キールは僅かに刀の切っ先を寝かしたり、手元を下げるだけで竜巻のような斬撃を捌いていく。

「そんな……！？ シーティア様の斬撃をあんな方法で防ぐなんて……！」

必要最小限の動きでシーティアの剣を捌いていく。まるでどこに

剣が迫るのか予め知っているかのように。

ズザアツ シーティアは高速で動かしていた足を止め、踏ん張るような構えを取った。

「シーティア様!？」

(高速移動からの連続斬撃が通じないのなら、足を止めての強打撃!？ でも)

重い一撃は連続斬とは違い、見切られやすい。今の攻撃を捌かれているのなら、一撃勝負など、してはならない愚行だ。

だが。シーティアはピティの心配などお構いなしに両手の刀を交差させ、そのまま左右に薙ぎ払った。ギーンツ 当然のごとく刀が交差した部分にキールの長刀が入り、受けられる。

捌かれれば、体勢を崩し反撃に備えることなど不可能。
「危ない!！」

ピティの悲鳴に近い叫び声が森に響き渡る。ドゴオウツ しかしその声よりも更に大きな炸裂音が響き渡り、声が打ち消されてしまった。

ズザアツ 後方へ弾かれたのは刀を受けたキールの方。彼は仮面越しに自分の立ち位置を見下ろすと、緩やかに笑った。

「流石は、ファフニール。これほどの一撃とは、御見それしました」

言い捨てるキールにピティが驚愕の表情のまま言った。

「シーティア様の強打撃をしても、ダメージを与えられないなんて

」

勝ち誇るかのように静かに笑うキール。対してシーティアはその冷たい瞳を揺らがすことなく、ビュンツと右刀を宙で払いキールの仮面を見つめ返す。

「……ッ!！」

次の瞬間、キールの左の頬がパクリと裂け、赤い血が流れていく。血の流れる気配にキールは静かに仮面の奥の瞳を傷のある頬に向けると、そのままシーティアに向き直った。

先ほどまでの薄笑いは ない。

「……なるほど。コレが“ファフニール”ですか」

「続きを始めてもいいか？」

左右の刀を今一度強く握りしめ、腰を落としてシーティアは構えた。だが キールはいつの間にか、長刀を鞘に納めていた。

「続きは、また今度ということだ」

「……何？ おい待て！ お前のヴェンツェルと言う名は……！！」

そう告げると同時、シーティアが訝しげに眉を上げ、問いかけようとしたその時、先ほどまでであった仮面の執事は完全にその姿を気配と共に消していた。まるで、亡霊のように。

「シーティア様……」

「逃げたな アイツめ」

ピティが心配げにシーティアを見上げるも、当の彼女はどこか憮然とした表情をしていた。

「お姉ちゃ〜ん！！」

「よかった、無事みたい！！」

その時、森の向こうから自分の妹とその親友が駆け寄ってきた。

「ルイセ、ミーシャ」

笑顔で自分たちに駆け寄ってくる二人に、シーティアも頬が緩む。抱き合う女性達3人の後ろから、ゆっくりと盲目の壮年男性が歩み寄った。

「どうやら、うまくいったようだな」

「ええ。心配をかけたな、ウオレス、皆」

シーティアは答えながら、自分の口調に気づき、赤い髪紐を解いた。そして、自分に抱き着いた少女に微笑みながら続ける。

「ルイセ、テレポート！」

「うん、将軍に報告しなくちゃ！！」

シーティアの言葉に、ルイセも頷く。

「よろしく願います。ルイセ様」

「本当、テレポートって便利よね〜！！」

かしこまるピティと暢気なミーシャ。そんないつも通りの一行を見て、ウォレスは苦笑した。

「全く、一国の危機を救ったとは思えない面子だな。こうしてみると」

そのウォレスのつぶやきを残して、一行はラージン砦に向かった。

44・弟の帰還

ラージン砦。石造りでできたこの砦の奥にある作戦会議室へ、シーティア達は報告の為、足を踏み入れた。

「よくやってくれた!!!」

ラージン砦の主ブロンソン將軍は、彼女たちの顔を見た瞬間に、そう告げ勞った。

「これで、ローランディアは盛り返すことができる!!!」

「ああ。しばらくはバーンシュタインもランザックも攻めては来ないだろうしな」

ブロンソンの言葉に、ウオレスも太鼓判を押す。

「やったね、お姉ちゃん!!!」

「さつすが、お姉さま!!!」

自分をはやし立てるルイセ、ミーシャの二人に軽く笑むとしかし、シーティアは深刻な表情でブロンソン將軍に向き直り告げた。

「そのことです。將軍。樂觀視できない不足の事態が起こりました」

「何? 不測の事態だと」

シーティアは皆に事情を説明していった。ランザックとバーンシュタインの仲違いに成功させたその時に4人組の兵士が現れたこと。かつてこの大陸にあったボルギナ皇国。小さいが豊かな土地を持つていたその国は、砂漠の国ランザックに取り込まれた。

その4人の兵士はボルギナの兵士であることを明言した上で、バーンシュタインとランザックの両軍に攻撃を仕掛け、蹴散らしていたこと。

「加えて言うならば、その内の一人に黒い髪 of 壮年の男性が居たのですが、彼はシーティア様のグンニグルに優るとも劣らない、いいえ刃の重厚さならグンニグルを上回る豪槍を片手で振り回していたのです!!! それも、二振り!!!」

ピテイの言葉を聞き、ミーシャが首をかしげた。

「ボルギナ？ どこかで聞いたような？」

その言葉に隣のルイセが可愛らしい眉を曲げて注意する。

「もう、ミーシャだったら！ この前授業で習ったばかりだよ！！」

「へ？ そうだっけ？」

「もう！ ランザックに20年前に滅ぼされた国の名前だよ。」

この大陸がまだ 三国大陸では無かった頃の国」

ルイセの言葉に、ウォレスはニヤリと笑い答えた。

「よく知ってるな、ルイセ。その通りだ……。そして、小国のボルギナが、砂漠の大国ランザックを最後まで手こずらせた理由が、フオマルハウト將軍だ」

ウォレスの言葉に、誰もがゾツとしたような顔で彼を見つめた。

その隣に立つブロンソンはやはり同じように深刻な顔をしている。

「ボルギナに智将にして武將ありと言わしめた、フオマルハウト將軍か……。かつて、この大陸最強と言われた男。当時のインペリアルナイトをも凌駕したという」

「そ、そんなに凄いんですか……？」

大陸最強と言えば、インペリアルナイトだというのは、ルイセ達の世代ならば当たり前の話だ。ソレを凌駕するなど信じられない。

「ああ……。とんでもなく強い上に戦略や魔法にも長けていてな、ウエーバーが傭兵団を率いてランザックに入ってなければ、戦力差を覆されたかもしれねえ……。それほどの相手だ」

「だが……。無敵の將軍も寄る年波と病には勝てず、戦争の最中に倒れ なし崩し的にボルギナは占領されていった」

ウォレスの言葉の後にブロンソンが続ける。しかし、將軍のその言葉にルイセ達は思わず目を丸くしてしまった。

「ま、待つてください將軍！ それじゃ……！！」

「フオマルハウトって人は、もう死んじゃってるってことじゃ……！！？」

ルイセたちの反応を受け、ウォレスはジッとシーティアを見据え

た。

「　　と言う訳だ。お前が見たのは、本当にフォマルハウト將軍だったのか？」

「誰かが、フォマルハウト將軍の名を語って行動しているというのですか、ウォレスさん」

ウォレスの言葉に、ピティも確認の為に聞いてみる。答えたのはウォレスに質問を受けたシーティアだった。

「本物かどうかなど、ルイセ達と年齢の変わらない私に聞かれても答えようがないんだけど。それでも　彼がフォマルハウト將軍だと思っ」

「　影武者でも、狂言でもなく、か？」

「ええ　。少なくとも、戦場で見た彼は噂に違わない力を示していたわ。槍術も魔法も戦略も。加えて言うなら、彼の持っていた武器にも、ね」

「　武器？　槍のことか」

「ただの槍じゃない。双頭の槍だというのは同じだけれど。私のそれよりも明らかに重厚で長い刃は、敵の鎧ごと首を叩き割るかのようになられていた。あれ程の剛槍を左右で一振りずつ操るなんて馬鹿げたマネ、インペリアルナイトでも不可能だと思っ」

ウォレスが眉根を寄せて考える。

「俺のミヨルヴィルムを槍にしたってのか　」

「……その槍、もしかするとロンギヌスかもしれないな」

「ロンギヌス。フォマルハウト將軍の愛槍の名、か。たった4人で敵兵を壊滅に追いやる戦闘力と言い、噂に違わぬ力の様だ」

「深刻な表情で話を締めるウォレス。其処にピティが割り込んだ。ですが　フォマルハウト將軍は壮年だったという話ですね？」

「それでは　今の將軍は余りにも若すぎます！　まるで　若返ったかのように」

「うーん、一体……何がどうなってるの、ルイセちゃん！！」

「私にも分からないよ、ミーシャー！」

全員が頭を抱え込む状況で、ポツリとウォレスがつぶやいた。

「ランザックは、同盟を結ぶどころじゃねえかも知れねえな」

「そうかも知れない。でも、同盟を結べなかったとしてもローランディアが相手にする戦力が今より増えることはないのだから、良しとするべき。なのよね。やっぱり」

少しさみしそうにつぶやくシーティアにブロンソンが声をかけた。

「とりあえず、この件は陛下に報告をしておいてくれ。君たちのおかげで、とりあえずの脅威は去ったということを、な」

「分かりました。じゃあ、ルイセ」

シーティアがルイセにレポートの魔法を唱えるように声をかけたその時、

「將軍、シーティア様達に面会の者が」

シーティア達が互いに顔を見合わせる。全員心当たりはないという表情だ。

「？ 分かった、通してくれ」

ブロンソンの言葉で、兵士が一人の青年を連れてきた。彼らのよく知る黒い髪、金と銀の瞳の青年を。

「アンタ？」

シーティアと同じ顔をした青年は、紅の制服に黒い軍靴を着用し、その上に赤いコートを羽織っていた。

「……その服は、王立近衛騎士“ファフニール”の正装？」

ルイセがキョトンとした表情で彼の着ている制服を見る。そのまま青年の顔を見上げ、ルイセは呆然と尋ねた。

「……お兄ちゃん？」

いつもならば、真っ先に兄に駆け寄るはずの彼女の様子を感じることもなく、ウォレスとミーシャが笑いかけながら声をかける。

「ようやく、帰ってきたか」

「お兄様！ 一緒に戦ってくれるんですか！？」

そんな彼らの言葉に取り合わず、青年　カーマインはシーティアを見据えた。

「ローランディアはランザックと同盟を結ばなければならない」

「……どうということ？」

「ボルギナという国の裏にゲヴェルが絡んでいる」

「淡々と抑揚のない口調だが、その場にいる全員を凍りつかせるには十分すぎる言葉だった。」

ゲヴェル。伝説の異形といわれ今もなお、この大陸に潜み続ける人類の敵。

「迷いの森にあった遺跡の前での戦闘、気づいては？」

「！あの時に遺跡から感じた魔力は……、戦闘だったの！？」

カーマインの言葉に、ルイセが驚きの声を上げる。

「なるほど、ルイセが言っていたのは本当だったのか」

「グローシアンって魔力波にも聡いんだね！すごい、ルイセちゃん！！」

ウォレス、ミーシャがそれぞれの感想を漏らす中で、シーティアはジッとカーマインを見据えていた。

「知っていたわ。あの強烈な魔力波を放ったのが、誰かと言うのも、ね」

「なら、話は早い。ボルギナの4人がバーンシュタインとランザックの両軍を相手にしている最中、あのグローシアンの遺跡にボルギナ兵が居た。奴らはその遺跡に眠らされていたゲヴェルと人との融合体ってのを目覚めさせていた」

「！？人とゲヴェルの融合体？それは……ゲヴェルがグローシアンの遺跡にも眠っているというの！？」

「ああ 人間の姿をしたゲヴェルがな」

「淡々と告げられる言葉は単刀直入過ぎて、反応に詰まってしまう。衝撃の言葉を彼は次々と簡潔に、ためらいなく答えてしまうのだ。思わず、ウォレスが言葉をはさむ。」

「人の姿と変わらないゲヴェルだと？ そいつは……！！」

「アンタは気づいているはずだ。仮面の騎士やシュワルゼ、ラルフ達の事を」

「……………!!」

淡々と事実を告げるカーマイン。しかしその言葉はウォレスの表情を険しいモノに変えてしまった。絶句するウォレスに代わり、答えたのはシーティアだった。

「そういうこと」

「……………分かってもらえたのならわざわざ言うことは無い。構わねえな？」

「ええ…………。これだけヒントがあれば、ウォレスじゃなくても、当事者なら誰だつて気づくわ。流石にね」

ため息交じりのシーティアにカーマインは静かにコクリと一つ頷いた。

「カーマイン様、その話は」

「そ、そういうえば お兄ちゃん！ ティピは？」

険しい表情で口を開いたピティの脇からルイセが殊更、明るく話題を変えるような質問をした。その言葉に、カーマインは淡々とした口調で続ける。

「……………ティピなら、カレンと一緒にだ。彼女の身に何かあったら俺に連絡するよう、伝えてある。まだ 身の安全が保障されたわけじゃねえからな」

「！ カレンさん、狙われてるの!？」

「可能性は高い。安心しろ、何かあれば俺にはすぐにわかる」
「ソレは そうかもしれないけど……………!」

カーマインの言葉に違和感を感じるのか、ルイセは眉根を寄せ、不満げに答える。そんなルイセに、ミーシャはいつもと違う学友の態度に首をかしげている。

「……………お姉ちゃん」

ルイセは何かを訴えかけるようにシーティアを見上げた。見上げたシーティアもジツとカーマインを見据えていたが、一つ力を抜くようにため息を吐くと穏やかに笑ってルイセを見つめ返してきた。

「……………ルイセ」

シーティアは優しく語りかけると同時に、頭をポンと撫でる。その様にルイセも何かを感じたのか、納得したような表情でカーマインに向き直った。

「……王への報告を最優先にする、いいわね？」

「構わん。むしろ、その方がスムーズに行くだろう」

カーマインの答えにルイセは一つ力強く頷いた。

「それじゃあ、レポートするよ！！」

黄金の魔力の光が、一行を包み込み何処かへと飛んで行く。その様を見てブロンソンは皆の天井を見上げ、願うのだ。

「頼んだぞ。ローランディアの未来を」

黄金の光の球が現れた先は、ローランディア城と門をつなぐ道だった。脇を見下せば、ローランディアの緑を象徴する森が見える。

「これほどの人数をこうもアツサリと連れてくる、か。とんでもねえ代物だな、グローシアンってのは」

カーマインが正に聞こえるかいないか位の小さな声音でつぶやいて見せた。シーティアはその言葉に何も言わず、聞こえていたウオレスもあえて触れては来なかった。

シーティア一行はそのまま、真っ直ぐに玉座の間に向かって歩いて行った。

玉座の間では、シーティア達の母サンドラが向かって右手に、文官が左手に立つ。そして中央に穏やかな瞳の壮年の男性 アルカディウス・ウエルナー・ローランディアが玉座にてシーティア達を迎え入れた。

「戻ったか、それでラージン皆の方はどうなのだ？」

王はシーティア達を見るなり声を投げかける。シーティアは静かに黙礼すると応えた。

「ハッ。我が国より先に同盟を結んだランザックとバーンシュタインが迷いの森を抜けて合流し、ラージン砦東の平原でローランディアを挟撃せんとする作戦を事前に察したため、我々は迷いの森を起動させローランディア背後に回る予定だったランザックをバーンシュタインの後方へ移動させる事に成功しました。更に両軍へ私が攻撃を仕掛け、戦局を混乱させることでランザックとバーンシュタインの仲違いに成功。実質上、両国の同盟は破棄されたものと思います」

一息に話すシーティアの報告に、その場に居た誰もが息を吐き、頬をほころばせる。

「本当に、良くやってくれましたね。シーティア」

「お前達の働きが無ければ、ローランディアは確実に滅んでいただろう」

サンドラ、文官共にねぎらいの言葉をかけてくれる。しかし、シーティアは二人の言葉に首を左右に振って見せた。

「そのことです」

シーティアの続く言葉に、王も文官達も、誰もが重々しい空気を放つようになった。長い沈黙の後に、王は口を開く。

「そうか……！ 仲違いは成功したが、ランザック領土の小国ボルギナが独立宣言をし、更にその背後にはゲヴェルの影。その言葉が真であるならば、ランザックへ忠告をせねばならぬ」

「エリオットの事もあります。ランザックに向かいソコに居ると言う母・サンドラの師ヴェンツェル老にも合わなければ」

「……そうだったな。彼が何故バーンシュティン王リシャルと同じ顔をしているのか。何故、暗殺者に付け狙われているのか。手紙の中身は何だったのか、全ての鍵を知るのにはやはりヴェンツェルか」
ローランディア王アルカディウスは、自分達の状況をもう一度口に出して纏めると、シーティア達を改めて見据えた。

「では シーティア、ウォレス。よろしく頼んだぞ」

「ハッ」

その言葉に二人は深く頭を下げ、同時に応えるのだった。

砂漠に覆われた国ランザック。国土の大半が砂漠であるために、ほとんど資源は無く、人々はオアシス等を中心に街を建て、暮らしている。

その中で一際大きなオアシスの街が、今ルイセ達の前に有るガラシールズである。

「ハイ、到着！」

「うーん！ 何だか久し振りだなあ」

ルイセが元気よく告げ、ミーシャが鼻歌交じりにガラシールズの街を見つめる。そんな暢気な雰囲気は一瞬溶け込みそうになったのだが、ウォレスが表情を険しくして告げた。

「……おい。様子がおかしいぞ」

「え？」

ルイセとミーシャもそこで改めてガラシールズへの入り口を見なおしてみた。見張りの兵の数が増えている。

「お姉ちゃん……。コレって」

「な、何だか、前より見張りが増えてる？」

二人とも不安そうにしながらシーティアを見上げて来た。当のシーティアは静かにその口元に笑みを浮かべると、門番の所へ真っ直ぐに歩いて行く。

「止まれ」

ガキイツ 互いに長柄の斧を左右から伸ばし、交差させて行く手を阻む見張り兵。平時に比べ、屈強そうな兵士たちである。二人の門兵は不躰にシーティア達一行を見据える。

「……何者だ、お前達は」

シーティアは、ピリピリとした雰囲気の中、いつも通りの自然体で言葉を告げた。

「私達はローランディアの者よ。ガラシールズには前にも来たこと

があるけれど、ここまで嚴重な警戒では無かったわよね？ 何かあったのかしら」

「……ローランディアの者が何故ランザックに用がある？」

代わりに応えたのはシーティアの肩に座っていたピティである。彼女はシーティアのポケットから書簡を引っ張り出してきた。

「私達はローランディア王から書簡を預って来たのです」

「あの　ここに、手形もあります！」

ルイセがシーティアの傍らに立ち、通行手形も一緒に差し出す。

「コレは……！」

書簡と手形を見て、兵士たちは顔色を変えた。本物であることが分かったらしい。

「済まないが、私達の一存では決められない。この責任者に確認を取るから少し待ってくれ」

「分かりました。丁寧な対応、ありがとうございます」

「あ、ああ」

ピティがニツコリと屈託のない表情で笑顔を浮かべる。ソレに毒気を抜かれたのか兵士も思わず間抜けな声を上げてしまった。4人の内、一人の兵士が書簡と手形を持ってその場を離れて行った。

「直ぐに責任者を連れて来る。それまで少し待て」

「分かったわ」

シーティアがその言葉に頷き、ルイセ達と一旦街の入り口から離れる。そしてウォレス達に事情を説明しようとした。

その時　黒い影が、3人のランザック兵に向かって切りつけて

行った。ズバアッ

「何ですって!?!」

「!?!」

シーティア、ウォレスの二人の目を欺き、ランザック兵達の奇襲に成功した男はスキンヘッドに眼帯をしたバトルアックスの男。

「!?! グレンガル!?!」

「よう」

ピティが驚愕の表情を取りながらも声を張り上げる。ソレにグレンガルはニヤリと凄みのある笑みを浮かべて返した。

「……またアンタ……!!」
ウンザリとした表情のシーティアの隣でウォレスが声を張り上げた。

「奴は、ランザックの兵を皆殺しにして、その罪を俺達になすりつけるつもりだ!!」

「お姉ちゃん!!」

ルイセ、ミーシャも自分の杖を引き出し、構える。彼女達の目の前には、いつのまにかランザック兵を取り囲むように5人の野盗の姿をした男が現れていた。

「……チ!!」

シーティアは舌打ちをしながらグンニグルを具現化し構える。グレンガルが連れて来た5人の身のこなしは、ランザック兵よりも格上だ。

「愚図ついてる暇はない……!! 一気に叩くわよ、皆!!」

「よし!!」

「ウン!!」

「は、ハイ!!」

ウォレス達がそれぞれ言葉を返す中で、シュンツ これまで気配を意図的に消していたとしか思えない青年が動いた。

縮地法で一気にグレンガル達との距離を詰める。

「フン!!」

反応したグレンガルは思い切り戦斧を薙ぎ払う。しかし、青年カーマインはその一閃を屈んで、掻い潜り ザアン 足を止めたのは深手を負ったランザック兵の前。

彼等を庇うような位置で静かにグレンガル達を見据える。

「その顔……!! あの時バケモノ、じゃねえな……。なら叩きつぶしてやる!!」

グレンガルは戦斧を振り回しながら、カーマインに仕掛けて来る。

長柄を回転させながらの右胴、袈裟がけ、切り上げ、逆袈裟等、次々と斬戟を繰り出していく。

カーマインはソレ等を摺り足で鼻先をかすめるように躲していく。「お、お兄ちゃん!!」

ルイセが杖を構えてカーマインを援護しようとする。しかし、シーティアはカーマイン達の姿を見据えると告げた。

「ルイセ、今は目の前の敵に集中して!!」

「カーマイン様を信じましょう!!」

ピティにも言われ、ルイセはカーマインから、目の前に迫る5人の盗賊を見据える。

「分かった。私達の、邪魔をしないで!!」

瞳を閉じ、魔力を集中させて行く。ミーシャはサポート用の魔法を唱え始めた。シーティア、ウオレスが己の武器を片手に、5人の盗賊に斬りかかる。

「フン。大した見切りだが、素手でこのグレンガルの相手が出て来ると思っているのか?」

肩をすくめ、続ける。

「だとしたら、このグレンガルも甘く見られたもんだ」

「……」

カーマインはその言葉に、彼の傍らに落ちていたランザック兵の戦斧を拾い上げる。

「……お、おい……!?!」

ランザック兵が語りかけるのにも構わず、静かに一閃し構える。

「フン。そんな鈍らで、この俺が斬れるかよ!!」

次の瞬間、グレンガルが大きく戦斧を薙ぎ払う。同時、カーマインも戦斧を切り返した。ガキイツ 二人の中央で激突する。次の瞬間、グレンガルの斧が その穂先が爆発し、ズドオウツ カーマインをその爆風に飲み込んで行った。

煙の向こうには、何も見えない。彼等の闘う様を、シーティアは敵の山刀を捌きながら見ていた。

「ほう……！」

男 グレンガルは爆煙の向こうに立つ人影を見るや、嗤った。
「大した腕だな」

斧の部分こそ破壊され、ただの鉄棍と成り下がってしまったているが、カーマインは自分が纏う紅い軍服に汚れ一つ付けること無く立っていた。

「斧が爆発する瞬間に反応し、縮地法を使って捌いたか」
「すっごくいい！！ お兄様！！」

ウォレスが納得がいったという表情で笑い、ミーシャが素直に反応する。シーティアはそんな二人に向かって言った。

「二人とも、カーマインのことは、後にして！」

「分かっている！！」

「ハイ、お姉さま！！」

カーマイン一人で、グレンガルの相手をさせる。その動きに、グレンガルは嗤った。

「おいおい、このガキ一人でこの俺を止めるってのか？ 笑わせやがる。俺の力がこの程度だと思われるのは心外だぜ」

「……ゴチャゴチャ言ってるねえで、さっさと構えたらどうだ？」
淡々と告げて来るカーマインに、グレンガルは殺気を瞳に浮かばせる。

「そんな棒つきれ一本で、この俺を倒せるなんて思っちゃいねえだろうな？」

「……お喋りな男だ」

グレンガルの殺気を見ても淡々とあしらうカーマイン。その様にいよいよグレンガルの目つきが険悪なモノに変化した。

「……上等じゃねえか！！」

グレンガルは戦斧を頭上で旋回させ、遠心力が加わった一閃を次々と仕掛けて行く。カーマインは受ける事の出来ない攻撃に紙一重で反応し、躲していく。

「フン。まだスピードは上がるぜ！！ 堪え切れずに受けて爆

発するか、ナマス切りに刻まれるのか、好きな方を選びな！！」

それまでとは明らかに斬戟のスピードが変わる。だが

「……何だと？」

グレンガルの感覚では完全に捉えたカーマインの体。しかし、気がつけば空を斬り、カーマインの体の側面を通り過ぎて行く。

カーマインは摺り足で移動することは最早せず、その場に止まり、静かに 淡々と迫り狂う斬戟を斧の刃を外し、長柄の部分を鉄棍で捌いて行く。まるで触れるか触れないかという程度に鉄棍を斬戟に当て、その軌道をずらしている。

神技とも言うべき、見切りと受け流しである。

「コイツ……！？」

ビュンビュンツ 更に斧のスピードを上げる。攻撃の手を休めずに攻め続けるグレンガルだが、一向に当たる気配はない。

（コイツ、さっきの攻防で俺の動きを見切っていただけじゃねえ……！ 俺の斬戟の癖、動作、その全てを 覚えやがったのか！？ そんな バカな！！）

愕然として、事実気付くグレンガル。同時に あの時のバケモノを思い出す。自分を圧倒的な力の差で破り、フェザリアンの女王を連れ去った男を。

（あの化け物の様な、圧倒的な力じゃねえ……！ コイツのは、研鑽され修練された剣術だ。 実に見事で的確な動きじゃねえか、人間を 殺す為の！！）

自身も一流の戦士であるグレンガルだからこそ、この違いに気付いた。と同時に勝算が低い事も理解する。

「だがな ……！！」

ガアツ 地面に突き刺さる斧。同時に爆発。たちまちカーマインの姿は爆風の中に飲み込まれていく。

「斧は捌けても、この不規則な爆風からなる石のツブテと衝撃波までは鉄棍で捌けまい！！」

勝ち誇るかのように告げるグレンガルだが その表情はすぐに

苦悶のソレへと変わった。ドゴオウツ　グレンガルの腹に鉄棍が突き刺さっていたのだ。

「グフウ……！　何だと!?」

（まさか、コイツ　。見切ったって言うのかよ？　規則性のないツブテの動きや見えない衝撃波の振動を!!!）

気配のみで察し、捌く事が出来るモノが剣の達人には居ると言う。この男がソレを出来るとすれば、正に　劍聖の域だ。

体をくの字に曲げ、前のめりになった横顔に、唸りを上げた鉄棍の雑音が迫る。ガキイツ　戦斧の柄で止め、刃で斬りつける。ズバアツ　しかし、カーマインは背筋を伸ばしたまま、摺り足で後方へゆっくりと下がって迫る刃をミリ単位で見切って見せた。

戦斧は自身の起こした風で、カーマインの前髪を僅かに揺らすことしかできない。

「……へ。あの時の男とは違うようだが、とんだバケモノだな」
「……………」

カーマインの尋常ならざる動きと剣術に引きつった笑みを浮かべるグレンガル。対するカーマインは全くの無表情。静かに光る双眸がグレンガルをジッと見据えている。

「お兄ちゃん!!」

「お兄様!!」

ルイセ、ミーシャがカーマインを呼びながら、杖を構えて駆け寄ってくる。ドガアツ　同時に鈍い音が別の方向で起こる。

グレンガルがチラリとそちらを見やると、最後に立っていた部下がウオレスに倒された所だった。これで　グレンガルの部下は全滅した。

「残るは、貴方一人よ」

「降参しなさい!!」

シーティアはグレンニグルを構え、ピティがその傍らから強く宣言する。その言葉に、グレンガルは嗤った。

「フフ……！　この程度で勝ったつもりとはな。だが……！　確か

に今日の所はこれまでだ……！」

言うとグレンガルは掌からビー玉の様な大きさと形をした宝石を取り出した。

「アレは……？」

「コイツはな、リングウエポンに装着することで、圧倒的な力を付与する事が出来る精霊の石ってヤツだ」

シーティアの口から突いて出た疑問の言葉に、グレンガルはニヤリと笑いながら応える。掌に有る石は青白い光を発していた。

グレンガルはソレをシーティア達の前に掲げた。次の瞬間、シーティアが気付く。

「！ コレは……！！！」

「精霊石の力を解放すれば、こう言う事も出来るんだよ！！ じゃあな！！」

グレンガルから距離を取るように皆が下がる。瞬間、青白い炎がグレンガルの全周囲に生じ、爆発させた。

「！！ 皆、もつと下がって……！！！」

シーティアの声が響く中 炎と爆発の勢いは凄まじく、触れるモノ全てを消し飛ばしていく。ルイセ達はともかく、負傷したランザック兵達に逃げる事は敵わない。彼等が諦めかかったその時

「 禍事の闇に光、一つ……！」

力強く、良く通る声が響き渡った。同時 宙を網の目の様な鋭い斬戟が奔る。ズババアツ ソレ等の青い斬戟は炎とぶつかり、衝撃を完全に相殺した。

「 ……何だと！？ 」

ウォレスがその神技とも言つべき剣に、目を見張る。

(アレほどの爆発を、斬戟の衝撃波だけで相殺したっていいのか……)

…！？ カーマイン、いつの間にこれほどの剣を……！！！)

「 …… 」

シーティアがその傍らから、静かにカーマインを見据える。

「 ……お、お兄ちゃん………？」

「す、凄い……!!」

ルイセもミーシャも、余りの斬戟と展開に、自分達が助かった事を自覚できていなかった。まるで 狐につままれたようだ。アレほどの凄まじい炎が消し飛んだのだから。

カーマインは静かに自分の持つている鉄棍を見据えた。

「やはり、今のは無理だったか」

ボロボロと崩れ落ちて行く鉄棍。カーマインの手の中で跡形もなく崩れ去った棍をカーマインが静かに見送った。

そんな彼に、シーティアが一步近づき、何かを口にしようとしたところで、ガラシールズの街からランザックの指揮官が走って現れた。

「一体、何があったのだ!？」

その言葉に、傷を負ったランザックの兵達が事情を説明した。自分達にいきなり襲いかかった凄腕の男の話。そして、ここに居る者達に助けて貰ったことを。

「そうか。賊は逃がしてしまったようだ、仕方が無い」

指揮官はシーティア達に向き直ると、表情を穏やかに言った。

「君達のおかげで、部下に犠牲が出なかった。本当にありがとう」

「当然のことをしただけです。それで 書簡の話ですが」

「ウム。既に話は聞いている。さあ 通ってくれ」

「ありがとうございます」

指揮官の言葉に、シーティアは頭を丁寧に下げた。ソレを見ていたルイセやミーシャ達がにこやかに微笑む。

「これで先に進めるね!」

「ホント、一時はどうなることやら……って感じだったけど……!!」
そんな彼女たちの言葉に、皆が微笑むのだった。

45・異形と天剣

ガルアオス監獄。バーンシュタイン領にある終局を意味する監獄は、クレイン村の南に位置し、湖の上に不気味に立つ。

湖の周囲は荒涼とした荒野があるだけで、モンスターも徘徊しており、とても人が生きていける場所ではない。

その東側には、深い谷が連続して続く為、簡易だが木の板と綱でできた吊り橋をかけ、馬車などが通れるようにした荒野。

そこに 3つの影が所狭しと駆けまわっていた。

人の形をした影の持ち主 三人は全員が同じ顔をしており、もし服装まで同じであれば、見分ける事は困難だったであろう。

両の指の先に10振りの刃を持つ爪を装着した黒づくめの男

ルーチェの右爪の突き。ガキイツ 剛刀を両手で持つ男 シュワルゼは簡単にその刃を横に寝かせて受け止める。

「ッ!!!」

次の瞬間、空間をハッキリと切り裂く一閃がシュワルゼから放たれる。ガアオンツ ルーチェは爪の刃でその一閃を受けようとしたのだが、受けきれず後方へ弾き飛ばされる。

「チイツ」

舌打ちしながらも体勢を立て直そうとするルーチェの背後に音もなく、亡霊のように最後の一人 ラルフが現れた。鋭い唐竹がルーチェの側頭から振り下ろされる。

「コイツ !!!」

間一髪、縮地法で後方に見切り、反撃を仕掛けようとするが、その時にはラルフはシュワルゼを盾にするかのように距離を取っている。ルーチェの表情は、明らかに忌々しげだった。

「いい加減にしつこいな！」

異形の力 白銀の煙をその身に纏い、ルーチェは不機嫌に呻いた。力を解放した自分とここまで渡り合える シュワルゼという

同族。

その事実が、彼を苛立たせている。

（いくらロードと呼ばれる存在でも、ここまで力を開放した俺を軽くあしらえるものなのか！？）

シュワルゼは、因子を使わずにその剣術、体術一つで渡り合っ
て見せている。ラルフに関しては、最初だけ剣を交えてきたがシュワ
ルゼの剣術が圧倒的であることを悟るや、ソレを利用するように立
ち回り、ルーチエの攻撃をやり過ごしている。

（虎の威を借る狐が　！　忌々しい！！）

すぐに殺せるはずだった。ラルフの力がいかに優れていようと、
力を開放できなければ、開放している自分の方が全てにおいて上だ。
あつという間に血祭りに上げられる。

なのに、自分は未だどちらも殺せていない。

同族から最強と恐れられ、調子に乗ったシュワルゼも。親の同類
を殺し、その力を掠め取って尚、自分の親を付け狙う薄汚いラルフ
も。

その事実が　ルーチエの顔を悪鬼のごとく歪める。しかし、怒
気に顔を染めたのは彼だけではなかった。

「ガキが。この程度で一々騒ぐな、見苦しい！」
シュワルゼである。

戦いの中にあれば、常に不遜に笑うはずの彼の表情は、見たこと
もないほどに怒りに歪んでいた。ルーチエの態度は、同じゲヴェル
であるシュワルゼの目に酷く滑稽に映ったのである。

「何だと？」

「見苦しいと言ったのだ。自分よりも上の實力を持つ者を相手にし
たからと言って、何だその様は？　己を強者と謳い、力こそが全
だというのであれば、いかなる相手を前にしたとしても狼狽えるな
！　むしろ喜べ。ソイツを倒せたのなら、自分は更に強くなれるの
だからな！」

剛刀を八双に構え、シュワルゼは更に続ける。

「お前は、一々騒ぎ立て狼狽する自分の姿が強いとも思っているのか!? 笑わせるな　!!!」

「お前　!!!」
吐き捨てるかのような言葉にルーチエの殺気も強まる。しかし、シュワルゼは意に介さない。ギロリと睨み返す。

「　!!!」
最強の力を持つ同族。その怒りに満ちた睨みは、ルーチエを一瞬とはいえ怯ませた。それほどの　鬼気。

「どうやらお前は、自分より弱い相手としか戦ったことがない様なな? 強者との戦いの中で強さを学ぼうとはせず、己が強くあろうともせず。ただ、他者より抜きん出た己の力に酔いしれ　カーマインに足元を掬われた。そうだろう?　無能!!!」

次の瞬間、シュワルゼの体から白銀の炎が吹き上がる。

「　何だと、まさか!!!」

ウオオオオオオツ

彼の口から異形の咆哮が響いた、同時に　その影が彼の背に現れ、消える。圧倒的な力の顕現だ。大気が震え　向かい合うだけで、体が震えてくる。

「お前……!!!　わざと力を開放しなかったのか!?!」

気を抜けば今にも逃げ出そうとする体を無理やり押しとめ、ルーチエは精一杯の虚勢を張ってシュワルゼを睨み付けた。

いつもどおりの不遜で邪悪な笑みがシュワルゼの整った顔立ちに浮かぶ。

「このシュワルゼを相手にする貴様の腕がどの程度か、見てやろうと思つてな。だが　これ以上は我慢ならん。強さを語りながら、醜態を晒す未熟者よ　貴様の相手は、もう飽きた!!!」

「……!!!　何て、力だ……!!!」

あの時の、自分を追いつめたカーマインと名乗る同族と互角いや、それ以上の力の顕現に、ルーチエは金縛りにあつたかの様に動けなかった。

(鬼気だけで、これ程だというのか！ 最強よ……!!)

その圧倒的な力に、今までのらりくらりと攻撃を避けていたラルフが足を止め、シュワルゼに向き直った。

「！……なるほど。私との戦いで負った傷など、力を解放する支障にはならないということか。いや、それくらいの傷を負って戦ったこと等、過去に幾らでもあるか？」

力を全開にして顕現した異形に、隣にいたラルフは淡々とした口調で問いかける。シュワルゼは不遜に笑って答えた。

「このシュワルゼは生まれた頃より、最強。いかなる力も存在も、この俺を超えることはできん……」

「面白い。例えば、それが“全てのゲヴェルを殺す者”でも、か？」

その言葉と、同時にラルフは自分の中の力を解放した……。白銀の炎がラルフの身にも纏わりつく。

ウオオオオオオオツ

先のシュワルゼと同じく、異形の影が顕現した後、ラルフの気が莫大に膨れ上がる。その瞳は、金と蒼銀の間に彩られた鬼の眼。

「なんだと！？ 力を使い果たしていたんじゃないのか！？」

その余りにも圧倒的な力に、ルーチエが驚愕の表情でラルフを睨み付けた。気の大きさだけなら、シュワルゼにも匹敵する。

有り得ない。ゲヴェルの作り出した存在が、ソレを凌駕しようかという力を得るなど。あつてはならない。それなのにここに二人、いる。ゲヴェルを脅かす力の存在が二人。

狼狽するルーチエとは対照的にシュワルゼは、素直に関心したかのような表情で、ラルフを見据えた。

「……ほう！ 随分と大人しいと思ったら、このガキとの闘いの中で、力を回復させていたのか？ 流石だな！！」

「力に溺れた子どもの眼を欺いて傷と力を回復することなど、私にとっては造作もない。この程度で騒ぐな、シュワルゼ」

掛け値なしに褒めてくるシュワルゼに対し、ラルフの返答は素っ

気ない。本気でこの程度のこと、何でもないとやっている。

ルーチェは、改めてこの二人の異形の力を認識していた。同時に自分の置かれている状況について観察し始める。

ほんの僅かな時間で、形成は逆転している。ルーチェ自身を大きく上回る異形が、自分の親の影を色濃く纏い、その力を全身の炎へと奔らせる。

白銀の異形、ラルフとシュワルゼは金と銀の間に彩られた鬼眼で、こちらに同時に向き直る。

「最強」と「伝説」……！ 想像以上　か。確かに、お前たちの力を侮っていた様だ」

「力の差が分かったのなら、大人しく死ね」

ラルフは冷淡に冷徹な表情と声音で、炎を噴き上げる魔剣・真レヴァンティン　レーヴァティンの切っ先をルーチェに突きつけ、宣言する。

その光景をシュワルゼは面白げに見ていた。ラルフがどう倒すのか、それともルーチェがラルフの攻撃をどう逃げるのか……。それを、純粹に楽しんでいる……。

「舐めるなよ……？　ラルフ・ハウエル！」

ルーチェが10爪の刃　ガリアン・グロウを、右手を頭上に、左手を前方に突き出して構える。十の刃の煌きはラルフの瞳を照らす……！

対するラルフは魔剣を脇構えにし、腰をゆっくりと落とす……！ 凄まじい緊張感がその場を包んでいく。互いに攻撃を繰り出す瞬間を、作り出そうと。

「いたぞっ……！」

その時だった。

第三者の声が谷底に響き渡る、三人が同時に振り向くとその先には、鎧を着こんだ騎士団　バーンシュタイン軍の姿があった……。先にレティシア姫を救うためにシュワルゼが壊滅させた部隊と同じ

騎士甲冑の部隊。

シュワルゼは不遜に笑い、言い放つ。

「ほう？ 先ほど潰した軍隊のお仲間、か」

一軍の中に、シュワルゼが殺さなかつた御者の男が居た。彼は、この部隊を率いている將軍らしき人物に、こちらを右手で指示し訴えかける。

「將軍、あの男です！」

「……レティシア姫をさらい、我々の仲間を虐殺したのは、あの男か」

將軍と呼ばれた壮年の騎士は、シュワルゼ達を見据え その瞳を鋭く細める。

「ハイ！ ……隣の奴等も同じ顔……！？ 仲間か！」

バーンシュタイン兵の言葉に、ラルフは慄然として述べた。

「顔が同じだから仕方は無いが、コイツ等と一緒にされるのは嫌だな」

シュワルゼはニヤリと笑い、ラルフを見た。

「……ウルセエ奴らだ、どうする？」

「……」

二匹の異形は白銀のオーラを纏い、力を張らせていた。その圧倒的な力は、バーンシュタイン軍にも伝わる。一瞬で空気が重いものになっていった。

「……化け物……！」

その様を、バーンシュタインの兵の誰かが告げた。その言葉に、バーンシュタイン兵がザワついていく。

「……フン、虫けらよりは知恵があるか」

シュワルゼが不遜に笑い、ラルフは静かにバーンシュタイン軍を見る。その時、3人目の異形であるルーチエが動いた。

「！」

「フン」

ラルフ達が振り返った瞬間、ルーチエは猛スピードで崖を駆け、

跳び降りていく。一瞬ラルフはレーヴァティンを構えるが、静かに剣先を下ろし、谷底を静かに見送った。

「意外だな、見逃がすとは」

シュワルゼが言うと、ラルフは顔をこちらに向け、静かに返してきた。

「勘違いをするな。……取るに足らないと感じただけだ」

「フン。この虫けらの群の方が取るに足らん……というか、相手になるまい？」

シュワルゼはニヤリと邪悪に笑い、バーンシュタイン軍を睨み据える。

「そう……！ 私と貴様の勝負には、どうでも良いことだ」

だがラルフは静かにバーンシュタイン軍を睨むシュワルゼの前に現れ、そう言ってレーヴァティンを構える。そのラルフの行動に、シュワルゼはレギンスロータを構えることなく面白げに眺め言った。

「貴様が、それほどまでに身を呈し、守る必要があるか？ 見ず知らずの人間どもを」

「……彼らにも、帰る家……護るべきモノがある。国同士の戦争ならいざ知らず、こんなことで死なせられるか」

刀を構え、戦いを仕掛けようとするラルフの前で、シュワルゼの表情が思い切り変化した。思わず、ラルフが目を丸くするほどに。

「……！ ほう。愛……とかいうヤツか！」

そのラルフの言葉に、まるで子供が素直に感心を示すかのようにシュワルゼは言った。

「……。……人間の愛に興味があるのか？」

戸惑い気味にラルフはシュワルゼに問いかける。すると、彼は大きく「ウム」と首を縦に振って応えた。

その余りの無防備さに……無邪気さに、ラルフは闘志を失った。

レーヴァティンの炎が消え、元のシエルオープンナーへと変化する。シュワルゼは剛刀レギンスロータを背中の中納め、興味津々と

いった感じで問いかける。

「何故、テメエは愛を知っている？」

「人に育てられたからだ」

「それで理解できるモンなのか？」

目を丸くして首を傾げる幼子の様な仕草に、言葉に　ラルフは
思わず穏やかに笑って応えた。

「……………ああ」

「ムウ……………！」

ラルフの答えにシュワルゼは眉間に皺を深く刻み込み、腕を組んで考える。……………しかし、しばらくして覗き込むように、降参したかのようにラルフを見る。まるで宿題を解けない生徒の様に。

「……………サツパリ解らん……………。何故、人間に育てられたからと言ってそんな訳の分からんモノが理解できるのだ？」

「変わった奴だとは思っていたが……………、何故愛を理解したい？」

ラルフはため息気味にシュワルゼを見つめ問いかけた。先ほどまであったとてつもない力の持ち主と同一とは、とても思えない無害ぶりだ。

だが　ラルフが警戒を解こうとするや、シュワルゼはニヤリと
いつもどおりの不遜な笑みを浮かべた。

「分からぬこと……………理解できぬことだからだ。理解ができぬということはつまり、未知のモノ……………！　闘いの場におけば未知即ち、無知ほど己の力を弱くさせるモノはない」

「……………闘いのため……………か。お前にとつて闘いとは何だ？　ゲヴェルを殺す手段か？　他者を踏みにじる行為か？」

「生きる術……………、生き方そのものだ」

そう言い切るシュワルゼの瞳は、とても純粹で……………それでいて、
不遜であった。

その時、バーンシュタイン軍に動きがあった。二人の異形がこち

らに攻撃を仕掛けることもなく、話し込んでいるだけであることを理解し、それぞれに武器を構える。

「奴らは、内輪で話をしている。今の内にかかるのだ、レティシア姫の居所を吐かせる！ 少なくとも、こやつらの首を獲らねば、我らに帰る家はないぞ！！」

「……おおつ！！」「」

バーンシュタインの強固な軍勢が隊列を編成し、一斉に身の丈はある両手剣を抜いて、二人の異形に向かってくる。

それまで穏やかな輝きだったシュワルゼの瞳に不遜でいて強烈な殺気の光が宿る。

「フン、話の最中に……！！」

「よせ！！」

ラルフが止めるよりも早く、シュワルゼは納めた剛刀を鞘から抜き両手で大きく振りかぶる。

軍勢に向かいニヤリと笑うとシュワルゼは、剛刀を振り下ろした。「よく見るがいい、虫けらども。コレが 力だ！！」

ズバアツ すさまじい斬閃は、その場にいる皆を瞠目させた。

地面に向かって放たれた一閃は、地響きを立てると同時に、巨大な土煙を発生させる。

「な……！！？」

「……グウツ！？」

思わず自分たちの顔を庇い、嵐のような衝撃と土煙からその身を守る。やがて 煙と風は収まり、バーンシュタイン軍はゆっくりと顔をシュワルゼに向けた。

「な、何だと……！！？」

バーンシュタイン軍の指揮官は、思わずそう零してしまった。周りにいる部下に至っては、白昼夢でも見たかのような表情で呆然としている。

無理もない。煙が晴れ、彼らの眼に映ったのは、バーンシュタイン軍とシュワルゼ達を隔てる為に底知れぬ巨大な谷が生まれていた

のだ……。

その衝撃の事実にも、ラルフさえも目を見張っていた。

コイツ……地面を断った……？

「なんて奴だ……！」

ラルフをして、そんな言葉を吐くしかないほど、シュワルゼ・ロード^男はデタラメだった。谷の向こう岸にいるバーンシュタイン兵たちは、まるで夢でも見ているかのように、地面を断った男と、生じた谷を見比べる。

「……これで、邪魔は入らん」

シュワルゼは自分の作った谷に向かって一つ頷いた。

「とんでもない奴だ。会話を邪魔されたくないからと言って地形まで変えるとは……！」

「俺と、このレギンスローターならば、可能だ」

胸でも張りそうなシュワルゼの言葉に、ラルフは頭を抱え込みそうになった。がその前にふと、気になることをシュワルゼに尋ねた。「……何故、斬らなかった？ 地面を断って谷を作る位なら、人間を皆殺しにした方が早いんじゃないか？」

そんなラルフの言葉に、シュワルゼはフンと鼻を鳴らして答える。「俺は、弱い者イジメは好かん。ただ、それだけだ」

それ以外にはないとシュワルゼは言いきる。ただ純粹に強さのみを追い求める異形……。その考えや生き方は彼にしかできない。決して善ではないが、悪とも言えない……。

それが、シュワルゼ・ロードという異形の青年。

ラルフ・ハウエルはこのとき、シュワルゼという異形の本質を理解した。ラルフは初めてシュワルゼに心から微笑んだ。

「フフ……なるほど！ ゲヴェルの中にもこんな奴がいるのか……。デタラメだが、どこか気持ちのいい奴だ」

「？ ……誰のことを言ってる？」

ラルフの言葉に、首を更にかしげるシュワルゼ。ラルフは素っ気なく告げた。

「さあな……。愛のことを知りたいんだっただな？」

ラルフの言葉にシュワルゼは「ウム」と力強く頷いた。ラルフは顎に手をやり、しばらく考え込んでから、一つ提案した。

「知りたければ、人と共に生きてみることだ。……しばらく共に在れば、愛がどんなものかは解る」

「……ほう……！　そうか……」

その言葉に、心底感心したかのように答えるシュワルゼ。そんな彼を見据え、ラルフは静かに続けた。

「どんな人間にも愛はあるが……、一番簡単に学びたいのなら街や村など、人が大勢生きる場所で暮してみる。人の生活、社会、常識を学んだのなら、自然と理解はできる……愛と言うものをな」

「……よし！　この近くに街とか村とかはあるのか？」

すぐ様にも向かおうとするシュワルゼに、ラルフはクスリと笑って言った。

「ああ。ここから北に向かったところにクレインという村がある。私はそこへ行くつもりだ。お前も来るか？」

「ウム……！！」

即座に頷いてくるシュワルゼに苦笑を返しラルフは、ウオレスが利き腕と両の眼を失ったクレインという村へ向かおうとした……。

突如目の前に現れた谷底に行く手を遮られたバーンシュタイン軍。しかも異形二人は、何処かへと去ろうとしている。このまま指をくわえているわけには行かない。

指揮官は声を張り上げた。

「退く道はない……！　奴らを殺さねば、我らが国に攻められよう……！　たった二人の人間に逃げた負け犬としてな……！」

「……し、しかし！！」

部下の誰かがそんな声を上げる。当然だ、相手は自分たちの力を、理解を遥かに超越した　化け物なのだから。

だが、そこに言及すれば、戦など挑めるはずもない。だから、彼はあえて的をズラした答えを告げる。

「橋をかける工作兵は部隊の中にいる。彼らが橋をかけるまで、魔法や弓にて異形の足を止めるのだ！」

「はっ！」

指揮官のいつも通り毅然とした言葉と態度に、彼らはいつも通りの敬礼をして答えを返す。部隊の混乱は収まった。弓兵、魔道兵が次々にシュワルゼ達を攻撃しようと弓を番え、魔法を唱える。

「工作兵は速やかに橋をかけよ！」

「おお！」

一斉に軍としての行動を取り戻したバーンシュタイン軍。その見事な指揮を見ながら、ラルフは訝しげに見やる。

「優秀な指揮官のようだが……。ならば何故こんな無謀な真似を」

指揮や判断は見事だ。しかし、シュワルゼの人の力を見て、挑んだところで勝ち目など無いと考えるのが普通だ。まともな判断ではない。

「……地面を断ったことに、何か仕掛けがあると見たか？」

ラルフはジツと指揮官の様子を窺う。通常ならば見えない距離だが、ラルフの強化された瞳は、相手の顔が手に取るようにハッキリと解る。

指揮官は読み間違えていない。明らかに負ける戦を仕掛けようとしている。

「何故、そんなことを……！」

ラルフが苛立つように言うのと、同時に。またしても荒野に第3者の声が響き渡った。穏やかで、やさしそうな男の声。

「無駄な足掻きはやめた方が賢明ですよ」

バーンシュタイン軍の後ろから静かに、しかし、全員の耳に届く声はかけられた。

「何者だ！？」

バーンシュタイン軍の指揮官が振り返り、問いかける。背後には、

二人の青年が立っていた。一人はシルバーグレイの髪をした女と見違えるほど美しい男、もう一人は長身で、髪の色は暗いグリーン、眉間にしわを寄せた不機嫌そうな面立ち。

二人とも異なる美形だが、両者には共通する所があった。瞳の色と見たこともない軍服である。黒を基調とした軍服は、ローランドイア、バーンシュタイン、ランザックのどの軍でもない。

「……ゲヴェル。いや、融合体か」
「ほう……？」

ラルフが鋭く、シュワルゼは面白げに反応する。左眼が金、右眼が蒼銀の二人組に、その二人は、ラルフとシュワルゼに明らかかな殺気を送ってきていた。

彼らは眼の前のバーンシュタイン軍を気にもしていない。まるでアリの群になど興味はないと言っているかの様だ。

「アレが報告にあつた面白い物ですね、レイドさん」

シルバーグレイの美青年の言葉に、レイドと呼ばれたダークグリーンの男は不機嫌そうな顔を軍の向うにいるラルフとシュワルゼに向けた。

「……どこかで見たような顔だな」

低く、無愛想な声音で返す。まるで怒っているかのような言葉使いに、しかし美青年は気にした様子もなく返す。

「コレも報告通りですね……。強さの方はどうでしょう、僕達を楽しませることができますかね？」

「ソレを試すために来たのだ。議論は四万秒と積んだとしても不毛だ」

「それもそうです」

レイドと呼ばれた男の言葉に、青年はにこやかに笑いながら自分の右手にある長槍を握りしめた。この槍、刃の付け根の部分に鎖がついてある。

レイドは自分の長刀を左手に無造作に握りしめながら、青年に対し、ポツリと告げた。

「貴様の槍術で、試すがいい」

「ゆずつてくれるんですか？」

キョトンとした眼差しで青年はレイドを見る。彼はアツサリと答えて見せた。

「討ち洩らしたなら、俺が狩れば済む」

「……では」

と青年はそのにこやかな顔を好戦的に、酷薄な笑みに変え、ラルフとシュワルゼを睨み据えた。その態度に、シュワルゼはニヤリと笑う。

「……フン、大した自信だな？」

「シュワルゼ。すまないが、場所を変えるぞ」

シュワルゼは不遜に笑って青年を見返し剛刀を構えるが、ラルフがそれを止めた。シュワルゼは興味深そうにラルフを見る。

「……？ あの軍勢が邪魔か？」

「余計な死人を出すことはない。人間は……ゲヴェルには関わらない方が良くんだ」

静かに　しかし強く言いさられるラルフの言葉に、一瞬シュワルゼはジツとラルフの瞳を覗き込むかのように見据えた。

「……。俺にはどうでも良いことだが、まあ良かるう。大した手間でもない」

ややあって、シュワルゼはそう答えるのにこやかに笑う青年を見据えた。

「貴様等もソレで良いな？」

青年は微笑みながら槍の柄を両手で握りしめる。

「その必要はありませんよ」

「なに？」

その微笑みに殺気を感じ、ラルフは思わず目を見開いた。

「貴様　……！」

青年は、黒柄の幅広い槍をこちらに向けて構える。正確にはこちらと彼らの間にあるバーンシュタイン軍に向けて。酷薄に笑み、

告げた。

「ゴミは掃除すればいい。彼らの死に場所は　ここですよ」

その言葉に、シュワルゼは傲岸不遜な笑みを浮かべる。

「ほう……？　たかが虫けらが、この俺の言葉を無視する、か」

ビュンツ　大きく、右手の槍を薙ぐ青年……。すると、槍の刃の部分が柄から離れ、鎖に縛られた刃が一斉に軍勢に襲いかかった。

その鎖は伸縮自在のようにどこまでも伸び、その刃は意志を持って
いるかのようにバーンシュタイン軍に　人間の首に襲い掛かる…

…！

「え……？」

彼らに発せられるのはそこまで……、次の瞬間には千の首が飛び
血の雨が降る　ハズだった……。

ガギギンツ

彼らの首が飛ぶより早く剛刀を持った男　シュワルゼが軍の前
に現れ、同時に青い斬閃が宙を網の眼の様に疾った。

「！」

鎖刃は弾き返され、槍の穂先の部分が青年を向いて猛スピードで
弾き出された。

「おっと、これは驚いた」

ガシインツ

冷静に柄を使って刃を上へと弾き、カシインツ　元の槍へと戻す。
とその時、青年の表情が変わった。

「何……！」

目の前に炎の刀を振り被ったラルフが音もなく忽然と現れたのだ。
ラルフは刀を振りかざしていたがソレを振り下ろすことはなく、
宙を泳ぐかのような流麗な蹴りを放った。青年がそれを槍の柄で止
める。

ドゴオツ　次の瞬間には、遙か後方へ弾き飛ばされていた。地面
を足が取り戻した瞬間、体勢を立て直す。

「……これほどとは！」

優雅に着地したラルフを見、青年は微笑ではなく、ハツキリと笑った……！ 狂気に満ちた闘いへの興奮が創らせた笑みを　ラルフへ向ける。

「僕はクオル・ラ・キュリオネス。かつてこの世界を支配したグロ・シアンの王族。彼らが作り出した近衛騎士　。 “天剣”の一人です」

青年の言葉にラルフは静かに氷のような無表情で炎の剣を構えた。

一方、天剣と名乗ったクオルと同じ服を着た男　　レイドは静かにラルフとクオルを見たまま、口を開いた。

「何故、斬りかかって来ない？」

彼の背後には、いつの間にか剛刀を持つ男　　シュワルゼが立っていた。彼はつまらなさ気に答える。

「背を見せた相手を斬るのは好かん。例えそこに罠が仕掛けられていてもな」

「……気づいていたか。見た目よりは頭が回るらしい」

静かに背後に向き直るレイドに対し、シュワルゼは見下すような笑みを浮かべた。

「勘違いするな……。この俺にとってテメエの罠など無いも同然。ただ、背を向けた者を斬るのが好かん。それが理由で貴様は生き延びただけよ」

「……なるほど、無駄口を叩くのも、俺が生き延びた理由か？」

その言葉にシュワルゼは強く、不遜に言い放った。

「少しは楽しませろ……！　ラルフとの決着を後回しにしたのだ、ソレ位はできるのだろう？」

「いいだろう……。我が力思い知るがいい」

レイドは長刀を腰の辺りにもつてくると鞘に納めたまま、鯉口に左手の指をかけ右手を柄に添える。

「我が力……貴様を千を超える木端に引き裂き、その死を持って証

明してやるう。レイド・ハーケン。我が名にかけて」

言うと、男……レイドは鞘に入れたまま、長刀を構えるレイドに、シュワルゼは目を細めて言った。

「面白れえ……！ 居合とか言うヤツだな」

シュワルゼは剛刀を八双に構えて笑う。

その様をバーンシュタイン軍は、少し離れた所で、ただ呆然と見るしかできなかった。

46 不穏な存在

ガルアオス監獄東に位置する荒野で、バーンシュタイン軍が立ち止まっていた。彼らはそこで信じられない光景を 戦いを目にしていた。

のちに彼らはこう語る。

この世には、決して手を出してはならない相手があるのだ、と。

白銀の炎を見に纏い、睨み合う4人の戦士。

炎の魔剣を持つ異形は鎖槍を持つ青年と。身の丈を超える剛刀を持つ異形は同じく、身の丈に迫る長刀を持つ男と。

極度の緊張感が、辺り一面を包み込む。

「あの二人、谷を一足飛びで越えてきたというのか……！」

「だが、何故私たちを庇う？」

先の異形の行動に、バーンシュタイン軍が混乱を始めた。自分たちが倒すべき敵が、自分たちを庇ったのだ。当然のことだろう。

しかし彼らの混乱を無視し、次の瞬間にラルフとクオル、シュワルゼとレイドが激突した……！ ドゴオウツ 四つの強大な力により、大気と大地が激しく震える。ちっばけなアリの軍など、手出しできようはずもない強大な力と力。

肉食獣のように獰猛な笑みを自身の美貌に刻んだクオルに対し、殺人鬼のごとき瞳のラルフが冷たい表情で、炎の刀を振り被る。

「フフ……僕のゲイボルグが喜んでいきますよ……！ 貴方のような強者と闘えて……！」

「……闘いに喜びを感じた事などない。勝つか負けるか、生か死か……。それだけだ」

超神速で動き、宙を無数に疾る斬閃。ギギインツ 火花が散り、炎が、斬閃が煌く。ガキイツ 槍と刀がぶつかり合い、ラルフはア

ツサリとクオルの懐へ入り込んだ。ゴオウツ 刀を振り下ろすラルフに対し、クオルはその拳をレーヴァティンに叩きつけた。

「……………」
自身の右腕を焼かれて尚、クオルは狂気 of 笑みを顔に浮かばせ、ラルフとの距離をとると、寸分たがわずにゲイボルグを横に薙いだ。ズバアツ 斬られたラルフは 影。

「……………！！」
このとき、ラルフはシュワルゼと戦った時に見せたレーヴァティンにすでに変化させていたのだ。炎を纏った鋭く迅き斬閃。

クオルは咄嗟にゲイボルグを盾にするも、ラルフの横薙ぎは右手一本でクオルを弾き飛ばし、炎は容赦なく、彼の全身を覆い尽くした。ドゴオウアツ 派手に背中から叩きつけられるクオル。

ラルフはその圧倒的な魔剣を手にし、凄絶な鬼気を全身から漲らせながら、静かにクオルを見据える。

「……………！！」
煙が晴れたとき、クオルは百を超える数に増殖していた。

「……………残像？ ……………“天剣”とかいうのは伊達ではないらしい」

「僕の奥の手の一つ、分身による全方位連続斬撃法です」
百人のクオルは思い思いの型を取りながら鎖槍を構え、振りかぶる。

「千斬閃……………貴方に破れますか？」
凄絶な笑みを浮かべ百の槍が、ラルフへと襲いかかった。

「……………千だろつと、万だろつと」
対するラルフは、腰だめに構え、両手で柄を握りしめて脇に構える。

「相手がなんであろうと……………！！」
静かにつぶやきながら、鬼気を纏い、炎を猛らせ ! ドクンツ
「敵は 斬る！！！」

爪先立ちになって地面を押すようにして トオンツ レーヴァティンを振り被って、迎え撃った……………！！

一方のシュワルゼとレイドとの闘いは、激しい技や剣を繰り出しあうラルフ達と違い、静かであった。互いに一步も踏み出さず、睨みあう。

ドオンッ 初撃で、シュワルゼが笑みを浮かべながら突っ込むと、レイドはすかさずその長刀を抜刀した。ビュンッ

シュワルゼをして、手が霞んだように見えるほどの一撃。しかし、シュワルゼはそれに反応し、袈裟斬りをぶつけた。ドゴオッ 炸裂音がした後 レイドが後方へ吹き飛ばされ着地した。

シュワルゼの一撃は、レイドの抜刀術を上回る威力であった。だといふのにレイドは表情を変えない。

シュワルゼはその表情を見、背後に一瞬目をやるとその眼を細め、笑みを鋭くした。

ズガアッ……ッ

彼の背後の景色が一瞬後、切り取られていたのだ。山が、木が、岩が、雲が……、世界が斬られたのだ。

唯一、斬られていないのは、シュワルゼ・ロード本人が立つ場所だけであった。

「……リヴァイアサンに喰われなかったか」

「そんなナマクラに俺が喰われるものかよ……!!」

両者はそう述べあい、また構え直した。

「……千に裂け散れ」

レイドはそう述べると、同時に右手を奔らせた。ズババアッ 二連抜刀、狙いは首と胸。ギギンッ 軽々とレギンスローターを縦に構え、首に放たれた一閃を。手元を寝かせて胴薙ぎを受けるシュワルゼ。

「貴様の剣は、その程度か ！」

そう告げるシュワルゼにレイドはボソリと呟いた。

「言い残すことはソレだけか？」

「ぬ？」

レイドの手と刀の柄が消え、白刃が宙を疾り、網の目を描き、やがてすべてを青白い線が覆い尽くしていった……。ズバババアツ目の前に映るすべての世界を青い斬閃が飲みこんでいく……！

その技を受けきれぬ者など、この世に　いない。　だが
「何　？」

レイドの表情が変わった。自信の描いた青白い世界を、さらに強く太い青白い斬閃が疾り、それが網の目のように描かれて増えていった。

次の瞬間、ガガガガアオツツ　レイドの右手に凄まじい衝撃が疾り、自身も後方へ飛ばされる。ズザアツ　着地し、足を引きずるも、決して目を前方から離さない。いや、離せなかった。

そこに自分の最高の技を破った斬閃を放った男　シュワルゼが立っていた。彼はいつもどおり剛刀を肩に担ぎ、不遜に笑い、レイドを見ている。

「スピードは大したモンだ。……だが、ソレで終りか？　世界を斬れても、たった一人の敵を斬れぬでは、話にならない」

「……本物の化け物か　！」
スツとレイドは立ち上がり、静かにシュワルゼを見据え、言った。
「クオル！」

その男、クオルは分身術を発動し、ラルフ・ハウエルに斬りかかっていた。

ラルフもまた、コマンドメンツの力をゲヴェルの力で無理矢理補い、10人にまで分身を発動している。互いに放つ全方位斬撃。数では圧倒的にクオルが上回る。

ガガガガガアツツ　バキィツ
「　クツ！？」

だが、10人のラルフは百人のクオルの動きを遥かに上回り、クオルは後方へと弾き飛ばされて、一人に戻った。

「ク……ククツ　貴方は　本当に僕を楽しませてくれる……！」

「まだ闘うつもりか？」

「止める必要性を感じない。もう一つの僕の技を見て頂こう」

そう言って槍を構えるクオルに、レイドがもう一度呼びかける。

「クオル！」

戦いを中断され、不機嫌そうにクオルはレイドを見据えた。

「この楽しいときに、何ですか？ レイドさん」

「この闘い 長引けば我々が不利だ。一気に終わらせるぞ」

そんな彼に対し、レイドは取り合わずに自分の言葉を告げた。そう聞いてクオルは思わず、自分の技を破ったラルフを見据える。

「……と言いますが？」

クオルが何か言おうとするのを遮って、レイドは述べた。

「一気に叩き潰す……。俺の合図で、極限の一撃を放て。準備に十秒以上要するとは言うまいな？」

それは、あからさまな挑発だった。それは、とても心躍る挑発だった。

「いいですよ。やりましょうか」

自らの限界の試し合い。誰がより強大な魔法を放つか、誰がより強力な技を放つか。天剣同士による競争だ。

二人だけで話を進ませたことに、シュワルゼは不遜に笑い、ラルフは不快に吐き捨てる。

「……フン、大した余裕だな？ 面白い！」

「私は、不愉快でしかない！」

彼らは同時に気を高め、レイドとクオルの天剣達に対し、それぞれ剣を構える。

「……本当に……貴方は素晴らしい！」

クオルは高揚感に包まれ、そしてそれは減衰することがなかった。あらゆる技を駆使し、あらゆる奥義を出し尽くせるという感覚は快感さえ、彼に与えていた。

闘いの中で生まれる新たな連携は新たな自分の発見として感じ、それらを駆使してもなお不動として立つラルフが、自分がまだ強く

なれるという可能性を教えてください。

4人の中で、先に動いたのはレイドであった。シュワルゼに向かい、先程の無数の斬閃を　青白の世界を紡ぎだす……。

「同じ手を！」

シュワルゼはニヤリと笑い、連続攻撃改を放つ。一瞬で、レイドの白刃の世界をズタズタに切り裂く青き斬閃。しかし、シュワルゼの鋭い感覚は、レイドの技がまだ終わっていないことを感じていた。

来る……！

シュワルゼが切り裂いた白い世界は、空气中を漂う本当に小さい氷の欠片となった。

「我が牙　リヴァイアサンの氷は、世界を喰らう。例え斬れたとしても、その程度では壊れぬ……。さあ、彼岸に送ってやろう」

それは、シュワルゼを捉える氷の檻。空気を氷散が包み込む。レイドはそこへ、ソウルフォースのエネルギーを溜めた刀にて、突きを　魔法剣を放った。

「インクルーズ・ソウルフォース！！」

「　シュワルゼ！！」

ラルフが思わず、叫ぶ。

青い光の球　ソウルフォースは、シュワルゼを包み込んだ。薄い氷の膜を反射し、瞬間、光が周囲のすべてを掻き消した。

氷の膜の内側へと、ソウルフォースの威力は集束し、対象を全方位から押し潰していく。対象者は悲鳴を上げることさえ許されず、巨大な光の塊に叩き潰されていく。

ラルフが、シュワルゼに気を取られた瞬間、クオルもまた分身術を仕掛けてきた。クオルは　壮絶な、興奮しきった凶暴な笑みを浮かべていた。

クオルをして、こんなことをするのは初めてだ。はたしてうまくいくのか、いかないのか。だが、レイドはあの絶大なシユワルゼの動きを完全に封じ、しかも全方位からのソウルフォースによる攻撃と言ふ凄まじい技を実現させた。

あれほどの大技をしてのける者が、この世界に果たして何人いる？
「いいさ、やってみせようさ！」

百のクオルが、その10倍の千に増える。正に 自分の限界を更に越えようとする動きであった。

千のクオルの槍・ゲイボルグが、青白き光を纏う。

ソレは ソウルフォースではないが、同じ種類の技だ。マジックアローとソウルフォースの中間に位置する魔法ブラスト。

クオルは、それを魔法剣として、千発同時にラルフへと放った。この地のすべてを消し飛ばして余りある力。

「サウザンド・ブラストアタック!!!」

二つの絶技が同時に発動した。当然、反応するのも、同時である。ラルフは、両手にレヴァンティンを持ち、八双に構えた。グアオウツ 紅の炎が刀身へと纏わり、刀自身は青白い輝きを放つ光へと転ずる。

「 ウオオオオオ!!! 」

その背に異形の影を背負い、白銀のオーラを放つ。集約された力を極大まで高め、千のクオルに向け、放つ!

「ヴァハムート・ソウルストライク!!!」

千のブラストを受け、紅の龍を象った炎が爆発し、螺旋を描き、レヴァンティンにまとわり、紅の刀身を前方へ振り切って生じた青白い光線。

ズガオウツ 千の光と、龍炎を吸収した光線が宙で激突した。クオルが凄絶な笑みを浮かべ、ラルフは冷徹に、互いを睨みあう。次の瞬間、千のクオルが驚愕の表情をとった。

「コ……コレは……!?!」

ウオオオオオオ!!!

ラルフの背後に見える白銀の異形が吼え、ソウルストライクが千のブラストアタックを押し返して行く。

「幾千の光を束ねても、伝説の魔龍の炎は破れない」

「バ　バカナ!？」

ズドオツ　千の光が爆散し、ヴァハムートソウルストライクが炸裂した。クオルの声すらも消す、白き闇。千の光を喰らう伝説の炎。青い光の矢は紅の炎へと転じ、クオルの体を中心に天へ火柱を立てた。その炎が　紅の龍を象り、ラルフの背に背負った異形の咆哮に応えるように吼え、爆散した。辺りを　白い闇が覆い尽くして行く。

「……何だと」

レイドが、驚愕の瞳で白銀の鬼と化したラルフを見据える。伝説の魔龍ヴァハムートの炎を操る、白銀の鬼を。

彼がラルフに気を取られたその時、もう一人の鬼が動いた。

「!?! ムッ」

レイドが自身が放った光の球体を、その中に封じ込めた鬼を見据えた時、ソレは起こった。光の中で、シュワルゼが　鬼が、剛刀を振り被ったのを。

「……ウオオオ!!!」

鬼の咆哮。一瞬後、剛刀が横薙ぎに斬り払われ、青白い炎が、シュワルゼの周りを斬閃が一周し爆発、無数の斬撃が生じ全てを薙ぎ払う。ズガオウアツ!

完全にレイドの技を破った次の瞬間、シュワルゼはニヤリと笑い、縮地法で一気にレイドに斬りかかった。

咄嗟にレイドも対応し、抜刀術を放つ。ズバアツ　交差法で斬り合いすれ違う両者。

「!」

ズバアツ　血が舞いあがり、片膝をついたのは　レイドの方で

あつた。

「馬鹿な　！　我が一撃が……！」

シュワルゼはニヤリと笑い、レイドを見下ろして言った。

「いかに速かるうが、鋭かるうが……脆くては勝てん。ソレだけのことだ」

煙の向こうから、炎を纏った刀を手にラルフがシュワルゼの方へ歩いて来た。

「……無事だったか」

「当たり前だ、この俺を誰だと思っている」

「そうだな。……さて、コイツ等をどうしたものか」

ラルフとシュワルゼはそう言い合い、倒れ伏したクオルと、片膝をついて動けないレイドを見下ろす。

その時、流麗な　空気を澄み渡らせるかのように聞き心地の良い美声が、凜とした口調で発せられた。

「　成程。クオルとレイド。天剣の二人をして勝てないとは……、父上が気にするだけのことはある」

ラルフとシュワルゼは同時に声の主を向き直った。

そこに立っていたのは二人の女だった。一人は穏やかに微笑みを浮かべ、亜麻色の柔らかなウェーブがかかった髪を背中まで伸ばし、右眼が蒼銀、左眼が金色の瞳を持った美しい女性。

その女性を従わせるかのようにした、腰まで伸ばした青い髪……。陽の光にあたるとソレは紫色に輝く。その瞳の色は右眼が翡翠、左眼が金色のもう一人の女性。彼女は冷徹にシュワルゼとラルフを見据える。

「……姫様」

レイドが、クオルがうずくまっていたまま、青い髪の女性に言う。

「フフ、勢い込んで出て行った割に、呆気ない幕切れですね」

亜麻色の女性が、代わりに応えた。

姫と呼ばれた青の女性は静かに、シュワルゼとラルフを見据えている。

「……その瞳　グローシアンか……！」

「ほう……、俺達の力とグローシアンの力を併せ持つとはな……！」
ラルフ、シュワルゼは女の翡翠を見据え、言う。美女は静かに言った。

「我が名はセフィロス・オストウリア・ヴェンツェル。覚えておいてもらおう、下郎」

「そして私は、シャクティ・エアリフォン・リヴィン……。セフィロスの片腕にして、天剣の一人です」

名乗る二人の女に、二人の鬼は同じ質問をした。

「……で？」

「何の用だ？」

ラルフ、シュワルゼともに無碍のない言葉で問う。すると、セフィロスがフと微笑し、言った。

「剣を取りに来ただけだ。折らせるには、まだ早い」

シュワルゼは途端に女　セフィロスから視線を外し、にべもなく告げた。

「そうか」

ラルフも冷淡に述べる。

「さつさと連れて行け」

その二人の態度は　たかが、異形のまがい物にしては度が過ぎている。全てを支配するグローシアン。その王族であるセフィロスを前に、そこまで無礼な態度を取ってただで帰すわけにはいかない。

「……少し口の利き方を教育するべきですわね」

すっと、自分の指に嵌めたリングを撫で、微笑を浮かべたシャクティが前に出るのを、セフィロスが止めた。

「セフィロス　？」

問いかけてくるシャクティに構わず、セフィロスはラルフ達を見据えた。

「早々に退散するでしょう。まだ、貴様らと闘う時では無いようだ

「からな」

「　　まだ、か？」

「そう　　。　　まだ、だ」

そう言つて、グローシアンであり、ゲヴェルでもある女性は三振りの剣を従え、黄金の光を発生させる。その光は　　テレポートだった。

光が消え、残されたのはラルフとシュワルゼ。そして　　呆然と事の成り行きを見ていたバーンシュタイン軍だけだった。

「……　　とんだ時間の無駄だったぜ」

「まったくだ　　」

シュワルゼとラルフは、そう言い合いながら街道を歩き始める。残されたバーンシュタインの軍勢は白昼夢を見ているような顔で、誰一人動けなかった……。

と、不意にラルフが足を止め、消えた女がいた場所を見据えた。

アレが……キールのいつていた完全体　　か？　　……シーテ

イア、彼女は……！

「何をしてる？　　早々と行こうぜ」

「……　　ああ」

シュワルゼに伝え、ラルフはそこで考えを中断した　　。

それから、シュワルゼとの戦いでボロボロにされた自分の服を見、一つ苦笑すると。

バサアツ　　どこからか、黒いマントを出しソレを羽織った。

すると、カーマインと初めて闘った茶色の胸当をつけた、黒ずくめの姿へと変化した。違うのは、白いズボンと黒の靴だ。ブーツを仕込んでいないことであつた。

「　　ほう？　　便利だな」

「まあな」

素直に関心するシュワルゼに、ラルフは笑みを称えて答える。二人は造作もなく先ほど作つた谷を一足飛びで越えた。

「それで　　愛のことなんだが、な！」

「私は、宣教師ではないのだが……」
二人の異形はそう言い合いながら、街道を歩いていく。

「何故、あの無礼な者たちを帰したのですか？」
グローシアンの遺跡。

そこには、彼女たちにしか使えない器具がたくさんある。例えば
レイド達が眠らされているカプセルもそうだ。

この中で、彼らは今回の戦いの傷をいやすのである。

「不満か、シャクテイ？」

男たちの傷の具合を見ながら、口元に不敵な笑みを浮かべて問い
かけるセフィロス。その笑みを横目にシャクテイは口をとがらせる。

「だって、あの程度の相手……！」

「フフ……。久しぶりに懐かしい顔を見られたから、良しとするさ」
「……本当に、妹君に甘いんですから」

本当に懐かしそうに笑うセフィロスに、シャクテイは呆れたよう
な視線を送った。

「そうやって、甘やかせるから先の大戦の時にも土壇場で裏切られ
るんですよ」

「耳の痛い話だな。確かに 父上や異母姉^{あねっえ}上に遠慮することなく
アッサリと殺しておけば良かった」

シャクテイの容赦のない言葉にセフィロスは気さくに笑う。

「まあ、機会はいくらでもある。そう……いくらでも、な」

その瞳に 強烈な殺気が籠るのを、ウツトリとシャクテイは眺
めた。

「それでこそ、わが主」

自分が伝えるこの後の情報を聞けば、より一層彼女は美しい笑顔
を見せてくれるだろう。

(貴女の異母弟^{おとこ}も動き出したようですよ、セフィロス……)

だが 今は、異母妹に思いを馳せるこの表情が良い。シャクテ

イはそう思いながら、その口元に笑みをうかべるのだった。
「フン。今度は、邪魔されずに殺しあえればいいな？ シーテ
イア」

セフィロスは虚空を睨み付けるかのようにし、自身の異母妹の顔を思い浮かべる。かつて敵、味方と別れて殺しあった。あの楽しい日々を思い起こす。

自分の渴きを満たしてくれた愛おしい異母妹の血を。

47・暗躍する異形

砂漠の国　ランザック。その城下町はローランディアの王都とは違い、均一化された石造りの建物ばかりが目についた。

「ここが、ランザック……」

「空気が乾燥していて、風も砂が混じってる感じがする」

ピティとルイセが目を細めながら、街並みを確認していく。皆、麻製の薄着が多い。全体的に質素な感じのする国だ。

無駄を徹底的に省いたその街並みは、どこかフェザーランドに通じるものがあるような気がした。

「ランザック城は城下町から一直線に抜けた先にある。門番がいるから、彼らに話を通してもらえばいいだろう」

「すぐに信用してくれるかな？」

ウォレスの言葉に、ミーシャが首を傾げた。この所、まず疑われることが多いので少し疲れているようだ。

「その為の書簡だよ、ミーシャ」

「そっか……！　そうだよね……！」

ルイセに明るく言われ、ミーシャもすぐにいつもの調子に戻る。

そんな二人の少女をシーティアは穏やかに見ていた。

「シーティア様……」

自分の肩に留まっているピティがカーマインの方をチラリと見ながら話しかけてきた。ピティが何を言わんとしているのか、シーティアは察しながらも静かに手をピティの口に添えて、制する。

「……」

ピティも感じていた。最初はそうでも無かった違和感が徐々につきりとしてくる。ティピの記憶にあるカーマインと、目の前の青年はどこかが違う。そう確信するようになってきた。

それが何を根拠にしているのかと言われれば、何も言い返せないが。当然、シーティアもルイセも気づいている。

カーマインと同じ顔の青年　心当たりは、ラルフとシユワルゼ。彼らはゲヴェルに関わりの深い者だ。ならば、この青年は。ピティがそんな考えにとらわれていると、ランザック城の門番の前に着いていた。

「　王が謁見を許可された。通られるが良い」

門番は交差した槍を引き、同時に道を開けた。規律のとれたその動きに、思わずウオレスが感嘆の意を表した。シーティアも微かに感心したような表情をしている。

その意味に気づけなかったルイセやミーシャ、ピティは二人の反応に首を傾げていた。城内に入るとルイセがさっそく質問してくる。

「お姉ちゃん、どうして感心してるの？」

「規律のとれた部隊だ」

ルイセの言葉に反応したのは、カーマインだった。話しかけられると思っていなかったのか、ルイセはキョトンとしてカーマインを見返す。

「規律？」

「先の兵士たちの動きに一切の無駄が無い。阿吽の呼吸と言つべきモノか、彼らは互いに相手の動きと俺達の動きを見て行動を起こしている。よく訓練された動きだ」

淡々とした感情のこもらない口調だが、カーマインは素直に相手を褒めているようだった。ウオレスがソレにニヤリと笑った。

「ランザックのウエーバー將軍直属の部隊だからな。当然だろう」

「有能な人材を引き当てたわね、ランザックは」

シーティアも相槌を打ちながら、城内の至る所で立番をしている兵士たちを見据える。彼らも全く動作に無駄が無い。質実剛健

正にそんな言葉が当てはまる。国民も兵士も城もだ。

ソレが　ランザックと言う国に対してシーティア達が感じた事だった。

謁見の間。

彼女たちは緊張の表情で、その場に立っていた。ルイセもミーシヤもピテイも、不安でたまらないといった表情である。

渡した書簡に現在、ランザック王は目を通していた。やがて読み終え、王はシーティアを見据えた。

「我らの国も、そなたらの国も、突如として牙を剥いたバーンシュタインに襲われた。この上、我らはボルギナの相手もせねばならん。今回の同盟は我らこそ助かる話であった。せめて我々だけでも友好な関係を築き上げたいものだ」

深い皺を刻んだ人の良さそうな王は、どこか嘆いているようにルイセには見えた。

「全て承知しております。我が国王アルカディウス・ローランディアも陛下と全く同じ考えであります」

シーティアが即座に背筋を伸ばし、真っ直ぐに凜とした視線をランザック王に向けた。その返答にランザック王はニコリと微笑み

「ウム……」

そう、満足そうに頷いた。

こうして、ローランディアとランザックの同盟は成立したのだ。た。

謁見の間を出た一行は、来た道を引き返そうと歩を進めた時、廊下で意外な人物に呼び止められた。

「ウォレス？ ウォレスじゃないか？」

その言葉に一行の足が止まり、ふり返ってみるとそこには鋼の様な肉体と針金のような黒い髪、ひげを蓄えた甲冑の将軍が居た。

「その声、ウエーバーか」

ウォレスは声の主の方を向いて静かに答えた。

「久しぶりだな、しかし その姿は？」

「……隊長を追って、各地を探し回っていたが。その時に利き腕と両の目をやられた」

「お前ほどの男を、何と言う……!!」

淡々と事実を語るウォレスに、ウエーバーは目を瞠った。若かりし頃のこの男の力を知る彼だからこそ、一方的にウォレスに打ち勝ったという相手に脅威を感じた。

「今は、コイツ等と一緒に隊長と戦っていた化け物を探している最中だ。すまねえ、ウエーバー」

「? 何を謝る、ウォレス?」

ウォレスは静かに頭を下げた。ソレにウエーバーは困惑したような表情で見る。構わず、ウォレスは続けた。

「団員の事を全てお前一人に押しつけちまって。おまけに隊長を探すぐどころか、俺はこんな様だ……!! すまねえ……!!」

「……お前にも、いろいろあったんだ。気にするな、お前が無事で良かった!」

ウエーバーはその敵つい顔をほころばせ、笑った。その笑顔は、無骨な将軍が浮かべるにはあまりにもあどけない笑顔であった。

ウォレス達の会話を一步引いたところで見ていたシーティアだが、不意に口を開いた。

「ランザックのウエーバー将軍……、敵に回さなくて正解かもね」
「シーティア様?」

「あの手のタイプは敵に容赦をしないわ。自分の身内を大切にする分、ソレを脅かすものに一切の情けをかけない」

見上げた自身のパートナーである美女は、その美しい瞳を冷たく光らせて、言った。

「私のように」

「……」

その眩きに、ピティは何も告げることが出来ずただ シーティアを見上げていた。

「すまない、ウォレス。俺はこれより王に報告しなければならぬ」

「かまわん。こちらこそ、長話をして悪かった」

「……いずれ、酒でも飲み交わそう。アイツ等も喜ぶ」

「ああ。その時は、お前の苦勞話を聞かせてもらおう」

そう言いあうと、ウェーバーはシーティア達にも黙礼しその場を去って行った。

「……さて、一仕事終えたな」

ウォレスが伸びでもするように告げる。ルイセもミーシャも、ピテイも揃ってたまっていた緊張を解すようにため息を吐いた。

シーティアはにこやかに彼女たちを見ると、告げる。

「それじゃ　もう一つの用件も済ませちゃいませうか？」

「もう一つの用件、ですか？」

「それって　エリオット君のこと？」

ミーシャとルイセが小首を傾げながら問いかけてきた。ソレにピテイが合点の言ったという表情になる。

「エリオットさんは、たしか“ヴェンツェル様への手紙をご両親から渡されていた”と言っていましたね。マスターの話では魔導師ヴェンツェルはバーンシュタインの宮廷魔術師をした後、ランザックに魔法を教えに廻ったということですよ」

「ウム……。しかし、相手はこの国の宮廷魔術師だ。そう簡単に出会えるものか……！」

ピテイの言葉にウォレスが渋い顔で呟いたその時、

「私を探しているのかね？」

「……　ッ……！」

一同が一齐に声をした方を振り向いたとき、好々爺とした表情の白いローブを着た初老の男がその場に立っていた。髪の色が銀色なので、老人に一見、見間違えてしまいが実年齢はもっと若そうだとシーティアはぼんやりと思った。

男は好々爺とした笑顔のまま、語りかけてきた。

「どうした？ 私に用があったのではないのか？」

「……あなたがヴェンツェル老ですか？」

一行を代表して、シーティアが一步前に出て、正面から問いかけた。ソレにヴェンツェルは穏やかに笑みながら返す。

「いかにも、私がヴェンツェルだ。シーティアよ」

「? 何故、私の名を?」

「覚えておらぬのも無理はない。私がサンドラと最後に会ったのはお前がまだ5つの時だからな」

その答えに、シーティアは違和感を感じた。自分の記憶力には自信がある。5つくらいの時ならば、シーティアはハッキリと思い出せる。彼はサンドラに会いに来ては居ない。

(だが、それなら何故私は彼に見覚えがあるの? 私は、この人を知ってる?)

困惑を表情には出さずに冷静に記憶を掘り起こしていると、肩の上からピティがヴェンツェルに話しかけた。

「では、ヴェンツェル様。エリオットさんという少年をご存知でしょうか?」

「知っているも何もない、ゲヴェルの企みを阻止すべく私が助け出したバーンシュタインの本物の王子だ」

「……!?」「」「」

何でもないかのように話すヴェンツェルだが、その言葉に一行は声も出ずに黙ってしまう。ヴェンツェルは一行の反応等気にもかけずに言った。

「お前たちの質問に答える前に、まずこれを聞いておこう。何故、エリオットは未だローランディアにいるのかね?」

「どういうことですか?」

ルイセがシーティアの傍らから疑問の声を上げた。ソレにヴェンツェルは一つ頷くと答えた。

「お前たちがエリオットと言っている少年は、本来ならばバーンシュタイン国王リシャールとなる者だ。今の国王リシャールはゲヴェルによって作り出された虚像の王」

「作り出された? 虚像? それって??」

ミーシャが首を傾げて問いかけ、ウオレスも隣で渋い顔になる。
「ゲヴェルは己の細胞から分身を作り出す能力がある。ソレを応用させて、人間の髪の毛や細胞から遺伝子を取り出し、自分の細胞から基となった人間そっくりな存在を複製することが出来る」
「……！！ それじゃ、複製人間や自分の分身を作り出せるってこと……！！」

ルイセが驚愕に満ちた表情で問いかけた。ソレにヴェンツェルは満足げに首を縦に振る。ピティが思ったことを口に出してみる。

「それでは、偽物とはいえ今のリシャル王は本物と全く変わらな
い作られた存在ということですか？」

「半分は正解だ」

「半分、ですか？」

「ゲヴェルが、ただ人の遺伝子を取り込み、複製品を作るだけだと思
うかね？ 奴はその複製品に自分の細胞を組み込んで作り出すの
だよ」

皆が、どうして そんなことを、という表情で見返す。

「簡単なことだ。人間同士を争わせ、人間を滅ぼすためだよ。自分
の力を使えば、容易に対処できるのに、ゲヴェルはソレをしない。
何故なら、人間の中にはグローシアンがいる。奴はグローシアンの
波動には勝てない」

「……それで、仮面の騎士を作り出したのね」

シーティアが静かに、ヴェンツェルを見返しながらいかけた。

その言葉にヴェンツェルも深くうなづく。

「そつだ、魔法を使えるものを配下にするため、奴は兵士を創り上
げた……。それこそが、お前の言った仮面の騎士だ」

「俺の右腕と両の目を奪った奴等、か！ ……だが、何故アンタは
そんなにもゲヴェル達に詳しい？」

ウオレスの言葉に、この場にいる誰もがヴェンツェルを見やる。
対するヴェンツェルは静かに返した。

「奴の企みを阻止するためにも、エリオットをここへ連れてくるが

いい。エリオットを交えたなら、真実を話してやろう。今この大陸で起こっている真実を、な」

だが　ヴェンツェルの態度は頑なだった。シーティアは静かにため息を吐き、ヴェンツェルを見返す。

「分かりました、エリオットをあなたの前に連れてきます。ただし、その前に私たちも色々しなければいけないことがありますので」

「構わん。戦争の最中である現状、そう容易く他国へ出入りできるものでもあるまい」

こうして　一行は、エリオットを連れてくるといふ条件でヴェンツェルとの約束を取り付けるのだった。

バーンシュタイン領のクレイン村　。その北側にある巨大な滝の前に、二人の同じ顔の青年が立っていた。

「……フン、ここから奴の“気”を感じるな」

不遜な笑みを口元に称えて、剛刀を背に担ぐ男の横で、炎を纏った刀を鞘に納め、茶色の胸当てを着けた青年が言う。

「間違いなく　居る。ゲヴェルの手の者が」

2人の名はシュワルゼとラルフ。互いに人ではない者から作り出された存在だった。彼らは自分の周りに横たわっている2メートルくらいの白銀の異形を静かに見下ろす。

「ユング……、ここで餌をやっているのか。ゲヴェル……！！」

炎の刀を腰に差したラルフは、冷たい表情で、憎しみに満ちた暗い声で怨嗟の言葉を吐き捨てると、滝の中へと入っていった。その圧倒的な殺意を見て、シュワルゼは愉快そうに笑う。

（野郎……、力が上がってやがる）

憎しみがラルフの力の源なのか、　その根源はどこにあるのか。シュワルゼは楽しくて仕方が無かった。

人間を観察するようになって、自分と同等の強い奴等が人間臭い同族であると悟った。ならば、ラルフの憎しみは　一体、何を

された憎しみなのか。

その正体を見極めようと、シュワルゼは余裕綽々といった表情で滝の中に入っていった。

ラルフとシュワルゼ。クレイン村にたどり着いた二人を待っていたのは、とんでもない状況だった。

「ここが、クレイン村か」

シュワルゼのつぶやきにラルフが答える。

「ああ、彼女たちの情報が間違っていないければ、ここでゲヴェルについての情報を得られるはずなんだが」

「おい、ラルフ……。面白い見世物だぞ」

「……何？」

シュワルゼはいつものように不遜に笑いながら、先ほどからラルフでは無く、その前方を見ている。気になってラルフもそちらを振り向いた。

村の広場に3体のグレムリンが飛んでいた。

人を容赦なく襲う、魔物。その翼と槍の一撃は、一般人にとっては脅威以外の何物でも無い。

「……!!!」

すぐさま、腰の刀を抜刀しようとするラルフを、シュワルゼがその前に出て、手を広げ止めた。ラルフは訝しがりながらもシュワルゼを見返すと、彼は顎でグレムリン達を示した。

よく見ると、グレムリン達は曲に合わせて踊っていたのだ。

「……これは、そうか噂に聞いたことがある。これが『モンスター使い』か」

「？ 何だそりゃ？」

ラルフは自分の知識の中にあるモンスター使いについての情報をこちらに向かつて興味津々な顔をしているシュワルゼに話し始めた。

「特殊な粉で本来は人間を襲うモンスターを操る種族がいる。ソレがモンスター使いだ」

「ほう……！面白れえな」

子供のように感心し、目をきらきらと光らせるシュワルゼに、ラルフは思わず苦笑した。自分を先ほどまで追い詰めていた男と同一人物とは、どうにも信じられない気分だった。

「……モンスター使いのことをご存知とは、博識ですね」

モンスターを操っている青年がにこやかに話しかけてきた。二人は同時に振り返り、ラルフが笑顔で青年に答える。

「大したことではありません。旅をしていると、様々な事柄を見聞きしますから」

「ご謙遜を。モンスター使いなんでマイナーな職業を知っておられるんですから、充分に博識でいらっしやいますよ」

「……」

青年の言葉に、ラルフは静かに微笑を浮かべるに留めた。シュワルゼは僅かにラルフを横目に見やるが、こちらも何かを話す気はないらしい。

青年は、気にした風もなく話を続ける。

「僕もいつか、旅をしようと思っています。立派なモンスター使いになって」

そんな彼に、シュワルゼが目を大きく見開いた少年のような表情で問いかける。彼が指差したのは青年が腰に挿している布袋だった。「なあ、その妙な香りをした粉がモンスター使いの粉か？」

青年はキョトンとした表情で答えた。何度も粉が入った袋とこれを指摘してきたシュワルゼを見比べる。

「ええ……。すごい嗅覚ですね。普通の人間にはまず嗅ぎ取れない臭いなんです。モンスターに一定の動作を行わせるのに、この粉は使用されません。粉には色々な種類がありまして、配合を間違えると暴走させてしまうこともあります」

「ほう……！」

目をキラキラとさせながら布袋に夢中なシュワルゼ。その後ろでラルフが頭を掻きながら苦笑し、青年に頭を下げてきた。

ラルフに対し、青年はうれしげな表情で首を横に振ると、多少碎けた口調で話しかけてきた。

「……そういえば、お二人は旅の途中みたいだね。こんな村に用が？」

その言葉に、ラルフは表情を真剣なものにして答える。

「このクレイン村に滝があると聞いてきた。私たちはそこに用があるんです」

「あの滝……？ やめたほうがいいよ。北の滝の周辺で次々と人が神隠しにあつて、調査に行った村長の息子さんまで帰らなくなってしまった」

青年が表情を一気に引きつらせ、必死になつて忠告してきた。それにシュワルゼが不遜に笑う。

「ほう……？ 神隠し、か。幽霊と違ってそちらのほうが面白そうだ」

かつて自分が救った有翼人の女王を思い起こしながら、シュワルゼは早くも滝の裏側に興味を示し始めた。

「面白いなんて、とんでもない！ 兄弟そろって行くもんじゃないよ、あんなところ……！」

「兄弟？ ……………」

いやそんな顔をして沈黙したラルフを横目に面白そうに眺めるシュワルゼ。そんな二人の様子にこれ以上言ってもむだかと判断したのか、青年は眉根を寄せながら教えてくれた。

「どうしても行きたいのなら、この村の村長に会うといいよ。彼が滝への入り口の管理をしているから」

その言葉にラルフは丁寧に一礼すると品の良い笑顔をその美貌の上で作った。

「分かりました。色々ありがとうございます」

隣のシュワルゼは、一歩青年の前に出ると、言った。

「お前の話、面白かったぜ。……頑張れよ」

ポンツ と肩を叩きシュワルゼはそのまま、村長の家の入り口に
向かって行く。その彼の横にラルフも歩を並べて進む。

そんな二人の背中を、モンスター使いの見習い青年は眩しそうに
見つめた。

村長ゼメキスは、好々爺とした老人であり、初めはラルフたちの
言葉に驚いていた様子であったが、順にラルフとシュワルゼを見や
ると

「あの滝は危険な場所 。 本来ならばお若い貴方達を行かせるの
は止めるべきところ。ですが 」

「村長、私達ならば必ず今回の神隠しの真相を暴いて見せます、ど
うか」

ラルフが几帳面に一礼しながら告げる。その言葉にゼメキスはに
こやかに笑うと言った。

「それほどまでに意思がお強いのですたら止める理由はありません。
どうか、生きて帰って来てください」

「ありがとうございます、村長！」

笑いかけるラルフの隣でシュワルゼがジッと村長の顔を見る。

(グローシアン、か)

「……フン」

瞳を閉じ、口の端を吊り上らせて、シュワルゼは村の北側にある
という滝へと思いを馳せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5067n/>

救世の光、殲滅の紅

2011年11月15日21時20分発行